【オブスキュア・サウンド】

obscure sound

桃源郷的音盤640選

selected by Chee Shimizu

Rittor Music

【オブスキュア・サウンド】

obscure sound

桃源郷的音盤640選

selected by Chee Shimizu

introduction

ハプニングは予期せぬときに起きるものだが、まさかこのようなガイドブックを作ることになるとは、思いもよらなかった。僕にとってはまさに、ハプニングだ。こんな機会でもなければ、音楽について冷静に思考をめぐらせることも、まずなかっただろう。

音楽への好奇心が芽生えて、小遣いを工面しながらレコードを買い出した小学生のころから今に至るまで、夢中に、というより、ほぼ盲進に近い状態で、ひたすら音楽浸けの日々を過ごしてきたのだが、思い返してみれば子供のころは、日本の歌謡曲からビルボードのヒット・チャートまで、いろいろな音楽を節操なく聴いていたものだ。 当時はそれが何のジャンルだとか知る由もなく、気にすらしていなかったが、音楽の経験値が増えるにつれて、特定のジャンルやシーンに深くのめり込むようになり、それ以外の音楽がまったく耳に入ってこない時期もあった。それでも興味の赴くまま、流転を繰り返しながら音楽を聴き続けるうちに、いつの日からかまた、子供のころと同じように新鮮な刺激を求めて、さまざまなジャンルの音楽に情熱を注ぎこむようになっていた。なぜそうなったのか、思い当たるふしがないわけではないが、それはたぶん、偶然の出来事だったように思う。好奇心さえあれば、ちょっとしたタイミングで突然、新しい世界が目の前に現われたりするものだ。昔聴いていた音楽をもう一度聴いて、当時とはまた違う新鮮さを感じたり、より深く理解できることだってある。そんな新しい世界へとつながっている、小さいようでとても大きな入口の扉を開ける、ちょっとしたきっかけになるように、本書のディレクションを進めることにした。

音楽を聴いているときに、なにかしらの感情を呼び起こされたり、頭のなかに映像が浮かんだり、音がカラダを震わせたり、鳥肌が立つような感覚が訪れることがある。あまりに漠然としたものなので、それがいったい何なのか、はっきりと説明することもできず、もどかしい限りなのだが、世の中にはそのような音楽が確実に存在する。言ってみれば、それがまさしく、自分にとっての音楽なのかもしれない。

『obscure sound【オブスキュア・サウンド】』と題した本書は、特定のジャンルについて深く掘り下げることを目的とせずに、未知の音楽を求めて流浪するなかで、なかば偶然に出会ってしまった、とりとめもないレコードの群れのなかから、さまざまな心象やヴィジョンを感じさせてくれる音楽を選び出して、包括的に紹介してみよう、という試みだ。多少の偏りはあるかもしれないが、選び出されたレコードのジャンルは広範囲に及び、世間で認知されているジャンルにカテゴライズすることが困難なものもたくさんある。たとえば、ジャズとしてカテゴライズされている音楽でも、一般的にイメージされるジャズにはまったく聴こえないものもあり、そのへんはとても曖昧模糊としているわけで、そういう意味での“オブスキュア”というワードがテーマとして浮上し、めでたく本書のタイトルとなった次第だ。

そんな曖昧模糊とした存在の音楽を、ガイドブックというかたちで紹介するにあたって、12のキーワードを考えてみた。選び出されたレコードは、それらの音楽から感じられる印象をもとに、あくまでも主観的なイメージで、それぞれキーワードごとに分類して紹介している。レビューも、音楽から受け取ったイメージをそのまま言葉で表現するように努めた。意味不明だったり、的外れなところもあるかもしれないが、そのままの印象で受け取っていただければと思う。ものによっては、1枚のレコードのなかに異なるキーワードに該当する曲が複数含まれていたり、1曲のなかに複数のキーワードの要素が含まれていることもあるが、その場合は、一番強い印象のものをキーワードに該当させている。

紹介しているレコードはすべて、70年代から90年代に発表されたもので、2000年以降、現在進行形の“新譜”は取り上げていない。すでに体系化が進んでいて、関連する書籍やガイドブックが出版されているようなジャンルの音楽については、必要最小限にとどめている。本文に掲載されている情報はすべてアナログ・レコードのもので、12インチや7インチのシングルもわずかに取り上げているが、ほぼすべてがアルバムである。CD

の情報は掲載していないが、ちょっとだけ扉の向こうを覗いてみよう、というときのために、CD化されている（されたことのある）タイトルを、“マスターピース”として各章の冒頭で紹介している。比較的容易に入手できるものが多いと思うので、試しに聴いてみてもらえるといいだろう。好みではなかったときは、ごめんなさい。

また、“オブスキュア”という言葉には、“世に知られていない”という意味もあり、稀少価値のあるものを意味する“レア”に近いニュアンスで使われることもあるが、本書では、そういった稀少性の高いレコードだけ紹介することを目的とはしていない。なかには高額で売り買いされているレコードもあるが、500円玉1枚でおつりがくるような、ちょっとしたお得感を味わえたりするレコードもたくさん紹介している。“こんないい曲が入ってるのに、300円か！”という類いのやつだ。あくまでも音楽そのものに注目したガイドブックである。

最後に、これはレコードを紹介する“本”なので、もちろん、ここから音楽は聴こえてこない。本書で紹介されている音楽を聴くためには次の一歩、レコードやCDを手に入れてもらわねばならない。しかし、ここで紹介している音楽を絶対に聴いてくれ、ということでは決してない。しつこいようだが、未知の音楽に触手を伸ばすための、ただのきっかけだと思っていただきたい。これらのレコードは、たまたま僕が拾った鍵のようなものだ。その鍵をもち、手を伸ばして開いた扉の先には、無限に近い膨大な数の、素晴らしい音楽が待ちかまえている。

本書がとくに面白くない場合は、パラパラとページをめくりながら、色とりどりの芸術的なジャケットのアートワークを楽しんでもらえたら幸いである。ただ、そんなとき、うしろで素敵な音楽がかかっていたら、最高だ。

Chee Shimizu

contents

007 organic
025 ethnic
041 psychedelic
059 spiritual
075 experimental
089 cosmic
109 meditative
123 tropical
139 floating
153 mellow
169 pensive
185 groovy

column:

024 音楽のパラダイム・シフト
058 ライブラリー・レコードの世界
138 アナログ・レコードの歓び
168 レコードから見える文化
184 雑音と快適音

extra selections:

200 二見裕志
202 ヤマベケイジ
204 梶原としお(BING)

talk session:

104 Chee Shimizu × 二見裕志 × 梶原としお(BING) × ヤマベケイジ

198 recommended record store

凡例

通し番号　ジャンル　アーティスト名　作品名

#001 | Jazz

ECM / 1972 / Germany

Chick Corea

Return To Forever

クロスオーヴァー・ブームの火付け役といえる作品で、メジャー流通もなされ大ヒットとなったが、当時同類にカテゴライズされていた音楽と比較しても、その独創的な世界観は一線を画している。サンバやフラメンコなど、ラテン音楽の要素を多分に含みながら、抑揚のある展開で繊細な感情を表現した、きわめて斬新な発想と創造性にあふれた作品だ。まろやかにトレモロするフェンダー・ローズもさることながら、各パートの定位に注目したい。Chick Coreaはまるで指揮者のような佇まいだ。

レーベル / 発売年 / 発売国（地域）

◎掲載盤は、すべてレコードです。CD化されているものも含みますが、発売中のものとジャケットが異なる場合があります。

◎ジャンルは、大まかな音の傾向／スタイルを示したもので、参考程度にとらえてください。本書では既存のジャンルにカテゴライズしづらい音楽を多数紹介しています。

organic

organic

“オーガニック”と聞くと、世間で汎用される健康志向をうたった商品が連想されると思うが、本書でいうそれは、さまざまな分子が複雑かつ緻密に平衡する“オーガニズム（有機体）”のことで、聴き手の細胞を活性化させるようなエネルギーを秘めた、“有機的な音楽”という意味だ。選盤されたどの音楽からも、自然とのつながりをあらためて認識させてくれるような、ポジティヴなヴァイブレーションを感じることができるだろう。

masterpiece

#001 | Jazz

ECM / 1972 / Germany

Chick Corea
Return To Forever

クロスオーヴァー・ブームの火付け役といえる作品で、メジャー流通もなされ大ヒットとなったが、当時同類にカテゴライズされていた音楽と比較しても、その独創的な世界観は一線を画している。サンバやフラメンコなど、ラテン音楽の要素を多分に含みながら、抑揚のある展開で繊細な感情を表現した、きわめて斬新な発想と創造性にあふれた作品だ。まろやかにトレモロするフェンダー・ローズもさることながら、各パートの定位に注目したい。Chick Coreaはまるで指揮者のような佇まいだ。

#002 | Jazz

ECM / 1982 / Germany

Adelhard Roidinger

Schattseite

ドイツの奇才ジャズ・ベーシストが、ECMからリリースした初のリーダー・アルバム。70年代には山下洋輔や佐藤允彦との共演作品も発表しており、フリー畑の住人という印象の強い音楽家だが、本作では女性ヴォーカルによるスキャットを加えたセプテット編成で、ECMらしい洗練されたコンテンポラリー・ジャズを披露。長い旅路の疲れを癒すかのように、音場をやさしく包み込みながら折り重ねる、やわらかな感触のインタープレイにいつのまにか引き込まれていく、抒情性に満ちた美しい作品だ。

#003 | Jazz

Niglo / 1985 / France

Aïré

Aïré

フランスのグループ、Aïréによる85年発表のアルバム。これが唯一の作品のようだ。現在もフランスを拠点に活動するスペイン人フラメンコ・ギタリスト、Manuel Delgadoがメンバーとしてクレジットされており、郷愁に満ちたドラマティックな展開による叙情的なクロスオーヴァー・ミュージックを、フラメンコや地中海音楽の要素が色濃く反映されたアレンジと、ドライな肌触りのアコースティック・サウンドで披露している。フラメンコ・ギターの音色が、手拍子とともに生々しく響きわたる。

#004 | New Age

Music Box International / 1990 / Greece

Akis

Into The Light

ギリシャ産ニューエイジ・ミュージックの最深層、マルチ・インストゥルメンタリストのAkisが90年にリリースした唯一のアルバム。ピアノ、リコーダーとトランペットを担当するふたりのミュージシャンが参加しているが、ベーシック・トラックはすべてAkis自身によるもので、デジタル・シンセサイザーとコンピューター・プログラミングをフル活用した、クリアで純度の高いエレクトロニック・アンビエントを展開。太陽光線に照らされてキラキラと輝きを放つ、蒼色のエーゲ海を連想させる美しい世界。

#005 | Jazz

WEA / 1987 / Argentina

Alberto Favero

Alberto Favero

60年代よりアルゼンチン・ジャズ界を牽引する、ブエノスアイレスのジャズ・ピアニストが残した名盤。初期作品で聴くことのできるハード・バップな作風は時代とともに影を潜め、シンセサイザーを大々的に導入したクリスタル・クリアなエレクトリック・フュージョンへと進化。深いリヴァーブが施された空間性のあるリズム・セクション、漂うように浮遊するシンセサイザーのパッド音、エレクトリック・ピアノのメランコリックなメロディが切なく響きわたる。ブエノスアイレスの慕情。

#006 | Jazz

ECM / 1977 / Germany

Arild Andersen
Shimri

67年にJan Garbarek Quartetのメンバーとしてキャリアをスタートさせたノルウェーのジャズ・ベーシスト、Arild Andersenのリーダー・アルバム。カラダの奥底まで響きわたる芯のあるベース、アーシーなフルート、エスニックな香り漂うパーカッションや可憐なピアノが有機的に混じり合う民族ジャズから、甘美で切ないアンサンブルを奏でる洗練されたコンテンポラリー・ジャズまで、一貫して透明感のある美しいサウンドが音場を支配する、ECM流スピリチュアル・ジャズの真骨頂的作品。

#007 | World

Takoma / 1979 / US

Bernie Krause
Citadels Of Mystery

モーグ・シンセサイザーを操るアメリカの電子音楽家Bernie Krauseが、人類学者Loren Elegyの著書にインスパイアされ、アフリカ、ペルー、ブラジルやハイチなど、第三世界の民族音楽のエレメンツを多分に取り入れて制作した、カラフルなクロスオーヴァー・ミュージック作品。長きにわたり活動をともにしたパートナーPaul Beaverに捧げられている。通常盤のほかに、高品位なマスタリング技術に定評があるカリフォルニアのMobile Fidelity Sound Labによるデジタル・マスター盤がある。

#008 | Jazz

Platufelagio Tutl / 1981 / Denmark

Brongl
Vidari

サックス・プレイヤーKarsten Vogelや、ベーシストBo Stiefなど、デンマークの名ジャズ・ミュージシャンが一堂に会したジャズ・プロジェクト、Bronglの2作目。デンマーク自治領のフェロー諸島に拠を構えるレーベル、Tutlからのリリース。ブルージーなジャズ・ロックから、スウィンギンなモダン・ジャズまで、アダルトな雰囲気漂う洗練された楽曲を収録している。やわらかなタッチで軽やかに疾走するブラジリアン・フュージョン「Samba Sneis」が、気持ち良くカラダをゆらしてくれる。

#009 | Jazz

Private Press / 1984 / US

Chateau
Breakers

アメリカ・フロリダのマイナー・グループが、自主制作でリリースしたアルバム。参加メンバーの詳細な情報は皆無で、まったくもって正体不明である。Pat Metheny Groupの影響を色濃く感じるクロスオーヴァー・ジャズだが、コンポーズ、アレンジから演奏まで、どこをとっても非の打ちどころがない。タイトル曲の「Breakers」で聴くことができる、透きとおるほどに美しく瑞々しい質感は、自主制作のレヴェルを完全に凌駕。もはや奇跡としか言いようのない、究極のロマンティシズムがここに。

#010 | Jazz

Ismez Polis Music / 1983 / Italy

Damiani Opus Music Ensemble

Flashback

イタリアのジャズ・ベーシスト、Paolo Damianiによる83年録音のリーダー・アルバム。うっすらと空間にたちこめるミスティックなシンセ・パッド、フリューゲルホルンやミュート・トランペットのやわらかな音色が美しいアーバン・ジャズ「The Procession」、女性シンガーJulie Goellの表情豊かなスキャットとリードがミステリアスに交錯するライヴ録音作品「Mansarda Sonora - Esablu」など、太陽のあたたかい日差しを感じるオーガニックなスピリチュアル・ジャズを収録した名盤だ。

#011 | Jazz

Cream / 1983 / France

Daniel Goyone

Daniel Goyone

インド人パーカッショニストTrilok Gurtuとの長きにわたるコラボレーションをはじめ、ブラジルやキューバなど中南米のミュージシャンとも数多い共演歴をもつフランス人ジャズ・ピアニスト、Daniel Goyoneのソロ作目。ラテン・フィーリングを加味したリズミカルなサウンドからモーダル・マナーのクールなジャズまでを披露しているが、乱層雲のすきまから差し込む太陽の光が大地を黄金色に照らすような、ゆるやかな丘陵の風景が浮かぶ、「Point Du Jour」から「Neroli」への流れが美しい。

#012 | Jazz

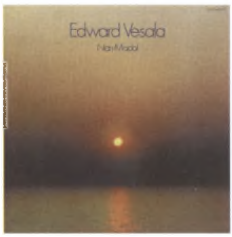
ECM / 1980 / Germany

Eberhard Weber Colours

Little Movement

ECMの看板アーティストのひとりであるドイツ人ダブル・ベース奏者による、Colours名義の2作目。本作のサウンドの中核を担う鍵盤奏者、Rainer Brüninghausによるシンセサイザーのミニマリスティックな意匠と、Weberのもつ詩的な音楽性が見事に結実。上昇気流に乗るがごとく高々と舞い上がるアコースティック・ピアノとシンセサイザーのリフレインが、心地良い開放感とともに壮大な宇宙感覚をも呼び起こしてくれる「Bali」は、非常にポジティヴなエネルギーを秘めた傑作だ。

#013 | Jazz



JAPO / 1974 / Germany

Edward Vesala

Nan Madol

フィンランド人ドラマーEdward Vesalaの、通算4作目となるリーダー・アルバム。真骨頂であるアヴァンギャルドな側面ものぞかせているが、張りつめた空気のなかで透きとおるようにクリアなサウンドが立体的に広がる、アンビエント・エコー・ジャズとでも言いたくなるような楽曲や、Don CherryやBengt Bergerに通じる民族テイストの楽曲など、深い精神性に裏づけされたフォークロア・ジャズ・アンサンブルを披露。微細な音の粒子が空間を埋め尽くす、高品位な音質も非常に素晴らしい。

#014 | Electronic

Sky / 1978 / Germany

Eno Moebius Roedelius
After The Heat

アンビエント・ミュージックという概念の創案者であるBrian Enoと、クラウト・エレクトロニクスの最重要アーティスト、Dieter MoebiusとHans-Joachim Roedeliusという、最高のメンバーが集結して制作し、78年にSky Recordsからリリースされた名作。三者三様、個性が強い面々だが、それぞれの作家性が失われることなく、最も良いかたちで融合した、珠玉のエレクトロニック・ミュージックを全編に収録。圧倒的な先鋭性と実験精神に富んでいるが、非常に有機的な世界観をもった電子音楽である。

#015 | Jazz

Cicada / 1985 / Norway

Erik Wøllo
Traces

作品ごとに新たな表現を試みるノルウェーの奇才、Erik Wølloのソロ3作目は、Øysten Sevågとの共同プロデュースによる、完全セルフ・メイキングな電子音楽作品となった。極限までそぎ落とされた必要最小限のパートがシンプルなリフレインを繰り返すトラックのうえで、ウェットかつクリアなシンセサイザーのメロディがさまざまなサウンドスケープを描く、メンタリスティックなマインド・ミュージック。パースペクティヴな音場を形成する立体的なミキシングは、音響芸術としても一聴の価値あり。

#016 | Jazz

Flying Fish / 1984 / US

Eternal Wind
Eternal Wind

Don Cherryとの交流も深い、Mandingo Griot Societyのメンバーでもあるパーカッショニストのの Adam Rudolphを中心とするグループ、Eternal Windの処女作。世界各国の民族楽器を自在に操る土着要素の強いリズムに、中東や東洋の民族音楽のような旋律を奏でるリード楽器の、フリー・フォームかつアヴァンギャルドなインタープレイが万華鏡のように混じり合う、エスノ・トライバル・ジャズ。収録曲すべてが最高水準、音の粒子が音場空間できらめくような素晴らしいサウンドに、めまいすらおぼえる。

#017 | World

Free Lance / 1978 / France

Évé
Canto Aberto

Everaldo Marcialを中心とするグループがプライヴェート・レーベルに残した唯一のアルバム。 在フランスのブラジル人ミュージシャンといわれているが、詳細は不明である。Alceu Valençaなどに代表されるノルデスチ音楽に共通するあたたかみのある土着性と、Toninho Hortaなどのミナス派に通じるサウダージな郷愁を感じさせる、アコースティックなブラジリアン・ミュージックを披露している。楽曲のコンポーズやアレンジも素晴らしい。フランス盤が功を奏してか、繊細でまろやかな音質も秀逸。

#018 | World

Grabaciones Accidentales / 1984 / Spain

Finis Africae

Finis Africae

世界各国の民族音楽を研究し、自身の作品においてもその成果を色濃く反映させている、スペインきっての先鋭音楽家であるLuis Delgadoが結成したエクスペリメンタル・エスニック・グループ、Finis Africaeの1作目にして最高傑作。波間にゆれるオートハープのセレッシャルな旋律やシンセサイザーの深遠なパッド音に、さまざまな民族楽器のプリミティヴなサウンドが有機的に溶けあった、どこまでも果てしなく美しい自然の情景を想起させる、マインド・ベンディングなエスノ・アンビエント作品。

#019 | New Age

Zweitausendeins / 1983 / Germany

Friedemann

Voyager

ドイツのマイナー・レーベル、Biber Recordsから数多くの作品を発表するほか、コンポーザー／アレンジャーとしても活躍したギタリスト、Friedemann Witeckaの3作目。フォーク色の強かった前2作の意匠を継承しつつ、多様な音楽性をニューエイジ感覚で集約させた、のちの方向性を決定づける布石となった重要な作品。冒頭曲「Voyager Without Passport」のハイ・エッジなレゲエ・ウェーヴから、アトモスフェリックなニューエイジ・ジャズへと展開する流れが、すべてを物語っている。

#020 | Jazz

Software Music / 1981 / Germany

Fuchs-Goos-Band

Chameleon 2

少ないリリース量ながら個性的な作品を残しているドイツのレーベル、Software Musicから発表された、ドラマーJoachim Fuchs-Charrierと、ギタリストWerner Goosを中心とするワンオフ・グループの唯一作。ピアニストChristoph Spendelがゲスト参加したクインテット編成で展開される、エッセンシャルなコンテンポラリー・ジャズ作品。淡くグラデーションがかった静かな海の遠く彼方に見える水平線を望むような、おだやかなサウンドスケープのなかに見え隠れする、郷愁と哀愁。

#021 | New Age

Utopia Music / 1979 / Netherlands

Gamma

Aurora Borealis

アコースティック・ギター、ブロック・フルートとキーボードで編成された、オランダのマイナー・グループによる作品。89年にもアルバムをリリースしているが、アナログとしては本作が唯一のようだ。フォークロア調の楽曲を主体に、おだやかな自然の風景を描いたニューエイジ・ミュージックを展開している。とげのないやわらかなタッチのエレクトリック・ピアノ、ハーモニクスを交ぜながら細やかにアルペジオを奏でるガット・ギター、ナチュラルなフルートのアンサンブルに心あたたまる。

#022 | Experimental

The Bear On The Moon / 1986 / Italy

Gigi Masin
Wind

イタリアの実験音楽家、Gigi Masinの処女作。300枚のみプレスされた完全自主制作盤で、音楽業界の流通システムを嫌い、コマーシャルなプロモーションは一切行なわれていない。ラベルには“Disco non in vendita (Disc not for sale)”とプリントされている。シンセサイザーやテープ・エディットを駆使した実験的な作風だが、聴こえてくるのは、ミニマルにリフレインする電子音と、トランペットやピアノのシンプルなフレーズによる静寂の音世界。Gigi Masinの囁くようなヴォーカルも、ただ浮遊している。

#023 | Experimental

Divergo / 1991 / Italy

Gigi Masin & Alessandro Monti
The Wind Collector

ラジオDJとして活動を開始し、劇場音楽やメディア音楽素材の制作を手掛けるほか、テープ、ターンテーブルやライヴ・エレクトロニクスを駆使した、実験的な音楽を制作しているイタリア人音楽家、Gigi Masinが、マルチ奏者Alessandro Montiとともに制作した作品。ピアノやシンセサイザーが奏でるシンプルなフレーズのリフレインと、繊細なヴォーカルの対比が、淡い色彩の抽象画を描く「Snake Theory」をはじめ、ガラスのように透きとおった、はかなくも美しいサウンドを作り上げている。

#024 | Jazz

Compendium / 1977 / Norway

Graf / Hovensjø / Eberson / Christensen
Blow Out

ノルウェジャン・コンテンポラリー・ジャズ界の気鋭ミュージシャン4人が、マイナー・レーベルに吹き込んだ唯一作。ビート感を重視したロック的なアプローチを見せた作品で、シンセサイザーやハモンド・オルガンによるトリッピーなサウンドとサイケデリックなギターが絡むスペース・ジャズ・ロックから、浮遊感のある幻想的な楽曲まで、ニューエイジ感覚とセンチメンタリズムを兼ね備えた極上のクロスオーヴァー・サウンドを披露した、ボディ・ソニック効果抜群の1枚。

#025 | Rock

Sky / 1986 / Germany

Harald Grosskopf
Oceanheart

Rolf-Urlich Kaizer先導による70年代初中期サイケデリック・ジャム・セッション、Cosmic Jokersへの参加をはじめ、Manuel Göttschingのソロ・プロジェクトとなったAsh Raや、Klaus Schulzeの作品において重要な役割を担っていたドイツ人敏腕ドラマー、Harald Grosskopfは、ソロとしても非常に秀逸な作品を残している。なかでも86年に発表した本作は、まばゆいばかりの輝きに満ちたポジティヴなヴァイブレーションを、シンセサイザーを駆使したエレクトロニック・ミュージックで表現した名作だ。

#026 | Jazz

Island / 1988 / US

Jay Azzolina
Never Too Late

アメリカのジャズ・ギタリスト、Jay AzzolinaのI作目でアナログ唯一作。テクニカルなパフォーマンスで聴かせる、80年代に隆盛したライトなタッチのアーバン・フュージョン作品だが、こういうアーティストに限って、透きとおるようにクリスタルなサウンドの、メランコリックなニューエイジ・ジャズをやっていたりするものだ。本作でも、やわらかな感触のシンセサイザーや、Pat Methenyを連想させるウェットでどこかコズミックなエレクトリック・ギターが、広がりのある美しい音世界を見させてくれる。

#027 | New Age

Coda / 1985 / UK

John Themis
Atmospheric Conditions

イギリスの正統派ニューエイジ系レーベル、Coda Recordsの所属アーティストで、ギタリストのJohn Themisによるセルフ・プロデュース・アルバム。アコースティック・ギターやエレクトリック・ギターの繊細なメロディ・ワークと雲のようにゆっくりと浮遊するシンセサイザーのパッド・サウンドで構成された、シンプルながらも奥行きと広がりのある立体的な音響処理と、郷愁を誘うロマンティックな作風が秀逸。趣向や表現方法は違えど、Brian Enoの影響下にあることは間違いない。

#028 | Electronic

Nicole / 1986 / Japan

Jun Fukamachi 深町 純
Nicole '86 Spring And Summer Collection

シンセサイザーに造詣が深いことで知られるコンポーザー／鍵盤奏者の深町純が、ファッション・ブランドのコレクションのために制作した音楽を収録した非売品レコード。シンセサイザーのマルチ・レコーディングによる、ハイセンスでイマジネイティヴなニューエイジ・エレクトロニクス8曲が、タイトルもなく収められている。ブランドのイメージを汲み取ったヨーロピアン・モダンな室内音楽趣向の作風も美しいが、透明感のあるパースペクティヴなシンセサイザー・サウンドが先鋭的かつ有機的だ。

#029 | Jazz

Meadow Lark / 1985 / US

Justo Almario
Forever Friends

Just Almarioは、多くのRoy Ayers作品をはじめ、James Masonの不朽の名作『Rhythm Of Life』にも参加しているコロンビア人サックス・プレイヤーで、80年代に数枚のソロ・アルバムを残しているが、とくに本作以降は、非常に透明度の高い洗練されたクロスオーヴァー・ジャズを展開している。時代柄、いささか軽薄なアーバン・フュージョンも収録しているが、パーカッションとシンセサイザーのやわらかなアンサンブルが心地良い「Sharing」のような、極上のニューエイジ・ジャズがどうにも素晴らしい。

#030 | Experimental

Epic Sony / 1986 / Japan

Killing Time
Bob

小川美潮が在籍したニューウェーヴ・グループ、チャクラのメンバーだった板倉文、MaTo、清水一登らが結成したグループ、キリング・タイムのデビュー作となる3曲入りの12インチ・シングル。当時はニューエイジ・ミュージックとしてプロモートされたようだが、極めて実験的な趣向のサウンドは、その枠にとどまらない。西欧古典音楽に傾倒したようなエレガンスを見せながらも、いっぷく毒をもったようなパンキッシュな精神性を感じさせるところがアヴァンギャルドだが、感触は有機的。

#031 | Jazz

Ciclo 3 / 1990 / Argentina

Lito Vitale Cuarteto
Vientosur

アルゼンチンの鍵盤奏者Lito Vitaleは、中心的存在として活動したロック・グループ、MIAの解散以降、ジャズやアンビエントなどさまざまなスタイルを変遷しながらも、一貫して叙情性を追求したロマンティックな作風で知られる音楽家だ。80年代以降は、ジャズ・ミュージシャンと積極的に共演を重ねていて、90年に発表した本作でも、Pat Methenyに追随する情緒性と精神性による繊細な美的感覚と、大陸的な土着性をもちあわせた、壮大なスケールのクロスオーヴァー・ジャズを披露している。

#032 | Rock

Ariola / 1987 / Spain

Luis Eduardo Aute
Templo

Luis Eduardo Auteは、スペインのポップス・フィールドで活躍したシンガー・ソングライターだが、非常に作り込まれた、完成度の高い作品を数多く残している。スペインの名ミュージシャンが参加し、87年に発表した本作では、フラメンコをはじめ、スペインや地中海沿岸の民族音楽の伝統を踏まえながら、スタイルを超越した独創的な音楽を構築。アートワークは宗教的だが、太陽に照らされて輝く静かな海を想起させる「Tu Sueno Eterno」のまばゆいばかりのアンビエンスは、地中海音楽ならではの世界観。

#033 | Jazz

Phrases / 1992 / Italy

Maras-Posillipo-Proietti
Sfumature

イタリアで発見した謎のレコード。アーティストの情報が皆無だが、イタリアのジャズ・シーンで活動するミュージシャン3人の連名作品と推測される。2分から4分程度のスケッチのような楽曲が11曲収録されているが、アフリカや東洋の民族音楽をエッセンスに、ライヴ・パフォーマンスとエレクトロニクスを融合させた、実験精神あふれるクロスオーヴァー・ミュージックを展開していて、いずれも高品位だ。手書きのメッセージが記されているだけの無地のジャケットも、非常にミステリアス。

#034 | Pops

Clan Celentano / 1978 / Italy

Marco Fedrigo
Il Giorno Del Troppo Amore

イタリアのシンガー・ソングライター、Marco Fedrigoの唯一作で、Adriano Celentanoへの楽曲提供やプロデュースを数多く手掛けているMiki Del Preteの手により、サマー・ブリーズな装いにアレンジされたソフト・ロックを中心に展開しているが、曲調からすると、もともとはカントリーやフォークをルーツにもつアーティストのようだ。水面をキラキラと輝かせる太陽光線のように、アコースティック・ギターの美しいアルペジオがやさしく降り注ぐフォーク・ナンバー「Umbria」が素晴らしい。

#035 | Jazz

Private Press / 1981 / Brazil

Marcos Ariel
Bambu

ブラジル人ジャズ・ピアニストのMarcos Arielによる極上のブラジリアン・フュージョン・アルバム。上昇気流を起こすような疾走感にあふれる高速サンバ・ジャズや、オーガニックでメロウな美しいスロー・ブラジリアン・ジャズなど、極彩色豊かな素晴らしい楽曲ばかりが、ずらりと並ぶ。エレピやキーボードの使い方も絶品で、曇った音色のせいか、どこかサイケデリックにも聴こえる。テクニック重視のフュージョンものとは一線を画す内容だ。ときおり聴こえてくるトリッピーなシンセSEもヤバい。

#036 | Jazz

Antilles / 1982 / US

Mark Egan & Danny Gottlieb
Elements

初期Pat Metheny Groupの骨格を支えた、ベーシストのMark EganとドラマーのDanny Gottliebによるプロジェクト。90年までに7枚のアナログ作品を発表しており、いずれもPat Methenyの審美眼を継承するクロスオーヴァーな作風の名作ぞろいだが、電子楽器を大胆に導入し、ミニマリスティックに構築されたトラックにダブル・ベースがたおやかなメロディ・ラインを重ねていくという、ふたりの個性が最も顕著に表われているのが、82年に発表されたこの処女作だ。太陽と海が実によく似合う。

#037 | Field Recording

Miyacho / 1978 / Japan

Masaaki Takano 高野昌昭
Shizukutachi しずくたち

高野昌昭なる人物について、詳しいことはまったくわからないが、ライナーノーツに書かれているささやかな文章を読むと、この作品の制作に至った氏の心境をうかがい知ることができる。全編にわたって、ただ、しずくのしたたり落ちる音が収録されているのだが、それはいわば、自己の音楽性を放棄し、自然が偶発的に奏でる再現不能な音楽を記録にとどめる行為に、自らの創造性を見いだしているようなものだ。聴こえてくる音は決して退屈ではない。個人的には打楽器音楽の感覚で聴いている。

#038 | Jazz

Rillenwerke / 1981 / Germany

Matthias Frey, Trilok Gurtu
Sandhya

Matthias Freyは、アカデミックな教養をバックボーンにもちながらも、オーガニシズムやアニミズムへの深い傾倒を感じさせる、数々の名作を残しているドイツ人ピアニストだ。Charlie MarianoやToto Blankeをはじめ、ECM周辺アーティストとの共演も著しいインド人パーカッション奏者、Trilok Gurtuと共演した本作は、なかでもオーガニックな志向が際立つ1枚で、ピアノと打楽器のみによるデュオとは思えないほどの奥行きと豊かな広がりをもった、自然讃歌的エスノ・ジャズの極みだ。

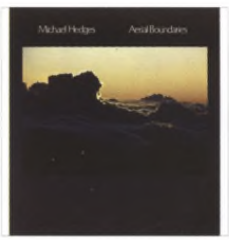
#039 | New Age

Inner Light / 1986 / US

Michael Bierylo
Life Line

アメリカのアヴァン・ジャズ・ロック・グループ、Birdsong Of The Mesozoicのギタリストとして活動していたMichael Bierylo が、マイナー・ニューエイジ・レーベルに残した唯一のソロ作品。オヴェーション・カスタム・ギターとレス・ポールのオーヴァーダビングのみで制作されており、淡いトーンのパステルで描かれたグラデーショナルな風景画のように、やわらかな色彩のギター・サウンドがとても美しい。カントリーやフォークをフォーマットとしているが、非常に洗練されたサウンドスケープだ。

#040 | New Age



Windham Hill / 1984 / US

Michael Hedges
Aerial Boundaries

超絶技巧で知られるアメリカのギタリスト、Michael Hedgesの作品のなかでも、とくに素晴らしいのが、84年に発表されたこのセカンド・アルバムだ。スラップ・ハーモニクスをはじめ、あらゆる技術を駆使した独自の奏法で演奏されるアコースティック・ギターから弾き出された、繊細でありながらダイナミックなソニック・サウンドが、ときには力強く、ときにはおだやかに降り注ぐ。さまざまな表情を見せながら、リアリティあふれる情景を描く、万華鏡のように美しいギター・ミュージックである。

#041 | World

Philips / 1978 / Brazil

Nivaldo Ornelas
Nivaldo Ornelas

ブラジル・ミナス派のリード奏者、Nivaldo Ornelasによる初リーダー作品。盟友Wagner TisoやToninho Hortaをはじめ、自身が参加していたグループQuarteto Contemporâneoのメンバーなど、錚々たる顔ぶれがサポートするほか、ブラス／ストリングス・アンサンブルをフィーチャーし、重厚でありながらな軽やかなシンフォニーを奏でる、ブラジリアン・フュージョン・アルバム。子供たちの可愛らしいコーラスや、ドラマティックな展開が冴えるアレンジの妙は、Egberto Gismontiからの影響か。

#042 | Experimental

Linterna Musica / 1983 / Spain

Orquesta De Las Nubes
Me Paro Cuando Suena

スパニッシュ・ニューエイジのパイオニアとして評価されている、プロデューサー兼ギタリストのSuso Saizが結成した先鋭音楽グループのI作目。現代音楽と民族音楽の素養をもつ打楽器奏者のPedro Estevanと、女性ソプラノ・シンガーのMaria Villaとともに、古楽器を多分に用いた土着的なサウンドとミニマル・ミュージックのイディオムを融合させた、稀に見る音楽性による新しい解釈の現代音楽を創造した作品だが、ふと我にかえってみると、どちらも根本は同じであることに気づかされる。

#043 | Experimental

Grabaciones Accidentales / 1987 / Spain

Orquesta De Las Nubes
Manual Del Usuario

アナログでの最終リリースとなる本作では、土着的な民族音楽と現代音楽の融合という、以前作の意匠を継承しながらも、さらに研ぎすまされた感性が際立つ、独創的な作風へと進化を遂げている。必要最小限の楽器群とエレクトロニクスで構成されたミニマリスティックなサウンドとソプラノ・ヴォーカルのスキャットが、宗教色の強い幽玄な音世界を描き出しているが、アクション・ペインティングのように衝動的な偶発性も感じさせる。先鋭的な実験精神とシャーマニズムは両立するのだ。

#044 | Jazz

ECM / 1984 / Germany

Pat Metheny Group
First Circle

数あるPat Methenyの名盤のなかでも、ECM時代最終作となるグループ名義5作目の本作は、Geffinレーベル移籍後に展開されるサウンド・クリエイションへとつながる、重要な分岐点となった作品だろう。Charly Garcíaを筆頭とするアルゼンチン・ロック・シーンで活躍していた、ベーシストでマルチ奏者のPedro Aznarが本作よりグループに正式加入し、きらめくように美しく、生命力に満ちあふれたMethenyサウンドのフォーマットをともに築き上げた。「End Of The Game」があまりに感動的。

#045 | Jazz

Interdisc / 1984 / Argentina

Pedro Aznar
Contemplacion

80年代のPat Metheny Groupにおいて重要な役割を担うこととなる、アルゼンチンのベーシスト兼マルチ奏者のPedro Aznarが、同グループの全面バックアップを得て完成させたソロ2作目。エレクトロニクスの導入が顕著だが、ウルグアイ／アルゼンチン人脈のさまざまなプロジェクトで活動した打楽器奏者のOzvaldo Fattorusoや、アルゼンチン・ロック界の至宝、Luis Alberto Spinetta率いるグループ、Invisibleのメンバーでもあるドラマーの Hector "Pomo" Lorenzoが参加している点も興味深い。

#046 | Rock

Ascolto / 1977 / Italy

Pepe Maina
Il Canto Dell'Arpa E Del Flauto

アヴァン・プログレ作品を数多くリリースしている、イタリアCGD傘下のインディ・レーベルに残された、ギタリスト／マルチ奏者Pepe Mainaの唯一作。ギターを軸に、ハープ、フルート、タブラ、シタール、シンセサイザーなど、すべての楽器の演奏を自らこなし、アフリカ、アラブや東洋の民族音楽とエレクトロニクスを融合させたような、神秘的な楽曲が並ぶ。体内に深く浸透するような、繊細で美しいオーガニック・サウンドを奏でた、エスニック・アンビエント・ロックの秘境的作品。

#047 | Jazz

Unicornucopia / 1986 / US

Pete Brewer
Dancing Visions

アメリカのマイナー・ジャズ・サックス奏者、Pete Brewerのソロ・アルバム。アダルト・オリエンテッドなヴォーカル・ナンバーから、ニューエイジ・ライクなクロスオーヴァー・ジャズまで、さまざまなスタイルに挑んでいるが、終始サマー・ブリーズな香りが漂う。シンセサイザー・パッドとパーカッションが深遠な空間を作り出すイントロから、ドラム・マシンによるデジタライズされたビートにライヴ・ドラムがフィルを重ねるエレクトロニック・フュージョンへと展開する「Inner Syncdom」のアンビエンスが美しい。

#048 | Jazz

Love / 1975 / Finland

Piirpauke
Piirpauke

70年代北欧のジャズ・シーンでは、多民族の音楽性がミクスチャーされたエスニックな要素の強い音楽が華開いたが、フィンランドのトラッド・ミュージックをベースに、南米、中東やアジアなどの民族音楽を取り入れたフォークロアなジャズ・ロックを展開したPiirpaukeも、その例外ではないグループだ。当時スウェーデンに移住していたアメリカのトランペッター、Don Cherryの影響下にあることをうかがわせるエキゾチックなサウンドだが、フィンランド特有の幻想的な風景音楽といった趣向である。

#049 | Jazz

ECM / 1981 / Germany

Rainer Brüninghaus
Freigeweht

ドイツ人ピアニストRainer Brüninghausは、ECMのアーティストのなかでも、とりわけ稀有な感性をもつジャズ・ミュージシャンではないだろうか。Steve Reichを彷彿させるミニマルなリフレインの微妙な変化や、美しい旋律を追いかけているうちに、いつのまにか音楽の世界へ引き込まれているという、良質なニューエイジやアンビエントと同様のメンタリティをもった音楽性を感じる。「Radspuren」では、スリーヴに配された3枚の写真のような飛翔感と爽快感を味わうことができる。

#050 | Jazz

Caprice / 1980 / Sweden

Resa
Lycklig Mardröm

EgbaやBitch Milkのメンバーを中心に結成されたスウェーデンのジャズ・グループ、Resaによる80年発表の2作目にして最終作品。ドラム、ベース、ピアノのリズム・セクションと、ギター、サックスからなる、いわばノーマルな編成のジャズ・カルテットであるが、ギターとスキャットのユニゾンが心地良いブラジリアン・フィーリングの「Al Revez」をはじめ、あたたかくポジティヴなヴァイブレーションに満ちあふれた、エッセンシャルなコンテンポラリー・ジャズを全編にわたり展開した好作だ。

#051 | Contemporary

VM Boxes Ed. / 1987 / Italy

Roberto Aglieri
Ragapadani

イタリアのフルート奏者、Roberto Aglieriの処女作。ジャズ、トラッド／フォークやクラシックをルーツにもつアーティストと思われ、楽曲によっては教会音楽のような雰囲気も漂っているが、オリエンタルな趣向が色濃く打ち出されている。さまざまなタイプのフルートやリコーダーにエレクトロニクスをブレンドした、幽玄でメディテーティヴなサウンドスケープを終始展開する、極めてナチュラルな志向の音楽である。本作以外では、ミレニアム以降に数枚のアルバムを発表しているようだ。

#052 | Experimental

Lynx / 1992 / Italy

Roberto Donnini
Fluxmar

建築家としてもその才能を発揮するイタリアの芸術家、Roberto Donniniによるコンセプチャル・アート的実験音楽作品。楽曲は4つのピースに分かれていて、ミュージシャンたちはそれぞれ、別のピースでほかのミュージシャンが演奏した録音を聴きながら、インプロヴィゼーションで演奏を重ね、新たなアンサンブルを構築していくという、シート・ミュージックなる手法を創造。終始同一のテンションで展開していくが、折り重なる旋律は常に変化を繰り返しながら、しだいに環境へ溶け込んでいく。

#053 | Folk

Saga / 1991 / Spain

Rosa Zaragoza
Galaneta Mà

ムスリムからクリスチャン・トラッドまで幅広く歌う、スペイン・カタルーニャ地方の伝統音楽を継承するスピリチュアル・トラッド・フォーク・シンガー、Rosa Zaragonaが91年に発表した異色作にして傑作。小鳥のさえずり、赤ん坊の声、水を汲む音、集音されたさまざまな素材に、トラッド・ソングをアレンジした子守唄のようなヴォーカルと室内楽のような演奏がコラージュされた、非常にコンセプチャルで実験的な作品だが、音場に出現する世界はどこまでもおだやかでナチュラル、そしてオーガニック。

#054 | New Age

Private Music / 1985 / US

Sanford Ponder
Etosha - Private Music In The Land Of Dry Water

クラウト・ロック・グループTangerine Dreamのオリジナル・メンバーのPeter Baumanが、アメリカのニューエイジ・レーベルWindham Hillの傘下に設立したレーベル、Private Musicから発表された、コンポーザー／電子音楽家のStanford Ponderによるセルフ・ポートレイト的作品。サンプラー、FMシンセサイザーとギター・シンセを使用した、ミニマムな構成によるニューエイジ・エレクトロニクスだが、乾燥した大地、水の流れ、生命の息吹きなど、アメリカの広大なランドスケープを想起させるサウンドだ。

#055 | Jazz

ECM / 1981 / Germany

Steve Eliovson, Collin Walcott
Dawn Dance

南アフリカ出身の無名ギタリストがECMに残した唯一作にして、珠玉のギター・ミュージック。有機的なランドスケープを描く、繊細で抒情性豊かなアコースティック・ギターの調べ。本作にひとりゲスト参加した打楽器奏者、Collin Walcottによるエキゾチックなパーカッションが、さらに立体的な奥行きを与えている。本作以降、作品は発表されておらず、その経歴は依然、謎に包まれている。同レーベルから次回作を発表する機会も得ていたらしいが、不運にも事故に遭い、頓挫したようだ。

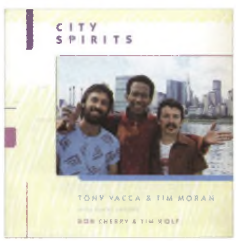
#056 | Contemporary

ECM / 1978 / Germany

Steve Reich
Music For 18 Musicians

71年発表の『Drumming』以降、自身の作品における先駆的手法であったフェイズ・シフティング技法から、より複雑な構造のコンポーズへと作風を進化させたSteve Reichだが、本作より再び原点回帰する。しかし、以前作と決定的に異なるのは、18人の演奏家によって構成される壮大なアンサンブルに挑んでいる点だ。ミニマルなパターンを繰り返し演奏する各パートが発する、パルスやリズムの微妙なズレから生まれる、不規則で偶発的なアンサンブルが、微細なモアレを描き出す。

#057 | Jazz



Philo / 1986 / US

Tony Vacca & Tim Moran
City Spirits

アメリカ人打楽器奏者Tony Vaccaとリード奏者Tim Moranが、Don Cherry師範とTim Wolfをゲストに招いて制作した86年作。アフリカ、アラブやアジアなどのあらゆる伝統民族楽器を大量に駆使して繰り広げられる無国籍民族ジャズだが、非常に洗練されたサウンドだ。Don Cherryが得意とする“Doussn' Gouni”なるアフリカの民族弦楽器が本作でも登場し、プリミティヴなパーカッション・サウンドと有機的に交わる。まるで目の前で演奏が繰り広げられているかのような臨場感だ。

#058 | Jazz

Amigo / 1986 / Sweden

Torbjörn Langborn & The Feel Life Orchestra

Torbjörn Langborn & The Feel Life Orchestra

スウェーデンのジャズ・ロック・グループSplashにも参加していた鍵盤奏者、Torbjörn Langborn率いるThe Feel Life Orchestraの唯一作。軽快なパーカッション・リズムとエモーショナルなブラスが疾走するブリージンなサンバ・ジャズから、ディスコとサンバにアフロ・キューバンがミックスされたような三部構成の長編組曲まで、ラテン・フィーリングを多分に取り入れた透明感のあるクロスオーヴァー・サウンドが素晴らしい。北欧に限らず、ヨーロッパでこのタイプの作品は珍しい。

#059 | World

Carmo / 1985 / Brazil

William Senna

O Homem Do Madeiro

ブラジルの至宝といっても過言ではない天才コンポーザー、Egberto Gismontiが主宰するCarmoレーベルからリリースされた、ヴィオラ奏者のWilliam Sennaによるソロ・アルバム。Gismontiがシンセサイザーなどでサポートしているが、ほぼ全編にわたり、Senna自身によるヴィオラのソロ・パフォーマンスを主体に構成された作品。同じくブラジルのヴィオラ奏者、Stenio Mendesにも通じる研ぎすまされた精神性と情熱が交錯する、どこまでも果てしない陶酔感をもった、精神性あふれる音楽。

#060 | World

Canyon / 1984 / Japan

Yas-Kaz

Jomonsho 縄文頌

坂田明や阿部薫とのセッションを皮切りに、ジャズ・ドラマーとしてのキャリアをスタートし、山海塾とのコラボレーションをはじめ、モダン・ダンスのグループに多数作品を提供するなど、多岐にわたり活動を続けるパーカッショニストYas-Kazのファースト・ソロ・アルバム。まるで本物の鳥が鳴いているようなパーカッションや笛の音、生々しく立体的な音響とともに音場に出現する、ありのままの自然。他に類を見ない有機的な世界観とプリミティヴな精神性。行き着く先はアニミズムか。

#061 | New Age

Polydor / 1984 / Germany

Zenamon

Zenamon

南米諸国やイスラエルで音楽を学んだボリビア生まれのギタリスト、Jamie Mirtenbaum Zanamonは、ギター・アンサンブルを主としたスコアから、室内楽やオーケストラのコンポーズまでを手掛ける作曲家だ。初のソロ・アルバムとなる本作は、ツィターをはじめとする民族楽器とシンセサイザーやプログラミングを駆使し、エキゾチックな情緒あふれるバンド・サウンドを構築。メランコリックなニューエイジ・ミュージックを披露した名盤だ。本作からカットした12インチも発表されている。

column_01

音楽のパラダイム・シフト

本書は、特定のターゲットに向けて書かれたものではないが、僕自身がアンダーグラウンドなクラブ・シーンの住人なので、クラブ・ミュージックを聴いている人たちにも読んでもらえたらと思っている。しかし、本書で取り上げているレコードとそのレビューを見ても、クラブ・ミュージックとの接点はなかなか見いだせないかもしれない。

ではなぜ、このように雑多な聴き方をするに至ったのか。凝り性、飽き性な性格が災いしてか、現行のクラブ・ミュージックに食傷感をおぼえていたときに、いくつかの偶然が重なって、クラブ・ミュージックではない、昔の音楽を使ってDJをするようになった。そのころはまだ、いろいろなジャンルのなかからダンス・フロアで機能する音楽だけを選び出していたのだが、そのようなレコードには、正しくビートを刻んだ音楽だけではなく、変拍子だったり、ドラムレスの音楽も収録されていたりする。簡単にいえば、そういうものを聴いているうちに、ダンス・ミュージックとして機能しない音楽に入れあげてしまったというわけだ。

そんなとき、ある店からDJの誘いをもらい、“なんでも好きにかけていい”という言葉を真に受けて、ジャーマン・ロックや電子音楽、実験音楽のレコードをしこたまバッグに詰め込んで、ダンス・ミュージック最大の約束事である“ビート”という概念からいったん放れてDJに臨んだ。

それは、今までにない新しい感覚の体験だった。クラブのサブ・フロアや野外パーティなどで行なわれるチルアウトと、似ているようでまったく違うものだった。すべての束縛から解放され、音楽そのものに宿る力を借り、インスピレーションにすべてをゆだねて物語を紡いでいく。僕はただの媒介に過ぎない。音楽がすべてを語るのだ。レコードを買うときからすべてが始まっているのだ。これが僕にとってのパラダイム・シフトだった。そうして、リスニング・スタイルのDJが始まった。

さらに面白いのは、このような転換が僕だけに起こったのではなく、遠く離れた海外でも起こっていたことだ。海外を訪れたとき、何年も前に知り合った友人と久しぶりに再会し、彼の家に遊びにいったのだが、せきを切ったように聴かせてくれた大量のレコードを見て驚いた。ディスコDJだった彼も同じような経験をして、同じような転換を迎えていたのだ。

今、わずかではあるが、このような新しい耳で音楽と向き合っている連中が、世界に点在している。さらには、僕のようにある程度の年齢と経験の積み重ねや段階を経由せずに、インターネットの力を借りていきなり飛び込んでくる若い世代もいる。

しかし、僕が知らないだけで、このような音楽の聴き方をしてきた人たちは、今までにもたくさんいたのではないかとも思う。その先人たちが無意識のうちに蒔いていった種に、たまたま水をやっているだけのような気がする。

ethnic

ethnic

“エスニック”とはその言葉のとおり、民族がもつ固有の性質や文化を根底とするルーツ・ミュージックを指すが、本章では、土着文化としての現地音楽はあえて除外し、民族的伝統を自己の音楽性に反映し昇華させた音楽、ルーツ回帰に新たなる創造力を得て生まれた音楽、さらには異国文化への憧れ＝エキゾティシズムに思いを馳せた音楽など、多種多様な表現方法のなかで転生する、さまざまな民族性を内包した音楽を取り上げている。

masterpiece

#062 | World

Odin / 1985 / Norway

Tamma with Don Cherry & Ed Blackwell

Tamma with Don Cherry & Ed Blackwell

スウェーデンに移住後、民族音楽への探究心がより強まっていったDon Cherryだが、盟友であるドラマーのEd Blackwellとともにアフリカ人ミュージシャンたちと共演した、ノルウェーのモルデ・インターナショナル・ジャズ・フェスティヴァルでのライヴ録音を収録した本作は、その民族志向が最も顕著に表われている。ポケット・トランペットから紡ぎ出される旋律はまさにDon Cherry節だが、躍動するアフリカン・パーカッションが放つポジティヴなパワーは、土着儀礼音楽そのもの。

#063 | Rock

MNW / 1975 / Sweden

Arbete Och Fritid

Ur Spår!

雑多な音楽性で9枚ほど作品を残している、スウェーデンのロック・グループによる5作目で、74年に行なわれたコンサートのライヴ・レコーディング・アルバム。ジャズをフォーマットに、スウェーデンのトラッド・ミュージックの伝統を吸収したエスニックな志向を加え、混沌としながらもストーリー性のある、サイケデリックなインプロヴァイズド・ミュージックを終始繰り広げている。70年代初期にスウェーデンに移住したアメリカのジャズ・トランペッターDon Cherryとの交流を感じさせる。

#064 | Jazz

MNW / 1977 / Sweden

Archimedes Badkar

Tre

Don Cherryとの交流も深い打楽器奏者のBengt BergerやPer Tjernbergをメンバーに有する、スウェーデンのエスニック・ジャズ・コンボによる3作目。プログレッシヴ・ロックとしてカテゴライズされていることが多いようだが、決してその範疇にとどまらない、ワイドな志向性をもった作品。打楽器や弦楽器を主体に、世界中のありとあらゆる民族楽器を取り入れたエキゾチックなサウンドと、大所帯グループならではのパワフルでエネルギッシュな演奏は、さながら北欧のFela Kuti & Afrika 70といったところか。

#065 | Jazz

Olufsen / 1988 / Denmark

Atilla Engin Group

Melo Perquana

デンマークを拠点に活動するトルコ出身のパーカッション・プレイヤーAtilla Enginが、北欧ジャズ・シーンで活躍するミュージシャンを従え結成したグループの88年作。トルコ民族音楽の伝統を多分に含んだ土着的なパーカッション、Ane Ramloseによるミステリアスなスキャット、オリエンタルな旋律を奏でるソプラノ・サックス、さらにはドラム・マシンをも導入し、強烈なグルーヴ感をもったターキッシュ・ジャズを展開している。初期作品とはひと味違う、洗練されたサウンド。

#066 | World

Guimbarda / 1982 / Spain

Babia

Oriente - Occidente

のちに、スペインのコンテンポラリー・ミュージック界で重要な役割を担うことになるふたりのマルチ奏者、Luis DelgadoとLuis Paniaguaが名を連ねるグループによる唯一作。母国スペインをはじめ、アフリカ、中東やインドなど、世界各国のさまざまな民族楽器を多量に用いたエキゾチックなアコースティック・サウンドに、シンセサイザーなどのエレクトロニクスを融合させた、無国籍なニュー・ワールド・ミュージックという発想は、ブラジルのギタリストEgberto Gismontiにも共通する。

#067 | Library

Patchwork / 1986 / France

Bernard Arcadio Et André Ceccarelli
Africa

60年代にLes Chat Sauvagesというロック・グループのメンバーとして活動を開始し、作曲家としても数々のアーティストに作品を提供しているフランス人ドラマーのAndré Ceccarelliが、ピアニストのBernard Arcadioとのコンビで、アフリカをテーマに制作したライブラリー作品。サバンナの乾燥した空気と広大なランドスケープを想起させるアフリカン・パーカッションが、大地の鼓動のごとくリズムを刻む打楽器音楽集。さまざまな仮想音楽を楽しめるのが、ライブラリー作品の面白いところだ。

#068 | Jazz

Jazz Haus Musik / 1984 / Germany

Boury
Für Herrn Keupert

ドイツのエクスペリメンタル・ジャズ・グループによる2作目。パワフルなパーカッション・ビートと芯の太いベースに、フルートや尺八が奏でる土着的な旋律がミステリアスな「Türkischer Honig」や、ミニマルに反復するザイロフォンとヴァイブラフォンのレイヤーに、トランシーなドローン・サウンドを放出する正体不明の楽器の音色がデンジャラス極まりない「Akasha」など、パーカッションや音階打楽器に世界各国のリード楽器を大量に導入した、フリーフォームなエスニック・ジャズ作品。

ethnic

#069 | World

Philips / 1978 / Brazil

Djalma Corrêa
Baiafro

ブラジルの有能なミュージシャンを紹介するPhilipsのシリーズ、“Musica Popular Brasileira Contemporanea”から発表された、パーカッショニストDjalma Corrêaの処女作。1曲トラッド・ミュージックを取り上げている以外はすべて、Djalma Corrêaのコンポーズによる楽曲を収録している。アフリカから多くの黒人奴隷が連れてこられた地域であり、また、ブラジルの魂ともいえるサンバの源流ともなった、バイーアの伝統的な黒人音楽の血統を引き継いだ、儀礼的ともいえる打楽器音楽が繰り広げられている。

#070 | World

Original Ton West / 1984 / Germany

Dunyabélé
Reality

Dominik Von Sengerやダモ鈴木の作品に参加しているアフリカ人ミュージシャン、Mandjao Fatyを中心とするグループの唯一作。軽やかなアフロ・ビートを刻むリズム・セクションをバックに、クリーン・トーンのエレクトリック・ギターが流麗なリフレインを奏でる、カッティングエッジなアフロ・ビートを収録した知られざる名盤。Phantom BandやDunkelzifferなど、Can人脈のジャーマン・ニューウェーヴ・グループに、アフリカ音楽の影響が色濃く反映していたことが垣間見られる貴重な作品だ。

#071 | Jazz

Sonet / 1973 / UK

Dyani ,Temiz, Feza
Music For Xaba

Don Cherry Trioで活動をともにしたJohnny DyaniとOkay Temizに、Assagaiのメンバーでもあるmongezi Fezaが加わった変則トリオが、72年にスウェーデン・ストックホルムで遂行したライヴを録音した作品。トルコの民族打楽器ダルブッカが組み込まれた特殊なセッティングのドラム・セットと、アフリカン・パーカッションが繰り出すワイルドなリズムに絡む、プリミティヴなアフロ・チャントが生々しく音場に響きわたる、ブラックネスあふれる冒頭曲「Idyongwana」が素晴らしい。

#072 | Rock

Schneeball / 1985 / Germany

Embryo & Yoruba Dun Dun Orchester
Embryo & Yoruba Dun Dun Orchester

Embryoはサイケデリック・ロック・グループとして69年に活動を開始しているが、民族音楽への傾倒が顕著で、70年代後半にはグループ総出でアフリカやアラブへの演奏旅行を幾度となく行ない、現地のミュージシャンとのセッションを繰り返すなかで、そのエッセンスを作品へ多分に取り込んでいる。本作はアフリカ・ヨルバの打楽器演奏グループとともに現地録音された作品で、土煙がたちこめるような埃臭いサウンドのなかに、Embryo特有のサイケデリクスが感じられる隠れた名盤である。

#073 | Jazz

Nagara / 1978 / Germany

Family Of Percussion
Message To The Enemies Of Time

トロンボーン奏者Albert Mangelsdorffのクインテットからキャリアをスタートさせたスイス人ドラマーPeter Gigerが、ジャズ・シーンで活躍するドラマー／パーカッショニストとともに結成したグループの1作目。ドラム・セットをはじめ、タブラ、ダルブッカ、タムタム、バラフォン、ザイロフォン、ゴング、スティール・ドラム、ベルなど、多量の打楽器がナチュラルな音質で空間に飛散する、土着的な精神性と前衛的な実験性を兼ね備えた、エスニック・パーカッション・ミュージック。

#074 | World

Ozileka / 1982 / France

Francis Bebey
New Track

カメルーン出身のアーティスト、Francis Bebeyの活動歴は長く、60年代後半から80年代後半にかけて数多くの作品を発表している。親指ピアノやギターによるアコースティックなフォークロアから、電子楽器を使用したキテレツなエレクトロまで、作風も実に幅広いが、こちらは後者か。 シンプルに打ち込まれたリズム・ボックスのビートと、シンセサイザーのチープなサウンドのコントラストが、あまりに強烈な印象を残すが、独特のゆらぎをもったBebeyのヴォーカルも、ただひたすら気持ちいい。

#075 | World

Invitation / 1982 / Japan

Geino Yamashirogumi 芸能山城組
Africa アフリカ幻唱

組頭、山城祥二を中心に、DNAに約束された人類本来のライフスタイルを模索検証することが、文明批判の一拠点であると意匠に掲げた実験集団として、60年代より活動を続ける芸能山城組。人間の肉声と電子音の融合や、ブルガリアン・ポリフォニーをはじめて日本に紹介するなど、前衛的な活動を行なってきた集団だが、本作では、幾重にも折り重なるアフリカン・チャントと、大地の鼓動のごとく響きわたる太鼓の音が、聴くものの潜在意識に訴えかける、超原始的精神音楽を作り上げている。

#076 | Jazz

CMP / 1987 / Germany

Glen Velez
Seven Heaven

Steve Reichの名盤『Drumming』にも参加しているGlen Velezは、ブラジルのパンデイロやエジプトのリクをはじめ、世界各国のハンドドラムを自在に操る名手として知られるアメリカ人打楽器奏者だ。ソロ3作目となる本作では、女性パーカッショニストのLayne Redmondとのコンビネーションで演奏される、ムビラやゴブレット・ドラムなどをはじめとするさまざま打楽器と、Steve Gornによるやわらかな音色のバンスリによるアンサンブルが、万華鏡のように色彩の変化を帯びながら展開していく。

#077 | Ambient

Hot / 1984 / Australia

Gondwanaland Project
Terra Incognita

ディジリドゥ奏者と鍵盤奏者からなるオーストラリアのエクスペリメンタル・グループ、Gondwanaland Projectの1作目。土着色の強い民族楽器と電子楽器の組み合わせによるトライバルなエレクトロニック・ミュージックというスタイルは、90年代前半からヨーロッパを中心に隆盛するトランスやチルアウトなどのレイヴ・カルチャーを先取りしている。まるで、Clusterとアボリジニが出会ったような感覚をおぼえるが、そういった意味では、Moebius-Plank-Neumeirの『Zero Set』のほうが先陣か。

#078 | World

Azwaw / 1982 / France

Groupe Berbere Agraw
Groupe Berbere Agraw

パーカッショニストのArezki Baroudiがプロデュースする、80年代のパリで華開いたライ・ミュージック・シーンで活動したと思われる、ふたりのアルジェリア人ミュージシャンからなるグループのアルバム。深いリヴァーブが施されたアラビアン・チャント、ドラム・マシンのようにシンプルでタイトなビートに陶酔感のあるウードの旋律がレイヤーされた、エキゾチックなサイケデリック臭がプンプンと漂う、向こう岸のオリエンタル・グルーヴ。本作以外にもカセット・テープで作品を残している模様。

#079 | World

Top Hits / 1980 / Venezuela

Grupo Madera
Folklorica Y Experimental

世界にはアフリカから派生した素晴らしい現地音楽が数多く存在するが、ベネズエラにおいてもそれは同様で、本作を制作したGrupo Maderaも、ナイジェリアから強制連行された黒人奴隷たちによって継承され発展した土着民族音楽を包括的に集約したグループだ。アフリカ諸国に広く分布するリズムとスペインのフォルクローレが生活のなかで自然と結びついた豊かな音楽を堪能できるが、その根底にはヨーロッパ列強国による奴隷制度が深く関わっていることを忘れてはならない。

#080 | Ambient

Monad / 1985 / Japan

Haruomi Hosono 細野晴臣
Paradise View

YMOを散開後の細野晴臣が、レコード会社を移籍して新たに創設したふたつのレーベルから怒濤のごとく作品を発表していた時期の1枚。こちらはそのアンビエント・サイドにあたり、沖縄を舞台にした同名映画のサウンドトラックとして制作された、モナド観光音楽シリーズの第3弾。琉球音楽の伝統的な音階を取り入れてはいるが、ガムランなど東南アジアの民族音楽からの影響を強く感じさせるエキゾチックなサウンドで、ミニマル・コンテンポラリーの手法も存分に引用されたと推測する。

#081 | Avant-Garde

Crammed Discs / 1985 / Belgium

Hector Zazou
Reivax Au Bongo

アヴァン・ロックからチェンバー・ミュージックまで、その音楽性は多岐にわたるフランス人コンポーザーのHector Zazouが、映画監督Xavier Lamboursの監修によるフォト・ノヴェルのサウンドトラックとして制作したもので、Zazou Bikaye名義でともに活動したアフリカ人シンガーのBony Bikayeや、79年の狂盤『La Perversita』でも共演したマルチ奏者のMedor Maderなどが参加。透きとおるほどに美しく瑞々しい空間に、アフリカン・チャントやパーカッションが三次元化する立体音響作品。

#082 | Jazz

Disques JMS / 1979 / France

Henri Texier
A Cordes Et À Cris

フランスのダブル・ベース奏者、Henri Texierは、Daniel HumairとFrançois Jeanneauとのトリオ作品も含め、80年までの初期5作品において非常に独創性あふれる音楽を創造している。79年発表の本作では、Aldo Romano、Gordon Beck、Didier Lockwoodなど、フレンチ・ジャズ・ロック界の精鋭が参加し、シンプルな構成／アレンジでエスニック感覚あふれる叙情を描き出しているが、Henri Texier自身による朴訥なスキャットとダブル・ベースの柔和なアンサンブルが、なによりも素晴らしい。

#083 | World

Echo / 1985 / India

Ilaiyaraaja (Original Soundtrack)
Andha Oru Nimidam

インドの一大映画シーンの総称として、すでに定着した感のあるボリウッドだが、映画音楽もその独自性においては唯一無二だ。とくに南インドの映画シーン、通称コリウッドのサウンドトラックは摩訶不思議なものが多く、そのコリウッドにおいて巨匠といわれる作曲家、Ilaiyaraajaが音楽を手掛けた本作も、インド古典音楽の伝統を引き継ぐオリエンタル音階の旋律と、シンセサイザーやドラム・マシンのトリッピーな電子音が凄まじいテンションで入り乱れる、狂おしいまでにストレンジなエキゾチック・ミュージックだ。

#084 | Jazz

Grabaciones Accidentales / 1988 / Spain

Javier Paxariño
Espacio Interior

Javier Paxariñoは、Kevin Ayersや山本邦山などとも共演歴をもつスペインのマルチ・プレイヤーだ。スパニッシュ・ニューエイジ・シーンの立役者のひとり、Suso Saizを共同プロデューサーに迎え制作したソロ1作目となる本作は、ウッドウィンドやソプラノ・サックスなどのリード楽器よる、艶のある伸びやかなサウンドをフィーチャーしたブライトなエレクトリック・フュージョンから、アフリカ音楽を絶妙に吸収したエスニックなクロスオーヴァー・ミュージックまでを披露した好作である。

#085 | Jazz

Eigelstein / 1981 / Germany

Jazz Yatra Sextett
Sangam

インド人ミュージシャンによるジャズ・セクスセットの唯一作。インドの伝統打楽器を用いた躍動感あふれるリズム隊と、インド人女性ヴォーカルによるトラディショナルなチャントをフィーチャーし、弾けるようなインタープレイが繰り広げられる高速ジャズ・ファンクから、プログレッシヴ・ロックばりに展開するスペーシーなクロスオーヴァー、アーバンなジャズ・グルーヴまで、南インドの古典音楽とジャズがスパイラルに融合した、凄まじいポテンシャルのサウンドに終始圧倒される。

#086 | Jazz

Mbira / 1985 / US

Jim Brock
Pasajes

ドラム／パーカッション界のイノヴェーターとして、Janis IanやJoe Cokerなど、さまざまなアーティストの作品に参加しているアメリカ人パーカッショニスト、Jim Brockが85年に発表したソロ・アルバム。世界各国のパーカッションを駆使したプリミティヴなサウンドと、オーセンティックなジャズのエッセンスが有機的に結合した、エスニック・クロスオーヴァー作品。軽やかにグルーヴする南国トロピカル・ジャズから、湿り気のある空気がひんやりと漂うミステリアスな熱帯雨林ジャングル・ジャズまで。

#087 | Jazz

Leo / 1977 / Finland

Juhani Aaltonen
Springbird

Juhani Aaltonenは、Edward VesalaやArild Andersenのグループでの活動をはじめ、フィンランドのジャズ・シーンで活躍した名うてのリード奏者だ。フリー／アヴァンギャルドの要素が強いアーティストであるが、77年に発表した本作では、土着的な打楽器のリズムとタンブーラのドローンをバックに、ハードエッジなエレクトリック・ギターやエフェクティヴなフルートが乱舞するサイケデリック・ジャズ・ロック「Manzil」を筆頭に、かなり特異な様相のエスニック志向を見せている。

#088 | World

Trikont / 1981 / Germany

Kapingbdi
Don't Escape

Kapingbdiは、西アフリカ・リベリア共和国のグループで、78年から81年までの間に、ドイツ・ミュンヘンのレーベルTrikontに3枚のアルバムを残した。Fela KutiやCymandeを彷彿させるファンキーなアフロ・ビートから、親指ピアノやバラフォンなどの土着的なアフリカ民族楽器によるディープ・オーガニックなアフリカン・ジャズまで、絶妙なグルーヴ感をもったアフリカン・ミュージックを披露している。ジャズ、レア・グルーヴ、ディスコなど、多方面から注目されてしかるべきサウンドだ。

#089 | Jazz

Plane / 1978 / Germany

Katamaran
Café Florian

ドイツのマイナー・ジャズ・セクステットによる2作目。洒落たカフェ・ミュージックを想起させるアートワークだが、引き締まったリズム・セクションが繰り出すラテン・フィーリングのビート、浮遊感のあるエフェクティヴなフルートや、アーブ・シンセサイザーのトリッピーかつコズミックなサウンドがトッピングされた、エスニックな要素を多分に含むクールなプログレッシヴ・ジャズ・ロック作品だ。オープン・カフェの雑踏のようなSEから幕を開ける「Café Florian」の展開がすごい。

#090 | World

Polskie Nagrania Muza / 1987 / Poland

Kulpowicz feat. Niemen
Samarpan

82年制作の『Three Etudes / Parased In Mangalore』から5年の歳月を経て発表された、ポーランドのジャズ・ピアニスト、Sławomir Kulpowiczのソロ3作目で、ビート・ミュージック・メイカーとして著名なシンガーのCzeslaw Niemenをフィーチャー。やや駄作感の否めない前作のイメージを完全に払拭し、新境地へと到達した名盤だ。かろうじてジャズの形態を維持しているが、タブラやタンブーラなどのエスニックな楽器群とエレクトロニクスが際立つ。ニューエイジ・フォークロアとでもいうべきか。

#091 | Jazz

Muse/Art / 1983 / US

Larry Chernicoff
Gallery Of Air

Larry Chernicoffは、クラシカルなエレメントのジャズやロックをバックグラウンドにもつマルチ・インストゥルメンタリストだが、処女作と思われるこのアルバムでは、バスーン・トランペットやアフリカン・ボウ・ハープをはじめとする民族楽器や、レトロなシンセサイザー・サウンドを取り入れ、エクスペリメンタルでありながらもエレガントなエスニック・ジャズを創造している。Don Cherryの民族志向とPhillip Glassの実験精神をかけ合わせたような、独特の音楽性をもった稀有な作品だ。

#092 | Experimental

Grabaciones Accidentales / 1986 / Spain

Luis Delgado
Vathek

長い歴史のなかでさまざまな民族に支配されたスペイン南部の自治州、アンダルシアの音楽文化を継承するLuis Delgadoは、オリエンタリズムとモダニズムを合わせもったスパニッシュ・コンテンポラリー／ニューエイジ・ミュージックの立役者でもある。初のソロ・アルバムとなる本作でも、イスラム圏をはじめとする多種多様な伝統民族楽器を自ら演奏し、エレクトロニクスと違和感なく融合させた先鋭的なワールド・ミュージックを創造しているが、難解さは皆無で、音場へ有機的に溶け込む環境音楽的志向だ。

#093 | Experimental

Grabaciones Accidentales / 1987 / Spain

Luis Paniagua
Neptuno

世界の民族楽器を操るマルチ・プレイヤーでもあるスペイン人音楽家のLuis Paniaguaが、82年に唯一の作品を残している先鋭エスノ・グループのBabiaで活動をともにした、Luis Delgadoを共同プロデューサーに迎え制作したソロ2作目。どの作品においても一貫したオリエンタリズムを表現しているアーティストだが、民族楽器に対する造詣の深さと演奏技術は相当なもので、さらには現代的なアレンジ能力ももちあわせた氏だからこそ構築を可能とする、新感覚のワールド・ミュージックである。

#094 | Jazz

P.M. / 1977 / US

Marcio Montarroyos
Stone Alliance

ブラジルのトランペッター、Márcio Montarroyosの活動遍歴は広範囲で、Milton Nascimento、Jorge BenやEgberto Gismontiをはじめ、数多くのMPB名作に参加している。Hermeto PascoalやSteve Grossmanが参加した初のリーダー・アルバムとなる本作では、自身によるトリッピーなシンセサイザーなどもフィーチャーしたディープ・ジャズ・ファンク「The Greeting」を筆頭に、リードだけではなく鍵盤やヴォーカルなども披露し、マルチ・プレイヤーとしてもその才を発揮している。

#095 | Jazz

Nabel / 1986 / Germany

Maria João Quintet
Conversa

日本人ジャズ・ピアニストの高瀬アキとの活動でも知られる、ポルトガル・リスボン出身の女性ジャズ・ヴォーカリスト、Maria Joãoのクインテット名義での3作目。レイドバック気味にシャッフルするドラムやベースが疾走するJoão Boscoのカヴァー曲「O Ronco Da Cuíca」のグルーヴ感も非常に素晴らしいが、ディープな残響空間のなかで各パートがミステリアスにフレーズを重ね合わせていくアヴァン・エスノ・ジャズ「A Uma Escrava Que Lheocultou O Sol」のエキゾチックな浮遊感があまりにも秀逸。

#096 | World

Ariola / 1991 / Germany

OÏO
Anima

おそらくフランス人ミュージシャンによるグループと思われる、OÏOの91年作。ドライなパーカッションとロー・ファットなベース、ミステリアスな音階を奏でるソプラノ・サックスがトランシーに展開する「Sohoro」、虫の鳴き声やカリンバの透明感のあるサウンドと、アラビックな旋律のヴォイス・パフォーマンスが異国情緒を漂わせるディープ・アンビエント・トラック「Kalimba」など、乾燥した砂漠地帯を想起させる、サハラ・テイスト満点のネオ・ワールド・ミュージック作品。

#097 | Jazz

Sonet / 1977 / UK

Okay Temiz
Oriental Wind

スウェーデン移住後のDon Cherryと深い交流をもつトルコ人ドラマー／マルチ・パーカッショニストのOkay Temizが、スウェーデン屈指のジャズ・ミュージシャンとともに結成したグループの1作目。倍音を放射するビリンバウ、サズーのエキゾチックな旋律、タムの代わりにダルブッカが組み込まれた変則ドラム・セットから繰り出される、アグレッシヴかつグルーヴィなドラミング、トルコ民族音楽の素材をアレンジしたストームのようなエスニック・ジャズ・グルーヴがあまりにも強烈。

#098 | Jazz

Casablanca / 1983 / Japan

OM
Solar Wind

80年代前半に活動した日本のアコースティック・グループ、OMの音楽性は、中心メンバーであるギタリストの羽野誠二が最も影響を受けたと公言してやまないアメリカのギタリスト、Ralph Townerの作風に直結する。インド古典楽器を取り入れながら、自然と対話するかのごとき精神性を感じさせるピュアなアコースティック・サウンドが、Townerが在籍したエスノ・ジャズ・グループのOregonを彷彿させる。ムー・プロジェクトの中心人物、国吉良一によるプロデュースも冴えわたる。

#099 | World

High-Fine Music / 1988 / Germany

Om Buschman
Total

7人のドイツ人ミュージシャンからなるグループ、Om Buschmanの唯一作。アフリカ、ブラジル、アフロ・キューバンなど、多種多様な黒人音楽を吸収し、アブストラクトなアレンジによるネオ・ワールド・ミュージックを展開した作品で、大地をゆるがすような低周波パーカッションが生み出すポリリズミックなビートに、エフェクティヴなアフリカン・チャントやトリッピーなシンセサイザーが絡む「Hey Tata Gorem」ほか、プリミティヴなパーカッション・アンサンブルとコンテンポラリーなアレンジが非常に素晴らしい1枚。

#100 | Jazz

44 / 1974 / Australia

The Original Galapagos Duck
Ebony Quill

70年代中後期にかけて5枚のアルバムを残しているオーストラリアのジャズ・ロック・グループ、The Original Galapagos Duckの1作目。5人のミュージシャンからなるクインテット編成のバンドだが、いずれのメンバーも多種の楽器を演奏するマルチ・ミュージシャン集団だ。さまざまなパーカッション群が繰り出すエキゾチックなリズムと、アーシーな旋律を奏でるリード楽器、過剰なまでに深い残響処理が施されたトリッピーなサウンド・メイクがすごい冒頭曲「Ebony Quill」で、いきなりトバされる。

#101 | World

Discos Marcus Pereira / 1975 / Brazil

Papete
Berimbau E Percussào

ブラジリアン・パーカッショニストの先人、Airto MoreiraやNaná Vasconcelosに多大なる影響を受け、自身も独自の演奏スタイルを築き上げたPapeteことJosé De Ribamarは、ビリンバウ奏者としても類い稀なる才能をもつミュージシャンで、ソロ1作目にあたる本作でも、オリジナリティあふれる演奏を披露している。まるで生き物のように生命力に満ちあふれた多様なパーカッション、弦のしなる音まで伝わってくる躍動感あふれるビリンバウの旋律は、人間の俗世界とはまったく違う時間が流れるアマゾンの密林を想起させる。

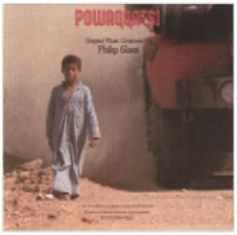
#102 | Jazz

Rub-A-Dub / 1990 / Sweden

Per Tjernberg
They Call Me

アフロ・ジャズ・コンボArchimedes Badkarへの参加や、Per Cussion名義でのリリースなど、民族系ジャズからブレイク・ビーツまで、リズムにこだわった作品を数多く発表しているスウェーデン人打楽器奏者のPer Tjernbergによる90年作。親指ピアノ、ログ・ドラム、ダルブッカ、アンクラングなど、さまざまな地域の民族打楽器が奏でるあたたかいリズムが気持ち良い、Don Cherry直系の土着系民族サウンドにモダンな解釈が加えられた、ネオ・エスニック・ミュージックが全編にわたり繰り広げられている。

#103 | Contemporary



Elektra Nonesuch / 1988 / US

Philip Glass (Original Soundtrack)
Powaqqatsi

アメリカの現代音楽家Philip Glassが音楽を手掛けた、Francis Ford Coppolaディレクションによるドキュメンタリー作品のサウンドトラック。アフリカの大地を想起させる壮大な音楽が全編に展開される、サウンドトラックの枠をゆうに超えた、コンセプチャルなヴィジュアライズド・ミュージック。土着的な民族打楽器と硬質な響きの金属系パーカッションによるミニマルなリズムが多用されており、現代音楽におけるミニマリズムは、実はアフリカ音楽に深く起因していることがよくわかる。

#104 | World

Vertigo / 1985 / Portugal

Rão Kyao
Oásis

モダン・ジャズからキャリアを開始し、以降、世界各国の民族音楽を融合させた独特のスタイルを確立した、ポルトガルのマルチ・リード・プレイヤーRão Kyao。85年リリースの本作は、エスニック・パーカッションのあたたかみのあるリズムと、オリエンタルな旋律を奏でるバンブー・フルートやストリングスがおおらかに舞う、ユーラシア大陸を想起させる壮大でエキゾチックなサウンドが全面に打ち出された、ニューエイジ感覚あふれるアコースティック・ミュージック作品に仕上がっている。

#105 | World

CMP / 1987 / Germany

Repercussion Unit
In Need Again

Repercussion Unitは、Frank Zappa一派のパーカッショニスト集団で、マリンバ、ヴァイブラフォン、スティール・ドラムやチューンド・ゴングなどの音階打楽器をはじめとする多量の打楽器を駆使し、カラフルでトロピカルなパーカッション・ミュージックを展開するグループだが、単なる打楽器アンサンブルにとどまらず、実験的かつアヴァンギャルドな要素も多分に含んだ、ダンサブルなサウンドが特徴だ。87年発表の本作には、プロモ盤限定でボーナス・レコードが付属している。

#106 | World

La Clapa Rusa / 1986 / Italy

Ritmia
Forse Il Mare

イタリアのトラッド／フォーク・グループRitmiaによる86年リリースのアルバム。このグループの詳細は不明だが、イタリア南部の伝統民族音楽や地中海音楽を現代的なアレンジで昇華させた、プログレッシヴなフォーク・ミュージックを展開している。プリミティヴなパーカッションのリズムに絡むアコースティック・ギターの生々しい旋律やチャントが躍動し、アラブ音楽の影響も感じさせるフォークロアな香り漂うエキゾチックなライヴ・アコースティック・サウンド。

#107 | Jazz

Biber / 1989 / Germany

The Silent Jazz Ensemble
The Silent Jazz Ensemble

ニューエイジ志向の作品を数多くリリースするドイツのマイナー・レーベルBiber Recordsから発表された、The Silent Jazz Ensembleの1作目。同レーベルからも作品を発表しているFriedemann Witeckaがウクレレで参加している。タイトなパーカッション・リズムと突き抜けるように美しいフルートやシンセサイザーが響きわたる「Estonian Moon」をはじめ、大陸的なおおらかさをもったエスニック・テイストのコンテンポラリー・ジャズが、透きとおるようにクリアなサウンドとともに展開する。

#108 | World

Kitty / 1987 / Japan

Tablatura
Tablatura

弦楽器奏者のツノダタカシを中心に結成されたタブラトゥーラは、ルネッサンス期の中世音楽を演奏する日本のグループで、1作目となる本作でも、リュート、フィーデルやダルシマーなどの古典楽器の素朴な単旋律が美しい、神秘的な古楽アンサンブルを披露している。ただし、それらは単に古典音楽の忠実なコピーではなく、新たな解釈とアレンジが施され、ドイツのジャズ・レーベルECMから発表されている民族テイストの作品に近似する、コンテンポラリーなエスニック・ジャズの様相を見せている。

#109 | Avant-Garde

T / 1983 / France

Tamia & Pierre Favre
Blues For Pedro Arcanjo

Joe McPhee Po Musicでの共演を機にセッションを開始した、フランス人女性ヴォイス・パフォーマーTamiaと、スイス人ドラマー／パーカッショニストPierre Favreによるデュオの1作目。ソリッドなパーカッションが飛び交うメタリック空間のなかで、変幻自在に声色を変化させながら雄叫びのようなファルセット・ヴォイスを繰り出すTamiaの呪術的なチャントが凄まじい。アマゾン先住民族の儀礼のような土着精神世界が超絶だ。以降、ふたりのコラボレーションはECMへ引き継がれる。

#110 | Jazz

Mistlur / 1979 / Sweden

Thomas Almqvist
Nyanser

多様な楽器を使いこなすマルチ・プレイヤーとしての顔をもつ、スウェーデン人ジャズ・ギタリストのThomas Almqvistによるソロ1作目。さまざまな民族音楽の要素を吸収した、フォークロアな香り漂うエスニック・ジャズから、叙情詩のように淡い世界観をもったニューエイジ・テイストの楽曲まで、全編にわたりピースフルでナチュラリスティックな空気感に彩られた、北欧産エスニック・ジャズのなかでも最高峰のひとつに挙げられる1枚だろう。エレクトロニクスを導入した以降作もマストだ。

#111 | Jazz

Dischi Numero Uno / 1974 / Italy

Toni Esposito
Toni Esposito

プログレッシヴ・ロックからディスコティックなポップスまで、イタリアの音楽シーンで長きにわたり活躍を続けるコンポーザー／ドラマーのToni Espositoが、名うてのスタジオ・ミュージシャンを従えて制作した74年発表の初リーダー作品。ポリリズムを取り入れた変則リズムや、ゆるやかなレイドバック感が気持ち良いファンキーなトラックなど、アフロ／ラテン・パーカッションのビートを軸にフェンダー・ローズやギターが絡む、極上のエスノ・ジャズ・ロックを全編に収録している。

#112 | Jazz

Zeleste / 1977 / Spain

Toti Soler
Desdesig

同郷のピアニスト、Jordi Sabatésの作品でも素晴らしい演奏を披露している、スペインのカタラン・ギタリスト、Toti Solerの77年作。アラブの文化が混じり合うカタルーニャ地方ならではの、異国情緒を感じさせるエキゾチックなパーカッション群とフラメンコ・ギターのコントラスト。ジプシー・ミュージックのような佇まいでありながら、どこかミステリアスでサイケデリックな雰囲気が漂う独特の世界観だ。もともとはサイケデリック・ロック・バンドOMのギタリストだったこともうなずける。

#113 | World

Barclay / 1975 / Canada

Toubabou
Attente

フォーク・ロック・バンドのHarmoniumに在籍していたドラマーのDennis Farmerを中心に、フランス／カナダのジャズ・ロック人脈のミュージシャンや、アフリカ人ミュージシャンが参加したグループによる、唯一のスタジオ録音作品。まるでTalking HeadsとNina HagenとSantanaがセッションしているかのような、強烈なポリリズミック・グルーヴが炸裂するアフロ・トライバルから、感動的な展開を見せる美しく力強いアフロ・スピリチュアル・ジャズまで、実にエネルギッシュなサウンド。

#114 | World

Caravan Of Dreams Productions / 1986 / US

Twins Seven Seven
Slang In Trance

数々の名作が録音された麻布十番のアオイ・スタジオでのレコーディング作品も残している、ナイジェリア・ラゴスのアフロ・ビート・グループによる代表作で、片面に1曲ずつ長尺曲が収録された壮大なスイート。意識を麻痺させるほど執拗に繰り返されるミニマリスティックなアフロ・パーカッションのビート、空間を切り裂くように上昇するスペーシーなシンセサイザーのサウンド、Fela Kutiの意志を受け継ぐ原点回帰的ファンクネスの精神。原始の魂を呼び起こす覚醒と陶酔の儀礼音楽だ。

#115 | Jazz

Edigsa / 1978 / Spain

Various Artists (Original Soundtrack)
Primera Aventura De Pepe Carvalho: Tatuaje

スペインを代表するジャズ・ロック・グループ3組が参加し、フル・オーケストラばりの大所帯で音楽を手掛けた、Bigas Luna監督作品のオリジナル・サウンドトラック。フラメンコやカタルーニャ地方の伝統民族音楽をはじめとする、ラテン音楽の要素を多分に含みながらクールかつディープに展開する、エスニック感覚あふれるジャズ・ロック／ジャズ・ファンクを全編にわたり収録した、スパニッシュ・ジャズ・ロック最高峰作品。ヤミ鍋的パエリアを食すシニカルなアートワークも絶品。

#116 | Rock

Brain Metronome / 1974 / Germany

'Zabba' W. Lindner & Carsten Bohn
Vollbedienung Of Percussion

プログレッシヴ・ロック・バンドFrumpyのドラマーで、Carsten Bohn's Bandstand名義でも秀逸な作品を残しているCarsten Bohnと、ジャズ・ロック・グループRelease Music Orchestraのドラマー、Wolfgang 'Zabba' Lindnerが74年に残したデュオ作品。ドラム・セットに加え、ゴング、ティンバレス、グロッケン、ハンド・パーカッション、ヴァイブラフォンなど、さまざまな打楽器を駆使して展開する、凄まじいまでに強烈なサイケデリック・パーカッション・グルーヴは、Klaus WeissのNiagaraをも凌駕する。

#117 | World

Aspen / 1987 / Germany

Zakir Hussain & The Rhythm Experience
Zakir Hussain & The Rhythm Experience

北インドの伝統音楽ヒンドゥースターニーをルーツとする、インド出身の世界的タブラ奏者Zakir Hussainが、6人のパーカッション奏者と結成したグループの処女作。インド古典民族打楽器からアフリカン・トーキング・ドラムまで、世界のさまざまな打楽器が織りなす、驚愕のパーカッション・アンサンブル。ウェットに響きわたるタブラと、シンセサイザーのような音を発する打楽器のアタック音が、まるで生き物のように音場を動き回る。ダンス・ミュージック的解釈が可能な楽曲もあり。

#118 | Experimental

Samadhi Klangproduktion / 1990 / Germany

Zann
Strange Ways/Inside Jungle

ドイツの地方都市、ドルトムントで結成された謎のグループ、Zannが90年に自主制作で発表したアルバム。長い間、日の目をみることなく、地元のレコード店に在庫が眠っていた、まさに秘境と呼べる1枚。ゴング、ガムラン、ザイロフォン、ビリンバウ、タブラ、サズーなど、アフリカやアラブから東洋まで、第三世界の民族楽器を大量に操り、さらにはシンセサイザー、テープ・エディットやサンプリングなどのエレクトロニクスまでをも駆使した、エクスペリメンタルなワールド・ミュージック。

psychedelic

psychedelic

60年代にアメリカから世界へ流布したヒッピー・ムーヴメントが、音楽にもたらした影響は語るまでもないが、本章では、そうしたカルチャーの直接的な影響下にある“サイケデリック・ロック”に限らず、意識を変性状態へ導くトランスパーソナルな音楽をジャンルレスにセレクトしている。あまりに至高であるがゆえ本書では紹介していないが、John Coltrane の歴史的名盤『A Love Supreme』をサイケデリックととらえるかが鍵だ。

masterpiece

#119 ｜ Electronic

King / 1978 / Japan

Tadanori Yokoo, Haruomi Hosono 横尾忠則、細野晴臣
Cochin Moon コチンの月

精神的に強烈なインパクトをもたらした横尾忠則とのインド旅行での体験をもとに、坂本龍一、佐藤博や松武秀樹らとシンセサイザーによる音楽表現の可能性を模索した、細野晴臣による実験電子音楽作品。モーグをはじめとするシンセサイザーで合成された疑似自然音やトリッピーなサウンドが、リアリティを超越した精神世界を描き出す。変性意識の拡張を促すようなブレイクで聴こえてくる、“中点連結の定理”や“出るものは何でも出したほうがいい、毒素だから”という声は、横尾忠則による説法か。

#120 | Rock

Private Press / 1981 / Germany

A La Ping Pong
Phase II - Go Go Pongs

80年代にドイツのアンダーグラウンド・シーンで活動した、ギタリストのKlaus Blochによる81年発表の自主制作盤。その名のとおり、ピンポン・ギターを主体にシンセサイザーなどを駆使して制作されたセルフ・プロデュース作品で、Manuel Göttschingのエコー・ギターとKraftwerkのテクノ・サウンドを融合したような楽曲からディープなアンビエントまで、クラウト・ロックの伝統を正当に継承したエレクトロニック・ミュージックを展開。Harmoniaの名作『Deluxe』にかなり近い感覚だ。

#121 | Rock

Polydor / 1972 / Germany

Achim Reichel & Machines
Echo

76年以降、国民的ポップ・スターになりさがった（失礼）ドイツ人ギタリストのAchim Reichelは、71年から74年にかけて、エコー・ギターを駆使した強烈なサイケデリック・ロック作品を6枚残している。伝説のエンジニア、Conny Plankのスタジオで72年に録音された本作は、Cosmic Jokersのサイケデリック・ジャム・セッションに先立つこと1年前に制作されたという事実、そしてKlaus Schulzeもヴォーカルとしてセッションに参加しているという事実からしても、クラウト・サイケデリアの金字塔と呼ばれるべき傑作だ。

#122 | Rock

Harvest / 1974 / Italy

Alan Sorrenti
Alan Sorrenti

イタリア・ナポリ出身のシンガー、Alan Sorrentiの3作目。以前作のドロッとしたサイケ感は若干後退し、枯れた音色のギターとシンプルなパーカッションのリズムをバックに、カンツォーネにルーツを感じる柔和なファルセット・ヴォーカルが浮遊する、切ない郷愁が終始漂う淡い色彩のアシッド・フォーク・ロックへと進化している。が、サイケデリックな志向はここでピリオドを迎え、4作目以降は、徐々にアダルト・オリエンテッドなポップ・ロックへとスタイルを変える。それはそれで素晴らしいのだが。

#123 | World

Som Livre / 1977 / Brazil

Alceu Valença
Espelho Cristalino

ブラジル北東部の街、サン・ベント・ド・ウナ出身のAlceu Valençaは、ノルデスチの伝統音楽を継承するミュージシャンだが、初期作品にはサイケデリック色の強いものが多い。77年発表の本作も、土着性の強いパーカッションやヴィオラのリズムに、フルートやスライド・ギターが舞う、The Beatlesの影響を感じさせるサイケデリクスとブラジリアン・フォークロアが交錯した独特の世界観を構築。「Dança Das Borboletas」で聴ける、粘り気のあるリズミカルでワイルドなヴォーカルも素晴らしい。

#124 | Folk

Movie Play / 1979 / Spain

Alejandro Lazo
Dia

チリ・サンティアゴのシンガー・ソングライター、Alejandro Lazoがスペインで録音したソロ作品。同郷のコンポーザーGabriel Brncicや、アルゼンチンのベーシストJorge Sarrauteが参加。ジャズやチェンバー・ミュージックのイディオムを昇華したコンテンポラリー・フォークロアとでもいうべき洗練された作風だが、ギター、ヴァイオリンやコントラバスを主体としたアコースティックなサウンドと、郷愁を漂わせながら静かに歌い上げるAlejandroのヴォーカルのマッチングは、極めてアシッドだ。

#125 | Rock

Wiska / 1978 / Germany

Alex Oriental Experience
Studio Tapes 1976-78

トルコの民族弦楽器であるサズーを操るドイツ人ミュージシャンのAlex Wiskaによるプロジェクト、Alex Oriental Experienceが76年から78年にかけて録音した音源をまとめた2枚組アルバムで、CanのドラマーJaki Liebezeit、Zina X Performanceなどのプロデュースでも知られるZeus B. Heldなどが参加している。ブレイク・ビーツのような人力ドラム、しびれるような音色のベースにストレンジな電子音が飛び交う「Chicken Talk」をはじめ、オリエンタリズムを吸収した独特のエスノ・ロック・サウンド。

#126 | Jazz

Private Press / 1979 / Netherlands

Angelo Noce Santoro
For You

70年代初期に活動したロック・バンド、Cosmic Dealerのメンバーだったラテン系オランダ人ベーシストが、自主制作でリリースしたカルティッシュなアルバム。メイン・パートであるベースのほか、ギターやフルート、パーカッションなども自ら演奏し、マルチな才能を発揮している。ラテン・アメリカや中東など、さまざまな地域のエレメントを昇華した、グルーヴ感あふれるカラフルでトロピカルなジャズ・ロックを展開しているが、なぜかサイケデリックに聴こえるのは、ラフな音色のせいか？

#127 | Experimental

Just Sunshine / 1971 / US

Arica
Heaven

アメリカの人類科学研究所、Arica Instituteが制作したメンタル・ミュージック・アルバムの第1弾で、自然現象と直結する存在である“音楽”が人体や精神に与える科学的影響をテーマに、世界各国の伝統民族楽器を多用したサイケデリックなエスニック・メディテーション・ミュージックをインプロヴィゼーションに近い形式で展開した作品。鳥の鳴き声などを模したさまざまなパーカッションとともに、チャイムの倍音やシタールの繊細な響きがゆるやかに異次元へと誘う、意識変容体験音楽。

#128 | Rock

Ugat Tunog Ng Lahi / 1979 / Philippines

Asin
Himig Ng Pag-Ibig

フィリピンの伝説的フォーク・ロック・トリオ、Asinが79年に発表した2作目。基本的にはアコースティック・ギターとコーラスのアンサンブルというシンプルなスタイルだが、バンドやオーケストラをフィーチャーした楽曲も収録している。エスニックな香り漂う口琴や銅鐘の音や土着的な太鼓のリズムがきいた「Baguio」や「Dasal At Katutubong Musika」を聴いていると、原住民に伝統が残る精霊信仰や仏教の影を感じるが、アジア唯一のキリスト教国家であるフィリピンでは受け入れられなかったのかもしれない。

#129 | Avant-Garde

Epic Sony / 1984 / Japan

Ayuo Takahashi 高橋鮎生
Carmina

サイケデリック・ロックやプログレッシヴ・ロックに影響を受けつつ、東欧やアジアの民族音楽や雅楽をも吸収した独特の感性をもつ、稀に見る才能を備えたアーティスト、高橋鮎生が84年に発表したデビュー作。すべての楽器とヴォーカルを自らこなした、セルフ・パフォーマンス・アルバムで、ブリティッシュ・ロックのデカダンスとアンビエントの浮遊感に、リリカルなポエトリーが融和する。まったくもって唯一無二の音世界を構築した、非常に先鋭的なサイケデリック・ミュージックだ。

#130 | Rock

Supraphon / 1978 / Czechoslovakia

Barnodaj
Mauglí

のちにProgress 2へと改名する旧チェコスロヴァキアのロック・グループ、Barnodajによる78年発表の唯一作で、Joseph Rudyard Kiplingの小説をベースに制作されたコンセプト・アルバム。モーグ・シンセサイザーが大々的に導入された、きらびやかなサイケ・フォーク・ロックを展開していて、トラッドな雰囲気漂うヴォーカル曲が大半を占めているが、シタールをフィーチャーした東洋的な旋律にパーカションが乱れ打つラーガなインスト・ジャズ・ロック「Dzungle」がサイケデリックだ。

#131 | World

Soukous / 1975 / France

Black Soul
Brasil Africa

70年代中後期に活動したフランスのアフロ・グループの1作目で、南米音楽やカリブ音楽の要素を含んだ疾走感のあるアフロ・ビートを全編に展開しているが、アフリカの大地に吹き荒れる強い風を連想させるSE、音数の少ない打楽器のリズムと、スーパー・バリトン・ヴォイスでささやくポエトリーがフィーチャーされた、唯一のスロー・ナンバー「The Sphynx」がすごい。当時のフランスでヒットし、多くのアーティストがカヴァーした「Africa」という楽曲と同系だが、こちらはさらに土着的でサイケデリック。

#132 | Rock

RCA Victor / 1973 / Italy

Brainticket
Celestial Ocean

ベルギー人鍵盤奏者のJoel Vandroogenbroeckを中心とする、スイスのサイケデリック・ロック・グループによる3作目にして、初期最高傑作。エジプト『死者の書』をモチーフに制作された、ストーリー性あふれるトータル・コンセプト作品。以前作を継承するヘヴィなサイケデリック・ロックに、メディテーティヴなニューエイジ・エレクトロニクスと、土着性の強い民族音楽のテイストを融合させた、リアル・トリップ・ミュージック。完全にこの世のものとは思えない、扉の向こう側の世界。

#133 | Jazz

A&M / 1973 / US

Charles Lloyd
Geeta

Charles Lloydは、モダン・ジャズのプレイヤーとして知られるサックス奏者だが、70年にセミ・リタイアしてカリフォルニアへ帰省したのち、The Beach Boysのレコーディングやツアーに参加。その影響からか、以降70年代後半までに、民族音楽に深く傾倒したサイケデリック志向の作品を数枚制作していて、これもそのうちのひとつ。シタールや女性コーラスが幻想的に空間を舞うプログレッシヴな展開のエスニック・ジャズを、まるでロック・アーティストのような視点で描いている。

#134 | World

Promus / 1971 / Venezuela

Chelique Sarabia
Revolución "Electrónica" En Música Venezolana

Nat King Coleもカヴァーした「Ansiedad」のワールド・ヒットで知られる、ベネズエラ人コンポーザーのChelique Sarabiaが71年に発表した、ベネズエラン・エレクトロニクス最秘境的作品。エレクトロニクスといってもシンセサイザーが使用されているわけではなく、ベネズエラの現地音楽を基軸とするアコースティック・サウンドに、過剰なまでに深くトリッピーな残響処理が施された、サイケデリック・ラウンジ・ジャズとでもいうべきサウンド。まだ見ぬストレンジ・ワールドが全開だ。

#135 | Rock

Polydor / 1978 / France

Christian Boulé
Photo Musik

フランスのサイケデリック・ロック・バンド、Clearlightのギタリストによるソロ1作目。本作にもCyrille Verdeauxをはじめとする周辺アーティストが参加している。異常に深い空間処理が施されたスペーシーなエレクトリック・ギターがSteve Hillageを彷彿させるが、宇宙の彼方まで突き抜けていくようなトリップ感は相当なもの。Andy Flatenによる女性のような声色のヴォーカルも際立っている。70年代フランスのロック・シーンの充実がうかがい知れる、スペース・ロックの名盤だ。

#136 | Rock

Gratte-Ciel / 1978 / France

Clivage & The Philharmonic Orchestra
Mixtus Orbis

フレンチ・アンダーグラウンドの実験的なプログレッシヴ・ロック作品をリリースするフランスのレーベル、Gratte-Cielから発表された、Andre Fertierを中心とするグループClivageの2作目で、管弦楽器とインド民族打楽器によるエスニックなサウンドに、シンフォニックなオーケストラ演奏をフィーチャーした、ジャンルを超越したコンテンポラリー・エスノ・ミュージックの極地。太陽や大地を連想させるフリー・マインドな志向と、かなりヘヴィな精神世界が相対して表現されている。

#137 | Rock

Ata Tak / 1990 / Germany

Cy Man
Space Time

ジャーマン・ニューウェーヴを語るうえで欠かせない重要なアーティストを多く輩出している、ドイツ・デュッセルドルフのレーベルAta Takからリリースされた、男女混成ネオ・フォーク・グループCy Manによる唯一のアルバム。フォーク、カントリー、レゲエ、ワールド・ミュージックなど、多種多様な要素がごった煮状態でミックスされながらも、一貫してユルいテンションで展開するアシッド・フォーク作品。作風は異なるが、Daevid Allenを想起させるシニカルな趣向が非常に興味深い。

#138 | Rock

Philips / 1985 / Japan

D.J. Pratt, Pe-De-Boi
Samba Fusion Flight No.064

日本航空のキャンペーンで制作された、Kalapanaのギタリストによるソロ・アルバムで、“サンバのリズムが躍動するトロピカルなフュージョン”というふれこみだが、プログレッシヴ・ロックにしか聴こえない。インプロの波が延々と押し寄せる長編ジャム・セッションをはじめ、企画者の目論みとは裏腹に、サイケデリックな空気が充満したスモーキーなジャズ・ロックを展開。さすがにまずいと思ったか、翌年にはJALのジェットストリーム・レーベルから、波の音をミックスした再編集盤が発売された。

#139 | World

Gypsy Production / 1975 / France

Danyel Gerard
Rien Qu'une Vie.....

Danyel Gerardは、アルメニア人とイタリア人の血を引く自身のルーツが反映されたジプシー音楽をベースに、フォーキーなロックやポップスで人気を博したフランスの国民的シンガー。本作でもアコースティック・ギターとパーカッションを主体とした郷愁あふれるフォーク・ミュージックを披露しているが、唸りをあげるディストーテッドなギター・ソロやトリッピーなシンセサイザーSEがフィーチャーされた「Le Vieux De La Montagne」は、かなりプログレッシヴな趣向のアシッド・ロックだ。

#140 | Rock

EMI / 1975 / France

Delired Cameleon Family

Delired Cameleon Family

フランスのサイケデリック・ロック・バンド、Clearlightの中核を担っていた鍵盤奏者のCyrille Verdeauxを中心に、Tim Blakeなどの周辺アーティストが参加して制作された、架空の映画のためのサウンドトラック。レコードに針を落とした途端に、異次元空間へとトリップするエスニック・サイケデリア。西洋の様式美と東洋の超自然思想が、過剰なまでにスペーシーな電子音とともにスパイラルを描きながら結合する、ねじれ現象を起こした桃源郷音楽。あまりにも行きすぎた意識変容の世界。

#141 | Rock

Kuckuck / 1971 / Germany

Deuter

Deuter

のちにヒンドゥー教へ改宗し、東洋思想へ深く没入した作品を数多く発表するドイツ人音楽家、Georg Deuterが71年にリリースした処女作。パーカッション群の粗削りなリズムや、呪術的な旋律を奏でるギターやシンセサイザーによる、カオティックなサイケデリクス。Popol Vuhの1作目に通じる志向だが、Florian Frickeが民族音楽へ傾倒しアコースティックなサウンドへガラリと方向転換していったように、Deuterも本作以降、桃源郷のような彩りをもった曼荼羅瞑想音楽へと姿を変えていく。

#142 | Folk

Novola / 1977 / Spain

Emilio Cao

Fonte Do Araño

スペインのフォーク・ミュージック・シーンにおいて、はじめてハープを導入したといわれているアーティスト、Emilio Caoが77年に発表した1作目。ハープをはじめ、“ガイタ”と呼ばれる、スペイン・ガリシア地方発祥のバグパイプのような音色を放つ気鳴楽器などを用いた、全編アコースティック楽器による演奏と、美しく繊細なコーラス・ワークが空間に溶け込むようにナチュラルに広がっていく、民族志向の有機的な世界観をもったアシッド・フォーク作品。洗練されたアートワークも素晴らしい。

#143 | Rock

Cosmic Beam / 1976 / US

Francisco

Cosmic Beam Experience

インド人タブラ奏者のZakir Hussainも参加していたサイケ・ロック・バンドShantiのドラマー、Franciscoが自主制作でリリースしたアルバム。アメリカ西海岸のフラワー・ムーヴメントの影響をモロに受けた、ヒッピー・カルチャー真っ只中といった感じのピースなサイケデリック・ロックやアシッド・フォークを披露しているが、ソウルフルな女性コーラスをフィーチャーした開放的なサウンドがエモーショナルな「Heal Yourself」は、非常に大げさな展開ではあるものの、気分を高揚させてくれる。

#144 | Experimental

Casal Gajardo / 1980 / Italy

Futuro Antico
Dai Primitivi All'elettronica

Futuro Anticoは、イタリアを拠点に活動する西アフリカ・ブルキナファソ出身のマルチ奏者Gabin Dabire、イタリア先鋭音楽のイノヴェーターAktualaの中心人物であるリード奏者のWalter Maioli、ADNなどから実験電子音楽作品を発表しているRiccardo Signigagliaという3人の辺境音楽家によるグループ。80年に発表した本作が唯一の作品であるが、エレクトロニクスとシャーマニックなエスニック・ミュージックを有機的に結合させたヒプノティックなサウンドスケープは、奇跡としかいいようがない。

#145 | Rock

Hör Zu / 1971 / Germany

Haboob
Haboob

Mal WaldronがECMのサブ・レーベルJAPOの第1弾として録音した名盤『The Call』や、そのWaldronも参加したEmbryoの初期傑作『Steig Aus』でも凄まじいプレイを披露している黒人鍵盤奏者のJimmy Jacksonが、クラウト・ロック・グループNiagaraの1作目に参加しているドラマーのGeorge Greenらとともに制作した唯一のアルバム。ブルースを基調としながらも、ワイルドに歪んだオルガンやギターがアグレッシヴにグルーヴする、強烈なフリークアウト・サイケデリクス。

#146 | Rock

Sandra Music Productions / 1980 / Germany

Herbert F. Bairy
Traumspiel

サウンド・スカルプチャーの制作や演奏家として活動するドイツ人音楽家、Herbert F. Bairy唯一のアナログ作品。ツィター、ウィンドハープ、タブラやタンブーラなど、第三世界の民族楽器にシンセサイザーなどのエレクトロニクスを融合させた、エスニック・テイストあふれるトリッピーなプログレッシヴ・サウンドが充満した、ジャズともロックとも言いがたい、カテゴライズ不可能な独特の世界観だが、クラウト・ロック特有のヘヴィなトリップ感と洗練された美的感覚が共存している。

#147 | Soul/Funk

Govinda Productions / 1978 / US

J.O.B. Orquestra
Open The Doors To Your Heart

Leroy Burgessが在籍したソウル・グループ、Black Ivoryの作品にも参加していたアメリカのコンポーザー／鍵盤奏者、Jorge Barreiroが手掛ける大所帯バンドによる、アナログ唯一作。ソウル人脈のミュージシャンが数多く参加し、ストレートなニュー・ソウルを展開しているが、最終曲「Govinda」だけが極めて異質だ。ブラック・ソウルとハレ・クリシュナ、一見想像もつかないような組み合わせによる、サイケデリックなアーバン・ソウルという、ありえない領域へ踏み込んでいる。

#148 | Jazz

Supraphon / 1973 / Czechoslovakia

Jazz Q Prague
Symbiosis

鍵盤奏者のMartin Kratochvíl率いる旧チェコスロヴァキアのジャズ・ロック・グループ、Jazz Q Pragueが、女性シンガーJoan Dugganの独特の歌唱法によるヴォーカルをフィーチャーして制作した本作は、他作にくらべるとかなり異質かつ秀逸。鳴きの哀愁エレクトリック・ギターとエレピがゆれるスローなブルース・ロックや、圧巻の展開を見せる16分を超える大作など、ジャズ・ロックという概念を遥かに通り越した、サイケデリック感覚にあふれたプログレッシヴ・ブルース・ロック作品だ。

#149 | Rock

Silence / 1976 / Sweden

Kebnekaise
Ljus Från Afrika

Kebnekaiseは、スウェーデンのトラッド／フォーク系プログレッシヴ・ロック・バンドだが、どの作品にも、唯一の黒人メンバーBah Hassanの個性を反映した、アフロ色の強い楽曲を含んでいる。76年発表の本作は、アフリカ音楽への傾倒が最も顕著に表われており、ポリリズミックなフレーズをミニマルにループするリズム・セクションにプリミティヴなチャント、スペーシーなシンセやSEが飛び交うサイケデリック・アフロ・ロック「Tigerdance/Wind」のトリップ感が群を抜いて凄まじい。

#150 | Jazz

JAPO / 1976 / Germany

Magog
Magog

スイス人ジャズ・ミュージシャンによるセクステット、MagogがECMのサブ・レーベルJAPOに残した唯一のアルバム。密林のジャングルから突如ワームホールへ吸い込まれていくような導入部から、インナー・スペースなモーダル・ジャズへと突入していく怒濤の展開を見せる「Summervogel」の、強烈なトリップ感がとにかくすごい。同レーベルからリリースされているフィンランド人ドラマーEdward Vesalaの名作『Nan Madol』にも通じる世界観をもった、自然回帰志向のサイケデリック・ジャズ。

#151 | World

Atlantic / 1976 / France

Malombo
Malombo

マルチ・インストゥルメンタリストのPhilip Tabaneを中心とする南アフリカのグループ、Malomboの76年作。もともとはThe Malombo Jazz Menとして60年代より活動し、JabulaのメンバーであるJulian Bahulaなどが参加していたが、ワールド・デビューとなる本作では、パーカッショニストのGabriel Thobejaneとのデュオ作品となっている。伝統的なトライバル・リズムとリチュアリスティックなチャントに、ジャズやブルースのギター・スタイルを融合させたサウンドで、自然派生的なサイケデリクス。だが、スモーキーだ。

#152 | Folk

Disques Deva / 1970s / France

Marie-Claude Clerval
Musiques Et Mouvements

Marie-Claude Clervalは、子供向けの可愛らしい作品を数多く残しているフランスのシンガー・ソングライターだが、Disques Devaに残した2枚組の本作では、世界各国の民族音楽を吸収したアコースティックな楽器群によるフォークロアな演奏から、シンセサイザーやドラム・マシンを使用したチープなエレクトロニック・サウンドまでもが登場し、ありえないほど実験的な趣向を見せている。さらにはサイケデリック感までも漂わせており、もはや想像を絶するアナザー・ワールドに悶絶。

#153 | Jazz

Fran / 1980 / Germany

Markus Stockhausen, Jasper Van't Hof
Aqua Sansa

ドイツの偉大なる現代音楽家、Karlheinz Stockhausenの実息であるリード奏者のMarkus Stockhausenと、オランダ人ピアニストのJasper Van't Hofによるデュオ・アルバム。深い残響処理を施した親指ピアノが舞い散るイントロから、PPG社製ウェーヴ・コンピューターを多用した重厚なシンセ音と、エレクトリック期Miles Davisの幻影を感じるロング・ディレイのきいたエフェクティヴなトランペットが、螺旋を描きながらゆっくりと上昇していく冒頭曲の「Aqua Sansa」が、何はなくとも凄まじい。

#154 | Rock

Energy Discs / 1979 / Canada

Melodic Energy Commission
Stranger In Mystery

カナダのヴァンクーヴァーを拠点に現在も活動するコンポーザー、Don Xalimanを中心に結成されたロック・バンド、Melodic Energy Commissionによる1作目。アシッド・テイストあふれるライヴ・パフォーマンスと、トリッピーなシンセサイザー・サウンドがめくるめく織りなす、フリーク・アウト・ミュージックの極み。HawkwindのサイケデリックとTangerine Dreamの浮遊感を兼ね備えたグループと一部ではいわれているようだが、それらをも凌駕するエレクトロニック・サイケデリアだ。

#155 | Experimental

Flabbergast / 1991 / Germany

Mimir
Mimir

ドイツの実験音楽レーベル、DOMのメイン・アーティストであるH.N.A.S.のメンバーで、昨今ではJim O'Rourkeも参加しているMirrorでも活動するアーティスト、Christoph Heemannを中心とするプロジェクトの処女作。アナログ・エレクトロニクスとライヴ・インストゥルメンタルによるテクスチャル・ミュージックで、ドローンの要素も強くかなりヘヴィだが、独特の陶酔感と高揚感を備えており、西欧的宗教観とエキゾティシズムがカオティックに混在したトリッピーなサウンドだ。

#156 | Rock

April / 1976 / Germany

Missus Beastly
Dr. Aftershave And The Mixed-Pickles

ドイツのインディペンデント・レーベルApril Recordsの第1作目としてリリースされた、Missus Beastlyによるサード・アルバム。Embryoのギタリスト、Roman Bunkaが参加している。電化時代のMiles Davisに代表されるUSジャズの黒いサイケデリック感とコズミック感に肉迫したグルーヴにエキゾチックなテイストを程よくブレンドしながら、プログレッシヴな展開も押さえたヒッピー・ジャズ・ロック作品だが、ECM作品にも共通する精神性もさりげなく感じさせるところが面白い。

#157 | Rock

Schneeball / 1978 / Germany

Munju
Moon You

ドイツのSchneeballレーベルは、Embryoの周辺ミュージシャンの作品をおもにリリースしていて、それらはヒッピー・カルチャーからの派生音楽といっても間違いではないが、どのアーティストも非常に優れた技巧を備えている。名立たるセッション・ミュージシャンがメンバーに名を連ねたMunjuもそんなグループのひとつだ。Guru GuruやEmbryoのジャズ・ロック期と共鳴するエスニック感とサイケデリック感に、洗練されたテクニカルな演奏が相まった、プログレッシヴ・ジャズ・ロック作品。

#158 | Experimental

BYG / 1970 / France

Musica Elettronica Viva
Leave The City

フリー・ジャズの殿堂、“Actuel”シリーズから発表された3作目で、同レーベルのファウンダーであるJean-Luc Youngのプロデュースのもと録音された、サイケデリック・フリー・ミュージックの最果て。細胞に振動するノコギリ波のドローンに、経のような太鼓やチャントが行業のごとく仏の道を進んでいく精進世界のA面から一転、B面では、ホワイトノイズやパルス音が電磁波のように飛び交うカオティックな宇宙空間へと突入していく。西欧文化と東洋思想が対峙したアートワークも意味深だ。

#159 | Jazz

Un Deux Trois / 1977 / France

Newtone Experience
Rashbehari

ふたりのギタリスト、Robert PortalとHenri Claude Portalを中心とするフランスのジャズ・ロック・グループ、Newtone Experienceの1作目。絡み合うようにオリエンタル音階を奏でるギター、フリーキーに乱れ打つドラムとパーカッション。シンプルな編成で展開する、インド古典音楽に影響を受けたエキゾチックなアコースティック・サウンドが、サイケデリックにうねりながら情緒的で郷愁あふれる情景を描き出す。かなりエクスペリメンタルな趣向だが、音楽は非常に有機的だ。

#160 | Rock

Continental / 1975 / Brazil

Ney Matogrosso
Água Do Céw Pássaro

異次元的なルックスが強烈なブラジル人シンガー、Ney Matogrossoのソロ1作目。2枚のアルバムを残して解散したロック・バンド、Secos & Molhados時代のテイストを継承しつつ、シタールやタブラを取り入れたエスニックなサウンドから、ロー・ファットなリズムがグルーヴするファンク、アコースティックなサウンドがゆらめくアシッド・フォークまで、さまざまな音楽要素を独自のフィルターで昇華した、ブラジリアン・サイケデリック・サウンドの極左的作品。この世界観はほかにありえない。

#161 | World

Pan Ra / 1978 / Germany

Pan-Ra
Music From Atlantis

Csaba KonczとMichel Poiteauからなるフランスのエスニック・ミュージック・グループ、Pan-Raは、70年代に2枚の作品を残している以外に活動遍歴は見当たらない。自主制作でなぜかドイツで発売された2作目の本作は、チェロ奏者のFredi Albertiが参加してトリオ編成に。ギリシャとエジプトの神から名づけられたグループ名のとおり、地中海沿岸国、東欧や中東の民族音楽や古典音楽にジャズを融合させた、第三世界的エスニック・サウンドがこれでもかと展開するトリッピーな内容だ。

#162 | Rock

Liberty / 1970 / Germany

Popol Vuh
Affenstunde

クラウト・ロック界きっての叙情派として知られるグループ、Popol Vuhが70年に発表したデビュー作は、モーグ・シンセサイザーによる陶酔ドローン・サウンドと土着的な民族打楽器のフリー・インプロヴァイズが創り出す、原始とテクノロジーが結合した脳内宇宙音楽だ。この凄まじいまでのトリップ・エレクトロニック・ミュージックは本作で終焉し、Florian Frickeはモーグ・シンセサイザーをKlaus Schulzeに譲り、以降の作風は自然との共生を示唆するような放牧サウンドへと変貌していく。

#163 | Rock

Music Hall / 1976 / Argentina

PorSuiGieco
PorSuiGieco

Raul Porchetto、Leon Gieco、そしてCharly GarcíaとNito Mestreによるデュオ、Sui Generisの名前を連結した、アルゼンチン・ロック界のオールスター・グループによる76年発表の唯一作で、表情豊かな楽曲群と抜群にハイセンスな演奏が素晴らしい、おだやかなサイケデリック・フォーク・ロックを全編に展開した名盤中の名盤。非常にゆったりとした空気のなかでやさしく響きわたる、アコースティック・ギターやフェンダー・ローズの音色と繊細なコーラス・ワークがどこまでも美しい。

#164 | Rock

Aija Recording / 1981 / Australia

Quasar
Man Coda

オーストラリアン・サイケの秘境、Quasarが81年に自主制作した唯一のアルバム。ギター、ベースにパーカッションという非常にシンプルな編成で、音数も少なく展開していくが、その空間性たるや、常軌を逸している。鬱蒼とした雰囲気を漂わせる淡々としたリズムが、グルーヴ感を保ちながら進行するなかで、エッジのたったファズを深くかませた攻撃的なギター・ソロが、トグロを巻きながら唸りをあげる、ヘヴィかつディープなサイケデリック・ジャズ・ロック。目がグルグル回る。

#165 | Avant-Garde

Shandar / 1977 / France

Ragnar Grippe
Sand

スウェーデンの電子音楽家、Ragner Grippeが、フランスの現代音楽／フリー・ミュージック専門レーベルのShanderから77年に発表した作品。オーヴァーダビングで幾重にもレイヤーされたさまざまな楽器音や電子音にディレイ処理を加え、まるで砂の粒子か水の結晶のように微細な音が、微妙なゆらぎを発声させながら混沌と音場空間に飛散する。ドラマティックな展開など皆無なミニマル・ミュージックだが、音の世界に深く没入していくような感覚を誘う超立体音響が、果てしなくサイケデリックだ。

#166 | Rock

Elektra / 1971 / US

The Rainbow Band
The Rainbow Band

男女ふたりからなるアメリカのフォーク・デュオが、71年にリリースした唯一作にして、サイケデリック・フォークの秘境。アコースティック・ギター、シタールやタブラが創造する奥行きのある音場のなかを、読経をアレンジしたようなメロディのヴォーカルとコーラスが、静かに浮遊しながら瞑想へと導いていく、東洋思想が色濃く打ち出されたスピリチュアルなアシッド・フォーク。かなり直球だが、ピースフルなメッセージとともに、どこまでも深く、精神世界に沈んで行くような感覚。

#167 | World

Diorama / 1977 / Argentina

Rodolfo Mederos & Generacion Cero
De Todas Maneras

アルゼンチンのバンド・ネオン奏者、Rodolfo Mederosが77年に発表した、現代タンゴの常識をくつがえす問題作で、Astor Piazzollaがジャズやクラシックを昇華したヌエヴォ・タンゴならば、こちらはプログレッシヴ・ロックを昇華したタンゴ・ジャズ・ロックといった具合だ。シンフォニック・ロックばりに展開を見せるスケールの大きな構成と、アルゼンチン・タンゴ特有の叙情的なバンド・ネオンの旋律が有機的に交わり合い独特の世界観を構築している、珍しいタイプの音楽。

#168 | Rock

Delta-Acustic / 1974 / Germany

Sand
Golem

クラウト・コズミック・ロック・ユニット、Sandが、Delta-Acusticに残した唯一作にして名盤。Klaus Schulzeがレコーディング・エンジニアを担当し、Canをはじめ多くのクラウト・ロック・グループのアルバムを手掛けているエンジニアのManfred Schunkeがリミックスを担当している。VCS3シンセサイザーのめくるめくトリッピーな電子音と気怠いヴォーカルが、ズブズブとディープ・エクスペリメンタルな世界へと引きずり込んでいく、ジャーマン・サイケデリック・ロックの最深層部。

#169 | Rock

Atlantic / 1971 / US

Shanti
Shanti

インドの世界的タブラ奏者、Zakir Hussainをメンバーに有するアメリカのマイナー・ロック・バンドが、71年に残した唯一作。粗削りなヴォーカルと疾走感のあるギター・サウンドによるガレージ・ロック風の楽曲も素晴らしいが、深いトレモロ処理が施されたインドの伝統弦楽器、サロドのゆらめくようなドローン・サウンドから幕を開け、放牧的なカントリー・ロックへと展開する「Innocence」や、タブラとシタールの超絶なインプロヴィゼーションが繰り広げられる「Shanti」がすごい。

#170 | Rock

Macondo / 1974 / Uruguay

El Sindykato
Vuelve A Tu País

68年から74年にかけて活動した、ウルグアイ・モンテビデオのロック・バンド、El Sindykatoの最終作。ブリティッシュ・ガレージをルーツとしながらも、Ruben Radaに直結するウルグアイの土着リズム、カンドンベのグルーヴとジャズ・フィーリングが絶妙にブレンドされた、ラフなサイケデリック・ジャズ・ロック作品。「De La Pobrez」や「La Feria」では、スペインのピアニスト、Jordi Sabatésの名作『Ocells Del Més Enllà』から洗練さを取っ払ったようなワイルドな哀愁が漂う。

#171 | Rock

Harvest / 1973 / Germany

Sweet Smoke
Darkness To Light

ブルックリン出身の若者がドイツへ移住し、ヒッピー・コミューンで生活をともにしながら結成したロック・グループ、Sweet Smokeの2作目。インド人ミュージシャンなども加わり、参加メンバーが圧倒的に増えた本作では、前作のトグロを巻くようにスモーキーだったブルース・サイケから、愛と平和を祈るヒッピー・ミュージックへと変貌した。パーカッションの素朴なリズムをバックに、東洋宗教的なメロディをおだやかに歌う、サイケデリクスの本質を表現した、極上のチルアウト・ロック。

#172 | Rock

Vertigo / 1982 / Greece

Syndrome
Syndrome

ギリシャのアート・ロック・バンド、Syndromeが82年に発表したクレイジーな1枚。ファンク、ガレージ、スカやパンクなど、雑多な要素が入り乱れたワイルドかつストレンジなロックといった趣だが、レイドバックするファンク・ビートを刻むリズム・セクション、トルコ民族音楽の影響をうかがわせるオリエンタルな旋律を奏でるラフなエレクトリック・ギターと、ディープなリヴァーブが施されたエレクトリック・ヴァイオリンがミステリアスに舞う「Pizes」が、サイケデリック極まりない。

#173 | Rock

Melody & Menace / 1982 / Canada

Terraced Garden
Melody & Menace

80年代に自主レーベルから3枚のアルバムを発表しているカナダのオブスキュア・ロック・グループ、Terraced Gardenによる1作目。ブルース、フォーク、カントリーなどのルーツを感じさせながら、King CrimsonやPink Floydからの影響もうかがえるストーリー性のあるプログレッシヴ・ロックから、Hawkwindのような疾走系サイケデリック・ロックまでを展開。かなり派手な音作りだが、美しいハーモニーを奏でるコーラス・ワークが素晴らしいアシッド・フォークも披露している。

#174 | Folk

Movieplay / 1976 / Spain

Tilburi
Alcocebre

スペインのフォーク・トリオ、Tilburiが76年に発表した2作目で最終作品。前年にリリースされた1作目ではすべて英語で歌われていたが、本作は全曲スペイン語歌詞となり、カントリー／フォークを基軸としたアコースティックなサウンドに地中海音楽の要素も色濃く反映された、メランコリックな作品となった。「La Música」は、深いエコー処理が施された音場空間に響くウェットなギター・サウンドと美しいコーラス・ワークのコントラストが美しい、ディープなアシッド・フォーク。

#175 | Rock

Discos De La Planta / 1972 / Uruguay

Totem
Descarga

ウルグアイを代表する名パーカッショニスト、Ruben Radaを中心に結成されたグループ、Totemの2作目。81年に発表されたRuben Radaのソロ・アルバムでも再演されている「Heloisa」をはじめ、疾走感のあるワイルドなジャズ・ロックを展開した名盤だが、その白熱したパフォーマンスがなによりもすごい。Ruben Radaの真骨頂、ウルグアイ伝統のカンドンベ・リズムを怒濤のごとく繰り出すパーカッションと、USサイケデリック・ロックを吸収したディストーテッドなギター・サウンドが生み出すグルーヴの妙。

#176 | Rock

Offers Musik Produktion / 1978 / Germany

Various Artists
Birth Of A New Place

Michael Bundtの1作目をリリースしているドイツ・ハイデルベルグのインディペンデント・レーベル、Offers Musik Produktionからリリースされた、Sloe Gin、Flintsprint、Pytagorasという3組のアーティストの楽曲を収録したカルト・コンピレーション・アルバム。いずれもまったく無名のグループで、このアルバム以外で作品を発表した形跡は見られないが、EmbryoやMunjuなどApril Records関連のアーティストに近似する、ファンキーでサイケデリックなジャズ・ロックを披露している。

#177 | Jazz

Panton / 1986 / Czechoslovakia

Various Artists
Jazz Praha Live

旧チェコスロヴァキアの首都、プラハで85年に開催されたジャズ・プラハ・フェスティヴァルのライヴ・レコーディング・アルバム。Alan Vitous率いるVitous Trioの演奏を3曲、ギタリストZdeněk "Sarka" Dvořákとヴォーカリストの Mirka Krivankovaの共演を2曲ずつ収録しており、全編にただならぬ雰囲気が漂っている。ポーランドのUrszula Dudziakを彷彿させるMirka Krivankovaの超絶なスキャットが、ライヴ会場の反響効果によってエフェクティヴに響きわたり、異次元空間を創造している。

#178 | Rock

Gaviland / 1974 / Venezuela

Vytas Brenner
Hermanos

ドイツで生まれ、イタリアやスペインなどを拠点に活動を展開したベネズエラ人アーティスト、Vytas Brennerは、シンセサイザーなどのエレクトロニクスとアコースティックの融合をはかり、ベネズエラのトラッド・フォークやラテン音楽を昇華したシンフォニックなプログレッシヴ・ロックのパイオニア的存在として知られるが、74年に発表された本作は、その志向が最もサイケデリックに表現された傑作といえる。しびれるような電子音が炸裂する「Madrugada」は、アートワークそのままのヴィヴィッドな世界だ。

#179 | Jazz

JAPO / 1971 / Germany

Waldron, Jackson, Weber, Braceful
The Call

アメリカのジャズ・ピアニストMal Waldronが、ECMのサブ・レーベル、JAPOの第1弾を飾るべく、ドイツの凄腕ミュージシャンとともに録音した長編セッション。注目すべきは、EmbryoやHaboobなど、ドイツのプログレッシヴなジャズ・ロック・グループに参加している黒人ハモンド・オルガン奏者Jimmy Jacksonとの競演。どこまでもドープにインタープレイを繰り広げる両者のエレクトリック・ピアノとオルガンが、渦を巻きながら絡み合う、ファンキーでサイケデリックなグルーヴが凄まじい。

column_02

ライブラリー・レコードの世界

レコードの一分野に、“ライブラリー”というものがある。これは、TV、ラジオやフィルムなどのBGMとしての使用を目的としたレコードで、今でいう、著作権フリーの音楽CDのようなものだ。60年代ごろから80年代後半までの間に、先進国を中心に大小を問わず数多くの専門レーベルが存在していたが、デジタル・メディアの普及とともにその役割を失い、ほとんどのレーベルは消滅してしまった。

日本ではそれほど注目されていないと思われるが、海外のレコード好きの間では、ライブラリーがひとつのカテゴリーとして扱われていることも多く、熱心に研究されている。その用途からも想像がつくように、さまざまなシーンに対応するために幅広い作風の音楽が制作されていて、“ジングル”と呼ばれるわずか数秒の音楽から、環境音や効果音まで、実に多様なレコードが存在する。

ライブラリーの最も大きな特徴は、有名無名を問わず多くの音楽家が、なりわいとして制作に携わった、完全に商業ベースの作品群であるということだ。依頼を受けた音楽家は、レーベルから与えられた“お題”をもとに音楽を制作しなければならない。そういう意味では、映画音楽に近いかもしれない。実際、映画音楽を制作するような、著名な作曲家によるライブラリー作品もたくさん存在するが、サウンドトラックにくらべて、もう少し遊び心があるというか、実験精神がうかがえる。商業ベースといえど、音楽家のパーソナリティがダイレクトに反映されているものもあれば、まったく別人が作ったような印象のものまで、音楽家の多様な側面を読みとることができる、なかなか奥深い世界だ。また、この手の音源の特性上、“お題”が最大の売りであるため、音楽家の名前は控えめにクレジットされている場合が多く、所属レコード会社との契約上の問題で、偽名を使用していることがあるのも、ひとつの特徴である。

そんなライブラリー・レコードのなかでも“秘境”とされているのが、イタリアだ。俗にいう“レア盤”と同じく、弱小レーベルからリリースされているうえ、プレスされた枚数も極端に少ないという稀少性が、秘境たらしめているのだと思うが、興味深い音楽が多いことも事実だ。内容と稀少価値は正比例するわけではないことを踏まえつつ、秘境に潜入してみるのも、冒険としては面白い。

左から、Marega『Climax』(Iller/1971/Italy)、Maria Teresa Luciani『Suoni Di Una』(Fama/1972/Italy)、Constantino Albini E Daniela Casal『Il Mondo Indiano』(Panda/1974/Italy)、Egisto Macchi『Andes』(Globevision/1975/italy)

spiritual

spiritual

音楽ジャンルとしての“スピリチュアル”は、一般的にゴスペルなどの黒人霊歌や賛美歌などの白人霊歌と定義され、日本のクラブ・ジャズ・シーンにおける“スピリチャル・ジャズ”についても、同様の意味合いを含むジャズの呼称であると思うが、本章ではそうした宗教的／人種的な分類に限定せず、音楽を通じて作家の精神性を感じとれる、聴き手になんらかの精神的な問いかけをする、超越的次元性を感じさせる音楽を選出している。

masterpiece

#180 | World

EMI-Odeon / 1974 / Brazil

Egberto Gismonti
Academia De Danças

Egberto Gismontiほど、多様な音楽手法を試行しながらも、一貫した精神性を表現している音楽家はいないのではないだろうか。Robertinho Silvaをはじめとする Academia De Dançasの面々を従え制作した、74年発表の本作では、オーケストラルなストリングス・アンサンブルをフィーチャーし、プログレッシヴ・ロックばりに壮大な展開をみせる一大抒情絵巻を完成させた。のちに本格的にオーケストラのスコアリングに挑むこととなるGismontiの才能は、この時点ですでに異次元へと到達。

#181 | Experimental

Materiali Sonori / 1980 / Italy

Aldo Tarabella
Piano Forte Piano

イタリア人現代音楽家のAldo Tarabellaによる80年作で、表題のとおりA面にはアコースティック・ピアノによるインプロヴァイズドなソロ・パフォーマンスが収録されているが、トルコ発祥のダルブッカやチューブラーベルなどの打楽器と、バンドゥラと呼ばれるウクライナ発祥の古典弦楽器によるインプロヴィゼーションが繰り広げられるB面に俄然注目したい。エキゾチックな旋律を奏でるバンドゥラの音色とダルブッカの埃くさい打撃音が、見果てぬ異国の地へ誘うかのごとく鳴り響いている。

#182 | Experimental

Ananda / 1975 / Italy

Alvin Curran
Canti E Vedute Del Giardino Magnetico

2作目『The Sound Pool』を最後に、前衛音楽集団Musica Elettronica Vivaを離れソロ活動を開始したAlvin Curranが、Loberto Laneriらとともに設立したレーベルから発表したソロ1作目。EMS Synthi Aシンセサイザー、アンプで増幅したシンバル、グラスチャイムごしのヴォイス、フィールド・レコーディングされたさまざまなコレクティヴ・ミュージックなどを用いたフリー・インプロヴィゼーションで、ライヴによるミュージック・コンクレート作品ともいえるが、非常におだやかな音世界だ。

#183 | World

Elkar / 1985 / Spain

Amaia Zubiria, Pascal Gaigne
Egun Argi Hartan

スペイン・バスク地方を代表する女性トラッド・フォーク・シンガーのAmaia Zubiriaと、ギタリスト／バンドネオン奏者のPascal Gaigneによる、85年発表のデュオ作品。シンセサイザーのドローンをバックに、厚みのあるサウンドを重ねていくブラスと神々しいヴォーカルが有機的な世界を創造する「Egun Argi Hartan」をはじめ、伝統的なバスク音楽を基軸に、洗練されたアレンジとパフォーマンスでコンテンポラリーに昇華されたニューエイジ・トラッド・ミュージックを展開した名盤。

#184 | World

Amiga / 1980 / GDR

Bayon
Suite

バンド名から連想されるとおり、カンボジア系のミュージシャンをメンバーに含む、旧東ドイツの多国籍グループによる2作目。1作目を継承した、太陽の熱い日差しが差すようなカラフルな楽曲から、アンコール遺跡群を照らしながらゆっくりと太陽が沈んでいくような、幻想的な風景が出現する宗教色の強い精神性あふれる作風の楽曲まで、疑似シェムリアップ旅行を体験できる、イマジネーティヴなフォークロア・ミュージック。異常に深い残響処理も、カンボジアの湿気を感じさせる。

#185 | New Age

Biber / 1983 / Germany

Büdi Und Gumbls
Hmm....

ドイツのニューエイジ系レーベル、Biberの所属アーティストが終結した、マルチ奏者Büdi Siebertの初リーダー作品。寝言のようなヴォイスから幕を開け、バリのケチャをモチーフにしたチャントと、古代ギリシャ発祥の擦弦楽器、リュラーの微細な旋律が高らかに舞い上がるタイトル曲「Hmm-Tanz Der Korperlinge」が、いきなりすごい。ヨーロッパのトラッド／フォークを軸に、Steve Reichを想起させるミニマルな現代音楽のエレメントまでをも昇華したイディオムは、斬新かつ唯一無二。

#186 | Jazz

MRC / 1978 / Germany

Chris Hinze, Sigi Schwab, Eberhard Weber, Lala Kovacev
Wide And Blue

ヨーロピアン・ジャズ界の凄腕ミュージシャンが集結した、究極のジャズ・カルテットによる傑作。たおやかに流れる微風のように美しいコンテンポラリー・ジャズから、張りつめた空気感が支配するスピリチュアル・ジャズ、グルーヴィかつソウルフルなジャズ・ファンクまで、さまざまな感情が表現された全6曲。楽曲、構成、演奏のすべてが有機的に結合した、最高水準のオーガニック・ジャズ。音質もすべからく高品位、ステレオ空間に出現するリアリティあふれるサウンドが非常に素晴らしい。

#187 | Jazz

ECM / 1983 / Germany

Collin Walcott, Don Cherry, Naná Vasconcelos
Codona 3

民族音楽に造詣の深い3人のミュージシャンが結集したスペシャル・ユニット、Codonaの最終作にして民族ジャズの極地。おそらく歌舞伎・浄瑠璃と思われる日本の伝統音楽をアレンジした楽曲や、ヴォイスのオーヴァーダブのみで制作された、現代音楽的な趣向をもったエクスペリメンタルな楽曲など、精神性の高いこの3人以外ではなしえない世界観のサウンドが、全編にわたり繰り広げられている。完全に異次元へ突入している宇宙曼荼羅音楽「Inner Organ」が、Codonaの最終到達点。

#188 | Jazz

Flying Fish / 1978 / US

David Amram
Havana / New York

ジャズ・コンポーザー／マルチ奏者のDavid Amramが、アフロ・キューバン・ジャズの歴史に敬意を表し行なった演奏活動“The Historic US-Cuban Musical Exchange Of 1977”の軌跡をたどる名盤。Alfredo De La Fé、Candido、Thad Jones、Pepper AdamsやPaquito De Riveraなど、錚々たる顔ぶれを見るだけでも圧巻であるが、マンハッタンでのストリート・ライヴや、ハバナでのライヴ・レコーディング音源など、アフロ・スピリットに満ちあふれた素晴らしい演奏を聴くことができる。

#189 | Jazz

EMI / 1975 / Italy

Don Cherry
Brown Rice

70年代初頭に、夫人Moki Cherryの故郷スウェーデンに移住し、アフリカ、アラブ諸国やインドなどを旅しながら、自身の音楽性を深く追求していたDon Cherryの東洋志向が最も明確に打ち出された名盤。エレクトリック・ピアノとスキャットがユニゾンする愛らしいフレーズから幕を開ける表題曲の「Brown Rice」や、チベット密教の読経を彷彿させるヴォーカルがスピリチュアルな「Malkauns」など、アルバム全編をとおして表現された金剛界曼荼羅のような音世界に、ただただ驚嘆するばかりだ。

#190 | Contemporary

Victor / 1983 / Japan

Eitetsu Hayashi 林 英哲
Kaze No Shisha 風の使者

和太鼓ソリストとして世界規模で活動する林英哲が、打楽器奏者の高田みどり、鍵盤奏者の千野秀一、朝鮮半島の伝統弦楽器、伽耶琴の奏者である池成子のサポートのもと制作したソロ1作目。日本の伝統芸能を正当に継承しながらも、独創的な世界を創造した前衛民族音楽作品。独自の奏法で多種多様な太鼓から放たれる原始的なリズム、マリンバやベルのミニマルなリフレイン、伽耶琴の微細な旋律、スペーシーなシンセサイザー音が一体となって描き出す、驚異の音曼荼羅。アートワークは横尾忠則。

#191 | Jazz

Hot Club / 1984 / Norway

Erik Wøllo
Dreams Of Pyramids

ノルウェーのミュージシャン、Erik Wøllloによる3作目。インダストリアルなドローンとメタル・パーカッションが響く空間に、プリペアード・ギターやタブラから放たれる開放的なサウンドが、オーガニックな世界へと誘う冒頭曲「Morning Ritual」をはじめ、エスニックなインストゥルメンタル群と電子楽器を多用して制作された、鳥肌が立つくらいの恍惚感とエナジーをもちあわせた、エレクトリック・ニューエイジ・ミュージック。この音楽をジャズへ分類するには、あまりにも無理がある。

#192 | Jazz

MPS BASF / 1973 / Germany

Et Cetera
Live

ドイツ人ピアニストのWoflgang Daunerが結成したグループ、Et Ceteraが73年に制作した2枚組スタジオ・ライヴ作品。ダブル・ドラムスの変則クインテットで繰り広げられる、悶絶エクスペリメンタル・ジャズ・ロック。インド音楽のエッセンス導入や、ミニマルなフレーズをひたすらリフレインすることでグルーヴを創造するあたりは、Miles Davisの影響も感じずにはいられない。ジャーマン・サイケデリック・ジャズの金字塔といっても過言ではない、トータル80分を越えるディープな音世界。

#193 | Jazz

Safran / 1982 / France

Fabriano Fuzion
Cosmik Sindika

ベーシストのSerge Fabrianoを中心に結成されたアフリカ系ミュージシャンズ・グループによる、アフロ・カリビアン・フュージョン最高傑作のひとつ。ベーシストがリーダーのグループだけあって、ベースがかなり前方に定位した独特のサウンドだが、まったく違和感がなく、リズム楽器という概念を超えて流れるようなメロディを紡ぎ出している。ブライトなバッキング・ピアノやプリミティヴなリズム・セクションも秀逸で、ここまで精神性の高いグルーヴを感じる民族ジャズはめったにない。

#194 | Jazz

Atlantic / 1977 / Italy

Gianni Bedori
The Man

Georgio Gasliniのグループなどで活躍した、イタリアのテナー・サックス・プレイヤー、Gianni Bedoriによる77年発表の唯一のリーダー・アルバム。アグレッシヴに弾けるリズムに絡むグルーヴィなエレピやフルート、力強くブロウするテナーが熱い表題曲「The Man」、クールにグルーヴするリズムにキレのあるフレーズを重ねるホーンのアンサンブルがアーバンな「Looking Around」など、アダルトでスモーキーなディープ・イタリアン・ジャズを全編に収録。音の厚みも半端ない。

#195 | Jazz

ITM / 1987 / Germany

Heinz Becker, Karl-Heinz Stegmann, Isabel Zeumer
Else Lasker-Schüler: Ich Träume So Leise Von Dir

ボヘミアンなライフ・スタイルで知られるドイツ・ベルリンの女流詩人、Else Lasker-Schülerのポエットを題材に制作されたジャズ作品。神秘的な広がりを見せるミスティックな空間形成がなされた表題曲や、マシン・リズムとスラップ・ベースがフィーチャーされたエレクトロニックなトラック「Mein Tanzlied」など、Miles Davisを想起させる丸みを帯びたやわらかなトランペットの音色と鋭角なエレクトロニック・サウンドのコントラストが素晴らしい。こういう独創的な音世界は、ありそうでなかなかない。

#196 | Jazz

Private Press / 1986 / Switzerland

Heinz Lieb Project
Walkperson

86年にスイスのヴィリザウで開催されたジャズ・フェスティヴァルに出演したときのライヴ音源を収録した、スイス人ドラマーによるプロジェクトのプライヴェート・プレス作品。ライヴ全体をとおして表現される森羅万象。シンセサイザーのパッド音が作り出す、遥か彼方まで広がるアトモスフェリックな空間に、エスニックな旋律を奏でるフルートや、立体的に響くシンバルやタムの音が、どこまでも深遠な世界を描き出す、ディープでスピリチュアルなエスノ・ジャズ。音の響きも艶かしい。

#197 | Rock

VMU Music Productions / 1982 / Netherlands

Henk Werkhoven
Orphical Positions

Henk Werkhovenは、60年代からオランダで地味に活動を続けている無名のミュージシャンで、82年に自主制作された本作以外に作品のリリースはないようだ。ブルースやトラッド／フォークを基軸にシンフォニックなプログレッシヴ・ロックを展開しているが、タンブーラやシタールをフィーチャーしたオリエンタルな趣向と叙情性あふれる有機的なアレンジが施された「Tales In The Morning」のような、精神性の高い楽曲を収録している。音楽に限らず、優れた芸術作品はいつの日か、誰かが拾い上げるものだ。

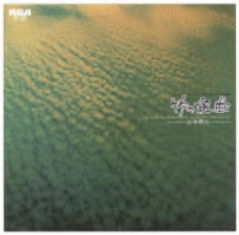
#198 | Jazz

Trova / 1975 / Argentina

Horacio "Chivo" Borraro
Blues Para Un Cosmonauta

アルゼンチンのJohn Coltraneとの呼び声高いサックス奏者、Horacio Borraroによる至高の1枚。ブラジルのヴィオラ奏者Stenio Mendesの参加が本作の要。収録曲5曲のうち2曲がStenio Mendesによるスコアで、それらはのちにMPBCから発表した自身のソロ作品でも再演している。魂が躍動する強烈なリズム、激しくかき鳴らされるグラヴィオラの旋律にトランスする前半から一転、スモーキーなモーダル・ジャズへと移行する「La Incasion De Los Monjes」ほか、圧倒的なポテンシャルを秘めた楽曲が並ぶ。

#199 | Jazz



RCA / 1976 / Japan

Hozan Yamamoto 山本邦山
The Suite For Shakuhachi 竹の組曲

60年代から異種音楽との共演を重ねてきた現代邦楽の大家にして人間国宝の尺八奏者、山本邦山が、ピアニストの前田憲男、ベーシストの荒川康男、ドラマーの猪俣猛とともに、東京カテドラルマリア大聖堂で開催したコンサートのライヴ・レコーディング作品。熟練した3人のジャズ・ミュージシャンによる白熱した演奏も驚嘆だが、もはや古典楽器の枠を完全に逸脱した、山本邦山の超絶なインプロヴィゼーションに思わず息をのむ。大聖堂の音響効果も相まって、ただならぬスピリチュアルな空気が全編を支配している。

#200 | Contemporary

Wergo Spectrum / 1986 / Germany

Ivory Playground
Scattered Clouds

オーストリア出身のコンポーザーで鍵盤奏者のPeter Arnesenに、ドイツ人現代音楽家のHermann UrablとWerner Stadlerが参加したプロジェクト、Ivory Playgroundが制作した、現代舞踏のための音楽作品。シーケンサーやプログラミング・システムを用いたシンセサイザーのメランコリックな電子音と、東洋からアフリカまで、さまざまな民族打楽器群によるパーカッション・サウンドのアンサンブル。極めてシンプルな構成によるミニマリスティックな作風だが、非常に深遠な世界が表現されている。

#201 | Jazz

ECM / 1981 / Germany

Jan Garbarek
Eventyr

ブラジル人パーカッショニストのNaná Vasconcelosと、アメリカ人ギタリストのJohn Abercrombieが参加した、ノルウェーのリード・プレイヤー、Jan Garbarekによる81年発表のリーダー・アルバム。プリミティヴに躍動するパーカッション、天に向かって突きぬけるように上昇するクリアなソプラノ・サックスが、見果てぬ幻想世界へと誘うスピリチュアルな作品。土着的であるはずのNaná Vasconcelosの打楽器群でさえも、Jan Garbarekの世界観へ引きずりこまれるようにソリッドに響いている。

#202 | Jazz

Bridge / 1983 / France

Jean-Luc Barbier
Dans La Ville Blanche

スイス人フルート奏者Jean-Luc Barbierが、同郷の映画監督Alain Tannerがディレクションしたスイスとポルトガルの合作映画『白い町で』のサウンドトラックとして録音した楽曲を中心に構成されたアルバムで、ドラマーGuido Pariniやベーシストの Hami Hammerliなどが前作に続き参加したカルテット作品。都会的な洗練された空気感を漂わせながらも、アーシーにグルーヴするプリミティヴなエネルギーと深い精神性に満ちあふれた、スピリチュアルなモーダル・ジャズを全編にわたり披露している。

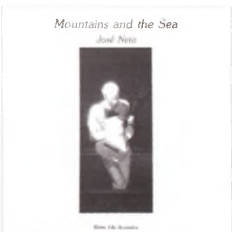
#203 | Jazz

Edigsa / 1975 / Spain

Jordi Sabatés
Ocells Del Més Enllà

スペインのジャズ・ピアニスト、Jordi Sabatésが75年に発表したカタラン・ジャズ・ロック最高峰作品。アコースティックとエレクトリックが絶妙なバランスで融合したプログレッシヴなサウンド、ブラジル人女性シンガー、Erica Norimarの変前自在なスキャットが宙を舞う、三部構成のコズミック・ジャズ・ロック「Ocells Del Més Enllà」は、Chick Corea不朽の名作『Return To Forever』への地中海からの回答とでもいうべき、凄まじいポテンシャルとグルーヴをもった壮大なスピリチュアル組曲。

#204 | World



Water Lily Acoustics / 1986 / US

José Neto
Mountains And The Sea

ブラジル・サンパウロで生まれ、18歳のときにHarry Belafonteのツアー・バンドへの参加を契機に活動の場をアメリカへと移したJosé Netoは、同郷のAirto Moreira、Flora Purim夫妻とともに結成したグループ、Forth Worldの一員としても活躍する一方、Steve Winwoodのレコーディングやツアーにも参加する技巧派ギタリストだ。86年発表の本作でも、Egberto Gismontiばりに叙情性豊かなアコースティック・ギターのパフォーマンスを見せているが、実はJimi Hendrixの演奏スタイルに多大な影響を受けているらしい。

#205 | Jazz

Mood / 1980 / Germany

Kolbe-Illenberger-Dauner
Live Kid

70年代中期からともに活動を開始したドイツ人ギター・デュオによる80年作で、ピアニストWolfgang Daunerとのトリオ名義でリリースされたライヴ・レコーディング・アルバム。1作目、2作目の収録曲からそれぞれ1曲ずつ披露しているが、スタジオ録音ヴァージョンで聴ける叙情性あふれる繊細なギター・ワークはそのままに、ライヴならではの緊張感が漂う開放的なインタープレイを繰り広げる、Mood Records屈指のエッセンシャルなサウンド。Wolfgang Danerの流麗なピアノも感動的だ。

#206 | Jazz

Harvest / 1979 / Germany

Lenny Mac Dowell
Flexible

ジャズ・ロック／クロスオーヴァーな趣向の作品をリリースしていた初期から、80年代中期以後はニューエイジ路線へと移行し、現在はクラブ・フィールドのチルアウト・ミュージックを制作している、ドイツ人フルート奏者のLenny Mac Dowellだが、79年に発表された本作では、その後の変遷の原点を垣間見れる。アコースティックとエレクトロニクスが美しく融合し、楽曲、構成、演奏、音質など、音楽を構成するすべての要素が、すでに計り知れないほどのハイ・クオリティなレヴェルへ到達している。

#207 | Jazz

Paddle Wheel / 1979 / Japan

Masahiko Togashi 富樫雅彦
Session In Paris Vol.1 "Songs Of Sol"

日本人パーカッショニスト富樫雅彦が、深い親交をもつトランペッターDon Cherryと、その盟友であるベーシストCharlie Hadenを招き、パリで録音した作品。コンポーズはすべて富樫によるものだが、その深い精神性を感じさせる作風は、まさにDon Cherry作品と直結するところ。ピンと張りつめた緊張感のある音場のなかで、プリミティヴなインタープレイを繰り広げる3者のエネルギーが作り出す、インナーマインドな陶酔感が非常に素晴らしい。Codonaとともに聴き込みたいアルバムだ。

#208 | Contemporary

RCA / 1983 / Japan

Midori Takada 高田みどり
Through The Looking Glass 鏡の向こう側

クラシックの素養をもちながらも、久石譲を中核とするグループ、ムクワジュ・アンサンブルへの参加や、アートやダンスとのコラボレーションなど、ジャンルを超越した先鋭的な活動を続ける打楽器奏者、高田みどりのソロ・ワークス。すべてのパートを自ら演奏した多重録音作品。小鳥のさえずりや風にゆれる木々のざわめきを連想させる鳴りもの、執拗に繰り返される鍵盤打楽器のミニマルな反復音が、現実と幻想の狭間でゆらいでいるような錯覚を起こさせる。その先には、まだ見ぬ桃源郷が。

#209 | Contemporary

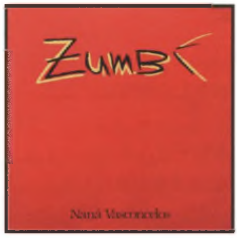
Better Days / 1981 / Japan

Mkwaju Ensemble

Ki-Motion 樹 - モーション

1作目で中核を担っていたコンポーザー、久石譲の手を離れ、坂田明の関連作に参加しているシンセサイザー奏者、千野秀一によるプロデュースのもと制作された、ムクワジュ・アンサンブルの2作目。オリジナル・メンバーであるふたりの打楽器奏者、高田みどりと定成庸司に加え、ドラマーの村上秀一が参加し、さらにアグレッシヴなミニマリズムへと躍進。異なるテンポを組み合わせることで発生するモアレ現象や位相変化を巧みに駆使した、原始と前衛のメルティング・ポット。

#210 | World



Europa / 1983 / France

Naná Vasconcelos

Zumbi

Pat Metheny GroupからBrian Enoまで、参加する作品すべてに存在感を残すブラジル人パーカッション奏者Naná Vasconcelosの83年作で、打楽器、ボディ・パーカッション、ヴォイスをすべて自らパフォーマンスし多重録音した完全なるソロ・ワークで、神がかり的なリズム感とプリミティヴなグルーヴが一体となった、驚異のヒューマン・ミュージックが繰り広げられる。アフリカ系ブラジル人が多く居住するブラジル北東部ノルデスチの伝統を、肉体、精神ともに継承しながらも、表現方法はまったくもって前衛的である。

#211 | Avant-Garde

Polskie Nagrania Muza / 1975 / Poland

Ossian

Ossian

Awanaというロック・グループのメンバーだった、Jacek OstaszewskiとMarek Jackowskiを中心に、70年に結成されたOssianは、アンプラグドな楽器群で無国籍な民族音楽を演奏する、ポーランドの前衛音楽集団。基本的に作品はすべてインプロヴィゼーションによるライヴ・レコーディングのようで、人間の深層心理に訴えかけるような土着的な旋律とリズムが、聴くものを陶酔させ深遠な精神世界へと誘う。ジャンルやスタイルではない、真のトランス・ミュージックを展開する稀有なグループである。

#212 | Avant-Garde

Muza Polskie Nagrania / 1980 / Poland

Ossian

Ksiega Chmur

ポーランドの前衛民族音楽集団Ossianの80年作で、5つのパートで構成された長編組曲。アーシーな縦笛と魂の叫びのごとき幻唄から幕を開け、古代儀礼を想起させる男女混成チャントと土着的な太鼓のリズムが否応なく感情をゆさぶり、精神世界へと突入してゆく。人間と地球と宇宙をダイレクトにコネクトさせる、有機質のアンプラグド・トランス・ミュージック。現代的（西洋的）な音楽解釈からすればあまりに辺境的だが、音楽の本質が概念を超えたところにあると、あらためて実感させてくれる。

#213 | Experimental

Stile Libero / 1988 / Italy

Paolo Modugno
Brise D'Automne

イタリアのコンテンポラリー・レーベル、Stile Liberoから発表された、マルチ奏者Paolo Modugnoによるアナログ唯一作。アフリカ・ブルンディ族ピグミーのヴォイス・サンプルから幕を開け、ウォーター・ドラムやトーキング・ドラムによる立体的なリズムの音像が、空間を大きく解放させる「Danza Nell'Acqua」をはじめ、さまざまな民族打楽器や自然音、電子音を駆使した、ネオ・プリミティヴな感覚が素晴らしいエンヴァイロメンタル・エスノ・ミュージック。この衝撃は、なかなか味わえない。

#214 | Rock

Better Days / 1985 / Japan

Paradigm Shift
Paradigm Shift

のちにAB'sのメンバーとなる松下誠を中心に結成された、敏腕スタジオ・ミュージシャン4人によるグループ、パラダイム・シフトの1作目。80年代King Crimsonを彷彿させるテクニカルなプログレッシヴ・ロックだが、日本人離れしたグルーヴ感をもつ松下の研ぎすまされた感性が冴えわたっていて、カッティング・エッジなエレクトロニクスとドラマティックな展開が生み出す、突き抜けるような上昇気流にのみこまれてしまいそうだ。あまり正当な評価がなされていないようだが、世界レヴェルで高品位だ。

#215 | Jazz

ECM / 1981 / Germany

Pat Metheny & Lyle Mays
As Falls Wichita, So Falls Wichita Falls

Pat Methenyがこの世に産み落とした名盤名曲は数知れないが、盟友の鍵盤奏者、Lyle Maysとの連名で発表したこの作品を取り上げないわけにはいかない。ライヴ・ツアーにも参加し、もはやグループの一員であるといえるブラジルの打楽器奏者、Nanã Vasconcelosが加わった鉄壁の布陣による、リアル・トリップ・ジャズ。A面すべてを費やした、20分を超える長編タイトル曲は、徐々に表情を変えながら、聴く者をトランス状態へと導いていく。これぞまさしく音楽の旅、すごいの一言。

#216 | World

Private Press / 1985 / Brazil

Paulo Steinberg
Aquarela Carioca

ブラジルのヴィオラ奏者、Paulo Steinbergが85年に自主制作で発表した作品で、現在も第一線で活躍しているパーカッショニストのMarcos Suzanoが参加している。シタールとタブラのオリエンタルなサウンドにおだやかなメロディを奏でるフルートが舞う、ブラジル産インディアン・ミュージック「Raxixe/Raga Maxixe」や、やわらかな音色のヴィオラと哀愁漂うソプラノ・サックスのアンサンブルが見事な「Tio Beijo」など、オーガニックでスピリチュアルな万華の世界が音場に広がる。

#217 | Jazz

Spotlite / 1978 / UK

Paz
Kandeen Love Song

Ian CarrのNucleusに参加していたリード奏者と鍵盤奏者を中心に結成された、イギリスのジャズ・セプテットPazによる1作目。モダン・ジャズの素養を感じさせる演奏だが、ラテンや東洋の民族音楽の要素を多分に取り入れた、エスニックな志向のサウンド・メイクと、陶酔感を誘う美しい構成／展開による、スピリチュアルでオーガニックなジャズ・ロック作品だ。絶妙なリヴァーブが施された広い音場も素晴らしく、音の粒子がやわらかく空間を浮遊する感覚が、このうえなく気持ちいい。

#218 | Jazz

Xanadu / 1983 / US

Peter Sprague
Bird Raga

アメリカ西海岸を拠点に、現在も活動を続けるギタリストの83年作。基本はジャズだが、そのスタイルは多様で、ラテンやカントリー／フォークなども取り入れた、ナチュラルなグルーヴを感じる秀逸なギター・プレイを披露している。インド古典弦楽器タンブーラのドローンをバックに、John McLaughlinばりにエキゾチックな旋律を奏でるアコースティック・ギターに心酔するインディアン・ジャズ「Mahavishnu」は、おだやかな曲調のなかに潜む自然愛を感じる、スピリチュアルな1曲。

#219 | Avant-Garde

Ki / 1981 / France

Philippe Cauvin
Climage

フランス・ボルドーのアヴァン・ロック・グループUppsalaのギタリスト、Philippe Cauvinのソロ1作目。Steve Tibbettsに肉迫するテクニックで、とめどもなく降りそそぐアコースティック・ギターのスコールのようなサウンドと、常人離れしたファルセット・ヴォーカルが、抽象的な風景画のように叙情的で情緒あふれるサウンドスケープを描く。エレクトリック・ギターとスキャットが複雑な旋律を延々とユニゾンし続けながら終焉する「Fantaisie Bordelaise」が、あまりにもすごい。

#220 | World

Puls Productions / 1987 / Germany

Reinhard Flatischler
Schinoré

アジアや南アメリカで長きにわたり民族打楽器を学び、音楽大学などで教鞭をとった異色の経歴をもつ、オーストリア人打楽器奏者による、驚異のスピリチュアル・パーカッション・ミュージック。タブラやムリダンガムなどのインド伝統打楽器と、コンガやボンゴなどのラテン・パーカッションが織りなす、きめの細かいミニマルな打撃音が、洪水のようにあふれ出しては、泡のように消えてゆく、果てしなくディープなエスニック・トランス・ジャム。アルバム全体を1曲としてとらえたい。

#221 | Jazz

Carmo / 1983 / Brazil

Robertinho Silva
Bateria

Milton Nascimentoグループでの長きにわたる活動をはじめ、ジャズ・シーンからMPBまで幅広いジャンルで活躍するブラジル人名ドラマー、Robertinho Silvaが、Egberto Gismonti主宰のCarmoレーベルから発表したソロ2作目。Academia De Danças周辺ミュージシャンが参加したカルテット編成による本作では、トリッピーなシンセサイザー・サウンドも導入され、MPBCシリーズから発表されたI作目よりも洗練度が増し、プログレッシヴなジャズ・ロックへと昇華した傑作となった。

#222 | Jazz

Private Press / 1979 / Austria

Sinus
Julian Dream

オーストリア人フルート奏者によるユニットの自主制作盤。ベーシストとドラマーが参加したトリオ編成によるシンプルなサウンドだが、テンションを抑えながらクールにグルーヴするリズム・セクションと、アーシーなウッド・フルートのメロディが幻想的に浮遊する、USブラック・ジャズに匹敵する深い精神性を感じるエスニック・ジャズを披露している。最終曲「Julian Dream II」では、残響処理が施されたフルートとシンセサイザーによる、深遠なメディテーション・ミュージックも聴ける。

#223 | Jazz

MPS BASF / 1973 / Germany

Smoke
Everything

ヴァイブラフォン奏者のWoody Webb率いるカリフォルニアのジャズ・グループ、Smokeがドイツの名門レーベルからリリースした2作目。パーカッシヴな変拍子ポリリズムにヴァイブラフォンやエレクトリック・ピアノが倍音成分を放出する「Everything」もすごいが、音場空間のなかでユラユラとゆれるフェンダー・ローズやハモンド・オルガンがディープ極まりない「Curtis」が垂涎。ディープでメロウ、アヴァンギャルドでスモーキーなアフロ・スピリチュアル・ジャズが、濃密に凝縮されている。

#224 | Jazz

RTV Ljubljana / 1979 / Yugoslavia

Sončna Pot
Sončna Pot

70年代後半の短期間に活動した、スロヴェニア、クロアチア、ブルガリアのミュージシャンからなるフュージョン・トリオ、Sončna Potの唯一作で、凛とした緊張感のなかでさまざまな心象風景を描き出す、パースペクティヴなクロスオーヴァー・ジャズを披露した傑作。ゲスト参加したスロヴェニア人打楽器奏者、Uroš Šećerovのエスニック感覚あふれるパーカッション・プレイも素晴らしく、抑揚のあるプログレッシヴな展開にさらなる彩りを与え、精神性の高いサウンドへと昇華させている。

#225 | Jazz

Producteurs Associes / 1983 / Switzerland

Speira N' Mbassa

Cheminement...

サックス奏者のHarley Ferreiraを中心とするスイスのジャズ・セクステット、Speira N' Mbassaが残した唯一作にして、知られざる名盤。洪水のようにあふれ出す鬼気迫る勢いのピアノがスピリチュアルな前半から一転、ファンキーにグルーヴするアフロ・キューバン・ジャズへと展開する「O-O」、メディテーティヴな導入部からピアノやパーカッションが有機的な空間を創造していく、Don Cherryを彷彿させるエスニック・ジャズ「Ethnic Suite」など、無名のグループとはにわかに信じがたい傑作だ。

#226 | Jazz

PLA / 1974 / Sweden

Splash

Splash

鍵盤奏者のThomas Jutterströmを中心とするスウェーデンのアート・ジャズ・ロック・グループ、Splashの1作目。厚みのあるブラス・ロック的なホーン・アンサンブルに、ディストーテッドなギターやシンセサイザーが唸りをあげる、壮大な世界観のプログレッシヴ・ジャズ作品。アフリカ人パーカッショニスト、Ahmadu Jarrのチャントとプリミティヴなパーカッションで幕を開け、むせび泣くサックスやエモーショナルなピアノがグルーヴするアフロ・ブラジリアン「Sambahmadu」がすごい。

#227 | World

Philips / 1980 / Brazil

Stenio Mendes

Stenio Mendes

ブラジルの新鋭アーティストを紹介するMPBCシリーズからリリースされた、ヴィオラ奏者Stenio Mendesの唯一作。アルゼンチンのサックス奏者、Horacio Borraroの名盤『Blues Para Un Cosmonauta』に提供した楽曲を、本作で自らも演奏している。粒子の細かいヴィオラの音色が叙情的な風景を切なく描く楽曲から、パーカッションとヴィオラが激しくリズムを刻む、エネルギーに満ちた楽曲まで、伝統に根ざした深い精神性、宇宙を感じる壮大なスケールの演奏が、あまりに素晴らしい。

#228 | Jazz

Flammis / 1980 / US

Steve Tibbetts

Yr

Manfred Eicherに見いだされ、ECMからデビューしたアメリカ・ペンシルヴェニア出身のギタリスト、Steve Tibbettsが無名時代に自主制作したセカンド・アルバム。オーヴァーダビングされた恍惚のギター・サウンド、長きにわたり活動をともにする盟友Marc Andersonによるプリミティヴなパーカッション、静と動の反復運動で表現された森羅万象。Steve Tibbettsの稀有な音楽性は、人知れず録音されたこの作品ですでに具象化していることを実感させられる。自主制作とは思えない芯のある音質にも驚愕する。

#229 | Jazz

BASF / 1971 / Germany

Sunbirds
Sunbirds

ドイツ人ジャズ・ドラマー、Klaus Weissによるプロデュースのもと、Fritz Pauer、Jimmy WoodeやFerdinand Povelなど、各国の名プレイヤーが集結したグループ、Sunbirdsは、70年代初期に2枚のアルバムを残している。ブルースやソウルを基調に、タイトなリズム・セクションとエフェクティヴなリードがスモーキーにグルーヴするスピリチュアルなサウンドスケープは、Mal Waldron参加の名作『The Call』と双璧をなす、クラウト・ジャズ・ロック最高峰の1枚といっても過言ではないだろう。

#230 | Jazz

Polydor / 1976 / US

Teruo Nakamura
Rising Sun

60年代初期より渡米し、ニューヨークを拠点に演奏活動をはじめた日本人ベーシストの中村照夫による、76年発表のリーダー・アルバム2作目で、69年よりともに活動を続けてきた盟友のSteve Grossmanをはじめ、Lonnie Smithなども参加し、非常にクールなグルーヴにあふれたジャズ・ファンクやサンバ・ジャズを披露している。なかでも心を奪われるのが、さまざまな民族楽器のサウンドがちりばめられた、メロウなスロー・ジャズ・ナンバー「Morning Mist / Steppin' With Lord」だ。

#231 | Jazz

Soul Note / 1984 / Italy

Tony Scott
African Bird

世界各国の民族音楽を吸収したエスニックなジャズや、アジアの文化に影響を受けた、メディテーションをテーマに掲げた音楽を早くより展開していた、イタリア系アメリカ人クラリネット奏者のTony Scottが、心の師であるCharlie Parkerへ捧げるために制作したアルバム。果てしなく広がるアフリカの大平原を想起させる壮大なサウンドスケープが素晴らしい表題曲「African Bird」をはじめ、極彩色の楽園世界が出現するトライバル・サウンド。エスノ・スピリチュアル・ジャズの隠れた名盤。

#232 | Jazz

Polydor / 1977 / Netherlands

Tony Scott feat. Jan Akkerman
Meditation

民族音楽へ深く傾倒したジャズ作品を数多く残している、イタリア系アメリカ人ジャズ・クラリネット奏者と、ジャズ・ロック・バンドFocusで活躍した、オランダ人技巧派ギタリストのスピリチュアルな競演。ウェットな音色のエレクトリック・ギターと、息づかいも生々しい、かすれた音色のクラリネットやソプラノ・サックスが、激しい展開もなく、ただ波に身をまかせるように流れていく、ディープ・スピリチュアル・ジャズの最果て。Jan Akkermanのギターはひたすら遊泳している。

#233 | Jazz

Melodia / 1989 / USSR

VSP Projekt
VSP Projekt

壮大なスケールのマインド・ミュージック作品を残している電子音楽家Sven Grünbergや、ブルース・ロック・バンドで活動するギタリスト、Riho Sibulなどが参加した、エストニアのワンオフ・プロジェクトによる89年リリースの作品。大空へ羽ばたくような飛翔感をもった「Tuuleperlne」や、遠く地平線を望むようなアトモスフェリックな空気に包まれた「Hilineja」をはじめ、清涼感のあるエフェクティヴなサウンドがカラダに浸透する、テクニカルなクロスオーヴァー・ジャズ・ロックを全編に展開したアルバム。

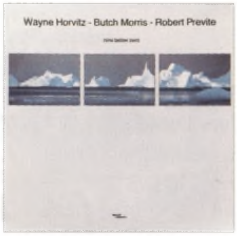
#234 | Jazz

Amigo / 1979 / Sweden

Waves
Blue Waves

スウェーデンのジャズ・クインテット、Wavesが79年に残した北欧ハード・バップ最秘境作品。USブラック・ジャズに負けず劣らずディープでスピリチュアルな志向に加え、ECM作品に通じるエレガンスも兼ね備えた、異常にクオリティの高い演奏に驚きを隠せない。SEのように単音フレーズを飛散させるサックスに、ときおり姿を現わすミニ・モーグのトリッピーなサウンドが、電化時代のMiles Davisの余波をうかがわせる、緊張感あふれるジャズ・ファンク「AR 2002」がすごい。

#235 | Jazz



Sound Aspects / 1987 / Germany

Wayne Horvitz - Butch Morris - Robert Previte
Nine Below Zero

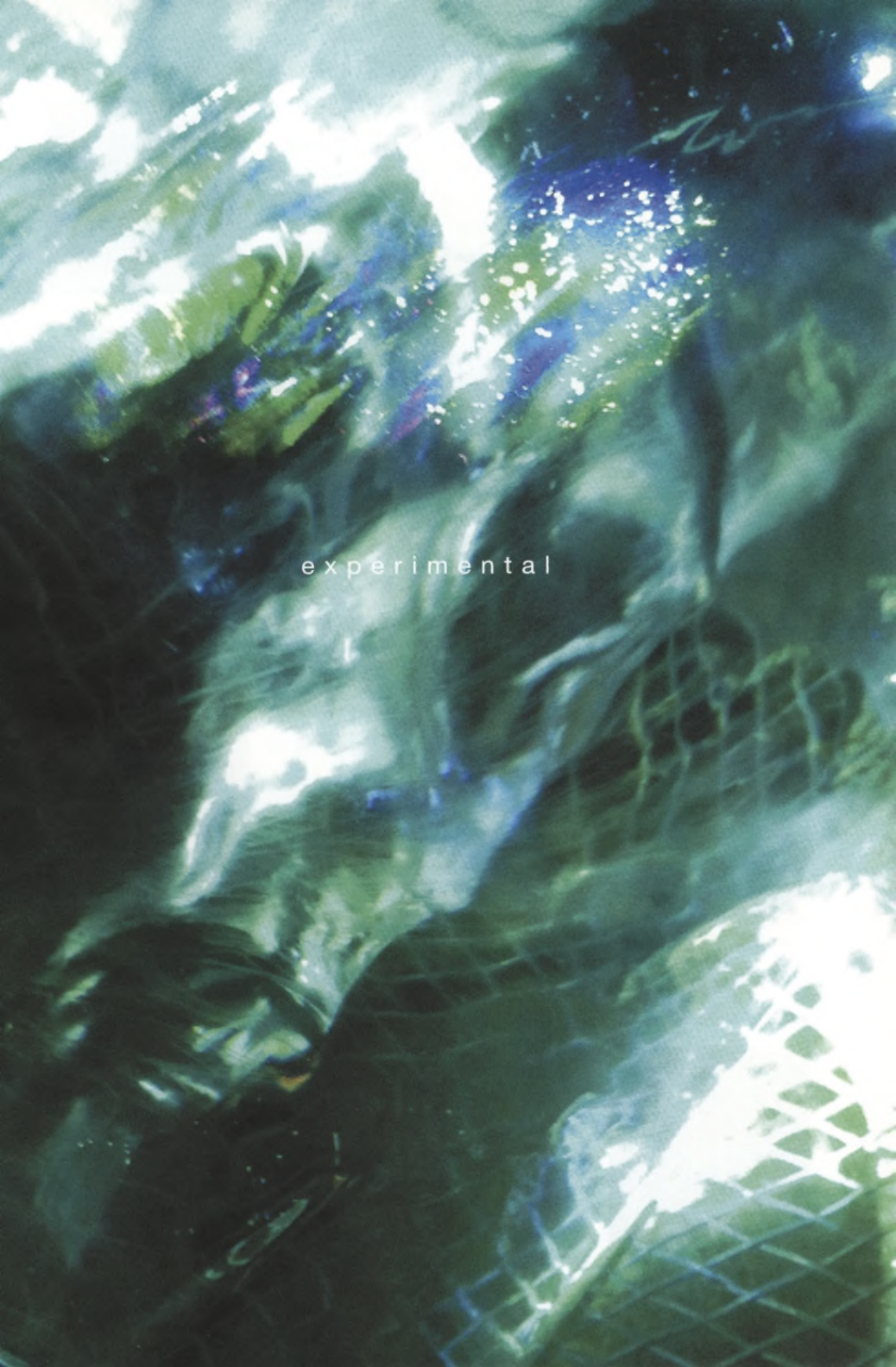
Elliott Sharpなどのアヴァンギャルド勢ともコネクトするドイツの鍵盤奏者、Wayne Horvitzが、Butch Morris、Robert Previteとともに制作したデンジャラスな1枚。ヤマハDX-7によるメタリックな電子音やRXドラム・マシンによるアブストラクトなマシン・リズムを多用し、フリー・ジャズからミニマル・コンテンポラリー、アンビエント・ジャズまでさまざまな要素を融合したWolfgang Downerの『Output』に肉迫する、精神性の高いサイケデリックな電子実験ジャズ。Miles DavisやDon Cherryの影響も感じる。

#236 | Jazz

Trio / 1981 / Japan

Yoshio "Chin" Suzuki 鈴木“チン”良雄
Wings

ベーシスト鈴木良雄が、前作『Matsuri』に続き、海外の名うてのジャズ・ミュージシャンを招いてニューヨークで録音した81年作。可憐に舞うアコースティック・ピアノとソプラノ・サックスが切なくも美しい冒頭曲「Persian Breeze」をはじめ、モーダル・ジャズからジャズ・ファンクまで、ピンと張りつめた緊張感のなかから生まれる、深い精神性に満ちあふれた音空間を創造した作品だ。デジタル・マスタリング・システムを使用して録音された瑞々しいサウンドも、非常に素晴らしい。


experimental

experimental

本章では、John Cageに代表される偶発性やチャンス・オペレーションを加味した現代音楽や、Karlheinz Stockhausenなどのトータル・セリエルな前衛音楽など、アカデミックな理論に基づく実験音楽ではなく、なんらかの事物に影響され、インスピレーションを得て、感情の赴くまま衝動的に実験行為に及んだと推測される、創造力を刺激する音楽を取り上げている。ただし、アカデミックな実験音楽のなかでもSteve Reichだけは別格。

masterpiece

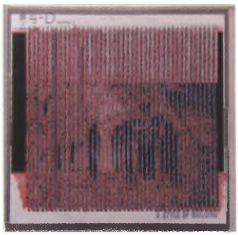
#237 | Contemporary

Elektra Nonesuch / 1989 / US

Steve Reich - Kronos Quartet, Pat Metheny
Different Trains / Electric Counterpoint

Steve Reichのコンポーズ2作品の初演。「Different Trains」は、現代音楽演奏集団のKronos Quartetのために書き下ろされたスコアで、第二次世界大戦がテーマに掲げられた、インタヴューの肉声音源とストリングスのアンサンブル。Pat Methenyが演奏した複数のギター・ピースをオーヴァーダビングした「Electric Counterpoint」は、The Orbの名曲「Little Fluffy Clouds」でサンプリングされたことで、クラブ世代にも知られているだろう。いずれもSteve Reich独自の哲学が反映されたコアなミニマリズムだ。

#238 | New Wave



Telegraph / 1984 / Japan

4-D Mode-1

A Style Of Building

泉奥陸彦とのユニットDADAやP-Modelで活動した小西健司を中心に結成されたニューウェーヴ・グループ、4-Dの初期作品。DAFをはじめとするAta Tak周辺のノイエ・ドイチェ・ヴェレ（ジャーマン・ニューウェーヴ）の流れをくむエレクトロニック・サウンドだが、耽美で陶酔感のある世界が独特で、ドラム・マシンの硬質なビートにフューチャリスティックなシンセ音がレイヤーされた「Piper In The Moon」や「旅の人」が先鋭的だ。パルコ・スペースで録音されたライヴ・テイク「ひろせ」も尖っている。

#239 | Rock

Spiegelei / 1982 / Germany

Aera

Akataki

サックス・プレイヤーのKlaus Kreuzederを中心とするドイツのグループAeraは、MagmaやZaoなどに代表されるフレンチ・プログレを彷彿させるテクニカルなジャズ・ロック作品を数多く残しているが、82年に発表された本作では、サイレンやエンジン音など、さまざまなトリップ音がトッピングされたパーカッション・ブレイクスが展開する表題曲「Akataki」をはじめ、他作よりもさらに突出したアブストラクトな音楽性を見せている。音の粒子がカラダに突き刺さるハード・エッジな音質も強烈。

#240 | New Wave

Express / 1986 / Japan

Akira Inoue 井上 鑑

Imaginary Arboretum 架空庭園論

アレンジャーやキーボーディストとして現在も第一線で活躍する井上鑑のソロ6作目で、技巧派ドラマーの山木秀夫、イギリスのトップ・セッション・ミュージシャン、John GiblinやAlan Murphyらとの共同レコーディングが行なわれている。シンセサイザーやヴォコーダーを駆使したエレクトロニック・サウンドで、ライトなシティ・ポップも多く含まれているが、「5000本の樫の木」や「架空庭園論」などは、複雑な構造によるコンセプチャルな楽曲だ。横尾忠則によるアートワークもイマジネイティヴ。

#241 | Experimental

ADN / 1983 / Italy

Andreolina

An Island In The Moon

イタリアの実験音楽家、Pier Luigi AndreoniとSilvio Linardiによるプロジェクト、Andreolinaの唯一作で、同レーベルに秀逸な作品を残しているRiccardo Sinigagliaが参加している。チャイムやチェロを模した音色の電子音がクリスタルに反響する「Market Of The Lost Illusion」、タブラの鋭角なアタック音とシタールの深遠なドローンがゆるやかに絡み合う「The Voice Of An Ancient Bard」など、民族音楽の要素を多分に吸収したエキゾチックな世界観のディープ・エレクトロニック・メディテーション。

#242 | New Wave

Invitation / 1985 / Japan

Aragon
Aragon

アラゴンは、林立夫、今剛、難波正司、西松一博の4人のスタジオ・ミュージシャンが結成したグループで、オリジナル・アルバムは本作しか残していないが、そのコンセプチャルな志向性やサウンド・メイキングは圧倒的なクオリティを誇る。エレクトロニクスを大胆に導入したアーティスティックな作風はCocteau Twinsを彷彿させるが、女性ヴォーカルと聴き間違えてしまうほどの特徴的な声色をもったシンガー、西松一博のヴォーカル・ワークは独特で、デカダンなサウンドと見事にマッチしている。

#243 | Experimental

Sky / 1982 / Germany

Asmus Tietchens
In Die Nacht

クラウト・アヴァン・エレクトロニクスの雄、Asmus Tietchensの82年作で、非常に実験的な音響処理によるアブストラクトな電子音楽を展開しているが、他作品にくらべリズム感があり、ClusterのMoebiusやRoedeliusあたりにもリンクするサウンド。シンプルにリフレインする低音シンセにノコギリ波がビキビキと脳天を直撃する「Kopfüber In Den Gulli」、リズム・マシンのミニマルなビートとトリッピーなトビ音が横断するディープ・アンビエント「Regenwald」で、異次元に連れていかれる。

#244 | Jazz

Replay / 1987 / Denmark

Bo Stief
Hidden Frontiers

デンマークの技巧派ジャズ・ベース奏者Bo Stiefが、Alpha CentauriやEntranceなどのグループで活動をともにした、同じくデンマークのジャズ・トランペッターPelle Mikkelborgのプロデュースのもと制作したソロ1作目。基本的にはコンテンポラリーなジャズだが、シンセサイザーを大胆に導入し、ニューエイジ・テイストあふれる美しい楽曲から、アグレッシヴに展開するエクスペリメンタルな楽曲まで、ひんやりとした肌触りのサウンドながら、どこかあたたかみを感じるエレクトロニック・ジャズを収録。

#245 | Jazz

Chiaroscuro / 1977 / US

Bruce Ditmas
Aeray Dust

アメリカ人ドラマーのBruce Ditmasは、Enrico RavaやGil Evansのグループなどで活躍した、フリー畑のジャズ・ミュージシャンだが、77年に発表されたこのソロ・アルバムでは、アナログ・シンセサイザーのトリッピーなサウンドが縦横無尽に空間を飛び交う、ジャズのフィールドから完全に逸脱した、ストレンジ・ワールド全開の実験的サウンドに挑んでいる。アートワークには、さまざまな打楽器群とアナログ・シンセサイザーに囲まれながら、どサイケな装いで佇む氏の写真が掲げられている。

#246 | Experimental

Island / 1983 / France

Charlélie Couture (Original Soundtrack)

Tchao Pantin

画家や写真家としての顔ももつフランスのコンポーザー／シンガー・ソングライターのCharlélie Coutureが音楽を手掛けた、Claude Berri監督映画『Tchao Pantin』のサウンドトラック。同じくフランスの奇才Ramuntcho Mattaに通じるウィットに富んだエクスペリメンタルなアヴァン・ミュージック作品で、空間を広くとったリヴァービーなドラム、ウェットなタッチのエレクトリック・ギターのレイヤー、深い残響空間のなかで立体的に響くエレクトリック・パーカッションや効果音にトバされる。

#247 | Experimental

Innovative Communication / 1987 / Germany

Clara Mondshine

Visions Of Audio

現代音楽の祭典、メタムジーク・フェスティヴァルを主宰するドイツ人音楽家、Walter Bachauerの変名プロジェクト。独創的でハイ・クオリティなエレクトロニクス作品を残しているアーティストだが、3作目にして、遂に境地にたどり着いたようだ。以前作から一貫して継承される、東洋思想のエッセンスを織り込んだ楽曲と、実験精神に満ちあふれたコラージュ・サウンドが未開の地を創造する、あまりにも凄まじい音響作品。ジャーマン・テクノを先取りするアシッドなマシン・ビートに悶絶。

#248 | Experimental

Takoma / 1981 / US

Craig Leon

Nommos

Craig Leonは、Talking Headsなどを見いだしたことで知られるアメリカ人プロデューサーで、そのサウンド・プロダクションは多岐にわたるが、80年代前半には個人名義での作品も残している。81年発表の本作は、一切甘さのない硬質な電子音による実験的なエレクトロニック・ミュージックを展開した完全セルフ・パフォーマンス・アルバムだが、その背景にあるのは土着的なミニマリズムで、まるでアフリカの少数部族がシンセサイザーを手にして伝統的な儀礼音楽を奏でているようだ。

#249 | New Wave

Moon / 1986 / Japan

dip in the pool

Rabo Del Sol 太陽のしっぽ

ファッション・モデルの甲田益也子と鍵盤奏者の木村達司によるユニット、ディップ・イン・ザ・プールが、サウンド・エンジニアのオノ・セイゲンによるプロデュースのもと制作した、4曲入りのファースト・アルバム。ベルギーのCrepuscule一派に通じる幻想的なニューウェーヴ・ポップ作品だが、最終曲「AGAIN-dip in the pool」の、オルゴールのようにメルヘンチックなサウンドと轟音ギターのコントラスト、奥行きのある立体的な空間に響くアヴァンギャルドな作風が、圧倒的にすごい。

#250 | Experimental

Grabaciones Accidentales / 1987 / Spain

Enrique Mateu De Villavicencio
Formas Millares

いくつかのポップ・バンドでの活動を経たのち、87年にLuis Delgadoプロデュースのもと発表した、スペイン人ギタリストのEnrique Mateuによる初のソロ作品。複数のセクションからなる組曲形式で、ウェットな音色のセミ・アコースティック・ギターが郷愁の情景を描く、ニューエイジ・テイストのA面から一転、B面ではフリーフォームなアヴァンギャルド・ミュージックからドローン・エレクトロニクスまでを展開。最終曲「Formas - Orientate」のダークマターなサウンドでノックアウト。

#251 | New Wave

Atelier Peyoti / 1984 / Japan

EP-4
Lingua Franca-X

70年代中期に京都の音楽シーンを先導していたアーティストのひとり、佐藤薫を中心に結成されたグループ、EP-4が、雑誌『夜想』などで知られる現代芸術出版社のペヨトル工房から発表した3曲入りの12インチ・シングル。「昭和崩御」と記されたアートワークも強烈なインパクトだが、硬質なサウンドによるファンク・ビートと過剰なまでにエフェクト処理が施されたヴォイシングやSEが狂おしい、先鋭的なダンス・ミュージック作品にして、前衛コンセプチャル・アート作品でもある。

#252 | New Wave

Inspyration Music / 1988 / Germany

Flex
The Silent Death Of Dreams

Flexの首謀者であるThomas Wackerについては素性がまったく不明だが、さまざまな楽器の演奏からコンポーズやアレンジまでをこなすマルチ・ミュージシャンのようだ。おそらく唯一作であろう本作では、エレクトロニクスを多用したポスト・パンクなニューウェーヴが展開されるが、すべての曲が切れ目なく進行するB面に注目したい。シンセサイザー・パッドの陰鬱なドローンにカリンバのようにウェットな音色の打楽器音がトッピングされた「Beyond The Gate Of Sleep」がミステリアスだ。

#253 | Library

Unidisc / 1970s / France

Francisco Semprun Et Michel Christodoulides
Choréo-Rythmes

スペイン生まれのパリジャンFrancisco Semprunと、ギリシャ生まれのMichel Christodoulidesのふたりのコンポーザーが手掛けた、ライブラリー・レーベルUnidiscからリリースされたモダン／コンテンポラリー・ダンスのための音楽作品。パーカッションが刻むアーシーなリズム、ミニマルなフレーズを重ねるヴァイブラフォンなどの金属音、情熱的に燃え上がるフラメンコのようなアコースティック・ギターのカッティングやハンドクラップなど、アフリカとはひと味違うプリミティヴ感のある現代音楽が面白い。

#254 | Jazz

Philips / 1975 / Netherlands

The Group
Omniphonic Music

ピアニストのRobert E. Van Der Lindenを中心とするオランダのジャズ・コンポ、The Groupの名作。おだやかなグルーヴのなかで浮遊するフルートとエレピが心地良い「Ballad Of Hathor」のような美しいコンテンポラリー・ジャズも秀逸だが、オーケストラルなイントロから現代音楽的ヴォイス・インプロヴィゼーションを経て、バンニングと残響効果を多用したディープな音響ジャズへと展開する、クラシカルな要素と実験的な要素が入り乱れたアヴァンギャルドな志向の「Workshop」がヤバい。

#255 | Electronic

Yen / 1982 / Japan

Haruomi Hosono 細野晴臣
Philharmony

YMOの活動を休止した82年に制作された細野晴臣のソロ6作目で、自身が発足したYenレーベルの第1弾として発表された。初期型サンプラーのイミュレーターをフル活用し、コンピューターやサンプリング・テクノロジーの可能性を極限まで追求した実験的な作品で、のちにフレンズ・オブ・アースで展開されるエレクトロの予兆を感じさせるが、チベタン・ベルや法具の音をサンプリングした「Luminescent/Hotaru」や「Birthday Party」では、前作『コチンの月』を継承するサイケデリクスも匂わせる。

#256 | New Wave

Scopa Invisible / 1979 / France

Hector Zazou
La Perversita

ZNRやThe Plastic Peopleなどの実験音楽作品をリリースしているフランスのレーベル、Scopa Invisibleから発表されたアヴァン・アート作品。5人のアーティストの名前が掲げられているが、Hecotr Zazou以外は演奏者ではない。モノクロにプリントされたポスター・サイズのインサートが付属していて、エグい現代アートとBazookaなる人物によるレビューが掲載されている。いわば音楽込みのコンセプチャル・アートだ。ただひたすらに淡々と展開する「I Love You S...」は、性に目覚めた子供の火遊びのよう。

#257 | Library

International Music Label / 1972 / France

Jacques Lasry
Musique Démesurée

フランスの特殊現代音楽界の巨頭が制作を手掛けた、ライブラリー作品。Baschet兄弟が発明した音楽彫刻『Structure For Sound』を駆使した、特有の浮遊感を備えたメタリックなドローン・ミュージックから、初期MagmaやUniveria Zektなどで活動した子息、Teddy Lasryのフルートやクラリネットをフィーチャーしたエスニックなフォルクローレまで、一貫してフローティングな質感と、独特の宇宙観に彩られた、驚愕の実験音楽作品。アーリー・アンビエントとしても高く評価したい。

#258 | Contemporary

Private Press / 1988 / France

Jean-Claude Camors
Strates

フランス人現代音楽家のJean-Claude Camorsが88年にリリースした自主制作盤。シンプルなフレーズがループするパーカッションのリズム、ヴァイオリンやアルト・サックスのサウンドにミニマルなヴォイス・パフォーマンスがレイヤーされながら、時間軸とともに徐々に変化を帯び、それぞれの音がまるで生き物のように動き回る有機的な世界観が素晴らしい、イマジネイティヴなミニマル・コンテンポラリー・ミュージック。シリアスに理論を追求したような堅苦しさは一切ない、遊び心のある音楽。

#259 | Experimental

Opal / 1990 / US

Jon Hassell
City: Works Of Fiction

77年発表の1作目以降、幻想的なサードワールドを夢想し続けてきたJon Hassellだが、9枚目となる本作で、その視線は都市へと向けられた。都市生活者のメタリックな日常を描き出した楽曲には、Glenn O'Brienによるショート・ストーリーが添えられている。陰鬱に浮遊するトランペットは変わらずだが、硬質なドラム・シークェンスが導入され、クラブ・ミュージックに肉迫したサウンドとなった。ドラムは打ち込みに聴こえるが、サンプル音源によるライヴ・パーカッションのようだ。

#260 | Experimental

Producciones Exilio / 1987 / Mexico

Jorge Reyes
Viento De Navajas

メキシコ実験電子音楽の第一人者といっても過言ではない、現代音楽家のJorge Reyesによる87年作。口琴のような電子音、バンブー・フルートやさまざまなパーカッションの湿度の高い音色に、ジャングルへ迷い込んだような錯覚をおぼえる「Apagon General」、硬質なシンセサイザーとマシン・リズムが不穏な空気感を漂わせる「Bimno」など、メキシコの民族音楽と実験的なエレクトロニクスを融合させた独特の世界観で、アステカやマヤのような古代秘境文明を想起させるミステリアスなサウンドが真骨頂だ。

#261 | New Wave

Grabaciones Accidentales / 1990 / Spain

Juan Belda
La Pasion

スペインのマイナー・アーティストの2作目で、Luis Delgadoがディレクションする同レーベルのシリーズに作品を残す、ギタリストのEnrique Mateu De Villavicencioが参加している。アタック感のある硬質なビートにカッティング・エッジなギター、スクラッチや電子音なども多用した、フランスの現代音楽家Hector Zazouに通じるエクスペリメンタルなサウンドから、ストリングスやホーンをフィーチャーしたディープなコンテンポラリー・ミュージックまでを展開したユニークな作品。

#262 | New Wave

Klamm / 1983 / Spain

Klamm
Africa Roja

スペイン・バルセロナの知られざるニュー・ファンク・グループ、Klammが自主制作で発表した唯一のアルバム。湿り気と透明感のあるエレクトリック・ギターの音色がDurutti Columnを彷彿させるが、シンセサイザーのように聴こえる独特のエフェクトを施しており、タイトなリズム・セクションが作り出す空間のなかで、アトモスフェリックに響いている。スパニッシュ・エクスペリメンタルの重要人物、Suso Saizの関連作品にも通じるエクスペリメンタル・ニューウェーヴ。

#263 | Experimental

Lyra / 1984 / Greece

Lena Platonos
Maskes Iliou

作曲家／ピアニストのGeorgio Platoを父にもち、18歳の若さですでにプロのピアニストとしてキャリアをスタートさせたギリシャの女性アーティスト、Lena Platonosが、Panos Dracosとの共同プロデュースで制作した4作目。エレクトロニクスを多用したミニマルなサウンドに、独創的な旋律のヴォーカルやポエトリー・リーディングがレイヤーされた、非常に実験的かつアヴァンギャルドなサウンド・メイクでありながら、コンテンポラリーなエレガンスを感じさせるミュージック・アート作品。

#264 | Experimental

Kamikaze / 1977 / Belgium

Marc Hollander - Aksak Maboul
Onze Danses Pour Combattre La Migraine

ベルギーの奇才コンポーザー、Marc HollanderとVincent Kenisのプロジェクト、Aksak Maboulが77年に発表した1作目。フリー・ジャズ、室内音楽、シンセ・ポップなど、聴き手次第でいかようにも受け止められる、奇天烈な発想によるアーティスティックなアヴァン・ミュージックだが、サウンド・プロダクションを手掛けるTelexのメンバー、Dan LacksmanとMarc Moulinの力量によるところもかなり大きい。のちにMarc Hollanderが主宰するレーベルCrammed Discsからも再発されている。

#265 | New Wave

Yupiteru / 1982 / Japan

Masumi Hara 原マスミ
Imagination Exchange イマジネイション通信

イラストレーターや声優としても活動するシンガー・ソングライター、原マスミの処女作。ファンタジックな詩世界と独特な声質のヴォーカルも秀逸だが、EP-4のキーボーディストBANANAやギタリストのRAなどが参加したバックのサウンドがとにかく素晴らしい。ProphetやLinn-Drumなどを駆使したエレクトロニクスとライヴ・パフォーマンスの絶妙なバランス感覚、同時代のクラウト・ロックやニューウェーヴを凌駕する先鋭的なサウンド・メイクが、ここ日本ですでに実践されていたという事実に驚きを隠せない。

#266 | Experimental

DRO / 1984 / Spain

Mecanica Popular
¿Que Sucede Con El Tempo?

第三世界の民族音楽に深く傾倒し、エスニック・フィールなコンテンポラリー／ニューエイジ作品を数多く残している奇才、Luis Delgadoが、Engenio Munozとともに結成した実験電子音楽ユニットによる処女作にして、スパニッシュ・エレクトロ最秘境。ひたすらミニマルにリフレインする硬質の電子音、パンチのききまくった圧力の強いマシン・ドラム、単調に繰り返されるシンプルなフレーズが幾重にも折り重なることで生まれる強烈な音世界に、気がつけば完全に飲み込まれている。

#267 | Experimental

Dome / 1982 / UK

Michael O'shea
Michael O'shea

北アイルランド出身の路上音楽家、Michael O'sheaが、DomeのBruce GilbertとGraham Lewisの目にとまり、両氏のプロデュースのもと制作したアルバム。共鳴箱に張られた弦を2本の小さなスティックで叩く、“Mo Cara”と呼ばれるツィター系の撥弦楽器の独奏に、まるで音を水中に振動させたような湿り気のある残響処理を施し、深遠かつスピリチュアルなサウンドを音場に出現させた、非常にドープな世界観の先鋭民族音楽。延々と響く微細な音の渦に埋没していくような感覚。

#268 | Avant-Garde

Gibex / 1978 / US

Michael William Gilbert
Morning Pictures

ベルギー・ブリュッセルの現代音楽家、Michael William Gilbertが78年に発表した処女作。シンセサイザーによるメタリックな電子音を背景に、さまざまなライヴ・インストゥルメンツを自ら演奏し、さらにテープ・レコーダーによるコラージュを駆使した実験的な電子音楽作品で、手法的にはミュージック・コンクレートの先駆者であるPierre Henryなどの影響をにわかに感じさせるが、根底にはアフリカやアジアなどの民族音楽に傾倒したヒューマニックな自然志向があると思われる。アンビエントの要素も強い。

#269 | Avant-Garde

Eksakt / 1985 / Netherlands

Niew Hip Stilen
Heartsounds & Murmurs

80年代初頭に結成され、オランダ国内のクラブ、劇場や美術館で、ヴィデオ・プロダクションなどを含むアーティスティックな音楽活動を展開したアヴァン・ニューウェーヴ・トリオ、Niew Hip Stilenが同国ティルブルグを拠点とするインディペンデント・レーベル、Eksakt Recordsからリリースした唯一作。シンセサイザーやコンピューター・プログラミングを多用し、ジャズ、ディスコからボレロまで、雑多な音楽性を吸収したアブストラクトなインプロヴァイズド・ミュージック。

#270 | Experimtental

Private Press / 1986 / Switzerland

Peter Schmid, Philipp Zehnder
Soundscapes

Evan Parkerなどとも共演するスイス人サキソフォニストのPeter Schmidが、同じくスイスのフレキシブルな打楽器奏者、Philipp Zehnderとのデュオ名義で自主制作した最初期録音作品。波のように押し寄せては引いていく、大小さまざまなシンバルやゴングの響きがプディスティックな「Soundscape II」をはじめ、エスニック・テイストあふれるパーカッションと管楽器による空間性のあるインプロヴィゼーション・ミュージックが終始展開される。音のプールにプカプカと浮かんでいるような感覚。

#271 | Avant-Garde

Komono / 1984 / France

Philippe Cauvin
Memento

フランスのアヴァン・プログレ・バンド、Uppsalaのギタリストとしても活動したマルチ・プレイヤー、Philippe Cauvinによる84年発表のソロ2作目。ふたりのミュージシャンが数曲でサポートする以外、すべての演奏を自ら担当した、セルフ・プロデュース作品。ヴィブラートをきかせた独特の歌唱法によるヴォーカルと、アコースティック・ギターのアンサンブルが、さまざまな表情を見せながら変化していく。繊細かつカッティング・エッジなアコースティック・サウンドが、非常に先鋭的だ。

#272 | Experimental

Maldoror / 1988 / Italy

Raffaele Serra
Kodak Ghost Poems

イタリアの実験音楽レーベル、ADN周辺アーティストの作品に参加し、ミレニアム以降は、Andrea Maruttiが主宰するレーベル、Afe Recordsからコンスタントに作品を発表している、イタリア人コンポーザー／鍵盤奏者のRaffaele Serraが、シンセサイザーやテープ・エディットを多用しマルチ・レコーディングした、セルフ・プロデュース作品。ミニマリスティックに浮遊するメタリックな金属音や、レゾナンスをきかせたシンセサイザー音がメランコリックに響きわたる、ポエティックな世界。

#273 | Experimental

Cryonic Inc. / 1986 / France

Ramuntcho Matta
Écoute...

フランス国内ではポスト・パンク／レフトフィールドのクリエイターとして扱われているRamuntcho Mattaだが、その作風は極めて実験的かつ先鋭的だ。ソロ名義2作目となる本作に収録の表題曲「Écoute」では、Don Cherryの影響を少なからず感じさせながら、Magma一派のベーシスト、Jannick Topのグルーヴィなベースを軸に、パーカッションやヴォイスをコラージュのように配した、モダン・アート・ミュージックが確立されている。フクザキユウコなる女性がささやく日本語のワードにもトバされる。

#274 | Experimental

Grabaciones Accidentales / 1986 / Spain

Randomize

¿Como Se Divertiran Los Insectos?

スペイン人電子音楽家のEugenio Munozによるソロ・プロジェクトの唯一作。立体的な空間を構築するエフェクティヴな電子音と、さまざまなギミックを駆使したコラージュ・ミュージック的アレンジによるインダストリアルなサウンドで、Luis Delgedoと共同制作したMecanica Popular名義の84年作の延長上にある作品といえるが、最終曲「La Armonía De Las Esferas」は、無機質なサウンドが作り出す有機的な世界が稀有なエレクトロニック・メディテーションで、Mecanica Popularでは聴けなかった作風だ。

#275 | Experimental

ADN / 1986 / Italy

Riccardo Sinigaglia

Riflessi

80年代初期から現在に至るまで、エスノ・シャーマニックな意匠による電子音楽をはじめ、実験精神に富んだ作品を数多く発表しているイタリアの特殊音楽家、Riccardo Sinigagliaによる86年作。同年にCorennti Magnetiche なるオーディオ・ヴィジュアル・アート・グループを結成し、デジタル・サウンド・システムを駆使した実験音楽を展開しているが、本作もその延長上にあるといえる。デジタル・シンセサイザーとライヴ・インストゥルメンツによる、コラージュ的な要素の強いサウンド。

#276 | Experimental

ReR Megacorp / 1988 / UK

Roberto Musci & Giovanni Venosta

Urban And Tribal Portrait

イタリアの実験音楽家ふたりによる共作第2弾。現代都市と第三世界を連想させるさまざまなエレメントを組み合わせ構築した、アーバン・トライバル・ミュージック。日本の歌舞伎をはじめ、モンゴル、アフリカ諸国やメラネシアなどのチャントや民族音楽の現地録音素材と、生楽器やシンセサイザーの演奏／プログラミングが、異次元で化学反応を起こしたような、オリジナリティあふれる作風だ。ふたりの共同作業は、92年発表の3作目まで続くが、残念ながらアナログでのリリースはここまで。

#277 | Experimental

Place Of Light / 1983 / US

Savant

The Neo-Realist (At Risk)

80年以降、自身の所有するレーベルから多量の作品を発表しているマルチ・プレイヤー、Kerry Leimerによるプロジェクト。この名義では、本作と12インチ・シングル1枚しか残していない。打ち込みのようなブレイク・ビーツだが、ほぼ人力によるもの。微妙にレイドバックする複雑なドラミングと、シンセやテープを駆使した浮遊感のあるウワモノが、ミステリアスな世界へと誘う。立体的に処理された奥行きのあるサウンドが、ダブの要素を多分に感じさせる。実験的でありながらもグルーヴ感がある。

#278 | Experimental

Private Press / 1980s / Netherlands

Shusaku & Dormu Dance Theater
Music From

Oblique名義でも作品を残しているオランダの実験音楽家、Gerard Stokkinkが、現在もアムステルダムに存在するコンテンポラリー・ダンス・シアターのために制作した舞台音楽作品。Obliqueのアルバムでも再演された「Yellow Turtles」のオリジナル・ヴァージョンをはじめ、デジタル・シンセサイザーと打楽器というシンプルな編成で、さまざまなイメージを想起させるエレクトロニック・ミュージックを全編に展開した傑作。繊細なサウンド・メイクは、Wally Badarouのソロ作品にもかなり通じるところがある。

#279 | Jazz

Mood / 1982 / Germany

Ströer Duo
Fluchtweg Madagaskar

ドイツ・ミュンヘンの音楽家兄弟、Hans PeterとErnstによるStrõer Duoの82年作で、Volker Kriegel主宰のジャズ・ロック・レーベルから発表されているが、もはやカテゴライズ不能な、極めて異質かつ実験的な作品。民族音楽の現地録音レコードから拝借したチャントにテープ・エディットを施してメロディ・パートを制作、そこにパーカッションやシンセサイザーなどを当て込んで、新たなグルーヴを創造するという、現在のリミックスという概念を先取りした前衛的な手法がすでに実践されている。

#280 | Experimental

Slow Food / 1991 / Spain

Suso Saiz
Simbolos

スパニッシュ・ニューエイジのパイオニア、Suso Saizのソロ名義としては3枚目にあたる91年作。ロング・エコーが施されたエレクトリック・ギター、大気のように音場を包み込むシンセサイザー・パッドのドローン、空間をより有機的に変えるエスニック・パーカッションが、果てしなく深遠な世界を描き出す桃源郷サウンド。必要最小限のパートのみで構成される研ぎすまされた音には一切の無駄がない。音の感触はやさしいが試みは実験的だ。Manuel Göttschingと同様のヴィジョンを見いだせる。

#281 | Experimental

Crammed Discs / 1986 / Belgium

Sussan Deihim, Richard Horowitz
Desert Equations: Azax Attra

ベルギー発の先鋭レーベル、Crammed Discsによる実験音楽シリーズ“Made To Measure”から発表された作品。硬質なメタル・パーカッションによるアブストラクトなビート、エミュレーターやフェアライトなどのサンプラーを駆使した、パースペクティヴなエレクトロニック・サウンドに、エキゾチックなヴォイス・パフォーマンスがトッピングされた、エクスペリメンタル極まりないデザート・ミュージック。砂嵐が吹き荒れる砂漠を、静かにキャラヴァンが移動する光景が目に浮かぶ。

#282 | Experimental

Tranquility / 1985 / Japan

Takashi Kokubo 小久保 隆
Digital Soundology #1 Volk Von Bauhaus

日本の環境音楽家、小久保隆が、シークェンス機能をもつ初期型サンプラー／シンセサイザー、フェアライトCMIや、FM音源を駆使して制作した無限演奏音楽。A面は、2小節単位のフレーズがひたすらループされるだけで、時間的な音階の変化は皆無であるにもかかわらず、そこには微細なゆらぎが存在している。B面にいたっては、コンピューターによる自動作曲／自動演奏によるもので、それ自体に作者の意匠は一切介在していない。電子音が自然音になる瞬間を垣間見てしまったようだ。

#283 | Experimental

Ariston Music / 1983 / Italy

Various Artists
Architettura Sussurrante

雑誌のディレクションをはじめ、プロダクト・デザインや建築など幅広い分野で活躍するイタリア・ミラノの才人、Alessandro Mendiniの監修によるコンピレーション・アルバム。電子音のミニマルなシークェンスとサウンド・コラージュが融合した、Luca D. Mayerによる「Un Milione Di Domani」をはじめ、パンキッシュなシンセ・ポップからミニマル・コンテンポラリーまで、ポスト・モダニストを自負する氏のセンスを投影したアヴァンギャルド・ミュージックが全編に繰り広げられている。

#284 | Jazz

Eigelstein / 1985 / Germany

Various Artists
Vor Der Flut

サックス奏者のHinnerick Broskampのコンセプトをもとに、各国のコンテンポラリー・ジャズ、ワールド・ミュージック系のアーティストが集結し、100年以上前に建造されたケルン近郊の貯水庫でレコーディングが行なわれた2枚組超大作。楽曲はすべて、当時も貯水されたままだったというタンクのなかに分散して配置された集音マイクによって録音され、アフター・エフェクトなども一切施されていない。ヨーロッパの石造建築特有の反響空間と水の残響音が生み出すウェットな質感が独特だ。

#285 | Jazz

ECM / 1970 / Germany

Wolfgang Dauner
Output

60年代初期よりフリーフォームに活動を展開するドイツ人ジャズ・ピアニストのWolfgang Daunerが、創設まもないインディペンデント・レーベルECMに残したソロ・アルバム。翌年に結成するグループ、Et Ceteraのメンバーでもあるベーシストの Eberhard Weberとドラマーの Fred Bracefulが参加したトリオ作品だが、通常のピアノ・トリオとは完全に一線を画すアヴァンギャルドな志向で、リング・モジュレーターを経由したノコギリ波のようなクラヴィネットの音が、脳細胞を直撃する。

cosmic

cosmic

Robert Moog 博士によって開発されたモーグ・シンセサイザーの誕生は、音楽家の新たなる創造の扉を開いた重大な事象だ。電子楽器が発する合成音は、音の存在しない宇宙空間のイメージを決定的なものとし、さらには、自然界に存在するさまざまな音までをも表現可能にした。本章で取り上げている音楽にはすべて電子楽器が導入されている。見果てぬ宇宙やシャングリラへの想像力をかきたてる、音楽による疑似スペース・トリップだ。

masterpiece

#286 | Electronic

Paragon / 1978 / Germany

Conrad Schnitzler

Con

2011年に惜しくも他界した、ジャーマン・エレクトロニクスの先駆的存在、Conrad Schnitzlerが、Peter Baumann所有のパラゴン・スタジオで録音した78年作。ミニマルにシークェンスする純度の高い電子音が音場を縦横無尽に駆けめぐる、凄まじいまでのトリップ感を秘めたメタ音響空間が目の前に出現する。単一では意味をなさない音のパーツが集結し構築されることで、はじめて音楽として成立するという、独自の理論で制作されたと勝手に推測する。「Metal I」でアウター・スペースに突入。

#287 | Jazz

Thein / 1984 / Germany

Adelhard Roidinger
Computer & Jazz Project I

山下洋輔や佐藤允彦など日本のジャズメンとの共演作も発表しているAdelhard Rodingerは、フリー・ジャズ畑のオーストリア人ジャズ・ベーシストだが、84年発表の本作のみ特異なサウンドを展開している。大量のシンセサイザーとコンピューター・プログラミングを駆使した美しいエレクトロニック・サウンドに、繊細で郷愁に満ちたコンテンポラリー・ジャズが有機的に結合した、タイトルどおりのコンピューター・ジャズ。“Computer & Jazz Project I”と掲げられているが、残念ながらパート2はない。

#288 | Electronic

Caeleste Arc / 1985 / US

Amerlan
Ascendences

アメリカの電子音楽家Michael Amerlanが、コンポーズ、アレンジ、演奏など、すべてを自ら手掛け制作したセルフ・プロデュース作品。伸びのある艶やかな電子音、奥行きのある立体的な音像定位、ストーリー性あふれる展開など、自主制作盤とはにわかに信じがたい、ハイクオリティなシンセサイザー・ミュージックを創造している。94年に同レーベルよりアルバムを1枚発表しているようだが、それ以外に目立った活動経歴はなく、非常にプライヴェートなアーティストのようだ。

#289 | Electronic

The Initial Recording Company / 1981 / UK

Bernard Szajner
Superficial Music

The Hypothetical Prophetsやソロ名義で、強烈にエクスペリメンタルなミニマル・エレクトロニクス作品を残しているBernard Szajnerによる、81年発表のクレイジーな1枚。79年に同レーベルからリリースされた、SF小説『Dune（砂の惑星）』をモチーフにしたアルバム『Visions Of Dune』の素材をもとにさまざまな加工を施し、さらにメタリックでダークマターな宇宙音楽を創造したリコンストラクト作品。脳や身体を刺激する体感型のサウンド・ウェーヴ・ミュージックだが、ハマりすぎるとかなり危険だ。

#290 | Contemporary

Finnadar / 1978 / US

Bülent Arel & Daria Semegen
Electronic Music For Dance

トルコ・イスタンブール出身の音楽家Bülent Arelと、ドイツ・バンベルク出身の音楽家Daria Semegenが、68年から77年にかけてコンポーズした現代舞踏のための楽曲を収録したアルバム。さまざまな電子音が泡のように湧いては消えてゆく、まるで無限の宇宙に信号を送っているような、どこまでも果てしなくスペーシーな電子音響空間。出来の悪いミュージック・コンクレートのような雑音感覚は一切なく、放出される電子音を耳で追っているうちに意識が遥か彼方へ飛んでいく、驚異の電子音楽作品。

#291 | Electronic

Innovative Communication / 1981 / Germany

Clara Mondshine
Luna Africana

ドイツ人現代音楽家にしてミュージコロジストのWalter Bachauerによる変名プロジェクト、Clara Mondshineの1作目。Klaus Schulzeが発足したレーベル、Innovative Communicationから発表され、プロデュースもKlaus Schulzeが手掛けている。Fabian Arkusの名で参加していた先鋭民族音楽集団、Betweenの作風からの影響か、アフリカ、インド、日本など、第三世界の民族音楽のエッセンスが充満した、異国情緒あふれる摩訶不思議なミニマリスティック・デジタル・サウンドが深い幻影を描いている。

#292 | Rock

Palacio / 1981 / Venezuela

Daniel Grau
Por Qué No Podemos Hacerlo?

ベネズエラ人シンセサイザー奏者のDaniel Grauは、作品ごとに違う表情を見せるアーティストだが、本作では、イージー・リスニング調のカラフルなポップスにプログレッシヴ・ロックをかけ合わせたような、独特のメロディ・センスによるストレンジなサウンドを展開している。リズム・マシンのチープなビート、シンセサイザーやギターがブリージンでスペーシーな旋律を奏でる「La Estrella Lejana」や、トリッピーなシンセサイザーとファンキーなギターがグルーヴする「Combination」がクレイジー。

#293 | Jazz

ECM / 1987 / Germany

David Torn
Cloud About Mercury

ルーピング・エフェクトなどの技術を開拓したことでも知られる、アメリカ人ギタリスト／コンポーザー、David TornがECMに残した珠玉の名盤。King CrimsonのベーシストTony LevinとドラマーBill Bruford、ニューエイジ・フィールドで活躍したマルチ奏者Mark Ishamが参加し、ジャズ、ロックとエレクトロニクスが高次元で結合した、トランス感覚あふれるプログレッシヴなサウンドを展開した作品。竜巻のようにウネリながら宇宙に向かって上昇する、幻想的なサウンドスケープが圧巻。

#294 | Library

Cardium / 1979 / Italy

Desert
Desert

Alessandro Alessandroniが手掛けた作品も発表しているイタリアのマイナー・ライブラリー・レーベル、Cardiumからリリースされた、Desertなる謎のワンオフ・プロジェクトによる唯一作。パワフルな4ビートを刻むドラム、ファットでファンキーなベースとクラヴィネット、サイケデリックかつスペーシーなソロを弾きたおすシンセサイザーとギター。プログレッシヴなジャズ・ファンクからスピリチュアルなエレクトロニック・ミュージックまで、オブスキュア極まりないイタリアの秘境的サウンド。

#295 | Electronic

Sky / 1981 / Germany

Deutsche Wertarbeit
Deutsche Wertarbeit

Streetmarkのメンバーだった鍵盤奏者、Dorothea Raukesのソロ・プロジェクト、Deutsche Wertarbeitの唯一作。ストリングス・パッドによる美しいメロディや、エッジのきいたシンセ・アルペジオが心地良く響きわたる「Auf Engelsflügeln」、シンセサイザーの重厚なレイヤー・サウンドが意識を遠く彼方まで運んでくれる「Intercity Rheingold」など、いかにもドイツらしい、といってもダークなインナー・トリップ感は一切ない、非常にポジティヴな志向のマインド・トリップ・エレクトロニクスだ。

#296 | Jazz

Intercord / 1978 / Germany

Dieter Reith
Love And Fantasy

ドイツ人ジャズ・ピアニスト、Dieter Reithによる問答無用の最高傑作。本作の極めつけは、なんといっても表題曲の「Love And Fantasy」の1曲に尽きる。フェンダー・ローズ、アープ・オデッセイやEMS Synthi Aなどの電子鍵盤群を大々的に導入した、完全に異次元へ連れていかれるディープ・フロートなエレクトリック・ジャズで、Kool & The Gangの「Summer Madness」をも凌駕するコズミック・ジャーニーだ。後半に登場するピアノ・ソロで気を失いそうになる。

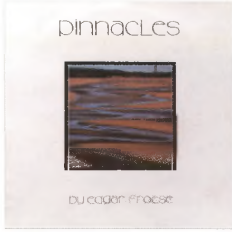
#297 | Electronic

Chicago 2000 / 1978 / France

Dominique Guiot
L'Univers De La Mer

PatchworkやKoka Mediaなどのライブラリー・レーベルに作品を残しているフレンチ・コンポーザー、Dominique Guiotの78年作で、本作もライブラリー作品のようだが定かではない。いささか奇妙で幻想的なアートワークにも惹かれるが、Manuel Göttschingを彷彿させるエレクトリック・ギターとシンセサイザーのレイヤー・サウンド「Les Pingouins S'Amusent」をはじめ、ニューエイジなアンビエントからスピリチュアルなエレクトロニクスまで、一貫してスペーシーなトリップ・ミュージックを追求した作品。

#298 | Electronic



Virgin / 1983 / Germany

Edgar Froese
Pinnacles

クラウト・エレクトロニクスの重鎮グループ、Tangerine Dreamの中核であるEdgar Froeseの、個人名義としては最終作となる6枚目のソロ・アルバムで、ウェットな音色のピュアなエレクトロニック・サウンドが広大なランドスケープを描き出す、美しいシンセサイザー・ミュージックが全編に収録されている。22分に及ぶ壮大なスイート「Pinnacles」は、強く吹きつける風によって自然造形された石灰岩の柱が無数に立ち並ぶオーストラリアの砂漠地帯、ピナクルの情景をダイレクトにイメージさせる。

#299 | Electronic

Melodia / 1980 / USSR

Eduard Artemiev & Yuri Bogdanov
Metamorphoses

Andrei Tarkovsky映画のサントラも手掛ける、ロシアを代表するコンポーザーのEduard Artemievが、ロシア国営レーベルMelodiaのエンジニア、Yuri Bogdanovとのコンビで制作したエレクトロニクス作品のひとつ。EMS社製アナログ・シンセサイザーを駆使し、ロシア正教的荘厳さのレトロ・フューチャーなスペース・エイジから、ディープ・スペースなアンビエントまでを展開。無重力空間に放り出されたような感覚や、ブラックホールに吸い込まれていくようなカオティックな音響処理が、極めて強烈。

#300 | World

EMI-Odeon / 1984 / Brazil

Egberto Gismonti
Egberto Gismonti

作品ごとに新たな試みに挑む実験精神あふれるEgberto Gismontiだが、本作はNivaldo Ornelasがサックスで参加している以外、すべてのパートを自ら演奏したマルチ録音作品で、大量のシンセサイザーやシタールなどのインド古典楽器を取り入れ、エレクトロニクスとライヴ・インストゥルメンツの奇跡的な融合を結実させた、感動的なまでに独創性豊かな音楽を創造している。まるでNaná Vasconcelosがリズム・マシンに化けたかのようにプリミティヴなリズムを刻むTR-808なんて、ほかに聴いたことがない。

#301 | Rock

Opus / 1977 / Czechoslovakia

Fermáta
Huascaran

ギタリストのFrantišek Griglákを中心に73年に結成された、スロヴァキアのプログレッシヴ・ロック・グループ、Fermátaの3作目。スピード感のあるシンフォニックでテクニカルな展開と、フェンダー・ローズやアープ・シンセサイザーをフィーチャーしたギャラクティックなサウンドが際立つ、サイケデリックな匂いも多分に漂わせる長尺のスペース・プログレッシヴ・ロックを収録した作品。当初は、Spraphonレーベル傘下のGramofovny Klubというレコード・クラブから、プリ・オーダーのみで発表された。

#302 | Jazz

Timeless Muse / 1979 / US

George Adams Quintet
Paradise Space Shuttle

アメリカのテナー・サックス奏者、George Adamsの79年発表のリーダー・アルバムで、イメージどおりのハード・バップなモダン・ジャズを演奏しているが、最終曲の「Funk-A-Roonie-Peacock」がすごい。ミッド・テンポのファンク・ビートにしゃがれ声のブルージーなヴォーカルが絡み合う、14分超えのスペース・ジャズ・ファンク。なかごろに登場するフルートのオーガニックなソロにもっていかれる。Pharoah Sandersの名盤『Thembi』を彷彿させるサンバ・ジャズ、「City Of Peace」も素晴らしい。

#303 | Electronic

G-S / 1980s / Italy

Gianni Sposito
Denebola

Luciano BerioとBruno Madernaにより設計されたミラノのフォノロジー・スタジオ、RAIが運営するレーベルからも作品を発表しているイタリア人音楽家、Gianni Spositoが残した謎のレコード。ライブラリーといわれているが定かではない。レイヤーされたシンセサイザーのシークェンスが立体的な音場を生み出すギャラクティックなサウンドから、インナー・トリップなメディテーティヴ・サウンドまで、ミニマル・コンテンポラリーの要素も兼ね備えたスペース・シンセサイザー・ミュージック作品。

#304 | Jazz

Jazzimage / 1986 / Canada

Helmut Lipsky
Melosphere

ドイツ人ヴァイオリニスト、Helmut Lipskyの86年作。ロック、ブルース、ファンクなどさまざまなスタイルを吸収したエレクトリックなクロスオーヴァー・ジャズ作品。エレクトリック・ヴァイオリンとシンセサイザーを大々的に導入した、スペーシーなサウンドとドラマティックな展開は、後期Klaus Doldinger's Passportの世界観をさらに美しく幻想的にしたような感触。プログレッシヴ・ロックの要素も多分に感じられ、単なるライト・フュージョンでは済まされない素晴らしい内容だが、まったく評価されていない。

#305 | Experimental

Spalax / 1985 / France

Henry Torgue & Serge Houppin
Les Aventures D'Ivan Vaffan

70年代中期から90年代後半にかけて、実験的な作品を発表しているフランス人コンポーザーのHenry Torgueが、盟友Serge Houppinとともに制作した、前衛ダンス・プロジェクトのGroupe Emile Duboisによる舞踏作品『Les Aventures D'Ivan Vaffan』のための舞台音楽。ソリッドなエレクトロニック・サウンドによる強烈なトリップ感をもった楽曲から、ミニマル・コンテンポラリーまでを展開した驚愕の作品。テーマ曲「Ivan Vaffan」の、カラダに突き刺さるような攻撃的な電子音が強烈だ。

#306 | Jazz

MPS / 1976 / Germany

Jasper Van't Hof
The Selfkicker

Charlie MarianoやGeorge Gruntzのグループでも活躍したオランダ人ジャズ・ピアニストのJasper Van't Hofが76年に発表したリーダー作品。プリペアド・オルガンやPPGシンセサイザーによる空間を切り裂ようなサウンド、凄まじいテンションでドライヴするリズム・セクション、すべての楽器の演奏がまるで宇宙と交信しているかのような、張り詰めた空気感とパースペクティヴな空間処理が超スペーシーなコズミック・ジャズ・ロック。MPSとは思えないスモーキーかつヘヴィ・ウェイトな音質。

#307 | Jazz

Love / 1974 / Finland

Jukka Tolonen
The Hook

サイケデリックからカントリーまで幅広い作風で知られるフィンランド屈指の凄腕ギタリスト、Jukka Tolonenが74年に発表した3作目にして最高傑作といっても過言ではない、スペース・ジャズ・ロック・アルバム。ずっしりとボトムの重いリズム隊がきいたスローなブルース・ロックから幕を開け、オーロラのように光り輝く恍惚のギター・サウンドが、大気圏を突き抜けて果てしない宇宙へと旅立つ変拍子トリップ・ロックへと転調する「Aurora Borealis」が、あまりにも強烈なインパクトを与える。

#308 | Electronic

Klaus Schønning Lydlaboratorium / 1979 / Denmark

Klaus Schønning
Lydglimt

デンマークの電子音楽家、Klaus Schønningが79年に自主制作でリリースした処女作にして最高傑作。ローランドSH-1000、ホーナー・ストリングメロディや、ホーナー・クラヴィネットなどを使用した比較的シンプルなシステム構成ながら、自然音のサンプルやアコースティック楽器を効果的に使用したオーガニック感覚あふれるニューエイジ・エレクトロニクスと、超宇宙的なシンセサイザー・サウンドによるエソテリックなサイケデリクスが絶妙に混じり合った、北欧ならではの独創的かつ神秘的な世界観が素晴らしい。

cosmic

#309 | Library

Coloursound Library / 1981 / Germany

Klaus Weiss
Open Space Motion

アフロ・パーカッション・グループのNiagaraなどでも知られるKlaus Weissは、ライブラリー作品も多く制作している、多才な顔をもつドイツ人技巧派ドラマーだ。本作もそのうちの1枚で、レゾナンスのきいた太い音色のシンセ・ベースにスペーシーなシンセサイザーのメロディがサイケデリックに浮遊する「Changing Directions」をはじめ、自然や宇宙をテーマに、卓越したテクニックのライヴ・ドラミングとコズミックなエレクトロニック・サウンドを有機的に融合させた、良質な楽曲を収録した名盤だ。

#310 | Electronic

RTB / 1983 / Yugoslavia

Laza Ristovski
2/3

旧ユーゴスラヴィアのプログレッシヴ・ロック・グループ、Smakのメンバーだった鍵盤奏者のLaza Ristovskiが83年に発表した3枚目のソロ・アルバム。モデュレーションをきかせたシンセサイザーのソロがコズミックにビルドアップする「Pulsing Star」や、ピコピコした電子音とメディテーティヴなシンセ・パッド音のコントラストが印象的なトリップ・ミュージック「2/3」など、アナログ・シンセサイザーを駆使したディープ・ギャラクティックなエレクトロニック・ミュージックを披露している。

#311 | Electronic

RCA Victor / 1974 / France

Luigi Venbento
Tangage

Luigi Venbentoはフレンチ・ポップ界隈で活動した鍵盤奏者のようで、Guy Frassetoなるシャンソン歌手の作品でモーグやオルガンを担当しているが、その程度の情報しかない謎のアーティストだ。個人名義の作品も7インチで発表された本作のみと思われる。A面ではシンセサイザーによる大道芸的インスト・タンゴを披露しているが、B面に収録の「Le Piege A Son」が異常だ。ズ太い音色のアナログ・シンセサイザーが竜巻のように上昇する、ギャラクティックな電子音楽がオブスキュア極まりない。

#312 | World

Private Press / 1984 / Germany

Magica
People

アフリカ人を含む4人のミュージシャンで構成されたグループによる自主制作盤。スティール・パンをフィーチャーしたトロピカルなサウンドに、アフロ、ブラジル、ラテンなどの要素を絶妙にブレンドした、プログレッシヴ・ワールド・フュージョンとでも呼びたくなる、奇跡的な楽曲が並ぶ稀有な作品。竜巻のようにウネるパーカッションとスラップ・ベースが疾走するリズム・セクション、エッジのきいたカッティング・ギターとスティール・パンの躍動感あふれる展開があまりにも宇宙的。

#313 | Experimental

Private Press / 1984 / Netherlands

Michel Mulders
Gotspe

オランダ・アムステルダムの現代音楽家、Michel Muldersが、現代舞踏のためにコンポーズした作品で、シンセサイザーとドラム・コンピューターによるエレクトロニックなサウンドを軸に、ヴァイオリン・ギターなどをフィーチャーした実験電子音楽作品。Bill BruforddとTony LevinのKing Crimson組が参加したDavid TornのECM作品『Cloud About Mercury』にも近似するプログレッシヴなサウンド。美しいヴィジョンが想起される壮大なニューエイジ・エレクトロニクス「She Said」が素晴らしい。

#314 | Electronic

RTB / 1982 / Yugoslavia

Miha Kralj
Odyssey

東欧ユーゴスラヴィアにおける電子音楽のパイオニアといわれているMiha Kraljは、80年代に3枚のアルバムを残している。本作は82年に発表された2作目で、シンプルながらツボを押さえたドラム・マシンのビート、どこか東洋的なエキゾティシズムを感じさせるシンセサイザーのフレーズ、スペーシーなSEやドローンが宇宙的なトリップ感を倍増させる、ピュアなアナログ・シンセ・サウンドによるレトロ・フューチャリスティックな電子音楽を展開した名作だ。旧共産圏には一風変わった音楽が多い。

#315 | New Wave

Tausend Augen / 1981 / Germany

Die Partei
La Freiheit Des Geistes

Walter DahnとTom Dokoupilからなるドイツのオブスキュア・エレクトロ・ウェーヴ・ユニット、Die Parteiが81年に残した唯一作。コンピューター・ウェーヴの上でサーフィンをしているかのような、心地良い浮遊感が訪れる冒頭曲「Gunten Morgen In Köln」をはじめ、ドラム・マシン、シンセサイザーやサンプリングを多用したミニマル・エレクトロニクスにギターやピアノをレイヤーした、ポスト・モダニズムな電化ノイエ・ドイチェ・ヴェレを全編に展開。すべてにおいてアーティスティックだ。

#316 | Electronic

PVC / 1980 / US

Patrick Gleeson
Rainbow Delta

Patrick Gleesonは、Herbie Hancockの初期エレクトリック作品に参加し、サウンド・プロダクションにおいて重要な役割を果たした電子音楽家で、Herbie Hancockにシンセサイザーの使用を勧めた張本人ともいわれる。ソロ3作目となる本作では、コンピューターによるマニュピレート・システムが導入され、シークェンシャルなリズム・パターン上にトリッピーなシンセ音が幾重にもちりばめられた、コズミックな電子音楽を創造。シンセサイザーによる疑似自然音で構成されたアンビエント・トラックも秀逸。

#317 | Electronic

Carrere / 1979 / France

Patrick Moraz
Future Memories Live On TV

Patrick Morazは、YesやMoody Bluesなどのプログレッシヴ・ロック・バンドで活躍したスイス人鍵盤奏者で、Yes時代に交流を深めたドラマーのBill Bruforddとの共作やソロ作品も数多く残しているアーティストだ。79年発表の本作は、スイスのTV番組で即興演奏された3つの組曲を収録したライヴ作品で、表題曲「Future Memories」では、高速で疾走する鋭角なマシン・リズムと、唸りをあげる強烈なシンセサイザー・サウンドが上昇気流を起こす、プログレッシヴな電子音楽を聴くことができる。

#318 | Rock

Egg / 1976 / France

Patrick Vian
Bruits Et Temps Analogues

作家として知られるフランス人ジャズ・ミュージシャンのBoris Vianの実息Patrick Vianが、Barclayのサブ・レーベルEggから発表した唯一のアルバムで、エグいアートワークからは想像もつかないほど、ハイセンスかつハイクオリティな内容。収録曲はそれぞれまったく異なるタイプの音楽だが、すべての楽曲において一貫したストーリー性と自然の描写性を感じさせる。東洋志向とサイケデリクス、アシッドな陶酔感とオーガニックなフィーリングをもちあわせた、極上のナチュラル・トリップ・ミュージックだ。

#319 | Electronic

EMI / 1975 / Sweden

Ralph Lundsten
Shangri-La

スウェーデンの電子音楽家、Ralph Lundstenが67年から75年にかけて作曲した5つの組曲をまとめた作品。各組曲にはショート・ストーリーが添えられていて、それぞれ単体で存在してはいるものの、スリーヴに掲げられたアートワークが聴くものの想像力をかきたて、アルバム全体をとおしてひとつのストーリーを感じさせてくれる。いわゆるスペース・エイジとは一線を画す、曼荼羅的宇宙観に彩られた電子音楽作品である。それにしても、75年産とは思えない驚嘆のサウンド・クオリティだ。

#320 | Rock

EMI / 1978 / Argentina

Raul Porchetto
Volando De Vida

Seru Giranなどにも参加しているCharly Garcíaファミリーのキーボード奏者で、女性のようにファルセットな声色をもつRaul Porchettoの78年作。アシッド・フォークからメロウ・バラードまで、プログレッシヴなサウンド・メイクが光るクロスオーヴァー・ジャズ・ロックを展開した傑作だ。シンセサイザーのソロが宇宙へ向かってゆるやかに旅立つ前半からリズミカルにグルーヴする中盤を経て、ハイスピードなスペース・フュージョンへと突入していく「Danza Murata」がダントツにすごい。

#321 | New Age

Ray Lynch Productions / 1984 / US

Ray Lynch
Deep Breakfast

Ray Lynchはクラシックの素養をもつアメリカ人ギタリストだが、エレクトロニクスを多用したニューエイジ作品を残しており、84年に自主制作で発表した本作もそんな1枚。シンセサイザーによる透明感のある電子音に、ギターやフルートなどのライヴ・インストゥルメンツを美しく融合させた、抽象的なアンサンブル・サウンドで、室内音楽のような佇まいだが、立体感のある音像処理は宇宙的。アンダーグラウンドでの成功を経てメジャー流通し、ビルボード・アワードを受賞したほど本国でヒットしたようだ。

#322 | Jazz

Barclay / 1979 / France

Rhoda Scott
Molybdenum

メソジスト教会の牧師だった父親の影響で、幼少より教会でゴスペルを学んだオルガン奏者のRhoda Scottは、67年にフランスへ移住後、Barclayからハード・バップやソウル・ジャズ・テイストの作品を多数発表している。いずれも自身のルーツである黒人教会音楽を基軸としたソウルフルなジャズだが、本作に限ってはなぜか宇宙をテーマにした異常なほどスペーシーな作風で、とくに「Nova」は、Kool & The Gangの「Summer Madness」ばりにコズミックなサウンドを展開した稀有な楽曲だ。

#323 | Rock

Harvest / 1980 / Germany

Richard Schneider Jr.
Fata Morgana

ドイツのマルチ奏者、Richard Schneider Jr.の2作目。前作ではラテンやブラジル音楽への憧れを感じさせる独特の作風を披露していたが、本作ではアシッド・フォークやサイケデリック・ロックにフォーカスしたトリッピーなスペース・ロックを展開。シンセサイザーのメランコリックなメロディがゆらめく「Regina's Dance」、唸るエレクトリック・ギターに可憐な女性コーラスや雷鳴のSEなどがトッピングされた表題曲「Fata Morgana」など、現在のバレアリックなテイストにも時代を超えて呼応する。

#324 | Library

Crea Sound Ltd. / 1982 / France

Roger's New Conception
Informatic 2000

500本以上もの映画音楽を制作したといわれるフランス人コンポーザーのRoger Rogerが、フランスのライブラリー・レーベルに残したエレクトロニクス作品。ファットなファンク・リズムにスペーシーなシンセSEが空間を浮遊する、Ralph Lundstenを超越するコズミック・ファンク「Expectation」をはじめ、ミュージック・コンクレート的作風からギャラクティックなスペース・ディスコまで、シンプルなマシン・リズムとトリッピーなシンセサイザーによるコズミック・ミュージックを全編に収録した傑作。

#325 | Electronic

Balkanton / 1984 / Bulgaria

Simo Lazarov
The City

東欧ブルガリアにおけるエレクトロニック・ミュージックの第一人者、Simo Lazarovによる84年作で、EMS社製巨大モジュラー・シンセSynthi 100をはじめ、Synthi AやローランドJupiter-8を駆使した厚みのあるアナログ・シンセサイザーのサウンドが異次元へと誘う。Ralph LundstenやEgberto Gismontiの電子音楽作品のようなファンタジー感と、レトロ・フューチャーなギャラクティック感をごちゃまぜにしたような、大阪万博的近未来のコズミック・サウンドがオブスキュア極まりない、驚異の電子音楽。

#326 | Electronic

BASF / 1971 / France

Soular System
Birth Of Paradise

謎に包まれたプロジェクトの唯一作。作曲者としてJames Boldenと書かれているが、David Christie名義でも活動した、同名の音楽家とは別人のようにも思われる。71年といえば、ドイツのコズミック・ロック勢もすでに傑作と呼べる作品を発表しているが、同時代のものとしてはそれをも凌駕するほどの、スペーシーなエレクトロニック・ミュージックだ。アナログ・シンセサイザーの重厚な電子音と、ステレオ音場を目いっぱい広く使用した、パースペクティヴな空間形成がサイケデリック。

#327 | Rock

Carrere / 1980 / France

Space Art
Play Back

Jean Michel Jarreのサポートも務めている鍵盤奏者のDominique Perrierとドラマーの Roger Rizzitelliによるユニット、Space Artの3作目。シンフォニックなプログレ色の強かった以前作にくらべ、アレンジや演奏が格段に進化。複雑なリズムを刻むアグレッシヴなドラムと開放的なリフを奏でるピアノ、伸びやかなシンセサイザー・サウンドが宇宙の遥か彼方まで飛翔する「Folkstone Hovercraft」は、長いときを経た今もなお、計り知れない神秘性と可能性を秘めたコズミック・ロック。そのほか名曲多数。

#328 | Rock

Virgin / 1982 / UK

Steve Hillage
And Not Or

ニューウェイヴ志向の駄作と言ってしまうと語弊があるかもしれない、82年発表のヴォーカル作品『For To Next』と同時に制作された、エレクトロニクスを全面に打ち出したインスト・アルバムで、Steve Hillageの先鋭的な志向が明確に打ち出された重要な作品である。ミニマルにループするトラックとサイケデリックなエレクトリック・ギターのコンビネーションというスタイルは、のちに始動するSystem 7へと直結する。この時点ですでにダンス・ミュージックの体をなしているところがすごい。

#329 | Rock

Clear Light Of Jupiter / 1975 / Australia

Steve Maxwell Von Braund
Monster Planet

Cybotronの中心メンバーで、オーストラリアにおけるシンセサイザー・ミュージックのパイオニアと自ら名乗るサイケデリック・モンスター、Steve Maxwell Von Braundが創造（想像）した宇宙音楽。“福寿”と書かれたはっぴを羽織ってアナログ・シンセを弾く氏の頭のなかは、完全に異次元へワープしているようだが、聴いているこちらも宇宙空間へ放り出されてしまったような気分だ。SF映画のようなサイケデリクスだが、ギャラクティックという言葉がこれほどマッチする音楽もそうない。

#330 | Electronic

Melodia / 1981 / USSR

Sven Grünberg
Hingus

Sven Grünbergは、チベット密教の思想に大きな影響を受けているエストニアの電子音楽家。オルガンをメインに多様なエレクトロニクスを駆使して制作したこの処女作でも、Klaus Schulzeなどに代表されるクラウト・エレクトロニクスのように荘厳かつ内向的なイメージでありながら、オリエンタルなメロディ・ラインや鳴りものを効果的に配してチベット密教の宇宙観である曼荼羅の世界を表現した、解放系瞑想音楽を創造している。心臓の鼓動のように響く極太のアナログ・シンセ音もすごい。

#331 | New Age

Innovative Communication / 1987 / US

Tim Timmermans & Skipper Wise
Poems Of The Five Mountain

アメリカのマルチ奏者とベーシストのコンビによるニューエイジ作品。Klaus Schulzeが設立したドイツのプログレ系電子音楽の名門レーベルからのリリースだが、アメリカ盤のみのようだ。Windham Hillを彷彿させる、郷愁の漂うメランコリックなニューエイジが主体のなか、トランス系チルアウト・ミュージックの黎明期を思わせる、スピリチュアルな趣向の「Winter Moon; Evening Stoll」と、現代音楽のような美しい佇まいのアンビエント「Five Mountains」の2曲が、群を抜いて際立っている。

#332 | Electronic

Polydor / 1974 / UK

Tonto
It's About Time

Stevie Wonderにシンセサイザーを伝授したことでも知られ、Steve Hillage作品のプロデュースも手掛けているアメリカ人電子音楽家のMalcom Ceciltと、Robert Margouleffによるユニットの74年作。Steve Gaddが参加している。自ら開発した巨大なアナログ・シンセサイザーを駆使したエレクトロニック・ミュージック作品で、宇宙の果てまで飛んでいきそうな電子音による透明感のあるアルペジオにウィンド・チャイムやベルが浮遊する、「The Boatman」のコズミックなフロート感がたまらなく気持ち良い。

#333 | Jazz

Bacillus / 1979 / Germany

Toto Blanke's Electric Circus feat. Stu Goldberg
Friends

ドイツのジャズ・ロック・シーンで活躍したギタリストのリーダー作品。PPG社製シークェンサーを駆使したレゾナンシーなシンセサイザーのアルペジオ、ツボを押さえたグルーヴをアグレッシヴに叩きだすリズム・セクション、果てしなくスペーシーなミニ・モーグと、ギター・シンセサイザーのサイケデリックなインタープレイ。すべてが一体となり高く飛翔するスペース・ジャズ・ロック「Birds Of A Feather」のすごさといったらない。インド人打楽器奏者、Trilok Gurtuのタブラも極宇宙的。

#334 | Rock

BASF / 1976 / Germany

Tritonus
Between The Universes

クラウト・ロック・グループ、Tritonusによる76年発表の2作目にして最終作。Emerson, Lake & Palmerあたりを想起させる、西欧的様式美を踏まえたシンフォニックなプログレッシヴ・ロック作品ではあるが、ハモンド・オルガン、ミニ・モーグや、PPGシンセサイザーによるサウンド・メイクがずば抜けて秀逸だ。ロー・フリークェンシーなシンセ・ベースがジリジリと伝導するスペースド・アウト・エレクトロ「Mars Detection」は、暗黒の宇宙空間に放り出されたような錯覚を呼び起こす異色曲。

#335 | New Wave

Yen / 1983 / Japan

Various Artists
Yen Manifold Vol.1

細野晴臣と高橋幸宏が主宰するYenレーベルの所属アーティスト、インテリア、上野耕路、テストパターンの3組によるコンピレーション作品で、“まったく新しい感性による芸術運動の一環としてこの作品を世に問う”とキャプションに記されている。上野耕路によるレトロ・クラシカルな楽曲以外はYMO影響下にあることを感じさせるが、自然の法則を抽象／簡略／記号化したFlank Lloyd Light作品を彷彿させる直線的な造形美によるアートワークのごとく、ナチュラルでスペーシーなサウンドが収められている。

#336 | Rock

FLVM / 1981 / France

X-Tet
Première Ligne

正体不明のフランス産エレクトリック・ジャズ・ロック。鍵盤奏者のJean-Marc BoutinとJosée Paleyを中心に、ベース、ドラム、サックス、パーカッションをフィーチャーしたセクステット編成で、凄まじいテンションのジャズ・ロックを展開している。天高く突き抜けるように舞い上がるスペーシー極まりないクラヴィアのソロが炸裂する「Nuit Blanche」、その曲調を継続しつつ、さらにアヴァンギャルドなインタープレイが疾走する「Première Ligne」など、カルトな匂いがプンプン充満した激烈サウンド。

#337 | Electronic

Melodia / 1984 / USSR

Yuri Bogdanov Boomerang Group
Moods

数々のサウンドトラックやエレクトロニック・ミュージック作品を残しているロシアのコンポーザー、Eduard Artemievのフィルム・スコアを取り上げた、ロシア人音楽家Yuri Bogdanovによる84年作。凄まじいまでにプログレッシヴな展開のシンフォニックな楽曲から、内向的なメディテーション・エレクトロニクスまで、オーケストラやシンセサイザーEMS Synthi 100を駆使したスーパー・ギャラクティックなサウンドによる、果てしなく壮大な宇宙絵巻を展開した超絶トリップ音楽。

#338 | Electronic

The Initial Recording Company / 1979 / UK

Zed
Visions Of Dune

The Hypothetical Prophetsやソロ名義で、実験的かつ強烈なミニマル・エレクトロニクス作品を残しているフランス人アーティスト、Bernard Szajnerによる79年発表のトータル・コンセプト・アルバム。David Lynch監督・脚本で映画化もされた、Frank Herbert原作のSF小説『Dune（砂の惑星）』の世界観を、独自の解釈で表現した超絶エレクトロニクス作品。楽曲が進行するにつれて強烈度が倍層していく、閃光のごとくビシビシとカラダに突き刺さるソリッドなシンセサイザーのサウンドが凄まじい。

Chee Shimizu × 二見裕志 × 梶原としお(BING) × ヤマベケイジ

選曲家、現代音楽家、レコード・ショップ・オーナー、そしてそれぞれDJとしての顔ももつ生粋の音楽人、二見裕志、梶原としお(BING)、ヤマベケイジが、筆者とともに音楽とレコードに思いを馳せながら、本書をひもとくヒントを投げかけるトーク・セッション。巻末には“extra selections”として、3人がセレクトした番外レビューも掲載している。

音楽を言語化する

Chee　僕はいつも、ジャンルも関係なく衝動的に音楽を聴いているんです。ただ、本で紹介するにあたって、それではあまりにもとりとめがないから、僕が音楽から感じる印象を12のキーワードにして、そこに当てはめて紹介することにしたんです。

BING　フィードバック状態だね。音楽から出てきた言葉をキーワードにして、さらにそのキーワードに沿って音楽を紹介するという……。

二見　仕事ならともかく、家では、普段キーワードを先行させて聴くことはないけどね。

ヤマベ　どちらかというと、お店でレコードを紹介するときの感覚に近いのかな。キーワードは、音楽の認識を広げるための手段だよね。

BING　でも、それはどっちが先でもいいんだと思う。言葉と音楽は常に相関関係のなかで進展してきたからね。とくに海外で思春期を迎えた自分にとって、日本の音楽批評と出会ったことは衝撃だったんですよ。高橋悠治の『たたかう音楽』とか中村とうようの『大衆音楽の真実』とかさ。膨大な音楽の蓄積と向き合うアジア人の視座みたいなものがあることを評論で知ってガツンとやられた。その辺の世代は本当に多くを遺してくれたと思うんだよね。

二見　そう言われて思い出したけど、僕も中村とうようの影響は受けているな。ルンバのレコードとか、彼が監修したのを聴いたのが最初かもしれない。多かれ少なかれ、みんな若いときからロックを聴いてきているわけじゃん。でも、音楽を聴き続けていると、ほかにもいろいろあることがわかって、ロック的なものから離れようとする時期がくるわけ。そういったときの架け橋にはかなりなっていたと思う。とうようさんのやったことは。

ヤマベ　やっぱり音楽が好きだったら、『ミュージック・マガジン』を一度は通るわけじゃない？で、読んでみると、ロックなんかも紹介しているけど、結局はワールド・ミュージックが一番すごい！みたいなことが、本から滲んでいたでしょう。

二見　そうすると、聴いてみないわけにいかないよね。80年代の終わりごろってちょうどワールド・ミュージックが大ブームだった。バブルのあおりもあって、ほっといてもNusrat Fateh Ali Khanとかが来ていた時代じゃん。だから、そういう時代的な流れもあって、ロック以外のものに目を向けられるような状況があったと。

Chee　そっちに意識が向いたのは、ある程度音楽を聴いてきて、そういうことに気づく下地が

会話のなかに登場したJan SteeleとJohn Cageのスプリット盤『Voices And Instruments』(1978年)。Brian Enoが運営するObscureレーベルの5作目としてリリースされた。

あったからですよね。

ヤマベ　ニューウェーヴにも民族音楽的な要素が絡んでいて、そのルーツを聴いてみるか、というタイミングだったのかもしれないね。

BING　そのあと90年代に入ると、日本の雑誌メディアってどんどんカタログ化してしまったじゃない。雑学誌からすべての情報を得るみたいなさ。でも、日本の音楽批評の功績は素晴らしいものがあるし、おかげで言葉は生き長らえていると思う。たとえば、レコード屋でポップをつけているのって日本だけみたいなこととかもさ。

二見　あれって日本だけなの？

Chee　向こうはあっても1、2行ですよ。

BING　ポップでちゃんと語れるってすごいことだと思う。その言葉から広がっていくものってあるからね。日本のレコード屋にはそれが求められるってこと自体が面白いよ。

音楽家が紹介する音楽

二見　言葉で情報を得て、盤を探して、買って、それをまた言葉で説明するという流れ……そうやってロックから、ロック以外の音楽に興味を向けていったわけだけど、僕らの場合は次の段階として、言葉を離れた音楽の聴き方に入っていく流れというのがあると思うんだけど。つまり、それがDJという行為とつながっているのかなって。

BING　そうだと思います。

二見　ただ自分がフィジカルに反応した音楽をかけて、お客さんもフィジカルに反応するみたいなことがしたくてDJをやっているのかなという気がするね。

Chee　やっぱり僕らは発信側としてのスタンスもあるから。DJ、ミュージシャンとしての聴き方、提示の仕方ってありますよね。

ヤマベ　それこそ、Brian EnoがObscureレーベルで、Gavin Bryarsなんかと一緒にJohn Cageを紹介したというさ。John Cageなんか全然知らなくても、わりとポップなRoxy Musicをやっていた人が、そうやって紹介することで名前を知って、それがきっかけでリスナーが、John Cageの「4分33秒」まで辿り着くという過程が面白い。ミュージシャンであるBrian Enoのそういう提示の仕方が、DJ的だとも思う。かなり特殊な解釈かな？

BING　うまいと思う、やっぱり。で、そこに「In A Landscape」とかが入っていて、そういうのを聴いちゃうと、もう、絶対ほかのも聴きたくなるっていうさ。

Chee　それ、ものすごく重要なポイントだと思うんですよね。

ヤマベ　そういう紹介の仕方をして、別にそのときにわからなかったとしても、音楽をずーっと追い続けていると、どこかで気づくじゃない？　アンビエントというひとつのジャンルでも、ただそれだけでは終わらない広義の提示というか。ウチらはわりとそういう提示の仕方に影響を受けていると思うし。

新しい音の響きを求めて

BING　LOS APSON? の第一期のクラシックは何だったの？

ヤマベ　開店した94年ごろって猟奇系が流行っていたんだよね。『映画秘宝』とか、Charles Mansonとか。で、店ではカルト・サイケのYahowha 13とか、ポップ・オカルトのAnton LaVeyとかが一押しだったよ……って、どんな店だよそれ（笑）！

二見　初期は普通の人が入れないレコード屋だったと思うよ。

ヤマベ　そりゃ行けないよね。雑居ビルの上のほうで、あたま五厘刈りにした目つきギラギラの店員が、Yahowha 13とか売っていたらさ。

二見　うっかり行った人は……。

ヤマベ　捕えられて首狩られるみたいな（笑）。

Chee　昔はそういうイメージもありましたね。

ヤマベ　まぁ、でも当時は世間的にもそういう猟奇みたいなのがさ、ちょっとしたブームみたいになっていたんだよ。今みたいに殺伐としていなかった時代だからさ。『マーダーケースブック』って殺人鬼を紹介するような雑誌が出ていたりとか（笑）。

Chee　でも、面白いことに、その後クラブ・シーン界隈の連中とLOS APSON? がコネクトしていったじゃないですか？

ヤマベ　それは、そのあとに、MoodymannとかUKのダブ・ハウス周辺が出てきて、“これ現行のサイケじゃない！”みたいな。

Chee　音の響きで感じるサイケみたいなことですよね。

ヤマベ　そうそう。“昔のサイケより、今聴くなら、こっちのほうが全然サイケでしょ！”みたいな感じで。そういうのをガンガン売っていたら……。

左から、二見裕志、ヤマベケイジ、Chee Shimizu、梶原としお(BING)

Chee　僕らみたいな連中が集まりはじめたと。

ヤマベ　一時期、新宿時代なんて12インチをすごく売っていたんですよ。時期としては96年ごろかな。MoodymannはKDJの初期番号から入れていたから。でも、そういう12インチを売っている時代は短かったよ。

Chee　そのあと、南米とか秘境的なところにいったわけですか？

二見　ここまで南米に傾倒したのは最近でしょ？

ヤマベ　うん。10年もたっていないね。

Chee　面白いものを探し求めて聴きまくっていたら、ヤマベさんの興味がそっちにいったんですよね。

BING　掘れないと始まらないから。たぶん音楽に関しては常に全方位的に興味はあるんだけど、掘れる環境があるほうにいくからね。

二見　それはあるね。“たまたまここが掘れた”みたいなことって常にある気がする。

ヤマベ　それで掘ってみたらザクザク出てきた。さっき言っていた、とうようさんが作った体系から漏れているワールド・ミュージックなんて山のようにある。

Chee　ほぼ無限にあるでしょうね。

ヤマベ　そう。サイケにはもう掘るところがないなと思ったら、ワールド・ミュージックのなかにサイケ的なものとかアヴァンギャルド的なものがいっぱいあったみたいな。

発芽するレコード

Chee　BINGさんもニューヨーク時代にA-1 Record Shopという中古盤屋で店長をやっていたわけですけど。

BING　日曜の朝にフリマに行くとさ、クラブ明けでゾンビみたいになっているレコードの堀師

が集まってくるわけ。そこでA-1のオーナーのアイザックっていう人と出会った。彼は古本のディーラーだったんだけど、彼にとってレコードって半分面倒くさい、重くて大変なわりに、ほとんどゴミじゃねぇか、って感じのもので。でも、どんどん集まってきちゃって、じゃあ僕がそのゴミを本当のゴミと使えるゴミに分けてやるからというのではじまったんですよ。

Chee　何年ごろですか？

BING　開店したのは96年だね。お店に常時100万枚以上はストックがあったよ。体育館にレコードがギッシリみたいなところで働いていたから。

Chee　そういうすごい量のレコードのなかに毎日いて、そのなかからいるものといらないものを分けていたわけですか。

BING　ほとんど責任感みたいな感じで。お百姓さんが畑に行くように毎日やっていましたよ。というのも、もうその先がないんですよ。ニューヨークも地価が高いから、そこがいっぱいになったら何万枚とか一度に捨てるの。だから全部見てあげないといけない。

二見　本当のゴミになっちゃうんだね。

Chee　そこでなるべくいいものを拾い上げておかないと。

BING　でも、レコードには音楽だけじゃなくて、それに付随するいろんな物語があるから。音楽が全然良くなくても、“こういう奴らが、こういう下らないものを作っていた”ことがわかるという意味では下らないレコードも誰かにとっては大事なんですよ。そう思うと、自分にはどうでもよくても、これはやっぱり取っておこうとかさ、そういう作業をずっとやっていたんですよ。

Chee　種は拾っておいて、あとで蒔くと。

BING　そうそう。それでEYEちゃんとかが来たときにそういうのを見ていて。誰も見向きもしない、“こんなのあった？”みたいなものを抜いたりとかさ。

Chee　ハハハ。

BING　スキモノは行くんですよ、墓場に。捨てられる前の在庫の墓場に。そこで掘らせてあげて。

Chee　芽が出なさそうな種でも……。

BING　出るんだよ。捨てられたもののなかに、一番大事なものがあったりするもので。でも、2000年を越えてしばらくしたら、レコードの絶対量が減ってきたのを感じるようになって。

ヤマベ　やっぱり廃棄しているから？

BING　そうそう。もうあまり作られていないから、減っていくんですよ。ジャマイカがレゲエのプレスをやめて、ヒップホップもやめてってなったときに、だんだん底が見えてきた。それで自分が売ったレコードが戻ってくるみたいな現象がどんどん起こりはじめて。

Chee　絶対量が明らかに減っているのは間違いないですね。だから廃棄される前に、拾い上げられるものは拾い上げておくべきですよね。

BING　それはある意味、責任感をもってやるべき作業だと思うよ。

meditative

meditative

ここで取り上げる“瞑想”とは、さまざまな宗教における神の意識への目覚めといった崇高なものではなく、音のゆらぎを体感し、ただひたすらに音楽の世界へ没入するという、いわば悦楽行為だ。“ヒーリング・ミュージック”などという陳腐な企業戦略のおかげで敬遠されがちな、“ニューエイジ”と呼ばれる音楽も多く紹介しているが、パブリック・イメージとはまったく違う音楽の世界がそこにあることを、声を大にして言いたい。

masterpiece

#339 | Electronic

Virgin / 1979 / UK

Steve Hillage
Rainbow Dome Musick

79年にロンドンで開催されたフェスティヴァルでライヴ録音された作品。アープやミニ・モーグによる幻想的な電子音の波、どこまでも陶酔していくSteve Hillageのエコー・ギターが、心地良い快感とともに聴くものを異次元へと誘う、ピュア・トリップ・ミュージック。Hillageが参加していたロック・グループ、Gongを継承するサイケデリクスではあるが、ミニマル・コンテンポラリーのような、反復による鎮静と覚醒の作用がある。現代のチルアウト・ミュージックの原点ともいえるだろう。

#340 | New Age

Green & Water / 1986 / Japan

Akira Ito 伊藤 詳

Marine Flower

瞑想やリラクゼーションをテーマに掲げた作品を数多く発表しているシンセサイザー奏者の伊藤詳だが、ポリスター内に設けられた新レーベルのシリーズ第1弾として発表された本作は、さらに一歩、自然へと歩み寄った、ガイア系インナー・スペース・ミュージックの最極地だ。ステレオ空間に浮遊する音の粒子も極めてクリア。他作同様、いささか表現過剰な感も否めないが、「水色の聖地」などで聴ける、エキゾティシズムを兼ね備えたピュアなトリップ感覚は、本作でしか味わえない。

#341 | World

PES / 1970 / France

Amba Sanyal

Ritual Vocals Of India

インド・デリー出身の女性シンガー、Amba Sanyalの70年作。タブラの乾燥したリズムに、シタールのまろやかな旋律と美しいインディアン・チャントが妖艶に舞う「Ram Dhum」、タンブーラのドローンがゆるやかに響くラーガからはじまり、タブラやチャントが抑揚をつけながら徐々にテンションを上げていく「Tarana Maklauns」など、インドの伝統的なリチュアル・ソングを中心に、サイケデリックなメディテーション・ミュージックが展開される。音質も70年産のインド音楽とは思えないほどコズミックだ。

#342 | Electronic

Silence / 1977 / Sweden

Anna Själv Tredje

Tussilago Fanfara

のちにCosmic OverdoseやTwice A Manなどのシンセ・ウェーヴ・グループで活動するKarl Gaslebenと、Mikael Bojénによるユニット、Anna Själv Tredjeの唯一作にして北欧メディテーティヴ・エレクトロニクス秘境。漆黒の闇のなか、北欧の奥深い森にある湖の上をプカプカと浮いているような幻想的な世界。Manuel Göttschingに通じる趣向ながら、北欧独特の神秘主義へと昇華されたディープなサウンドで、アルバム全体をとおして1曲ととらえると、より深遠な世界観を感じることができる。

#343 | Rock

Isadora / 1976 / France

Ash Ra Tempel / Manuel Göttsching

New Age Of Earth

Klaus Schulzeは1作目の発表後早々にグループを脱退し、オーバードーズで廃人同然となったHartmut Enkeは音楽キャリアに終止符を打ち、結果的にManuel Göttschingのソロ・プロジェクトとなったAsh Ra Tempelが76年に発表した7作目にして、ジャーマン・エレクトロニクス最高峰のひとつ。まばゆい光が降り注ぐようにきらめくシンセサイザーと、前作『Inventions For Electric Guitar』を踏襲するリズミックなギターのオーヴァーダビングによって描かれる桃源郷のごとき音世界は、いまだ色褪せず輝きを放つ。

#344 | Electronic

Victor / 1983 / Japan

Axis
Natural High

伊藤銀次のアルバムなどに参加しているキーボード奏者の緒方泰男が音楽を担当したリラクゼーション・ミュージック作品。当時盛んだった企画モノのひとつだと思うが、それはさておき、収録されている音楽がとにかく素晴らしい。シンセサイザーの澄みきった音色が体内に浸透していくような感覚をおぼえる、ライナーに記されている言葉を借りれば、まさに“超自然幻想音楽”だ。バイオ・フィードバック・システムなる脳波測定器による臨床実験で、アルファ波の上昇を実証済みとのこと。

#345 | Rock

Private Press / 1980 / Switzerland

Brainticket
Adventure

73年発表の3作目にして傑作『Celestial Ocean』から約7年の歳月を経て自主制作でリリースされた、スイスのサイケデリック・ロック・グループ、Brainticketの4作目。土着的なパーカッション群とエレクトロニクスの美しいコントラスト、すべてライヴ・レコーディングされたとはにわかに信じがたい、想像力豊かな構成と演奏。前作で確立したストーリー性のあるリアル・トリップ・ミュージックをさらに深く追求した結果、完全にプライヴェートな志向の自己内包型宇宙音楽へと進化を遂げた。

#346 | Contemporary

Wax Museum Art Corps / 1983 / UK

Celluloid
Neptune

イギリスの蝋人形館が主宰するレーベルからリリースされた謎のプロジェクト、Celluloidの83年作。荘厳な雰囲気漂うシンセサイザーの和音や賛美歌系ヴォイス、トリッピーな電子音やさまざまなフィールド・レコーディング・ソースが大量にコラージュされたミュージック・コンクレート作品。実験的な様相を見せつつも深い瞑想と覚醒を促す、スピリチュアルでサイケデリックなセンスを多分に含んだ壮大な世界観の音楽。アートワークには東洋的なドローイングが配されているが、いたってヨーロッパ的な宗教観だ。

#347 | Contemporary

Eine Production / 1990 / Germany

Christian Bollmann
Drehmomente

ドイツのプログレッシヴ・フォーク・デュオ、Midnight CircusのメンバーだったChristian Bollmannが、エスノ・ミュージコロジストへと変貌を遂げた90年発表の超絶作品。フルート、チャイム、ゴング、モノコードなど、すべての楽器を自ら演奏し、ホーミーのような発声法でオーバートーン・ヴォイスを奏でる、土着的かつ現代的なエスニック・メディテーション・ミュージック。特殊なセッティングによるサウンド・システムから発せられる、独特の音像効果もすごい。自己宇宙への旅立ち。

#348 | Ambient

Folkways / 1981 / US

Craig Kupka
Clouds

コンテンポラリー・ダンスの音楽などを制作するかたわら、レコーディング・エンジニアとしても活動したアメリカ・ロサンゼルス生まれのプロデューサー、Craig Kupkaが手掛けた“New Music For Relaxation”シリーズの第1弾で、“雲”をテーマに制作された、片面1曲ずつの長編アンビエント作品。メロディのアンサンブルはほぼ皆無で、それぞれのパートは時間軸の上でただひたすら浮遊しているという、雲海のなかを泳いでいるような心地良さを味わえる、まさにリラクゼーションのための音楽。

#349 | Contemporary

New Albion / 1985 / US

Daniel Lentz
Missa Umbrarum

アメリカ・ペンシルヴェニアの現代音楽家、Daniel Lentzが、70年代前半に作曲・初演した楽曲のスタジオ録音作品。自身が考案した録音プロセス“Cascading Delay System”を駆使し、ヴォーカル素材を異なった時間軸上に配置して生じる遅延を利用することで、独特の響きが発生し、さらに脈絡のない言葉の断片に文脈を持たせていくという、まさにミニマリスティックな行為が生み出す、驚異のサウンドスケープ。神聖な広がりと奥行きをもった、音像の定位や立体感も非常に素晴らしい。

#350 | Contemporary

Cuneiform / 1985 / US

David Borden / The New Mother Mallard Band
Anatidae

世界初のシンセサイザー・アンサンブル、Mother Mallard's Portable Masterpiece Companyの創始者であるDavid Bordenのニュー・プロジェクト。ECMからリーダー作品を発表しているギタリストのDavid Tornなどが参加している。電子音とライヴ・インストゥルメンツのミニマルなレイヤーによる現代音楽作品だが、浸透系の音色で音階を上昇下降するシンセサイザーと、Rebecca Armstrongの可憐なヴォイシングが神々しく光を放つ「The Continuing Story Of Counterpoint Part 3」が、瞑想効果大。

#351 | Contemporary

Wergo Spectrum / 1987 / Germany

David Hopkins
Gaia: An Ecological Meditation

スイス人マルチ奏者のDavid Hopkinsが、87年にドイツの現代音楽名門レーベルWergoから発表した作品。ドローン・チューブが発する風の音、原始の世界へと誘うディジリドゥやウォーター・フルートの乾燥した音色、大小さまざまなバンブー・フルートが奏でるエキゾチックな旋律、大地の鼓動のごとく音場空間に響きわたるダルブッカのリズム。現代音楽の枠を遥かに超越したエコロジカル・メディテーション・ミュージックが全編に展開する、多民族系中間音楽としては最高峰の1枚であると断言したい。

#352 | Rock

Polydor / 1979 / Germany

Deuter
Kundalini Meditation Music

クラウト・ロック勢のなかで最も深く東洋思想に傾倒したDeuterは、70年代に幾度となくアジアやインドへ渡り旅を重ね、最終的にはヒンドゥー教徒へと改宗まで行ない、ネオ・サンニャーサとなった。79年に発表された本作は、人間の根源的な生命エネルギーとされるクンダリーニの活性化を念頭においた瞑想の過程を、音楽によって表現した、サイケデリックなメディテーション・ミュージック作品。押し寄せては引いていく鍵盤打楽器やシンセサイザー音の波紋が、深く意識を覚醒させる。

#353 | Experimental

Grabaciones Accidentales / 1986 / Spain

Dino Del Monte Nahor
Zimbal: Los Cuatro Elementos

Finis AfricaeやBabelなど、スペインの先鋭民族音楽グループのメンバーに名を連ねるギタリスト／マルチ奏者、Juan Alberto Artecheのプロデュースのもと制作された、ルーマニア・ブカレスト出身のジンバル奏者、Dino Del Monte Nahorによるソロ作品。木製の箱に大量に張られた鋼鉄製の弦をスティックで叩いて演奏する、イラン発祥のサントゥールやアイルランド発祥のダルシマーなどと同系の民族弦楽器“ジンバル”が放つ微細な旋律と奥行きのあるサウンドが、感情をゆさぶる。

#354 | Ambient

Free / 1994 / UK

The Ecstasy Of Saint Theresa
Free-D (Original Soundtrack)

チェコのシューゲイズ・バンドによる2作目だが、刃物で斬りつけられたように鋭角なギター・サウンドが炸裂する1作目から一転、2枚組のヴォリュームでディープかつオーガニックなチルアウト・ミュージックを展開した異色作だ。極繊細でウェットな肌触りのギター、ステレオ空間に浮遊する電子音やソフトな女性コーラス、そして、木々のざわめきや小鳥たちのさえずり。シューゲイザーの彼らがなぜ自然に歩み寄りを見せたのか知る由もないが、そういう気分のときだってあるだろう。

#355 | Library

Coloursound Library / 1982 / Germany

Eric Vann
Water World

スイスのサイケデリック・ロック・グループ、Brainticketの首謀者であるJoel Vandroogenbroeckが、ドイツのライブラリー・レーベルのために制作した作品で、Eric Vannという名義を使用している。海のなかへ深く潜っていくような感覚をおぼえる、シンセサイザーの微細なバブル・サウンドに包まれる「Dancing Plancton」や、太陽光線によってキラキラと輝く水中を想起させる「Oceanic Expedition」など、“水の世界”と題されたテーマのとおり、ウェットなタッチで展開するドリーミーな電子音楽。

#356 | New Age

Biwa / 1986 / Japan

Fumio Miyashita 宮下富実夫

Tenkawa – Isuzu 天河 - 五十鈴

日本初のプログレッシヴ・ロック・グループといわれている、Far East Family Bandのアメリカ・ツアー中に東洋医学に出会い、その後、仏教やインド哲学をはじめとする東洋哲学に深く傾倒した宮下富実夫が、86年に奈良県吉野の天河大弁財天社での奉納演奏のために制作した組曲。シンセサイザーによる必要最小限のパートのみで構成され、自然や宇宙と対話するかのごとく奏でられる、日本情緒あふれるメロディと、精練された瑞々しいサウンド・メイクが融合した、有機的かつ神聖な祈祷音楽。

#357 | Electronic

Jugoton / 1982 / Yugoslavia

Igor Savin

Childhood

ユーゴスラヴィアン・エレクトロニクスの秘境、コンポーザーのIgor Savinによる3作目で、アナログでのリリースとしてはこれが最終作となる。丸みのある太いシンセ・ベースがゆっくりとリズムを刻む無重力空間のなかを、ミステリアスに浮遊する奇怪なシンセサイザー音が危険な「Roland Bells」、上下運動を繰り返しながらゆらぎを形成するシンセ・パッドと、神経を刺激する上昇系アルペジオの音色がトリッピーな「Florianna」。どちらも片面をフルに使用したロング・スペース・ジャーニーな電子瞑想音楽。

#358 | World

Silent Sun / 1981 / Germany

Inner Voices

The Inner Life Of The Tone

ドイツ人民族音楽家、Helmuth SchernerとJochen Vetterによるプロジェクト、Inner Voicesの唯一作。ホーミーのような独特の発声法で歌われる、倍音成分を多分に放出するチベタン・チャントと、シタールや大小さまざまなチベタン・ベルの精神的な響きが静寂の空間を漂う、まさに内なる声を表現したスーパー・メディテーティヴな先鋭民族音楽。日本の禅寺で修行を積んだ経歴をもつMichael Vetterというアーティストも本作と酷似する作品を発表しているが、兄弟か、はたまた同一人物か。

#359 | Experimental

Discos Esplendor Geometrico / 1988 / Spain

Jabir

Vuelo Por Las Alturas De Alhambra

スペインのエレクトロニック・インダストリアル・シーンから派生したレーベル、Discos Esplendor Geometricoより88年に発表されたJabirの1作目で、唯一のアナログ作品。サンプリングの生成と再生に用いられた3台のコンピューターにプログラムされたオリエンタル音階が奏でる旋律と、アラブ伝統民族楽器のペンディールやナーイなどによるフリー・インプロヴィゼーションが有機的に対話する、独創的なエスノ・メディテーティヴ・ミュージック。Terry Rileyに通じるエキゾチックなミニマリズム。

#360 | Library

Coloursound Library / 1980 / Germany

Joel Vandroogenbroeck
Meditations Vol.1

Brainticketの中心メンバーであるスイス人コンポーザー、Joel Vandroogen broeckがドイツのライブラリー・レーベルに提供した作品。感覚神経にジワジワと浸透するシンセサイザーのドローンが時間軸とともに覚醒を促していく超瞑想系長編電子音楽にして、サイケデリクスの極限を追求し続ける氏の実験精神を垣間見れる貴重なアルバムだ。傑作との呼び声高いBrainticketの3作目『Celestial Ocean』から、4作目『Adventure』までの約7年間の空白を埋める、ミッシング・リンクがここにある。

#361 | New Age

Prudence / 1989 / Germany

Jolly Kunjappu
It's Magic

画家としてもその才能を発揮するドイツ在住のインド人パーカッショニスト、Jolly Kunjappuによる89年発表のアナログ最終作品。前作『Warm Embrace』では、インド古典音楽の意匠にエレクトロニクスを注入した、カッティング・エッジなエスノ・パーカッション・ミュージックを展開していたが、本作では一転、ピースフルなメッセージが込められた、自然との融和を唱えるガイア理論的ニューエイジ・ミュージックへと変貌。地球讃歌とでもいうべき、まさに“It's Magic”な世界観だ。

#362 | New Age

Audion / 1987 / US

Laraaji
Essence/Universe

アメリカのエレクトリック・ツィター奏者、Laraaji Nanananda による87年作。もともとはスタンドアップ・コメディアンや俳優として活動していた黒人アーティストで、70年代初期に東洋神秘主義に目覚め、Swami Satchidananda に師事し改宗、その後はBrian Enoと親交をもち、アンビエントに深く傾倒していったようである。本作も、どこまでも永遠に響き続けるドローンとツィターの繊細な音色がゆらぐ、おだやかな瞑想世界へと誘うアンビエント・ミュージックで、Brian Enoの影響がうかがえる。

#363 | New Age

Biber / 1984 / Germany

Lenny Mac Dowell
Balance Of Power

プログレッシヴ・ロック寄りのジャズ・ミュージシャンとしてキャリアをスタートさせたドイツ人コンポーザー／フルート奏者、Lenny Mac Dowellが新境地を開拓した84年発表のアルバム。ジャズ・ロックのイディオムをベースに、シンセサイザーやディープ・エフェクトを多用した、ニューエイジ・フィーリングあふれる一大叙情詩を描き出した傑作である。ストーリー性のある楽曲に彩りを加えるLenny Mac Dowellのフルートは、どこまでも深遠に響きわたり、カラダの奥底まで浸透していく。

#364 | Electronic

Le Kiosque D'Orphee / 1987 / France

Madhya
Meditations Sur Le Seuil

50年代に創始されたフランスのレーベル、Le Kiosque D'Orpheeが小規模で運営していた実験音楽部門から発表された、Madhyaなるグループの2作目で、おそらくこれが最終作品のようだ。シンセサイザーによる深遠なドローン・サウンドのなかで浮遊するシタールやフルート、雲海のすきまから太陽の光が差し込むような神々しい展開ののち、仏の世界が出現する「Exit」をはじめ、東洋思想に傾倒したナチュラルなマインド・トリップ・ミュージックを、長尺の3曲構成で収録。

#365 | New Age

Windham Hill / 1989 / US

Mark Isham
Tibet

アメリカのニューエイジ専門レーベルWindham Hillレーベルに多くの作品を残し、ECMなどのジャズ作品にも多数参加しているアメリカのマルチ奏者、Mark Ishamによる89年発表の超大作で、チベットをモチーフに、5つのパートで構成されたトータル・コンセプト・アルバム。なぜか日本語による俳句の朗読がフィーチャーされているが、それがまた非常に良い効果をもたらし、シンセサイザーやパーカッションによって雄大に描かれるサウンドスケープとともに、まだ見ぬシャングリラへと誘ってくれる。

#366 | Rock

Blubber Lips / 1979 / Germany

Mick Clarke
Games

80年代にはNaked Lunchというエレクトロニックなニューウェーヴ・バンドでも活動していたMick Clarkeが、多量のアナログ・シンセサイザーを駆使して制作した79年発表のソロ作品。脳を刺激する強烈なシンセサイザー・サウンドと、Manuel Göttschingを彷彿させる覚醒ギター・サウンドがせめぎあう、クラウト・エレクトロニクス勢をも凌駕するクオリティとテンションを兼ね備えたインナー・トリップ・ミュージック。現在はクラブ・ミュージックのフィールドで制作を続けているようだ。

#367 | New Age

Innovative Communication / 1987 / Germany

Mind Over Matter
Music For Paradise

世界屈指のメロトロン・マニアで、現在もアンビエント／ニューエイジ・シーンで活動を続けるドイツ人音楽家、Klaus Hoffmann-Hoockによるプロジェクトの1作目。おそらくフィールド録音されたものであろう、さまざまな自然音と、子供の声や読経のようなヴォイス、ゆらめくシンセサイザーが深い瞑想へと誘う。パラダイス志向のタイトルとは裏腹に大きなテーマが込められた、東洋思想に深く傾倒したアンビエント作品だが、ドイツのコズミック・ロックの伝統を正当に継承している。

#368 | Contemporary

Network Medien GmbH / 1988 / Germany

Oberton-Chor Düsseldorf
Rise My Soul

ジャズの素養をもちながらも、John Cageなどとのコラボレーション経験があり、さらにはドイツにおけるオーヴァートーン・チャントのパイオニアでもある音楽家、Christian Bollmann制作によるアルバム。オーヴァートーン・チャントといえば、チベット密教の倍音声明やモンゴル・オイラト族のホーミーなどが思い浮かぶが、現代音楽である本作においてもそれらと同様の、精神の根源に訴えかけてくるような感覚をおぼえる。バウハウスなアートワークからは想像もつかないほどの原始的な世界観だ。

#369 | Electronic

Warner-Pioneer / 1978 / Japan

Osamu Shoji 東海林 修
Jataka 闍多迦

日本ではじめて国産シンセサイザー作品を手掛けた第一人者である作曲家の東海林修は、78年から80年にかけて、自身が構想したストーリーに基づいたソロ名義のシンセサイザー・アルバムを4枚発表している。本作はその2作目で、仏教に伝来する釈迦の善行を集めた物語をタイトルに掲げ、古代ロマンに想いを馳せた精神性の高い音世界を全編シンセサイザーで表現した、シリーズのなかでも傑作といえる1枚だ。サウンド・プロダクションも非常に研ぎすまされており、微細でありながら芯のある音の粒子が、浄化作用抜群。

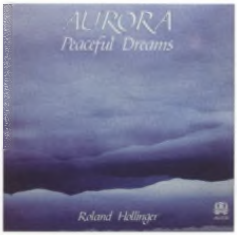
#370 | Contemporary

Wergo Spectrum / 1985 / Germany

Roberto Laneri
Two Views Of The Amazon

イタリア人マルチ奏者が、ドイツの老舗現代音楽レーベルからリリースした作品。インド古典楽器タンブーラと、ヤマハDX7シンセサイザーによるドローン・サウンドに、ソプラノ・サックスのミステリアスな旋律が交錯する楽曲や、チベット密教の読経を思わせるヴォイス・インプロヴィゼーションが幾重にもレイヤーされた、21分を超える長尺曲など、オリエンタルな宗教志向が色濃く打ち出された、意識を遠い彼方へと誘うディープ・メディテーション・ミュージックが終始展開される。

#371 | New Age



Auvidis / 1986 / France

Roland Hollinger
Aurora - Peaceful Dreams

精神身体のリラクゼーションを目的とした瞑想をテーマに創造・制作された、フランス人現代音楽家のRoland Hollingerによるニューエイジ作品。シンセサイザーのトリップ感あふれるサウンドとエスニックな香り漂うフルートの音色が、聴くものを精神世界へと導く「Aurora」、鳥の鳴き声や仏教の読経のようなヴォイシングが、スペーシーなシンセ音とともにおだやかに流れてゆく「Summer Dream」など、自己に内在する宇宙へ深く潜っていく、スピリチュアルな瞑想音楽を収録。

#372 | World

Wunder Tute / 1988 / Germany

Rüdiger Oppermann & Ensemble
Silberfluss

ケルティック・ハープの名手、Rüdiger Oppermannの2作目で、ふたりの女性ハープ奏者にチューバとパーカッションをフィーチャーした長編組曲を2曲収録している。音場の空気を澄みわたらせるような浄化作用があるハープの美しい音色がやさしく響く、A面の「Teil 1-7」から一転して、B面の「Teil 8-12」では、深い闇のなかへ意識が引きずり込まれていくインナー・トリップなサウンドを展開。その闇を抜けると再びおだやかな世界へと戻っていく。森羅万象のごときメディテーション・ミュージック。

#373 | Electronic

RCA / 1978 / France

S. Ramses
Secret

フランス人シンセスト、Serge Lafosseの78年作。81年にForce De Frappe名義で2枚のシンセ・ポップ作品を7インチ・シングルで発表しているが、アルバムとしてはS. Ramses名義による本作が唯一のようだ。15分を超えるシンセサイザー・シンフォニーの表題曲「Secret」をはじめ、いかにもフランス産電子音楽らしい、全編アナログ・シンセサイザーの多重録音によるセルフ・パフォーマンス作品だが、ゆらめく電子音の波に飲み込まれる冒頭曲の「When The Birds Die Away」が白眉だ。

#374 | Experimental

Lovely Music / 1984 / US

Stephen Montague
Slow Dance On A Burial Ground

アメリカ人現代音楽家のStephen Montagueによる84年作。フルート、ログ・ドラム、ウィンド・チャイム、スレイベルなどの楽器音と、コンピューターによるジェネレート・サウンドをコンクレートした、24分を超える大作「Slow Dance On A Burial Ground」をはじめ、川のせせらぎのような打楽器の音色、メディテーティヴなフルートの旋律やシンセ・パッドが幻想的な風景を描いていく。ドイツの先鋭民族音楽集団BetweenにTerry Rileyのミニマリズムをブレンドしたような、アーティスティックな世界。

#375 | Jazz

ECM / 1982 / Germany

Steve Tibbetts
Northern Song

アメリカ・ペンシルヴェニア出身の孤高のギタリスト、Steve Tibbettsが本格的にデビューを果たしたECMからの1作目で、その才能と存在感を決定づけた作品。アマチュア時代からの盟友であるMarc Andersonによるパーカッションのアタック音と、アコースティック・ギターの残響音だけが空間を支配していて、まるで懐かしい風景をじっと眺めているような、枯山水のような音楽だ。時間軸が変化してしまったかのような錯覚すらおぼえる。すべてを聴き終えたあとに訪れる、おだやかな余韻に浸りたい。

#376 | Experimental

Victor / 1984 / Japan

Stomu Yamashta (Original Soundtrack) ツトム・ヤマシタ
Kukai 空海

現代音楽家のツトム・ヤマシタが音楽を手掛けた、弘法大師空海の入定150年を記念して制作された映画『空海』のサウンドトラック。小久保隆がシンセサイザーで参加している。荘厳に響く読経の声や鐘の音、心拍のような低域電子音のビート、太陽の光のごとく広がる鈴のような音色のハイ・フリークェンシーなシンセサイザー、深く瞑想へと誘うスピリチュアルなパッド・サウンド、壮大なオーケストラ。真言密教の世界観を見事に表現した、メディテーティヴな曼荼羅電子音楽。音質も非常に繊細で美しい。

#377 | Electronic

Melodia / 1988 / USSR

Sven Grünberg
OM

エストニアの作曲家Sven Grünbergが、81年に1作目を発表したのち、実に7年の歳月を費やして完成させた、エレクトロニック・メディテーション・ミュージックの最秘境。古代インド思想・チベット密教における多階層的存在すなわち、悟りを表わす聖音である“オーム”をテーマに、シンセサイザーや民族楽器など、さまざまなエレメンツを組み合わせながら、世界共通の原始的な宇宙意識を表現した曼荼羅音楽。Grünbergは、エストニアにおける仏教研究の第一人者としても知られている。

#378 | New Age

Tranquility / 1985 / Japan

Takashi Toyoda 豊田貴志
Big Bang

アルファ波ミュージックや、1/fゆらぎサウンドを確立したことで知られる作曲家、豊田貴志が音楽を担当したリラクゼーション・レコード。瞑想過程に至る人間の脳波を測定し、脳波に現われる反応をフィードバックしながら、アルファ波の増減をコントロールして作曲を行なうという、実に興味深い試みだ。科学的見知で制作された音楽だが、神経系統からさらに精神へと伝導するサイケデリック極まりないサウンド。豊田貴志作品のなかでも群を抜いて素晴らしく、まったく古さを感じさせない。

#379 | New Age

Trikont / 1983 / Germany

Tom Ehrlich
Sunstar

ドイツを代表する現代音楽家、Karl Heinz Stockhausenの門下生で、アフリカやインドをはじめ世界の民族音楽への造詣も深い、上海生まれの鍵盤奏者、Tom Ehrlichの83年作で、両面ともにアコースティック・ピアノとシンセサイザーを用いた、19分を超えるメディテーティヴなニューエイジ・ミュージックを収録している。タイトル曲の「Sunstar」は、地鳴りのように響くバス・ドラム、宇宙的な広がりをもつシンセ・パッドのスペーシーなサウンドとピアノの美しい調べが、意識を遠い彼方へ運んでくれる。

#380 | Electronic

CBS Sony / 1978 / Japan

Unidentified Pulsing Object

Infinite Cosmos Travel 無限宇宙の旅

シンセサイザー奏者の小熊達弥がマニュピレートを務めた、瞑想のための音楽作品。いわゆるレコード会社による企画ものレコードで、サイケデリックなコラージュを配したアートワークもそれっぽいが、曼荼羅のポスターまで付属した凝りようだ。内容はといえば、低域と高域でゆらぐシンセサイザーのドローン・サウンドがただひたすら続き、たまに鐘の音や倍音を発する金属音がうっすらと聴こえたり、突然、高周波ホワイト・ノイズや振動のようなSEが現われては消えていく、無重力空間の電子音響。

#381 | New Age

Utopia / 1988 / Greece

Vangelis Katsoulis

The Slipping Beauty

90年までに3枚のアナログ作品を残し、現在も活動を続けているギリシャ人電子音楽家のVangelis Katsoulisによる88年発表の2作目で、演奏、プロデュース、アレンジまですべて自ら手掛けた完全セルフ・アルバム。インスピレーションが現われては突然消えるという芸術家の性ともいえる創造の葛藤を美徳ととらえ、チャイコフスキーの「The Sleepling Beauty」をもじったタイトルが冠されている。短尺曲が大量に収められているが、いずれもシンプルな構成ながらイマジネーションをかきたてるサウンドだ。

#382 | Electronic

Toshiba / 1977 / Japan

Various Artists

Invitation To The Wonderful Synthesizer Land 驚異のシンセサイザー軍団登場!!

日本のシンセ・メーカー、ローランドが77年に開催した“第1回シンセサイザー・テープ・コンテスト”の受賞作品を収録した、企画ものコンピ。のちにプロとして活動する音楽家たちが、20代に制作した楽曲を聴くことができるが、連研一なる人物が弱冠23歳で制作した「海鳴りがする」が、なかでもすごい。ヨーロッパのプログレッシヴ・ロックの影響を感じさせる、非常にメディテーティヴな電子音楽で、エコー・ギターとリード・シンセの浮遊感は、さながらManuel Göttschingのようだ。

#383 | Ambient

L.L.E. / 1985 / Japan

Veetdharm

Water Music

環境音楽やコンテンポラリー・アートのフィールドでも多岐にわたり活動するMorgan Fisherは、85年以降、活動の拠点を日本に移し、移住直後に東京のスタジオでこのアンビエント作品を録音。本作はPneumaこと高沢悟との共作で、名義はVeetdharmとなっているが、Morgan Fisherの名前は明記されていない。氷が溶けていくさまや、湖や雨あがりの情景を、デジタル・シンセサイザーの透明度の高いサウンドで表現した、枯山水のごとき世界観。同年にロンドンのCherry Redからもリリースされている。

#384 | Ambient

Decade Collection / 1990 / Belgium

Vidna Obmana
Revealed By Composed Nature

“光学的錯覚”という意味のセルビア語を名に掲げたVidna Obmanaは、80年代中期より怒濤のペースで作品を発表し続けているベルギー人コンポーザーで、オリジナル・タイトルのほとんどはカセットテープとCDによるリリースだが、数少ないアナログ作品のひとつである本作では、シンセサイザーによるドローンとシンプルなフレーズのループのみで構成された、アトモスフェリックでありながら陶酔感のある音世界を創造している。うつろう月の光や水のゆらぎを音にとどめたような感覚だ。

#385 | Experimental

SRI / 1978 / US

William Penn
Crystal Rainbows

アメリカ人コンポーザー、William Pennが制作した実験音楽作品。その作風はヴァラエティに富んでおり、口琴のような音色を奏でる何らかの楽器が印象的な民族音楽風の楽曲から、ステンレス製の巨大なプレートを用いたスティール・チェロが倍音を放出するコンテンポラリーなドローンまで、さまざまな楽器や音響構造物を駆使した、異なるイメージのサウンドを披露している。サンザとチェンバー・ボウルが、音場をやわらかに浮遊する「Reflections In A Pastel Vase」がディープかつ瞑想的。

#386 | Electronic

Mind Jazz / 1987 / Japan

Yoshio Sasaki Mind Jazz Orchestra 佐々木義生マインド・ジャズ・オーケストラ
Sho 翔

おそらく自主制作と思われる、日本産マインド・ミュージック作品。インサートには、自宅の一室を使用したであろうスタジオで演奏する佐々木義生の姿が収められている。初見では、喜多郎の二番煎じぐらいにしか思えず軽くスルーしていたが、よくよく聴いてみると、まったくそうではなかった。墨の濃淡のみで描かれた山水画のように、張りつめたような静寂のなかでシンセサイザーの音色が浮遊する「水舞」は、日本人の感性をダイレクトに刺激する、侘び寂びのきいたディープ・ジャズだ。

#387 | New Age

Misawa / 1986 / Japan

Yutaka Hirose 広瀬 豊
Nova

住宅メーカーの企画で制作された“Soundscape”シリーズの第2弾で、商業施設などで使用される音楽を制作する環境音楽家、広瀬豊が音楽を担当している。川のせせらぎ、鳥のさえずりや虫の声など、フィールド・レコーディングされた生々しい自然音に、ピアノやシンセサイザーが水滴のようにしっとりと単音を響かせる、透明度の高いサウンドが美しい。ミュージック・インテリア的発想の環境音楽作品であるが、作者自身はアニミスティックな志向をもっていたのではないだろうか。

tropical

tropical

本章では、サマー・ミュージックの宝庫である南米音楽をはじめ、夏の強い日差しや潮風の香りを感じさせる、波の音が聴こえてくる、そんな南国気分の音楽に焦点を絞って選盤している。サウダージからアーバン・リゾートまで、さまざまなシーンの夏を彩るハートフルな音楽がビーチへ連れて行ってくれる。そして80年代の日本においても、夏や海をモチーフにした音楽が隆盛し、数々の名曲が生み出されたことも付け加えておきたい。

masterpiece

#388 | World

Philips / 1975 / Brazil

Gil E Jorge
Ogum Xango

ブラジルMPBを代表する2大アーティスト、Gilberto GilとJeorge Benのコンビが75年に発表した2枚組。収録曲は同年にリリースされたアルバムとすべて同じだが、本作では9曲中8曲がロング・ヴァージョンとなっていて、かなり聴きごたえがある。アコースティック・ギターのドライなカッティング音と土着的なパーカッションのリズム、ふたりのマジカルなヴォーカルがめくるめく交錯する。これだけシンプルな編成で、ここまで完成された世界観を表現してしまうふたりの才能に、完全にノックアウト。

#389 | Experimental

Japan / 1982 / Japan

Akio Niitsu 新津章夫

Petstep

横尾忠則がデザインを手掛けた1作目が、わかる人たちの間で名盤と噂されるギタリストの新津章夫だが、82年に発表された2作目は、さらに実験精神に富んだユニークなアルバムだ。前作同様、ギターの多重録音によるセルフ・メイキングだが、本作では16チャンネルのマルチ・レコーダーを使用したことでパレットが拡大し、よりイマジネイティヴで遊び心いっぱいのサウンド・コラージュが実現している。クレジットはされていないが、細野晴臣がアドバイザーとして参加しているらしい。

#390 | Pops

CBS Sony / 1983 / Japan

Akira Inoue, Masataka Matsutoya Hiroshi Sato 井上 鑑・松任谷正隆・佐藤 博

Seaside Lovers

日本のトップ・スタジオ・ミュージシャンを多数起用したCBSソニーの“Sound Image”シリーズから発表された作品で、初出の『パシフィック』から数えると6作目になる。前作の『オフ・ショア』までは、すでに発表済みの楽曲が使い回されていたが、本作では、井上鑑、松任谷正隆と佐藤博がコンポーズした新曲を収録している。ビーチ・リゾートをテーマに、それぞれの個性がぶつかりあうことなく溶け込んだ、エレガントなポップ・フュージョンを披露、なかでも佐藤博のキーボード・ワークが光っている。

#391 | Pops

Palacio De La Musica S.A. / 1976 / Venezuela

Aldemaro Romero Y Su Onda Nueva

Una Por Una

50年代にキャリアをスタートさせ、オーケストラ・スコアからポピュラー・ミュージックまで幅広いコンポージングで数多くの楽曲を残している、ベネズエラを代表する作曲家、Aldemaro Romeroが76年に自身の名義で発表した作品。軽快にスウィングするワルツ・リズムと美しいハーモニーを聴かせる混声ヴォーカルがグルーヴィな「Que Bonita Es Mi Tierra」をはじめ、いろいろな感情を表現したカラフルなソフト・ロックやイージー・リスニングを収録している。良質なラウンジ・ミュージックとしても評価したい。

#392 | Easy Listening

Polydor / 1983 / Spain

Antón García Abril (Original Soundtrack)

Mata-Hari

映画音楽やTVプログラムの音楽を手掛けるコンポーザー、Antón García Abrilが音楽を担当したスペインのミュージカル・コメディ『Mata-Hari』のサウンドトラック。ストリングス・オーケストラをフィーチャーしたイージー・リスニングを中心に収録しているが、そのなかで異彩を放つのは「Damayanti」だ。パンニングするドラム・マシンのシンプルなリズム、遠くのほうから聴こえるタブラのソリッドな響き、シタールと女性スキャットの妖艶なメロディが浮遊する、オブスキュア・エキゾチック・グルーヴ。

#393 | World

Private Press / 1981 / France

Bill Loko
Dipita

Bill Lokoは、「Salsa Makossa」なる12インチ・シングルもリリースしている、カメルーンの現地音楽マコッサの名シンガー／パーカッショニスト。Michot Dhinと共同制作した81年発表の本作でも、ファンキーなアフロ・ビートがゆったりとカラダをゆらす「Musea」や、レイドバックするリズム・セクションと、ギターやシンセサイザーのソフィスティケイトなメロディがコッテリとした哀愁を漂わせるインスト・トラック「Dipita」など、カラッとした太陽の日差しを感じさせるトロピカルなマコッサを披露している。

#394 | Jazz

Softwere Music / 1983 / Germany

Brüning V. Alten's Sunrise Orchestra
Un Dia Ta Bini

ドイツ人ドラマーのBrüning Von Altenが、アフリカ人パーカッショニストを含む自身のバンドSunrise Orchestraを率いて、アフリカ音楽やアフロ・キューバンをモチーフに、ブライトなクロスオーヴァー・ジャズを展開した1作目。ドイツ産プログレッシヴ・ディスコの巨頭、Harry Thumannの『American Express』にも参加しているシンガー、Roland "Dooley" Richardsonのヴォーカルが、ポリリズミックなビートを刻むリズムとマッチした「Day Will Come」が聴きどころ。このレーベルは、マイナーながら良い作品が多い。

#395 | World

Portobello / 1981 / Germany

Candela
Salsa

Candelaは、ドイツ在住のラティーノたちによって結成されたサルサ・グループで、本作も含めて80年代に3枚のアルバムを残している。エッジのきいたラテン・パーカッションのビートとアフリカンなチャントで幕を開け、Santanaを彷彿させる哀愁のギターが唸りをあげる「Auoye」をはじめ、本格志向のアフロ・キューバン・サウンドに、プログレッシヴ・ロックばりに展開するドラマティックなアレンジを加えた、燃えあがるようなラテン・ロックが鮮烈だ。ドイツならではのきめ細やかな音質のミキシングも絶品。

#396 | World

Warner Bros. / 1977 / Brazil

Carlos Dafé
Pra Que Vou Recordar

ブラジリアン・ソウル・シンガー、Carlos Daféが77年に発表した処女作。ファンク・クラシックとして歴史的名盤であることは周知の事実だが、その稀有なソングライティング能力と歌唱力も大いに評価したいところだ。バックを固めるファンク・バンド、Banda Black Rioによるタイトなレイドバック・サウンドもさることながら、裏声なども駆使しながら広音域を歌いこなす表情豊かなヴォーカル・ワークが、Tim MaiaやCassianoとはひと味違うカラフルな彩りに満ちたグルーヴを放っている。

#397 | Rock

Eye / 1981 / Netherlands

Chris Latul

Latul

オランダのエスノ・フュージョン・グループMassadaのメンバーでもある、ニューギニア生まれのギタリストChris Latulのソロ作品で、ブリージンなAORやフュージョンを多数収録した、EU産トロピカル・グルーヴの隠れた名盤。哀愁漂うギターと可憐なエレピが絡むジャズ・ファンク・ライクな前半から、凄まじくスペーシーなシンセサイザー・ソロがフィーチャーされた後半へと展開する、Macky Feary Bandを彷彿させる「New Morning」が聴きどころだ。Chris Latulのイナタいヴォーカルも味わいがある。

#398 | Jazz

Epic / 1978 / Canada

Dale Jacobs

Cobra

カナダ人鍵盤奏者のDale Jacobsは、71年にグループ名義のライヴ・アルバムを発表しているが、スタジオ録音作品としては本作が初のリリースだ。当初はカナダ国内のみに流通したが、その高品位な内容が高く評価され、翌年にはアメリカやヨーロッパでも発売されている。純度の高いアナログ・シンセサイザー・サウンドで包囲されたトリッピーなジャズ・ファンクやフュージョンは、George Dukeあたりに通じるところだが、アートワークの毒のきいたアーバンな世界観とは裏腹に、感触は極めてトロピカルだ。

#399 | World

Plane / 1987 / Germany

Dario Domingues

Children Of South America

パタゴニアの先住民族の末裔で、自らの手で作り上げたケーナやバンブー・フルートを操る名手でもあるマルチ・インストゥルメンタリスト、Dario Dominguesは、自身のルーツであるラテン・アメリカの伝統音楽に加え、アフリカやアジアの民族音楽の要素も積極的に取り入れた、深い精神性に満ちあふれた有機的なネオ・ワールド・ミュージックを演奏するアーティストだ。87年に発表されたソロ5作目となる本作でも、スティール・パンなどを導入しトロピカルなタッチのフォークロアを披露している。

#400 | World

Discos De La Planta / 1972 / Urguay

Dogliotti

Candombe Liso

ウルグアイのオルガン奏者、Mike Dogliottiの72年作。Ruben RadaやOpaのFattoruso兄弟の楽曲を取り上げている。ウルグアイのルーツ・リズムであるカンドンベの強力なビートをバックに、サックス、フルートやピアノなどによるジャジーなエレメンツを含みながら、ファルフィッサ・オルガンのチープな音色が狂おしく舞う、なんとも独特なサウンドに心底やられてしまう。ダサさを軽く通り越して、さらにカッコ良さも素通りした、わけのわからない状態だが、とにかくヤバいことだけは確かだ。

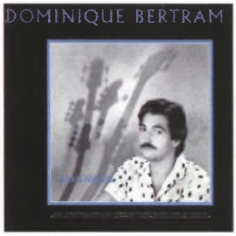
#401 | Jazz

Polydor / 1978 / Spain

Dolores
Asa Nisi Masa

フラメンコ・ジャズ・ロックの名盤を残しているPedro Ruy-Blasを中心に、Paco De Lucía Groupにも参加しているPardo兄弟などが参加したスペインのグループ、Doloresの78年作。スピーディにグルーヴするラテン・リズムに、有機的なフルートや流麗なスパニッシュ・ギターが舞うプログレッシヴ感覚あるれるスピリチュアル・ジャズ・ロックから、シンセサイザーを大胆に導入した南国サウンドまで、収録曲すべてがあまりにも素晴らしい、知られざるスパニッシュ・フュージョンの金字塔的作品。

#402 | Jazz



String / 1984 / France

Dominique Bertram
Chinese Paradise

ZaoやMagmaなどのフレンチ・ジャズ・ロック・グループで活動した経歴をもつフランス人ベーシスト、Dominique Bertramによるソロ1作目。本作でも鍵盤奏者のBenoit Widemannや、ベーシストのJannick Topなど、Magma周辺のミュージシャンがゲスト参加しているが、プログレ色は薄く、アグレッシヴなコンテンポラリー・ジャズを展開している。中国をイメージして作曲されたようだが、オリエンタルというより、むしろトロピカルな趣向のタイトル曲「Chinese Paradise」が際立つ。

#403 | World

Disques Vacances / 1982 / France

E+
La Qualité De La Vie

Geno Exilie、Daniel Ravaudを中心とする、ブラック・カリビアンのミュージシャンによるグループ、E+の82年作。丸みのあるあたたかなバーカッションのリズムに絡む、流麗なエレクトリック・ギターのソロや、オルガンの心地良い音色、カラフルなホーン・セクションとコーラス・ワークが楽しい、強い太陽の日差しを感じるズークを収録した、熱い夏に最適なトロピカル・ミュージック。「Rifize」の昭和歌謡的な哀愁のグルーヴも絶品。カリブのリゾート・ホテルのハコバンが似合いそうだ。

#404 | World

Radio Triunfo / 1982 / Portugal

Fernando Girão
Contos Da Europa Tropical

17歳でポルトガルに移住し、ロック・バンドPentagonoへの参加で音楽キャリアをスタートさせたブラジル・サンパウロ出身のシンガー、Fernando Girãoは、70年代初期にHermeto Pascoal、Gilberto GilやOs Mutantesなどとも共演を果たしているアーティストだ。ポルトガル人ミュージシャンをバックに従えて制作した本作では、テクニカルなジャズ・ロックからメロウ・グルーヴまで、ハスキーで芯のあるバリトン・ヴォーカルが映える、トロピカル・テイストのフュージョンを披露している。

#405 | World

Polydor / 1981 / Netherlands

Fernando's Ginga
Ride The Night

オランダで活動するポルトガル人ミュージシャンFernando Lameirinhasが、ラテン・ジャズ・ロック・グループSail-Joiaを解散後、新たに結成したグループの81年作。Lol Coxhillが1曲のみソプラノ・サックスで参加している。南米やカリブ海の現地音楽をベースに、ジャズ、ファンクなどさまざまなスタイルをトロピカルに昇華した、爽快なグルーヴ・ミュージックを全編に収録。終始漂うアダルトなメロウネスも素晴らしい。Fernando's Ginga名義では結局この1枚のみのリリースで終わったようだ。

#406 | Pops

Polydor / 1982 / Sweden

Frida
Something's Going On

世界的に人気を博したスウェーデンのグループ、ABBAのリード・シンガーのソロ作品。当たり障りのないポップ・ロックがメインだが、爽快なレゲエ・ビートとコケティッシュなヴォーカルがトロピカルな「I See Red」は、現代のバレアリック・テイストにマッチするし、マイルドなベースやシンセサイザーの浮遊感が心地良い「Stranger」もメロウ・グルーヴの極み。そうは思いたくないが、やはりこれも金をかけたサウンド・プロダクションの妙か。ちなみにプロデュースはPhil Collins。

#407 | World

Cap / 1980 / UK

Gasper-Lawal
Ajomase

アフリカ・ナイジェリア出身のパーカッショニストGasper-Lawalが、MonomonoのJoni Haastrupと、Tunji Oyelanaのプロデュースのもと制作した自主盤。思わずカラダが動き出してしまうトロピカルなパーカッション・リズム、陽気に躍動するギターやピアノにスペーシーなダブ・ミックスが施された、カラフルなアフロ・ビートやレゲエを収録。出音やGasper-Lawalの脱力系ヴォーカルはかなりスモーキーな装い。スペシャル・サンクスとしてVangelisがクレジットされているが、意味不明である。

#408 | World

Areito / 1985 / Cuba

Grupo Proyecto De Gonzalo Rubalcaba
Grupo Proyecto De Gonzalo Rubalcaba

10代後半になるころには、すでにハバナのクラブやミュージック・ホールで演奏していたという、早咲きのキューバン・ジャズ・ピアニスト、Gonzalo Rubalcabaが、Grupo Proyectoとともに録音した85年作。スリーヴのアートワークや表記が異なる盤も存在するが、いずれにせよ初のスタジオ録音作品と思われる。伝統的なアフロ・キューバン・ジャズを基礎としながらも、シンセサイザーやエレピを多用したトリップ感のあるアグレッシヴな演奏を繰り広げる、まるでプログレッシヴ・ロックのようなサウンドだ。

#409 | Folk

EMI / 1981 / Germany

Hallimasch
Canta

70年代にKaarstというプログレッシヴ・ロック・バンドで活動していた、ギタリストのHans Engstfeldとドラマーの Wolfgang Filzを中心に結成されたグループ、Hallimaschの唯一作。アフロ、ラテン、ブラジルなど民族音楽のテイストを多分に取り入れたフォーキーなアコースティック・サウンドと洗練されたアレンジが光るエスノ・ミュージック作品。サイケデリックな雰囲気も若干匂わせるが、子供番組で取り上げられてもおかしくないような可愛らしい楽曲も収録していて、気分はトロピカルだ。

#410 | Rock

Alfa / 1978 / Japan

Haruomi Hosono 細野晴臣
Paraiso はらいそ

アルファ・レコード移籍後に発表された細野晴臣のソロ4作目で、トロピカル3部作の最終作とされている。完全燃焼したという前作『泰安洋行』の発表後にティン・パン・アレーが解散し、新たに模索していたプロジェクトも頓挫したため、“醒めた状態”で制作したと本人はインタヴューで語っているが、「ファム・ファタール～妖婦」で聴けるアダルトなメロウネスなど、洗練度は格段に増している。仏教への傾倒もうっすらと漂わせ、「シャンバラ通信」は、同年に横尾忠則との連名で発表される『コチンの月』を予感させる。

#411 | Jazz

52e Rue Est / 1987 / France

Heliotrope
Heliotrope

フランスのマイナー・フュージョン・グループによる87年作。女性シンガーによる、清涼感あふれるブラジリアン・フィールなヴォーカルと、ミニ・モーグのトリッピーなソロがフィーチャーされた、後半のピルドアップ感が素晴らしいサンバ・フュージョン「Reves」をはじめ、伸びのある艶やかなシンセサイザー・サウンドを効果的に用いた、大陸的なエキゾティシズムを感じる開放的なクロスオーヴァー・ジャズを展開している。Pat Metheny Groupからの影響を多分に感じさせる作風だ。

#412 | Rock

Kitty / 1979 / Japan

Hiroshi Sato 佐藤 博
Orient

細野晴臣、山下達郎や吉田美奈子作品などでもその卓越したキーボード・ワークを披露している、ティン・パン・アレー・ファミリーの鍵盤奏者、佐藤博によるソロ3作目。前2作で聴けるウェスト・コースト系のスモーキーなロック・テイストが本作ではほぼ払拭され、ミニ・モーグをはじめとするシンセサイザー群やフェンダー・ローズによるスペーシーなエレクトロニック・サウンドが全面に打ち出された、細野晴臣の名作『はらいそ』や『コチンの月』の流れをくむ、極東エキゾティシズム作品へと進化した。

#413 | World

Polydor / 1976 / Brazil

Hyldon
Deus A Natureza E A Música

ブラジル・サルバドール生まれのHyldonは、サイケデリックとサウダージが同居したブラジリアン・ソウルのシンガーだ。76年リリースの本作に収録の「Primeira Pessoa Do Singular」や「Homen Pássaro」は、ソウル・ミュージックのレイドバック感とアシッド・フォークのサイケデリック感が、ブラジル特有の郷愁を媒介に一体となったメルトなファンク・グルーヴで、Gilbero GilやJorge Benなどにも似たような感覚をおぼえるが、こちらはさらに黒くてファンキー。しかし、終始漂うのは南国の香り。

#414 | Jazz

Kitty / 1981 / Japan

Izumi "Mimi" Kobayashi 小林“ミミ”泉美
Coconuts High

高中正義バンドで活躍した鍵盤奏者、小林泉美の個人名義では初となるソロ・アルバム。高中をはじめ、Harvey Mason、Tower Of PowerやThe Babylon Warriorsなどの海外ミュージシャンが参加してハイ・レヴェルな演奏を繰り広げているのだが、これだけヴァラエティに富んだ本格サウンドを自らコンポーズ／アレンジし、プロデュースまで手掛ける小林泉美の才能にも脱帽。「Crazy Love」と「Lazy Love」は同じ楽曲だが、それぞれシンセ・ポップとラヴァーズ・レゲエにアレンジされているのも面白い。

#415 | Jazz

Inner City / 1981 / US

Jasmine feat. Cassandra Wilson
Tropical Breeze

今やジャズ・ヴォーカル界を牽引する存在となった女性シンガー、Cassandra Wilsonが初レコーディングとして参加した、アメリカ・ニューオーリンズのジャズ・グループ、Jasmineの81年作。ハープのきめ細やかな旋律と、Cassandraのハスキーなヴォーカルのコントラストが非常に美しい「Jasmine」や、エレガントにフローティングする、ブラジリアン・テイストのアレンジが素晴らしいカヴァー曲「Everything I Do With You」など、トロピカルかつオーガニックな楽曲を収録。

#416 | Jazz

Cerise / 1985 / France

Jean Marc Jafet
Dolores

Didier Lockwoodをはじめとするフレンチ・ジャズ・ロック人脈のミュージシャンや、ブラジルのMPBシンガーMaria Marciaなどが参加した、フランスのトップ・ベーシストのひとり、Jean Marc Jafetによるリーダー作。ハミングやスキャットがフィーチャーされたブラジリアン・テイストのフュージョンや、ソフィスティケイテッドなメロウ・グルーヴなど、清涼感あふれるトロピカル・ジャズを全編に展開した、言われなければブラジル産のジャズだと思ってしまうほどサウダージな作品。

#417 | Jazz

Blau / 1984 / Spain

Joan Bibiloni
Una Vida Llarga I Tranquila

82年から本格的にソロ・プロダクションを開始以降、91年までに8枚のアナログ作品を残している、技巧派プレイヤーとしても知られるスペインのギタリスト、Joan Bibiloniが84年に発表した本作は、白と碧のコントラストが美しい地中海沿岸の情景がまぶたに浮かぶ、有機的なニューエイジ・クロスオーヴァー・ミュージックを全編にわたり展開した傑作だ。最終曲の「Una Vida Llarga I Tranquila II」のエンディングでは、日本人女性による日本語のピースフルなメッセージを聴くことができる。

#418 | World

Paco Rabanne Design / 1985 / France

Kassiry
Afrika

アフリカ人シンガーのKassiryが85年に発表した同名アルバムからの12インチ・シングル・カット。パーカッシヴな4ビートが心地良いディスコ・サウンドとカラフルなズークが融合した、カリビアンなアフロ・ビートで、ソフト・タッチのシンセ・パッドとあたたかみのあるヴォーカルも清涼感に満ちあふれている。オートクチュール・ブランドで知られるフランス人ファッション・デザイナーPaco Rabanneが運営するレーベルからリリースされていて、Paco Rabanne自らプロデュースを手掛けている。

#419 | Jazz

Biton / 1983 / Germany

Leaf
Sax Sisters

クラウト・ジャズ・ファンク・グループ、Leafが一部メンバー・チェンジを経て83年に発表した2作目。清涼感のあるヴォーカル／コーラス・ワークがアダルト・オリエンテッドな雰囲気漂う「Never Love Again」をはじめ、1作目の『One More...』にくらべ、かなりブリージンなクロスオーヴァー・フュージョンへと変貌しているが、Okay Temizを思わせるディープ・スペースなビリンバウやパーカッションがビルドアップするトロピック・エスノ・ジャズ「Song For Marian」が異質かつ秀逸だ。

#420 | Pops

CBS / 1986 / Portugal

Lena D'Água
Terra Prometida

ポルトガルのポップ・スター、Lena D'Águaの86年作。当時多くのフォロアーが登場したSadeの影響を感じさせるコンテンポラリーなR&Bサウンドが主体だが、ラテン・パーカッションを効果的に配したソリッドかつタイトなサウンドで、幅広いジャンルを手掛ける敏腕プロデューサー／アレンジャー、Luís Pedro Fonsecaのプロダクションが光っている。東南アジアやハワイなどの南国を思わせるエキゾチックなメロディ・ワークとサウンド・メイクが映える「Tao」が、メロウかつトロピカル。

#421 | Jazz

Relukreul / 1986 / Netherlands

Luluk Purwanto
Impressions Of Indonesia

インドネシア人ジャズ・ヴァイオリニストLuluk Purwantoは、フュージョン・グループBhaskaraのメンバーとしてオランダのジャズ・フェスティヴァルへの参加を契機に、ヨーロッパのジャズ・シーンでの評価を獲得、同年に競演作も発表するインドネシア生まれのオランダ人ジャズ・ピアニスト、René Van Helsdingenのバックアップにより、本ソロ・アルバム制作の機会を得たようだ。故郷インドネシアの心象風景を描いた、カラフルなエスニック・フュージョンが全編に展開する、知られざる名盤。

#422 | Jazz

Coomusa / 1980 / Brazil

Mário Negrão
Madeira Em Pé

Barden Powell、Marcos ValleやChico Buarqueなど、さまざまなアーティストとのセッションに参加しているブラジル人ドラマー、Mário Negrãoが残した奇跡のアルバム。Nivaldo OrnelasやMauro Seniseをはじめ、ブラジルの技巧派ミュージシャンが数多く参加し、アグレッシヴに弾けまくるリズムに、エフェクティヴなフルートやブラス・アンサンブル、スペーシーなギターやシンセサイザーが大空高く舞い上がる、トロピカルなクロスオーヴァー・ジャズを全編にわたり披露した、文句なしにカッコいい1枚だ。

#423 | World

Labalme / 1987 / France

Mendes Mendes Et O' Asah
Donna Kinjela

ダカール移民のポルトガル人ミュージシャン、Gerard Mendesの87年作。Emilio Santiagoあたりに通じるブラジリアン・テイストのヴォーカルとコーラスがトロピカルな「Donna Kinjela」、Cheryl Lynnの『Got To Be Real』を彷彿させるスラップ・ベースがファンキーな、ニューヨーク・サウンド的ブラジリアン・ディスコ「Africa Love」をはじめ、ブラジル音楽やアフロ・キューバンの影響を多分に受けつつ、洗練された都会的なサウンドへと昇華させた、ブリージンなトロピカル・ファンクを展開した好作だ。

#424 | World

CBS / 1988 / Brazil

Ney Matogrosso
Quem Não Vive Tem Medo Da Morte

円熟期を迎えつつある80年代後期のNey Matogrossoは、古典的なラテン音楽やアコースティック・アンサンブルなどにも取り組みはじめ、本格派ヴォーカリストとして技巧的にもさらに磨きがかかってきた。88年発表の本作でも、ブラジルの心とでもいうべきポジティヴなパワーを秘めたサンバから、色香漂う艶やかなヴォーカル・ワークが素晴らしいバラード・ナンバーまで、ブラジル伝統音楽の土着性と時代の先端を行く洗練されたサウンド・メイクが見事に融合した、独自の世界観が表現されている。

#425 | Jazz

Edigsa / 1974 / Spain

Orquestra Mirasol
Salsa Catalana

Jordi SabatésやOMのアルバムにも参加している弦楽器奏者のXavier Batllésと、鍵盤奏者のVictor Ammannを中心に結成されたスペインのジャズ・ロック・グループ、Orquestra Mirasolの1作目。マンドリン、ビリンバウ、クイーカなど、多種多様な民族楽器を効果的に用いたフォークロアな装いのアコースティック・サウンドと、躍動感あふれるカラフルなリード・サウンドがトロピカルに融合した、ブライトなラテン・ジャズ・ロック作品。グループはのちに“Mirasol Colores”に改名される。

#426 | Jazz

Color / 1979 / Venezuela

Pablo Manavello
Cosas Sencillas

イタリアで生まれ、ベネズエラでキャリアをスタートしたPablo Manavelloは、Vytas BrennerのグループOfrendaでも活躍したギタリスト。初のソロとなる本作では、Frank Quinteroをはじめとするベネズエラの名ミュージシャンが多数参加し、同地のトラッド・ミュージックやラテンのエッセンスを漂わせながら、軽やかなクロスオーヴァー／フュージョンを披露している。エレクトリック・ピアノとギターのコントラストが素晴らしいタイトル曲「Cosas Sencillas」の、心地良い爽快感がいい。

#427 | Jazz

Discomate / 1981 / Japan

Pacific Jam
Pacific Jam

ピアニストの松岡直也とリード・プレイヤーの土岐英史を中心に、Paulinho Da Costa、Flora Purimなどのブラジル人ミュージシャンや、David T. Walkerなどロサンゼルスで活動するセッション・ミュージシャンが参加した、81年録音のスーパー・スタジオ・アルバム。かなり本格的なブラジリアン・フュージョンを全編に繰り広げていて、全曲が土岐英史、もしくは松岡直也によるコンポーズというところもすごいが、アレンジも手掛ける松岡直也の、グルーヴの底まで知り尽くした確固たるセンスには脱帽だ。

#428 | Electronic

Fam / 1988 / Germany

Peter Schaefer
Sundaes

Peter Schaeferは、80年代初期から現在に至るまで複数の名義を使い分けながら、自主レーベルを中心に大量の作品を発表し続けているドイツの電子音楽家。80年代はとくにカセットでのリリースが多く、今となってはその音楽的全貌を知るのは困難だが、88年に発表された本作では、土着的なアフリカン・パーカッションやスティール・パンのような音色をシミュレートしたカラフルな電子音を用い、アフリカ音楽やカリブ音楽のエッセンスをブレンドしたトロピカルな電子音楽を聴くことができる。

#429 | Rock

Som Livre / 1979 / Brazil

Rita Lee

Rita Lee

60年代後期ブラジルにおいて、Caetano VelosoやGal Costaらとともにトロピカリズモ・ムーヴメントを牽引したグループ、Os Mutantesのオリジナル・メンバーでヴォーカリストのの Rita Leeによる79年作。ガレージ・ライクなロックンロールを中心に収録してはいるものの、母となる心境の表われか、カリブソのリズムを取り入れたゆるやかなフロウのソフト・ロック・ナンバー「Mania De Você」のような楽曲も表面化。エレガント路線に転換した次作『Lança Perfume』を予感させる。

#430 | Rock

Valentim De Carvalho / 1982 / Portugal

Rui Veloso

Fora De Moda

ポルトガルの国民的ロック・シンガー、Rui Velosoの2作目で、B.B. KingやEric Claptonに影響されたという、自身の音楽的ルーツであるブルース、フォークやロックンロールを中心に収録したアルバムだが、「Estrela De Rock And Roll」や「Bocejo」のような、Macky Fearyなどのハワイアン・グルーヴを彷彿させるトロピカルなアダルト・オリエンテッド・ロックも披露している。少し枯れた声質で軽やかに歌い上げるヴォーカルとコーラス・ワークも素晴らしく、この手のサウンドをやらせると天下一品だ。

#431 | World

Philips / 1978 / Netherlands

Sail-Joia

Mare Alta

ポルトガル系オランダ人、Fernando Lameirinhas率いるジャズ・ロック・グループの2作目。ラテン、カリビアンやハワイアンなど、トロピカルなセンスを多分に吸収した、アダルト・オリエンテッドなクロスオーヴァー・ジャズ・ロックを収録した好盤。ワーミーなパーカッションがきいた躍動感のあるリズムに、男女混成ヴォーカルが軽やかに疾走する「Meu Pai」、可憐な女性ヴォーカルがフィーチャーされた、エモーションとメロウネスが交錯する展開に惹かれる「High Tide」に注目。

#432 | World

RCA Victor / 1986 / Brazil

Sandra Sá

Sandra Sá

ブラジルの女性シンガー、Sandra Sáが、レア・グルーヴ再評価で一躍その名を知られることとなったカリオカ・グループ、Banda Black Rioのサポートを得て、アダルト・オリエンテッドな香り漂うコンテンポラリーなブラジリアン・ソウルを展開した86年作。ハスキーな声色で情熱的に歌い上げるダンサブルなモダン・ソウル・ナンバー「Retoratos E Canções」も秀逸だが、夕日に照らされて輝くコパカバーナのビーチが目に浮かぶ、「Olhos Coloridos」のサウダージなバレアリック感が素晴らしい。

#433 | World

Inner Music / 1983 / Germany

Saraba
Papa Music!

Abdul Corrを中心とする、アフリカ人とドイツ人の混合グループの唯一作で、自主制作盤と思われる。カリプソやレゲエの要素を含む、底抜けに明るいトロピカルなハイライフを収録した作品だが、タイトなリズムとクラヴィネットのリフ、哀愁を帯びたヴォーカルと鳴きのギターが印象的なアフロ・ファンク「Saté Muso」が抜群に素晴らしい。終始バッキングに徹したフェンダー・ローズもメロウ。熱くブロウするホーンがファンキーなレゲエ・スタッフ「Change The System」も秀逸。

#434 | World

Barcarola Producoes Artisticas / 1983 / Brazil

Sergio Boré
Tambores Urbanos

Gal Costa作品をはじめ、ニューエイジ専門レーベルであるInnovative Communicationに作品を残すQuiet Forceにも参加しているブラジル人パーカッション奏者、Sergio Boréの初リーダー・アルバム。スコールのように降りそそぐパーカッション・サウンドを軸に、哀愁漂うプログレッシヴなジャズ・ファンクから土着性豊かなフォークロアまで、Ruben Radaをはじめとするウルグアイ・ファンクに密接するクロスオーヴァー・グルーヴが展開される。OpaのHugo Fattorusoの鍵盤プレイも白眉。

#435 | Disco

PDI / 1984 / Spain

Tango?
Como Invertir Su Dinero

スペインのマイナー・ディスコ・グループ、Tango?の84年作。翌年にシングルを発表しているが、アルバムとしてはこれが唯一作のようだ。80年代前半に隆盛したイタリア産のチージーなディスコの延長線上ではあるが、Human Leagueあたりにも通じるデカダンスを感じるスリージーなヴォーカルと、アダルト・オリエンテッドな雰囲気漂うデジタライズされたサウンドによる、ニューウェーヴ・ライクなトロピカル・ディスコを全編に収録しているカルトな作品。ヘタレなラップが入った楽曲はご愛嬌。

#436 | Rock

Private Press / 1982 / Hawaii

Tender Leaf
Tender Leaf

ハワイアン・ロック・グループ、Tender Leafが82年に自主制作した唯一のアルバム。湿気のないドライな空気感で軽快に疾走するギター・ロックからアダルト・オリエンテッドなサーフ・ロックまで、美しいコーラス・ワークが映えるブリージンなサウンドを展開していて、ウェスト・コーストの香りが漂うが、「You Are My Fantasy」あたりはStyle Councilのようでもあり、さらに「Coast To Coast」ではサイケデリックでもある。それでいて終始さわやかなところがハワイアン・グルーヴのいいところ。

#437 | Pops

Invitation / 1986 / Japan

Tetsuo Sakurai 桜井哲夫
Dewdrops

カシオペアのベーシスト桜井哲夫が86年に発表した、ヴォーカル曲を中心に収録したソロ1作目。鳥山雄司と井上鑑が演奏や編曲で全面的にバックアップし、多量のデジタル・シンセサイザーを駆使したエレクトロニックなフュージョンを展開している。時代柄軽い印象の楽曲が並ぶが、山川恵津子がささやくように歌う韻を踏んだ簡潔な歌詞と、和のテイストを取り入れたパワフルなサウンドがビルドアップする「Kimono」は、新たな解釈のもとで現在に蘇る、発掘系ダンス・チューンだ。

#438 | Jazz

Splasc(h) / 1988 / Italy

Tiziana Ghiglioni
Yet Time

80年代にOrnette Colemanなどのフリー・ジャズの楽曲に歌詞をつけることで注目され、現在もイタリアン・ジャズ・シーンの先頭を行く女性シンガー、Tiziana Ghiglioni。88年発表の本作でもOrnette Colemanの楽曲を取り上げているが、ブラジル・ミナス派の雄、Milton Nascimentoの名スコアに、Sergio Mendes & Brazil '66時代のLani Hallが英語歌詞をあてた「Empty Faces」のカヴァーに注目したい。感情をゆり動かすドラマティックな展開、リード楽器と化したTizianaのスキャットが躍動する。

#439 | Jazz

Aquila / 1985 / Portugal

Via Nort
Greenwish

ポルトガルのメインストリーム・シーンで長きにわたり活躍しているプロデューサーQuico Serranoを中心とするワンオフ・グループ、Via Nortが85年に発表した12インチ・シングル。タイトル曲の「Greenwish」は、Wagner TisoやCesar Camargo Marianoなどのブラジル勢に通じる、ブリージンなクロスオーヴァー・ダンサーで、アーリー・ハウスを想起させるドラム・マシンのビートとタイトなスラップ・ベースによるリズム・セクションと、デジタル・シンセサイザーのサウンドがカラフルだ。

#440 | World

Surprise / 1970s / Belgium

Voices Of Brasil
Voices Of Brasil

ベルギー産疑似ブラジル音楽作品。Chris Craftのカルト・スペース・ディスコ作品『Discosmic Dancer』にプロデューサー兼シンセサイザー奏者として参加しているフランス人コンポーザーのPhillipe Renauxが手掛けただけあって、ディスコティックなアレンジが施された仮想トロピカル・ダンス・ミュージックを収録している。どことなくスパニッシュな香りがしないでもない、イナタいシンセサイザーとガット・ギターが哀愁漂うエレクトリック・サンバ・ディスコ「Geraldina Samba」が面白い。

column_03

アナログ・レコードの歓び

はっきり言って、アナログ・レコードは厄介モノだ。場所をとるし、しかも重い。持ち運ぶのも大変だ。せまい木造アパートで暮らしていたときは、レコードにほとんどのスペースを占領されて、床が抜けるんじゃないかと真剣に思ったこともある。引越のときは、音響機材と並んで運搬に頭を悩ませる。いざ音楽を聴こうにも、保管の状態が悪くて盤がゆがんでいたり、キズだらけだったり、ホコリまみれでは、まともに再生することもできない。良いことなんてひとつもないようだが、この扱いづらさが、これはこれで憎めなかったりもする。

レコードを買う最大の目的が、中身の音楽にあることは言うまでもないが、物質としてのアナログ・レコードに魅力を感じるのも、また事実だ。僕はレコードをコレクションすることに関心はないが、こと中古レコードについては、自分の手元にたどり着いて再生するまでの過程を楽しんでいるように思える。レコード屋に足を運び、アンテナの感度を上げて物色し、購入する。盤を取り出し、ターンテーブルに乗せて針を落とす。ジャケットを眺めながら音楽を聴く。聴き終わったら盤をスリーヴに戻す。この一連のフィジカルな行為に醍醐味を感じているのではないか、とさえ思う。

僕が今、こうしてレコードに針を落とすまでに、どれだけの人の間を渡り歩いてきたのか。このレコードにある汚れや傷は、僕がつけたものではない。前の持ち主の扱いがぞんざいだったか、長い間劣悪な環境のなかで眠っていたのかもしれない。できるだけきれいに磨いて、もう一度再生してみる。音がよみがえったときの快感はなかなかのものだ。パチパチとノイズが鳴っていたら、甘んじて受け入れるか、次の出会いを待つだけだ。

僕はいまだに、“ジャケ買い”という効率の悪いことをよくやっている。アートワークに惹かれたら手にとってみて、これといった情報がないときは、デザインや絵柄の雰囲気だけで想像力を働かせて、“これは良さそうだ”と思ったら、いざ購入。驚くほどにイイ音楽が聴こえてきたら大成功、ハズレたら部屋にでも飾っておく。これもレコードを買う愉しみのひとつだ。

アナログ・レコードは完成されたプロダクトであり、総合芸術だと思う。アナログとデジタルの音質論争はさておき、デジタル・データのダウンロードでは味わえない、アナログ・レコードならではの愉しみがあることは、レコードを愛するあなたなら知っているだろう。

floating

floating

“フローティング”。直訳すると“浮かんでいる、流動している”。漠としたキーワードではあるが、本章ではまさにその意味するとおり、流動的で、独特の浮遊感をもった音楽を取り上げている。選出されたレコードは多ジャンルに及び、表現方法も実にさまざまだが、共通しているのは、刺々しさのない柔和なサウンドで、雲や水に浮かんでいるような感覚を味わえることだ。心地良い流れに身をまかせ、音楽のなかで泳ぐのも悪くない。

masterpiece

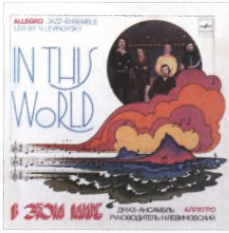
#441 | Rock

Brain / 1975 / Germany

Harmonia
Deluxe

ClusterのMoebiusとRoedeliusに、Neu!のMichael Rotherが加わったユニット、Harmoniaによる2作目。Guru GuruのMani Neumeierが、ドラムでゲスト参加。Clusterのふたりによるシンセ・ワークはもちろんのこと、多重録音されたMichael Rotherによるギターの宇宙的な響きが、本作の輪郭を担っている。太陽の光が降りそそぐかのように、音の粒子が音場空間でキラキラと輝きを放つ、サイケデリックなエレクトロニック・リゾート・ミュージックという、極めて特異な世界に到達した作品だ。

#442 | Jazz



Melodia / 1982 / USSR

Allegro Jazz-Ensemble
In This World

ロシアのトップ・ジャズ・バンドのディレクションやアレンジを数多く手掛けている、鍵盤奏者のNicholas Levinovskyが結成したジャズ・クインテットによる82年作。両面ともに20分を超える長編を収録した大作で、モダン・ジャズからクロスオーヴァーまで、さまざまな表情を見せながら華麗に展開していく壮大なジャズ・スイート。Herbie HancockやGeorge Dukeにも引けをとらない鍵盤さばきを披露している、Nicholas Levinovskyのメロウでスペーシーなキーボード・サウンドが圧巻。

#443 | Jazz

Pick Up / 1981 / Denmark

Alpha Centauri
20:33

ベーシストのBo StiefやトランペッターのPalle Mikkelborgをはじめ、デンマークのジャズ／フュージョン・シーンきっての先鋭ミュージシャンが名を連ねるクインテット・グループ、Alpha Centauriの唯一作で、Pat Metheny GroupやRainer BrüninghausなどのECM作品に近似する、透明感のある伸びやかなサウンドによるアーバンかつディープな世界観が充満したクロスオーヴァー・ジャズ作品。まるでギター・ソロのように聴こえるBo Stiefのベースが素晴らしい。

#444 | Jazz

Mood / 1979 / Germany

Apocalypse
Twilight Music

ヨーロッパのジャズ・ロック・シーンで活躍したオランダ人ピアニストのJasper Van't Hofが、デンマークのジャズ・ミュージシャンとともにコペンハーゲンで録音した作品。ゆったりとしたテンポでタイトなリズムを刻むドラム、郷愁あふれる旋律を奏でるフリューゲルホルン、遠くのほうでゆるやかに広がりをみせるPPGシンセサイザーがアトモスフェリックな「Twilight Music」の世界観が素晴らしい。微光が差す日没のたそがれどきが表現された、まさにトワイライト・ミュージックだ。

#445 | Rock

Ballon Noir / 1979 / France

Benoit Widemann
Tsunami

フランスのプログレッシヴ・ロック・グループ、Magmaで活動した鍵盤奏者、Benoit Widemannのソロ2作目。トリッピーな電子音が疾走する、テクニカルなジャズ・ロックを展開した前作も秀逸だが、本作では、爽快感と多幸感をもちあわせた、よりクロスオーヴァーな方向へとシフトしている。メランコリックなシンセサイザーのメロディが幾重にもレイヤーされた、カリブ海沿岸の音楽を想起させるトロピカルなエレクトロニクス「Tsunami」は、Widemannのセンスの良さを感じさせる。

#446 | Jazz

Transat / 1984 / France

Bertrand Richard
Amandine Léopard

ミレニアム以降は、Boub名義でダンス・ミュージックのクリエイターやDJとして活躍するフランス人プロデューサー／鍵盤奏者、Bertrand Richardの出発点はフュージョンだった。84年に発表したソロ2作目は、シンセサイザーやヴォコーダーを導入したエレクトリックなサウンドが軽やかにグルーヴする、トロピカル・フィーリングのクロスオーヴァー・ジャズ作品。おだやかな波がオレンジ色に輝くサンセットを想起させるフローティングなメロウ・フュージョン「Kunuonadivi」が絶品。

#447 | Jazz

Vanguard / 1977 / US

Cosmology
Cosmology

イスラエル人コンポーザーMisha Segalと、打楽器奏者Collin Walcottがプロデュースする、アメリカのジャズ・ロック・グループによる唯一作。Walcottはパーカッションに加えシタールでも参加している。アートワークのようなサイケデリック感はなく、艶やかな女性ヴォーカルをフィーチャーしたジャズ・グルーヴを展開。Flora Purimを彷彿させる浮遊感のあるヴォーカルと、フェンダー・ローズのまろやかなサウンドがメロウ・スピリチュアルな「Willow Land」が素晴らしい。

#448 | Rock

Erlkonig / 1979 / Germany

Cyklus
Planet Of Two Suns

ドイツの4人組グループCyklusによる、79年発表の唯一作。Pat Methenyとその周辺アーティストに通じる洗練されたセンスが光る、シンフォニックな展開の楽曲を収録したジャズ・ロック作品で、適度にテンションを抑えたクールなサウンドでありながらも、どこかしらサイケデリックな香りも漂っている。音場空間の遥か彼方からゆっくりと姿を見せるシンセサイザーのアルペジオで幕を開ける、メディテーティヴなエレクトリック・ジャズ・ロック「Wolken」の深遠な美しさに心を奪われる。

#449 | New Wave

Balcony / 1986 / Japan

D-Day
Grape Iris

80年代日本のインディーズ・シーンで異彩を放っていたニューウェーヴ・グループD-Dayが、チャクラやキリング・タイムなどで活動した音楽家、板倉文によるプロデュースのもと発表した1作目。女性シンガー川喜多美子のコケティッシュなヴォーカルが映える、ソフトな印象の楽曲が大半を占めるなか、シンプルながら非常に奥行きのあるエレクトロニック・サウンドとアヴァンなポエトリーが融合した、「Sweet Sultan」と「KI・RA・I」の陶酔感は、時代を超えて今なお魅力的だ。

#450 | New Age

Polydor / 1983 / Switzerland

Diethelm/Famulari

Diethelm/Famulari

スイス人ギタリストと鍵盤奏者のデュオによる処女作。複数のディレイとハーモナイザーを駆使した、ジプシー・ミュージックを想起させる飛翔感のある美しいギター・サウンドと、繊細かつカラフルなシンセサイザー・サウンドの完璧な融合。クロスオーヴァーなジャズ・シーンで活躍するインド人パーカッション奏者、Trilok Gurtuのリズミカルな演奏が、曲の輪郭をさらに浮き彫りにする。ポジティヴなエネルギーに満ちあふれた、他に類を見ない艶やかなニューエイジ・ミュージックだ。

#451 | Contemporary

Editions Walrus / 1982 / Belgium

Dominique Lawalrée

Clandestin

Dominique Lawalréeは、70年代中期からモダン・クラシカルな作風のコンテンポラリー・ミュージック作品を多数リリースしているベルギーのコンポーザーだが、82年発表の本作では、エレクトリック・ピアノやシンセサイザーとわずかなパーカッション類だけを使用したシンプルな構成で、ロマンティックなアンビエントを披露している。誰もいない公園のベンチに佇む少女が描かれたアートワークのイメージそのままに、晩秋から初冬にかけての少しひんやりした空気が伝わってくる。

#452 | Electronic

Innovative Communication / 1986 / Germany

Double Fantasy

Universal Ave.

ドイツ人シンセストのRobert Schröderがプロデュースを手掛けたプロジェクト、Double Fantasyの1作目。Dreamstarなる人物がメンバーとしてクレジットされているが、Robert Schröderのことである。PPG社製ウェーヴ・コンピューターやリズム・マシンを駆使したエレクトロニックなサウンドに、Manuel Göttsching直系のスペーシーなエレクトリック・ギターが、独特の浮遊感を醸し出している。スリーヴに掲げられた郷愁あふれる美しい夕陽の光景そのままの、エモーショナルな電子音楽作品。

#453 | Pops

Grabaciones Accidentales / 1991 / Spain

Esclarecidos

Rojo

女性ヴォーカリストのChristina Llisoをフロントに、Suso SaizやMiguel Herreroなどのスパニッシュ・エクスペリメンタル人脈のアーティストがメンバーに名を連ねる、インディペンデント・レーベルGrabaciones Accidentalesの代表的グループ、Esclarecidosの5作目。アンビエントやニューエイジのエッセンスが程よくブレンドされたサウンドと、アンニュイかつメランコリックな世界観が心地良い、都市感覚の洗練されたニューウェーヴ・ポップ。Sadeのような色気も若干漂っている。

#454 | Experimental

Casablanca / 1983 / Italy

Francesco Messina
Medio Occidente

アート・ディレクターとしても才能を発揮するキーボード奏者、Francesco Messinaの83年作。アヴァンギャルド界隈のミュージシャンが多数参加しているが、なぜかCasablancaから発表されている。たしかにディスコ・ライクな楽曲も収録されているが、本作において特筆すべきは、シンセサイザーを多用したミニマルなリフレインで構築された実験的なエレクトロニクス・トラック4曲。それ以外の楽曲との趣向の差があまりにも激しく、同じアーティストによる作品とは思えないほどだ。

#455 | Library

RCA / 1978 / Italy

Gianni Marchetti
Solstitium

数々のイタリア映画の音楽を手掛けるほか、フランスのライブラリー・シリーズ、April Orchestraなどにも作品を残しているイタリア人コンポーザーが、イタリアRCAレーベルのライブラリーのために提供した作品。四季をテーマに掲げた、切なく美しいムード・ジャズを全編に収録している。まろやかにグルーヴするベースとスネアのブラッシュ・サウンド、フェンダー・ローズの甘い音色、ムーディなブラス／ストリングスが、冬の冷たい空気のなかに溶けていく「January」が感動的だ。

#456 | Jazz

Anvil / 1980 / Germany

Glatter Wahnsinn
Glatter Wahnsinn

Storhm兄弟を中心に結成された、ドイツのジャズ・ロック・グループによる唯一作。疾走感あふれるサンバ・リズムに、ウェットなタッチのギター・ソロやスペーシーなシンセサイザーが舞う「Samba La Bamba」、抒情性のあるメロディアスなフロウが心地良い「Kristallei」など、ダークなアートワークに反して、ブリージンかつメロウなクロスオーヴァー・ジャズを全編に展開。しかし、なんとなくプログレッシヴ・ロック的な雰囲気も随所に感じられるところが、カルティッシュだ。

#457 | Rock

Brain / 1979 / Germany

Guru Guru Sun Band
Heydu

もともとはジャズ・ドラマーだったMani Neumeierを中心に結成され、ヘヴィなサイケ・ロック・バンドとして登場したGuru Guru。70年代中期ごろから徐々にクロスオーヴァーなジャズ・ロックのスタイルへ移行をはじめたが、79年にSun Band名義で発表した本作で、その進化を実らせた感がある。ラテン・リズムを刻む軽やかなパーカッションとマイルドなベース、メロウにゆれるフェンダー・ローズが心地良い、ブラジリアン・テイストのフュージョン「Taoma」の清涼感が象徴的だ。

#458 | Electronic

Schallter / 1982 / Austria

Hans-Joachim Roedelius
Wasser Im Wind

ClusterやHarmoniaなどで活動し、ソロとしても数多くの傑作を残しているHans-Joachim Roedeliusが、82年にオーストリアのマイナー・レーベルから発表した作品。強烈なレゾナンスを施したヘヴィなシンセ音と直線的なアルペジオが交錯する空間をサイケデリックなギター・ソロが駆けめぐるディープ・エレクトロニクスから、丸みのあるフワフワとした感触のシンセサイザーがゆったりと浮遊するアンビエントまで、非常に質の高いインテリジェントな電子音楽を終始展開している。

#459 | Ambient

Misawa / 1986 / Japan

Hiroshi Yoshimura 吉村 弘
Surround

“音”を居住空間におけるインテリアと定義してデザインする“サウンドスケープ・デザイン”をコンセプトに掲げた、住宅メーカーの企画による“Soundscape”シリーズの第1弾で、日本における環境音楽の第一人者、吉村弘によるアンビエント・ミュージックを収録した作品。シンセサイザーによるロング・トーンのパッド音や、水滴が落ちるようにウェットな単音など、これといってメロディのないシンプルなサウンド・ウェーヴの繰り返しが、ゆっくりと空間に溶けこんでいく。

#460 | Jazz

MMC / 1984 / UK

Ian Lynn
Forgotten Summer

Sheena Eastonなどのディレクションで知られるイギリス人ジャズ・ピアニストのIan Lynnは、UKのフュージョン系レーベルMMCに5枚のアルバムを残しているが、なかでもこの処女作が素晴らしい。透きとおった音色のデジタル・シンセサイザーやエレクトリック・ピアノを効果的に使用した、ニューエイジ・テイストの情緒あふれるフュージョン・サウンドを構築していて、アルバム全体をとおしてひとつの世界観を感じることができる美しい作品だ。なかでも「Sun Dance」のメランコリックなフロウが絶品。

#461 | Rock

Melodia / 1986 / USSR

Igor Garšnek & Nevil Blumberg
Synopsis

旧ソヴィエト連邦、エストニアを代表するロック・バンド、Rujaの鍵盤奏者Igor Garšnekと、RadarのギタリストNevil Blumbergによる共作。80年代特有の肌触りがあるシンフォニックなロックをメインに収録した作品だが、ローランド製のリズム・コンピューターを効果的に使用した空間性のあるリズムに、シンセサイザーの叙情性あふれるメロディをレイヤーした「Grotto」と「Uksindus」は、西欧のコンテンポラリー・ジャズを彷彿させる、淡い色彩によるフローティングな電子音楽。

#462 | Jazz

Stunt / 1988 / Denmark

Jukkis Uotila
Avenida

モダン・ジャズ系のミュージシャンを中心に多くの共演歴をもつフィンランド人ジャズ・ドラマー、Jukkis Uotilaのソロ作品で、Randy BreckerやJohn Scofieldといったフュージョン界の大御所が参加し、いささか派手な音作りのテクニカルなクロスオーヴァーが主体だが、デジタル・シンセサイザーの細やかなサウンドやマリンバのまろやかな旋律がラテン調のリズムにマッチした、華麗なコンテンポラリー・ジャズ「Sense Of Home」が素晴らしい。トロピカルな香りも漂うが、印象はいたって都会的なエレガンス。

#463 | Jazz

Electric Bird / 1978 / Japan

Katsutoshi Morizono 森園勝敏
Bad Anima

プログレッシヴ・ロック・バンド四人囃子のギタリスト、森園勝敏がグループ脱退後に発表したソロ作目で、村上秀一や中村哲などのトップ・ミュージシャンが参加した、クロスオーヴァーなジャズ・ロック・アルバム。オリジナル曲も披露しているが、シンセサイザーやエレピのやわらかな浮遊感とミスティックなサウンドが気持ち良い、James Vincentの「Space Traveller」と、郷愁あふれるハモンド・オルガンの演奏が冴える、Booker T. Jonesの「Last Tango In Memphis」のカヴァー曲が光っている。

floating

#464 | Rock

Diorama / 1978 / Argentina

Litto Nebbia
Canciones Para Cada Uno Vol.1

アルゼンチンのシンガー・ソングライターLitto Nebbiaの78年作で、アルゼンチンのJohn Coltraneと呼ばれるサックス奏者のHoracio "Chivo" Borraro、ECMなどの先鋭ジャズ・レーベルからも作品を発表しているヌエヴォ・タンゴの巨匠Dino Saluzziなど、アルゼンチンのトップ・ミュージシャンが集結し、えもいわれぬ多幸感と哀愁に満ちた極上のクロスオーヴァー・ミュージックを披露している。味のあるヴォーカルとスペーシーな鍵盤プレイもすごいが、楽曲やアレンジの完成度の高さが極みの域。

#465 | Jazz

Dorato / 1989 / Germany

Merge
Exchange

Doratoなるレコーディング・スタジオを運営するドイツ人エンジニアが残したプライヴェート・アルバム。参加アーティストも無名だが、内容がすごい。一歩間違えると陳腐に聴こえかねないが、Pat Methenyばりに哀愁の旋律を奏でるギター・シンセサイザーや、執拗に施されたディープな残響処理が、トロピカルなリゾート感も漂わせながら、非常に透きとおったサウンドのメロウなエレクトロニック・フュージョンへと昇華している。サウンド・エンジニアらしく、細部までデザインされた音楽だ。

#466 | Rock

Day Eight Music / 1984 / Sweden

Michael Shrieve
In Suspect Terrain

Santanaのドラマーとしてキャリアをスタートしたmichael Shrieveは、ツトム・ヤマシタ・グループへの参加を機にKlaus Schulzeに出会い、エレクトロニクスの可能性を大いに見いだしたようだ。その後、Schulzeをゲストに招き、シンセサイザーを大々的に導入した作品を発表しているが、それと同年にリリースされた本作では、リズムに特化した実験的なサウンドに挑んでいる。シンセ・ドラムとライヴ・パーカッションがミニマルにレイヤーされたソリッドなサウンドだが、独特の浮遊感がある。

#467 | Jazz

Storyville / 1986 / Denmark

Mikkelborg, Knudsen, N.H.O.P.
Heart To Heart

デンマークの3人のジャズ・ミュージシャンが共演したドラムレス・トリオ作品。深い霧がたちこめたようなアトモスフェリックな空間に、フリューゲルホルンやシンセサイザーのやわらかな音が浮遊する「Girl With Her Hat」、ドラム・マシンが刻む硬質なビートとスピーディなベース・ラインに、ミュート・トランペットのインタープレイがミステリアスに舞う「Shot Cart」など、シンセサイザーを多用したエレクトリックなサウンドが斬新な、イリュージョナリー・クロスオーヴァー・ジャズ。

#468 | Ambient

Shi Zen / 1986 / Japan

Motohiko Hamase 浜瀬元彦
Reminiscence

ジャズ・ベース奏者として、鈴木勲やジョージ大塚など多数のグループで活躍した浜瀬元彦だが、ソロ1作目となる本作は、自身の音楽的衝動をダイレクトに表現した結果、エレクトロニクスを全面的に使用したアンビエント・ジャズ作品となった。制作の過程で選択、整備、構成された音楽的世界のなかで、演奏家としての自身がエレクトリック・ベースを媒介としてイメージの交合を体験するという、エレクトロニクスに新たな表現方法の可能性を見いだした、コンセプチャルな作品である。

#469 | New Wave

Panton / 1983 / Czechoslovakia

ORM, Kameile
Tropic

Petr DvořákとPavel Růžičkaを中心とするグループ、Organization Recording Of Musicは、旧チェコスロヴァキアにおけるエレクトロニック・ダンス・ミュージックのパイオニアとして位置づけられているグループ。しかし、カラダに浸透するシンセサイザーのヴァイブレーションと女性デュオKamelieによる透明感あふれるコーラスがブリージンなスロー・ジャズ・ロック「Tropic」や、変拍子でシンフォニックに展開する「Colorado」などを聴いていると、その趣向は限りなくプログレッシヴ・ロックに近い。

#470 | World

Continental / 1974 / Brazil

Osmar Milito
Viagem

70年代に数枚の作品を残している謎多きブラジル人ピアニスト、Osmar Militoによる74年発表の作品。アコースティック・ピアノやヴィオラとストリングスのコンビネーションによるエレガントなサウンドと、女性コーラスのやわらかなサウダージ感が見事に相まった「Bonita」をはじめ、ボサ・ノヴァやサンバを基調に、洗練されたアレンジが施されたソフト・ジャズを展開した作品。いわゆるイージー・リスニングなテイストだが、ブラジル音楽だと許されてしまうのはなぜだろうか。

#471 | Vocal

Palo Alto / 1985 / US

Rare Silk
American Eyes

80年代に活動したアメリカの男女混成コーラス・グループ、Rare Silkがセルフ・プロデュースで制作した2作目。Manhattan Transferを彷彿させる、卓越したヴォーカル・ワークによる美しいハーモニーを聴かせるジャズ・コーラスから、ファンキーなナンバーまでを披露しているが、特筆すべきはStanley Turrentineによるスコアに、メンバーのMarylyn Gillaspieがリリックをのせた「Storm」。ゆったりとリズムを刻むウェットなパーカッションとやわらかなコーラスのマッチングが絶妙。

floating

#472 | Rock

EMI / 1979 / Argentina

Raul Porchetto
Mundo

Raul Porchettoは、Seru GiranをはじめCharly García周辺アーティストの作品に多数参加しているアルゼンチンのキーボード・プレイヤーだが、その中性的な声質のヴォーカルも非常に強烈な印象を与える特異なアーティストだ。79年発表の本作でも、甘美なファルセット・ヴォイスのヴォーカルにテクニカルな演奏と秀逸なアレンジが光る極上のクロスオーヴァー・サウンドを披露していて、なかでも「Amiguito, Ese No Es El Cielo」の開放感が絶品。「Ella Está Esperando」のフロート感もたまらない。

#473 | Rock

Harvest / 1977 / Germany

Richard Schneider Jr.
Dream Like Land

2枚のアルバムを残しているドイツ人コンポーザー、Richard Schneider Jr.の1作目で、エレクトロニクスとワールド・ミュージックを融合した非常に珍しいタイプの作品。Jacki LiebezeitやHelmut Zerlettなど、Can人脈のミュージシャンが参加している。サンバ、ボサ・ノヴァ、マリアッチやフォルクローレなど、南米音楽をモチーフとしたアコースティックなギター・サウンドに、スペーシーなシンセサイザーや波音などの疑似自然音が折り重なる。肩の力が抜けきった朴訥なヴォーカルもいい塩梅。

#474 | Jazz

Gala / 1987 / Italy

Roberto Gatto
Ask

イタリア人ジャズ・ドラマーが、自国のミュージシャンに加え、ギタリストJohn Scofieldをゲストに迎えて録音したセクステット作品。激しいインタープレイも披露する、ハード・バップあがりのフュージョンといった趣向だが、Pat Methenyの流れをくむエッセンシャルなコンポージングと、清涼感のあるサウンド・メイクがボディ・ソニック効果抜群の、素晴らしい演奏も2曲披露している。とくに「100 Flowers」では、本家さながらのクリスタルなフュージョンを聴くことができる。

#475 | Experimental

Recommended / 1987 / Italy

Roberto Musci & Giovanni Venosta
Water Messages On Desert Sand

ふたりのイタリア人実験音楽家による共作第1弾。サンプリングやテープ・エディットなどを駆使してコラージュされた、アフリカ、中東やアジアのプリミティヴなチャントや民族楽器音に、シンセサイザーなどのエレクトロニクスやライヴ・インストゥルメンツがレイヤーされた、デジタライズド・エスニック・ミュージック。ゆるやかなパッド・シンセが浮遊する空間に、ピグミー族のチャントやフレンチ・ホルンが静かにゆらぐ、「Nexus On The Beach」のフロート感が果てしなく気持ち良い。

#476 | Rock

Cobra / 1977 / France

Roland Bocquet
Paradia

Catharsisのメンバーだったフランスの鍵盤奏者、Roland Bocquetによるソロ作品。オリジナル・アルバムは本作のみで、ラテン、ブラジルやアフロなど、実に多様なエレメンツを昇華した、有機的なジャズ・ロック・サウンドに、絶妙なバランスでブレンドされた電子音がかなり独創的な、唯一無二の音楽だ。とくに「Exotique」における、フィルター処理されたパーカッションやシンセサイザーの、ミステリアスなサウンドが押し寄せては引いていく、トリッピーな世界観が非常に面白い。

#477 | Ambient

Sound Process / 1982 / Japan

Satoshi Ashikawa 芦川 聡
Still Way

日本における環境音デザインの先駆者である芦川聡が、自身の設立した環境デザイン・ラボ“サウンド・プロセス”から発表したアナログ唯一作。現代音楽家の高田みどりが参加している。“静止した道（動作）”と題された本作は、サウンドスケープを提唱したカナダの現代音楽家Murray Schaferと、アンビエント・ミュージックの先駆者Brian Enoの意匠を継承する、環境に融和する静的な音響を創造したサウンド・デザインだ。雨がやんだあとに、広葉樹の葉からしたたり落ちる水滴が奏でる音模様。

#478 | Jazz

Plainisphare / 1986 / Switzerland

Spiro, Giacopuzzi
Frontal

ギタリストのSpiro LaszloとドラマーのReto Giacopuzziによるデュオ・アルバム。どちらも、当時スイスに移住していたアメリカ人ピアニスト、Art Landeのグループに参加していたミュージシャンで、サポート・メンバーもArt Landeをはじめ、その周辺のミュージシャンで固められている。Pat Methenyの師匠であるMick Goodrickに師事したSpiro Laszloの、ギター・シンセサイザーを駆使した流麗なサウンドを軸に、エスニックなエッセンスも交えながら、深い霧に包まれたようなディープ・ジャズが展開する。

#479 | Rock

Private Stock / 1977 / US

Starbuck
Rock'n Roll Rocket

Eternity's Childrenのメンバーだったブルース・ブラックマンを中心に結成され、ELOやHall & Oatesをはじめ、ビッグ・ネームのツアーへの参加経歴も多数もつアトランタのグループ、Starbuckの2作目。ファットなベースとトリッピーなシンセサイザーがちりばめられたスペース・ブギー・ロック「City Of The Future」も秀逸だが、小気味良いカッティング・ギターとセクシーなヴォーカルのコントラストがメロウなAORブギー「A Fool In Line」の都会的なグルーヴが素晴らしい。

#480 | New Age

Inner Light / 1986 / US

Stefan Kukurugya
Sun Thoughts

アメリカ・ミシガンのニューエイジ系プライヴェート・レーベルからリリースされた作品。ソフトな響きのシンセサイザーがシンプルにレイヤードされた、メランコリックなエレクトロニクスや、クラシック・ギターとアコースティック・ピアノによる美しいアンサンブルなど、ナチュラル志向の繊細なニューエイジ・ミュージック。ウェットなパーカッション・ビートに、ハープのような音色のシンセサイザーや、チャイムのような電子音が舞う「Vacation Island」の心地良さは、かなり極上。

#481 | Ambient

Sanyo / 1986 / Japan

Takashi Kokubo 小久保 隆
Get At The Wave

家電メーカーがエアコンのキャンペーン用に制作した非売品アルバム。A面には、環境音楽家の小久保隆によるクリスタル・クリアなオーガニック・アンビエントを3曲、B面には、フィールド・レコーディングされた波の音と鳥のさえずりの自然音を収録したピクチャー・レコードで、写真家の利根川克正の撮影による浜辺の風景がブックレットで添えられている。音楽や自然の音と写真を同時に楽しむという、なかなか洒落た趣向だが、小久保隆による楽曲のクオリティの高さに、まず驚かされる。

#482 | World

Verve Forecast / 1989 / Brazil

Toninho Horta
Moonstone

ミナスの心を爪弾く天才ギタリスト／コンポーザーToninho Hortaが、Pat Metheny Groupのメンバーの全面バック・アップを得て制作した、89年発表のソロ作品。Robertinho Silvaをはじめ、ブラジルのミュージシャン勢も多数参加し、80年代Pat Metheny Group直系の、透明感と浮遊感に満ちあふれた美しいサウンドに、Horta特有のやわらかなギターとヴォーカルが見事に調和する。そんな有機的かつメロウ・フロートなブラジリアン・フュージョンを全編にわたり展開した、名盤中の名盤だ。

#483 | New Age

Alfa / 1986 / Japan

Toshifumi Hinata 日向敏文
Chat D'ete 夏の猫

TVドラマのサウンドトラックやCF音楽を数多く手掛ける作曲家、日向敏文のソロ2作目。I作目同様、アコースティック・ピアノをメインに置いたエレガントなサウンド。シンプルなフレーズのリフレインと浮遊感のあるシンセサイザーのパッド音を効果的に配した、ミニマル・コンテンポラリーの手法も取り入れながら、シネマティックに叙情を描き出している。タブラなどの民族楽器も導入しているがエスニック感はなく、あくまでも都市型のニューエイジ・ミュージックといった感じだ。

#484 | Pops

Fitzbeat / 1985 / Japan

Various Artists
882 Studio

シンガー・ソングライターの南佳孝が所有するプライヴェート・スタジオで録音された、新人2組を含む3アーティストの楽曲を収録したミニ・アルバム。コンピューターやシンセサイザー・プログラミングを導入したパワー・ポップといった趣向の作品が並ぶが、ハイファイ・セットのバック・バンドにも参加歴のあるギタリスト、太田健による「イルカ」は、清涼感のあるサウンド・メイクが際立つ、夏のビーチ・サイドをイメージさせるサマー・ブリーズなフロート感が心地良いニューエイジ・ライクなI曲。

#485 | New Age

Grabaciones Accidentales / 1985 / Spain

Various Artists
Musica Esporadica

Suso Saizを中心に、Grabaciones Accidentalesレーベル周辺のアーティストや、Steve Reich作品にも参加しているフレーム・ドラムの名手Glen Velezなどが集結したスーパー・グループによる唯一作。参加ミュージシャンらの真骨頂である無国籍な民族音楽テイストとエレクトロニクスがナチュラリスティックに融和した、独特のフロート感をもつセレッシャルなアンビエント・ミュージック。当時のスパニッシュ・ニューエイジ／エクスペリメンタル・シーンの先鋭性を感じずにはいられない名盤だ。

#486 | Audio Check

Sony / 1977 / Japan

Various Artists
Sound Sensor II

最新レコード制作技術の研究を進めていたソニーが、自社製品のプロモーションのために制作した非売品レコード。A面は、最新に開発されたメタルマスター・テープを使用した超Hi-Fiレコードなるふれこみで、インサートに“必ず45回転でお聴きください”と書かれていたが、試しに33回転で聴いてみたところ、カン・カンなるグループが演奏する、ジャズ・ファンクなアレンジを施したベートーヴェンの「第九」のカヴァーが、スモーキーにレイドバックするコズミック・ブギー・ファンクに化けた。

#487 | New Age

Private Press / 1987 / Germany

Wolfgang Gnida
Mellemlandet

Wolfgang Gnidaなる無名のドイツ人マルチ・インストゥルメンタリストが、87年に自主制作で発表したニューエイジ作品。ギターとベースを担当するミュージシャンがひとり参加している以外、シタールやダルシマーなどの民族弦楽器や電子楽器を自ら操り多重録音されている。トラディショナルな香り漂うフォークロア・サウンドと、清涼感のあるコンテンポラリーなニューエイジ・ミュージックが一体となった、自主制作盤ならではの奔放な作風が好感度大。

#488 | Jazz

Canyon / 1985 / Japan

Yuji Toriyama 鳥山雄司
A Taste Of Paradise

アレンジャーとしてもその才能を発揮し、幅広いアーティストの作品を手掛けているギタリスト、鳥山雄司のソロ4作目。佐藤博、ペッカー、富樫春生やイヴなどが参加している。I作目から続く、ビーチ・サイドをイメージさせるブリージンなフュージョン・アルバムだが、前作の『Yuji Toriyama』同様、ギター・シンセサイザーやドラム・マシンを多用した、佐藤博の80年代ソロ作品にも共通する、ツボをついたエレクトロニック・サウンドに注目。「Bay/Sky Provincetown 1977」のフロート感がいい。

#489 | New Age

Yamaha Music Foundation / 1987 / Japan

Yukie Nishimura 西村由紀江
Lyrisme

TV音楽などの分野を中心に活動する作曲家／ピアニストの西村由紀江のソロ2作目。ソフィスティケイトされたピアノ音楽をメインに収録した作品だが、現在もコンポーザーとして活躍し、ここではシンセサイザーを担当する崎谷健次郎と、シンセサイザー・プログラマーの平石晴己の手によるエレクトロニックなトラックに、アコースティック・ピアノのエレガントなサウンドがマッチした「Urban Road」、放牧的な美しいランドスケープが広がり、ECMの世界観を彷彿させる「Tomadoi」の2曲が素晴らしい。

mellow

mellow

日本の音楽シーンにおいては、シティ・ポップ、ブラコン、フュージョンやAORなどに多くみられる甘美な音楽スタイルを総じて、“メロウ・グルーヴ”という呼称が浸透しているが、海外ではほとんど使われていない。しかし、和製英語といわれようが、そうした音楽の雰囲気を表わすのに、これほど適したネーミングもないのではないか。本章では、日常や男女の関係などを甘く、色気たっぷりに奏でた“メロウ”な音楽を取り上げている。

masterpiece

#490 | Rock

Rainbow / 1978 / Hawaii

Macky Feary Band

Macky Feary Band

作品のリリースを重ねるごとに、テクニカルでタイトなファンク・サウンドへと移行していったKalapanaとは裏腹に、オリジナル・メンバーのMacky Fearyがグループ脱退後に録音した本作は、フェンダー・ローズが甘く鳴り響くアダルトなソウルから、爽やかな風が吹き抜けるクロスオーヴァー・ジャズ、プログレッシヴに展開するブラス・ロックまで、初期Kalapanaのメロウなグルーヴ・センスにさらに磨きをかけた、アダルト・オリエンテッドなノースショア・サウンドを聴くことができる。

#491 | Rock

EMI / 1977 / Italy

Alan Sorrenti
Figli Delle Stelle

イタリア人シンガー・ソングライターのAlan Sorrentiは、初期3作品まではサイケデリックの幻影に身を投じた叙情派アシッド・フォークを展開していたが、4作目で髪を切り、5作目となる本作でほぼ完全にポップ・ロックへの移行を完了し、色気のある都会の男へと変貌を遂げた。スウィートな高音ヴォイスと軽快でグルーヴィなサウンドが見事にマッチした「Figli Delle Stelle」や「Donna Luna」で聴くことができるアーバン・メロウなAORスタイルは、以降の作品への重要な布石。

#492 | Disco

Mercury / 1977 / Norway

Alex
Handle With Care

ポーランドで生まれ、ノルウェーで活躍したポップ・シンガー、Alexの2作目。70年代後半という時代柄か、1作目と同様に、ディスコ、ソウルやファンクのテイストを多分に含んだ、ダンサブルなポップ・ロックを展開した作品で、とりたてて特徴もないが、やわらかくトレモロするフェンダー・ローズと、静かに音場を浮遊するシンセ・パッドをバックに、抑揚のある表情豊かなヴォーカルを聴かせるメロウ・ファンク「I Gotta Feel Something」がダントツに秀逸な仕上がり。

#493 | Rock

Warner Bros. / 1977 / US

America
Harbor

70年代初期から活動するイギリスのポップ・ロック・グループ、Americaの77年作。The Beatles作品で敏腕をふるったGeorge Martinがプロデュースを担当している。アートワークからも連想されるとおり、涼しげな風が吹き抜ける、軽やかなタッチのウェスト・コーストなソフト・ロックを展開した作品。美しいコーラス・ワークとエモーショナルなストリングス・アンサンブルが映える「Are You There」は、バレアリック・フィーリング満点の、メロウ・ソフト・ロック・チューンだ。

#494 | Pops

Crown / 1987 / Japan

Atlas
Breeze

作曲家、編曲家としても活躍する3人のミュージシャン、難波弘之、川村栄二、今泉敏郎によるプロジェクトの3作目。“ハレー彗星”“南回帰線”に続き、本作では“潮風”をコンセプトに制作された、イメージ先行の企画ものだが、前2作にくらべ、楽曲の先鋭性が格段に向上した。『Rise』や『Beyond』あたりのHerb Alpertや、電化した80年代のRah Bandからの影響を強く感じさせるエレクトロニックなフュージョン・サウンドを、これでもかというくらいブリージンに昇華させている。

#495 | New Wave

EMI / 1988 / Portugal

Ban
Surrealizar

Bananas名義で83年にシングルを発表直後に改名したポルトガルのグループ、Banによるフル・アルバム1作目。ポスト・パンクに定義されるグループだが、ニューウェーヴのエレメントを色濃く反映したウェットでクリアなギター・サウンドと、シンセ・ドラムによるダンサブルなビートがフィーチャーされた、グルーヴィな楽曲を展開している。紅一点の女性シンガーAna Deusのハスキーなコーラスがきいたアーバン・ウェーヴ「Um Espelho Riu」の、ゆるやかなメロウネスが心地良い。

#496 | Rock

Asylum / 1977 / US

Bernie Leadon, Michael Georgiades The Band
Natural Progressions

ブルーグラスやカントリー・ロックのグループでキャリアを積んだ、アメリカ・ミネアポリスのシンガー・ソングライター、Bernie LeadonとMichael Georgiadesが率いるバンドの唯一作。ブルース、カントリーやフォークを基調に、バンジョーやアコースティック・ギターによる細やかなサウンド、艶やかなストリングスやフェンダー・ローズのメランコリックな響き、美しいヴォーカル／コーラス・ワークが印象的な、プリージンとメロウネスを兼ね備えたサザン・ロックを披露している。

mellow

#497 | New Wave

RCA / 1989 / Germany

Beto & Kara
Crystal Flakes

ドイツはベルリンの男女混成デュオ、Beto & Karaの89年作。おそらくこれが唯一作のようだ。ボサ・ノヴァ、ソウルやR&Bなどを取り入れた、アコースティックな感触のバンド・サウンドによるポップスを展開していて、マイナー・グループにしては、非常に質の高い内容に仕上がっている。女性ヴォーカリストKaraの、コケティッシュながらもうっすらと色気を漂わせる、ハスキーなヴォーカルもいい。やはりこの時代のこの手のサウンドは、どこかSadeの面影を感じさせるところがある。

#498 | World

Philips / 1976 / Brazil

Cassiano
Cuban Soul

ブラジリアン・ソウル・キング、Tim Maiaのバンドでファンキーなギター・プレイも披露している、Cassianoの76年発表のソロ作品。Tim Maiaを経由したソウル・マナーであることに相違はないが、ゆるやかなテンションでシンプルなフレーズがリフレインする「Onda」のメロウなソウル・フィーリングは、Curtis MayfieldやMarvin Gayeなどのニュー・ソウルからの色濃い影響を感じさせる。しかし、このサウダージ感はやはりブラジル特有のもので、US産ソウルとは決定的に違うところだ。

#499 | Rock

Discos CBS / 1986 / Argentina

Charly García - Pedro Aznar
Tango

アルゼンチン・ロック界のカリスマ、Charly Garcíaと、Pat Metheny Groupの黄金期を支えた天才ミュージシャンPedro Aznarという二大巨頭がタッグを組んだデュオ・アルバム。リズム・マシンで構築された独特の跳ね具合が気持ち良いビートと、浮遊感のあるシンセサイザーがフィーチャーされた「La Gente Es La Misma」をはじめ、この時代ならではのデジタライズされたサウンドと哀感のあるアレンジが素晴らしい、アダルト・オリエンテッドなメロウ・グルーヴに仕上がっている。

#500 | Soul/Funk

Polydor / 1981 / Netherlands

Daniel Sahuleka
Sunbeam

オランダで活動するインドネシア人シンガー、Daniel Sahulekaは、ニュー・ソウルやファンクに影響された、ダンサブルな作風を得意とするアーティストで、本作でもエッジのきいたファンキー・ディスコをメインに展開しているが、南国出身らしいトロピカルなテイストも随所にちりばめられている。軽快なパーカッションとメランコリックなキーボード・サウンドに、艶のあるハイトーン・ヴォイスでスウィートに歌い上げるヴォーカルがマッチした「Tears For The Stars」がメロウだ。

#501 | World

AVM Discos / 1982 / Brazil

Dedé Cruz
Pulsação

ブラジルのソウル・シンガーDedé Cruzの82年作。サマー・ブリーズな演奏とソフトな声色の女性ヴォーカルとのデュエットにとろける「Entre Os Dedos」、Milton Nascimentoを彷彿させるソングライティングと、エレガントなジャズ・アレンジが施された演奏が素晴らしい「Longa Metragem」など、軽快なサンバ・ソウルからメロウ・ソウルまで、極上の楽曲を堪能できるアルバムだ。アレンジを手掛けているJoão Boscoの手腕も冴えわたっていて、マイナー作品ながら、ブラジル音楽の奥深さを感じさせる。

#502 | World

RCA Ariola / 1987 / Brazil

Gal Costa
Lua De Mel Como O Diabo Gosta

ブラジルのトロピカリズモ・ムーヴメントにおける、女性シンガーの第一人者のひとりであるGal Costa。70年代後半以降は、よりポップな作風へと移行していったが、87年発表の本作は、Caetano VelosoやDjavanなど、ブラジルを代表する名コンポーザーたちの手による楽曲群に、アーバンなアレンジが施された、アダルト・オリエンテッドな趣向を打ち出した名作だ。ゆったりとしたグルーヴに、Galの艶やかで色気のあるヴォーカルが映える「O Vento」や「Tenda」はメロウネスの極み。

#503 | Jazz

MPS / 1974 / US

George Duke
Feel

マジカルなキーボード・ワークが冴えまくる、George Dukeの74年作。Frank Zappaが別名で参加している。真骨頂のコズミックなジャズ・ファンクを展開しているが、ラテン・テイストとメロウ・フィーリングを忘れないのが、George Dukeのいいところだ。パーカッショニストのAirtoとドラマーのNduguが作り出すトロピカルなブラジリアン・リズムに、Flora Purimの艶やかなダブル・ヴォーカルと、Geroge Dukeのスペーシーなシンセサイザーが彩りを加える「Yana Aminah」がメロウだ。

#504 | Pops

CBS / 1982 / France

Ginni Gallan
J'Arrête Pas La Musique

80年代から90年代に活躍したフランスの女性歌手、Ginni Gallanが、82年にリリースした7インチ・シングル。なんの変哲もないフレンチ・ポップ作品だが、B面に収録の「L'Amour Ça Rend Fou」に驚きを隠せない。ドラム・マシンによるスロー・テンポのリズム、極シンプルにフレーズを刻むレゾナンスのきいたシンセ・ベース、アーバンな空気感を醸し出すカッティング・ギターとバッキング・ピアノに、哀愁たっぷりのヴォーカルが可憐に舞う、奇跡のメロウ・バレアリック・ジェム。

#505 | World

Areito / 1982 / Cuba

Grupo Afro-Cuba
¡Dile Que Vuelvo!

アフロ・キューバン・フォルクローレ文化の中心地であるプロヴァンス、マタンザスを拠点に活動するGrupo Afro-Cubaによる82年作。キューバの黒人伝統音楽にジャズの要素を昇華した、洗練されたクロスオーヴァー・ラテン／サルサが素晴らしい。レア・グルーヴとして知られるアップテンポの楽曲も秀逸だが、モダンなアレンジが施された都会的なグルーヴ感がたまらないカンシオン・ロック「Nunca Pude Alcanzar La Verdad」が最高にメロウだ。ゴージャスなブラス・サウンドとエレピの絡みも極上。

#506 | Pops

Philips / 1979 / Japan

桑名晴子
Show Me Your Smile

日本のソウル・シンガー、桑名晴子の2作目。1作目は、元KalapanaのMacky FearyとLittle FeatのBill Payneをアレンジャーに招いて制作され、両アーティストのテイストが色濃く反映されていたが、本作では、バックのサウンドを担うベーカーズ・ショップとの共同プロデュースで、実兄の桑名正博との共作「もっとイマジネーション」のほか、桑名晴子自ら作詞作曲を手掛けた楽曲を数多く収録している。国府輝幸の秀逸なアレンジ・センスが光るメロウ・ファンク「蒼い風」がハイライト。

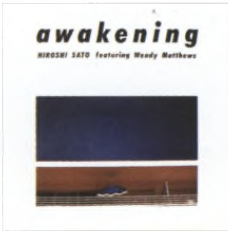
#507 | Jazz

Som Da Gente / 1981 / Brazil

Hector Costita
1981

Sergio Mendes、Zimbo TrioやHermeto Pascoalなど、ブラジルのジャズ・ミュージシャン勢とも多くの共演歴をもつ、アルゼンチン・ブエノスアイレス出身のジャズ・サックス・プレイヤー、Hector Costitaのソロ・アルバム。Roberto Bomilcarが奏でるエレクトリック・ピアノが印象的なボッサ・ジャズ「Lou」や、テンション控えめのムーディな前半から徐々に熱を帯びていく「Avessos」など、一貫してクールなグルーヴが全編を支配したアーバン・メロウなスピリチュアル・ジャズを収録した名盤。

#508 | Pops



Alfa / 1982 / Japan

Hiroshi Sato 佐藤 博
Awakening

アメリカ滞在時に出会ったWendy Matthewsという無名の女性シンガーを起用した、佐藤博のソロ4作目にして、ジャパニーズ・メロウ・グルーヴの金字塔。夏のビーチ・サイドを想起させるアダルト・オリエンテッドな空気感は、3年にわたり活動したカリフォルニアで得たイメージか。ドラム・マシン、Linn LM-1をはじめとするシンセサイザーを駆使した多重録音作品だが、そこに機械的な冷徹さは一切なく、まるでライヴ・パフォーマンスのように血の通ったエレクトロニック・サウンドを作り上げている。

#509 | World

Blau / 1986 / Spain

Joan Bibiloni Band
Papi, Are You OK?

Larry CoryellからJohn Cageまで、多岐にわたる音楽家との競演歴もあるスペイン屈指のギタリスト／プロデューサー、Joan Bibiloniが、女性シンガーをフィーチャーし、ソウル、ブルースやブラック・コンテンポラリーを大胆に取り入れて制作した、86年発表の異色作。ダンス・クラシック的ナンバーからジャズ・バラードまで、Joan Bibiloniと言われなければ、アメリカの黒人アーティストを想像してしまうくらいアーバンな作風だが、トロピカルでメロウなフィーリングも存分に楽しめる名盤だ。

#510 | Rock

Island / 1980 / UK

John Martyn
Grace & Danger

フォーク・クラブでキャリアを重ね、メインストリームへジャンプ・アップしたイギリスのシンガー・ソングライターJohn Martynの80年作で、Phil Collinsがドラムとコーラスで参加している。ブルースやカントリー／フォークを基調とした作風だが、男のロマンティシズムあふれるAORへと昇華されている。とくにエレクトリック・ピアノの使い方が素晴らしく、アコースティック・ギターの繊細なサウンドとハスキーなヴォーカルのマッチングが見事な、「Lookin' On」のミスティックなメロウネスが渋い。

#511 | Jazz

Inner City / 1980 / US

Judy Roberts
The Other World

前作、前々作と、ブラジル音楽の要素を取り込んだリズミックな躍動感と、エレガントなメロウネスを兼ね備えたクロスオーヴァー・ジャズを披露していたJudy Robertsだが、3作目となる本作でも、その洗練されたセンシティビティは陰ることもなく、さらに輝きを増している。フェンダー・ローズやミニ・モーグから放たれる開放的なサウンドはもちろんだが、感情表現豊かなJudyのヴォーカルはあまりに素晴らしく、まるで妖精のささやきのようだ。「Last Tango In Paris」のカヴァーも絶品。

#512 | Rock

Microfon / 1977 / Argentina

La Maquina De Hacer Pajaros
Peliculas

Sui Generis解散後に結成されたグループの2作目にして最終作となる本作では、グループの中心的存在でアルゼンチン・ロックを牽引するアーティスト、Charly Garcíaの音楽的興味がファンクやカリプソなどの黒人音楽へと移行していることがうかがえる。ドラムやベースはゆるやかにレイドバックし、オルガンやエレクトリック・ピアノはエモーショナルなメロディを奏でる。アダルトなメロウネスを醸し出すグルーヴィなロック・サウンドは、同郷のSpinettaやLitto Nebbiaにも共通するところ。

#513 | Rock

Ariston Music / 1983 / Italy

Mario Acquaviva
Mario Acquaviva

80年にイタリアCGD傘下のインディ・レーベルからデビューした、シンガー・ソングライター／マルチ奏者、Mario Accquavivaの83年作。Arti & Mestieriのギタリスト、Luigi Venegoniが参加している。心地良くグルーヴするミッド・テンポのリズムに、フェンダー・ローズやさまざまなキーボード・サウンドが、メランコリックに絡み合いながら進行する「Notturmo Italiano」をはじめ、メロウ・フィールに彩られた、ソフトなアダルト・オリエンテッド・ロックを4曲収録したミニ・アルバム。

#514 | Pops

Alfa / 1980 / Japan

Minako Yoshida 吉田美奈子
Monochrome

前作より2年のブランクを経て発表された、吉田美奈子のセルフ・プロデュース作品。松木恒秀や岡沢章など、現在も活動をともにするミュージシャンがバックをサポートしている。77年作『Twilight Zone』で見せた、切迫した内向性が再び表面化しているが、サウンド・プロダクションは洗練度を増している。Mike Mainieriによるヴァイブラフォンや、シンセサイザーのフックがメランコリックに浮遊する「Tornade」をはじめ、幾重にもレイヤーされた可憐なコーラス・ワークがとくに素晴らしい。

#515 | Pops

Harvest / 1977 / Japan

Miyako Chaki 茶木みやこ
Rainbow Chaser

日本の女性シンガー・ソングライター、茶木みやこが、ゴダイゴのメンバーの全面バックアップのもと、自身で全曲のコンポーズとプロデュースを手掛けたアルバム。11曲中9曲のアレンジに加え、ストリングス、ブラスとコーラスのアレンジも手掛けたミッキー吉野のセンスがひときわ冴えわたっていて、フェンダー・ローズやハモンド・オルガンのメロウなサウンドで彩られた「静かな夜」や「バイバイ・ブルース」のグルーヴ感は極上。いささか暗い世界観の歌詞とのアンバランス加減も絶妙だ。

#516 | Jazz

Discomate / 1979 / Japan

Naoya Mastuoka & Wesing 松岡直也
Fiesta Fiesta

“サマー・フュージョン”というジャンルがあるとすれば、その先陣を切っていたのが松岡直也だ。凄腕ミュージシャンが参加した自身のグループを率いて録音した本作は、サルサ、サンバ、レゲエなど南国音楽のテイストをたっぷりと盛り込んだ、本格派のトロピカル・フュージョン作品。色香漂うイヴのヴォーカルが心地良いレゲエ・ナンバー「Fiesta Fiesta」や、フェンダー・ローズのウェットなサウンドと吉田美奈子の可憐なスキャットがやわらかく絡み合う「Moonlight Sand」が最高にメロウ。

#517 | Pops

Hanaola / 1979 / Hawaii

Nohelani Cypriano
Nohelani

ハワイの女性ヴォーカリスト、Nohelani Cypriano が79年に発表した名作。エレクトリック・ピアノのソフト・リフとシンセ・ベースのアンバランスなマッチングが気持ち良いバック・トラックと、Nohelaniの妖艶なヴォーカルに酔いしれるハワイアン・メロウ・グルーヴ「Lihue」が人気のアルバムだが、El Cocoを思い浮かべるコケティッシュなディスコ・サウンドに、ハワイアン・テイストを絶妙にトッピングした、メロウ・ブリーズなAORディスコ「Moon Of Manakoora」も聴き逃せない。

#518 | Rock

Ohrwurm / 1983 / Germany

P'cock
3

Klaus Schulzeが主宰するレーベル、Innovative Communicationを離れ、マイナー・ジャズ・ロック・レーベルから発表された、クラウト・ロック・グループP'cockの3作目。以前作で聴けるような、電子音楽的な要素は影を潜め、メロディを重視したアダルト・オリエンテッドなロック・サウンドへ変貌している。アナログ電話のコールから幕を開け、スーパー・スローなリズムにファンキーなベースとコーラス・ワークが絡む、バレアリック・ロック・チューン「Telephone Song」に注目したい。

#519 | World

Areito / 1987 / Cuba

Pablo Milanes Y Su Grupo
Buenos Dias America

70年代初期より活動するキューバのシンガー・ソングライターでギタリストのPablo Milanesが、シンセサイザーなどの電子楽器をかなり大胆に取り入れ、ニュー・タイプのサルサ／アフロ・キューバンを展開した、87年発表のグループ名義のアルバム。なかでも特筆すべきが「Salgo De Casa」と「Con La Espada Y La Cruz」の2曲。シンフォニック・ロックとコンテンポラリー・ジャズに肉迫する楽曲構成とアレンジ、さらにメロウネスをも兼ね備えたアーバン・プログレッシヴ・サウンド。

#520 | Rock

Jupiter / 1982 / Germany

Panarama
Can This Be Paradise

PilotやAlan Person's Projectなどで活動した、スコットランド出身のギタリストIan Bairnsonが、友人のドイツ人鍵盤奏者、Hermann Weindorfとともに結成したユニットの1作目。YesやTotoなど、メインストリームへ躍進したプログレッシヴ・ロック・グループを彷彿させるポップな楽曲が中心だが、ゆったりとグルーヴするリズム・セクションと、やわらかな感触のエレクトリック・ピアノをバックに、アダルトなヴォーカルが絡む、「Run Away」のような、秀逸なAORナンバーも収録。

#521 | Rock

EMI / 1988 / Italy

Pino Daniele
Schizzechea With Love

Richie Havensのイタリア録音作品『Common Ground』でも、その美しいヴォーカルを披露しているイタリア人シンガー・ソングライターのPino Danieleは、80年代に質の高いAOR作品を数多く生み出しているが、なかでも88年発表の本作では、アーバン・グルーヴの極みに到達している。カラダに浸透する美しいシンセ・パッドと、サマー・ブリーズな哀愁の漂うメロディ・ラインが素晴らしい「Me So' Mbriacato E' Te Forever」は、このうえない清涼感と恍惚感を味わえる、バレアリックAORの宝石。

#522 | Pops

Stiff-Columbia / 1979 / US

Rachel Sweet
Fool Around

アメリカのアイドル歌手Rachel Sweetが弱冠15歳でレコーディングしたデビュー作。パンキッシュなロックからオールディーズ・スタイルの楽曲まで、いろいろな音楽にチャレンジした背伸び感覚が可愛らしい作品だが、ティーンエイジャーに大人びた楽曲を歌わせるのはどの国の歌謡界も同じのようで、カリビアン・フレイヴァーのエレクトリックなバック・トラックと、Rachelのコケティッシュなウィスパー・ヴォイスのマッチングが見事に功を奏した、「It's So Different Here」がメロウだ。

#523 | Rock

Govinda / 1978 / US

Rasa
Everything You See Is Me

詳細は不明だが、アメリカのインディ・レーベルGovinda Recordsは、ハレ・クリシュナを信仰する団体によって設立されたレーベルのようだ。これがデビュー作となる、クリシュナンで結成されたアメリカのグループ、Rasaは、宗教色の強い民族サイケ・フォークのイメージが強い作品を多数残しているが、この1作目のみ、純度の高いAORを披露している。ラヴリーなメッセージと、メロウなグルーヴ感を備えたタイトル曲「Everything You See Is Me」は、控えめながら実に上質な仕上がり。

#524 | Rock

Philips / 1975 / Netherlands

Richard Torrance & Eureka III
Living Today

アメリカ・ノースダコタ出身のシンガー・ソングライターによる3作目。カントリー、フォークやブルース色の強い典型的なサザン・ロックだが、カラッとしたアコースティック・ギターとスライド・ギターに、巧みな美しいコーラス・ワークが冴える「That's The Way」など、バレアリックを通過した耳で楽しむことができる作品だ。トロピカルな空気も漂っていて、若干ウェスト・コーストに接近している感もある。MCA流通で発売される予定が没となり、ヨーロッパ盤のみリリースされた。

#525 | Jazz

Back Straight Music / 1980 / Netherlands

Ronald Snijders
A Safe Return

Ronald Snijdersは、自主レーベルから7枚のアルバムを発表しているオランダのマイナー・アーティストで、おもにフルートを演奏するが、あらゆる楽器を使いこなすマルチ・プレイヤーだ。77年に発表したこの2作目は、ほぼセルフ・パフォーマンスによるマルチ録音作品で、Larry Grahamを彷彿させる跳ねたベースやファルセット・コーラスが気持ち良いスロー・ジャズ・ファンクを展開した知られざる名盤。自主制作のレヴェルを完全に凌駕したクオリティの高い楽曲群に、ただ驚嘆する。

#526 | Soul

SMS / 1977 / Japan

Ruriko Ohgami 大上留利子
Typhoon Lady

大阪出身のゴスペル・ソウル・シンガー、大上留利子のファースト・アルバムで、ジャパニーズ・メロウ・グルーヴ最高峰のひとつとして呼び声高い1枚。本作の代表曲といえる「セクシー・ウーマン」をはじめ、バックのサウンドを固めるベーカーズ・ショップによる、ツボを押さえたグルーヴィな演奏に、大上留利子の独特の声質によるソウルフルなヴォーカルが素晴らしい、高品位なソウル／ブルースを多数収録している。「ふわりふわふわ」で聴けるソフィスティケイトされた極上のメロウ・フロートも秀逸。

#527 | Rock

Spiegelei / 1978 / Germany

SBB
Follow My Dream

ポーランドのプログレッシヴ・ジャズ・ロック・グループ、SBBの通算6作目。西ドイツでレコーディングされた、西欧圏デビュー作で、歌詞も英語で歌われている。いくつかのパートで構成されたトータル・コンセプト・アルバムで、さまざまな展開をみせるシンフォニックな作風の組曲だが、甘く切ないメロディ・センスとヴォーカルが光る「Freedom With Us」と「Follow My Dream」で聴くことができる、アダルト・オリエンテッドなサウンドは、彼らの他作からは想像もつかないメロウネスだ。

#528 | Folk

Ohrwurm / 1983 / Germany

Sango
2

Frankfurt City Blues Bandというグループのメンバーだったドラマー、Werner Frommを中心に結成されたSangoは、80年代前半に2枚のアルバムを残しているマイナーなグループだが、どちらの作品も、カントリー、フォークやブルースを基調に、プログレッシヴな要素を取り入れながらも、あたたかみのある有機的なソフト・ロックを披露した好作だ。2作目となるこのアルバムも、素朴だが味のある女性ヴォーカルがフィーチャーされた放牧的な雰囲気が心地良いフォーク・ロックを収録している。

#529 | Rock

Travérse / 1979 / Germany

Santiago
Walking The Voodoo Nights

チリ出身のロック・ミュージシャンがスペインで結成したSantiagoは、ドイツで人気を博したグループで、75年から80年にかけて、数枚のシングルを発表しているが、アルバムは本作のみ。メインストリームで評価されてもおかしくない、秀逸なソングライティングと演奏による、アダルト・オリエンテッド・ロックを披露した、完成度の高い作品。美しいコーラス・ワークと、ウェットな質感の空間処理が施された「Berangére」と「Sleeping」の清涼感は、ウェスト・コーストに肉迫する。

#530 | Rock

Warner Bros. / 1978 / Germany

Schoenherz
What A Night

ドイツのロック・グループ、EinsteinやSupermaxなどで活動したオーストリア出身の鍵盤奏者Richard Schoenherzは、どちらかといえばシンフォニック寄りのプログレッシヴ・ロックに分類されるアーティストだが、ExplorerやQなどのコズミックなクラウト・エレクトロ作品を手掛けたことでも知られるPeter Haukeがプロデュースした本作では、粘り気のある気怠いヴォーカルと、スペーシーなシンセサイザーが独特のグルーヴを生み出す、スローモーなメロウ・ロックを披露している。

#531 | Rock

Invitation / 1979 / Japan

Shigeru Suzuki 鈴木 茂

White Heat

はっぴいえんどやティン・パン・アレーでの活動以降も、プロデューサーとして第一線で活躍するギタリスト鈴木茂が、坂本龍一、高橋幸宏、矢野顕子、後藤次利や小原礼などのトップ・ミュージシャンを招いて制作した作品。ラテン・フュージョンからイージー・リスニングまで、卓越した演奏技術で繰り広げられるインスト・アルバムだが、なかでも素晴らしいのが、唯一のヴォーカル曲「On The Coast」だ。YMOのふたりによるタイトなレイドバック・リズムとメロウな鍵盤プレイにしびれる。

#532 | World

RCA Victor / 1977 / Brazil

Silvio Cesar

Som E Palavras

Azymth、AquariusやHelio Delmiroをはじめ、ブラジルが誇る名ミュージシャンが一堂に会してバックを務めた、シンガーSilvio Cesarの77年作。AzymuthのJosé Roberto Bertramiが奏でるメランコリックなエレクトリック・ピアノ、Silvio Cesarの大人の哀愁漂うムードあふれるヴォーカルと女性コーラスがやわらかに舞う「A Festa」がメロウの極み。賑わうバーの店内を連想させるSEも効果抜群。こういうアダルトな感覚の気持ち良さを知ってしまうと、その先に待つムード・ミュージックの扉が、チラチラと見えてくる。

#533 | World

CBS / 1981 / Brazil

Simone

Amar

Simoneは、本国ブラジルでプラチナ・ディスクを獲得するほどの国民的シンガーだが、とくに80年代以降の作品はあまり正当に評価されていないきらいがある。作品によっては歌謡曲のような楽曲もあるが、現在の耳をもって聴ける秀逸な楽曲も多いのだ。81年に発表された本作でも、バーカッションのきいたグルーヴィなミッド・テンポのリズムと、エレガントなストリングス・オーケストラが多幸感を誘うタイトル曲「Amar」のような、パレアリック感覚あふれるディスコ・ナンバーを披露している。

#534 | Rock

Columbia / 1980 / US

Spinetta

Only Love Can Sustain

アルゼンチン・ロック界のリアル・カリスマ、Luis Alberto Spinettaが、アメリカ進出第1弾として制作した、全曲英語歌詞のソロ・アルバム。以前作やグループ名義の作品でも独特の哀愁を漂わせているSpinettaだが、本作ではよりストレートにアダルトなメロウネスを表現。本来のトゲのある毒気はかなり封印されているが、そのぶん色気が格段に増している。あまり抑揚のないテンションながらグルーヴィかつ感情表現豊かに歌い上げる、スウィートなファルセット・ヴォーカルに酔いしれたい。

#535 | Rock

Raton Finta / 1983 / Argentina

Spinetta Jade
Bajo Belgrano

Invisibleの解散後、ジャズ・ロック／フュージョンへ傾倒していったSpinettaが、その趣向をさらに発展させるべく結成したグループ、Spinetta Jadeによる3作目。本作より加入した鍵盤奏者、Leo Sujatovichによるメランコリックなキーボード・プレイに加え、ゲスト参加したウルグアイのドラマー、Osvaldo Fattorusoのアグレッシヴなパーカッションも素晴らしい、グルーヴィなフュージョン作品となった。疾走感のあるインスト曲でさえ、プンプンと色気が漂っているところがSpinettaの流儀。

#536 | Jazz

Flame / 1979 / Germany

Ströer
Ströer

ドイツのジャズ／ロック・シーンで精力的に活動したベーシストのHans Peter Ströerは、作品ごとにさまざまな趣向をみせ、多岐にわたる音楽性を追求した稀有なアーティストだ。個人名義での唯一作となる本作でも、男女混成ヴォーカルをフィーチャーしたブラック・フィールなジャズ・ファンクや、シンセサイザーを前面に打ち出した80sディスコ・スタイルのダンサブルなサウンドを披露している。「Don't Stay For Breakfast」のアップリフティングなメロウ・グルーヴが極めて絶品。

#537 | World

Polydor / 1980 / Brazil

Tim Maia
Tim Maia

70年にソロ・デビューし、56歳で他界するまで、長きにわたり活動したブラジリアン・ソウルの帝王、Tim Maiaの脂がのりきった時代の作品といえる80年作。初期作品で聴けるような、粗削り感のあるラフなグルーヴも氏の特徴だが、本作に収録の「Nissei Linda, Linda Nissei」や「Nossa Historia De Amor」などで披露している、ゴージャスなアレンジと演奏が冴えわたるアーバン・コンテンポラリーなソウル・サウンドとサウダージのミックスは、やはりこの時代ならではのメロウ・フィールだ。

#538 | Jazz

Electric Bird / 1980 / Japan

Toshiyuki Honda 本多俊之
Easy Breathing

サックス奏者の本多俊之が、和田アキラや大徳俊幸など日本のミュージシャンに加え、アメリカのセッション・ミュージシャンを多数招いて録音した80年作で、本場顔負け、というより本場となんら変わらない高品位なジャズ・ファンク／フュージョンを披露している。ゆったりとレイドバックするリズム・セクションと、ウェットに響くギターやエレクトリック・ピアノ、やわらかなタッチで浮かぶフルートが気持ち良い「Living In A City」のアーバン・メロウなジャズ・グルーヴが、なかでもとくに素晴らしい。

#539 | Rock

Polydor / 1978 / Italy

Umberto Balsamo
Crepuscolo D'Amore

イタリアのシンガー・ソングライター、Umberto Balsamoによる78年リリースの最高傑作。ゆるやかなグルーヴとウェットかつソフトなタッチのシンセサイザー・サウンドが融合した「Crepuscolo」や「Amore」をはじめ、哀愁と憂いに満ちあふれたグルーヴィなアダルト・オリエンテッド・ロックを全編に展開している。翌年に発表される『Balla』では、さらにブライトなAORサウンドへと進化するが、本作は現代のメロウ・バレアリックな解釈に見事にマッチする、絶妙なバランス感覚をもっている。

#540 | Rock

Arc Columbia / 1978 / US

Valerie Carter
Wild Child

James Taylorのバッキング・ヴォーカリストとして注目され、Little FeatやAl Kooperをはじめ、さまざまなアーティストとのデュエットやアルバムへの参加で知られるアメリカのシンガー・ソングライター、Valerie Carterによる78年発表のソロ2作目。1作目にくらべカントリー／フォークの匂いは減衰し、たおやかにレイドバックするブルージーなサウンドと、少し枯れ気味の美しいヴォーカルがマッチした、都会的なメロウネスが漂うマイルドなソウル／R&B路線の作風に進化している。

#541 | Jazz

Mad Minute Music / 1988 / France

Xavier Jouvelet
Blue Congo

Lol CoxhillやPapa Wembaなどの作品にも参加しているフランス人ジャズ・ドラマー／パーカッショニスト、Xavier Jouveletの初リーダー作。マイナーなアーティストながら、ラテン、レゲエやアフリカなどの民族テイストと、クリスタル・クリアなエレクトリック・サウンドを大胆に取り入れた、開放感のあるアーバン・コンテンポラリーなクロスオーヴァー・ジャズを展開した充実の内容。「Ceuf En Clock」で聴くことができる、Sadeを彷彿させるアダルトなメロウネスが非常に素晴らしい。

#542 | World

Philips / 1980 / Brazil

Zizi Possi
Zizi Possi

ハスキーで色気のあるヴォーカルが魅力的な、サンパウロ生まれのイタリア系ブラジル人シンガーZizi Possiが、Gilberto Gil、Edu Lobo、DjavanやJoyceなどの楽曲を取り上げた、80年発表の3作目。ポピュラー・ミュージック色の強い楽曲を中心に収録しているが、アダルト・オリエンテッドな気分を盛り上げるフェンダー・ローズとストリングスのエレガントなアンサンブルがしっとり流れていく、Gonzaguinhaとのデュエット曲「Libertad Borboleta」のムーディなサウダージ感がセクシーだ。

column_04

レコードから見える文化

仕事でヨーロッパのレコード屋を訪れることが多いのだが、先進国のレコード屋はどこも、ドメスティックなものを入手しやすいということを除けば、物量や内容の違いこそあれど、さほど大きな差を感じることはない。だいたいどこも似たような雰囲気である。海外のレコード屋を巡っているなかで印象深かったのは、旧社会主義国だ。

ペレストロイカによって国家が解体される前のロシアでは、国営企業の“Melodia”というレーベルからすべてのレコードが発売されていたのだが、ご存知のとおり、旧ソヴィエトは巨大な連邦国家だ。文化も言語も異なる国々が、長い間共和国として存在していたわけで、外国、とくにアメリカや西欧の大衆音楽の輸入が規制されているという閉鎖的な環境のなか、わずかな情報を糧に生み出された音楽には、とてもユニークなものが多い。

勝手な想像だが、リトアニア、エストニアやラトヴィアといった、ドイツや北欧に近いバルト三国などで生まれた音楽には、妙な感じで西側の影響を受けた面白いものが、たくさんあるような気がする。しかも、すべてのレコードはたったひとつの国営レーベルから発売されていて、さらに言語の壁もあるので、雑多なジャンルが入り乱れたカタログのなかから、善し悪しを見分けるのは容易ではない分、好奇心もそそられるというわけだ。

モスクワを訪れたとき、そんな面白いレコードに山ほど出会えるのではないかと軽く胸を躍らせて、とあるレコード屋へ向かったのだが、そこで見たのは、予想とはまったく違う光景だった。巨大な空間を埋めつくす、途方に暮れるほど膨大な数のレコードのほとんどは、アメリカやヨーロッパから輸入されたものだった。

現地の友人に言わせると、西洋文化が規制されていた時代に青春期を過ごした世代の人たちが、ペレストロイカ以降の急速な経済発展で富裕層となり、若いころに聴くことのできなかった外国のレコードを、今になって買い漁っているというのだ。以前、知り合いのレコード・ディーラーに聞いた、ヨーロッパやアメリカで中古レコードを根こそぎ抜いていくという、“ロシアン・レコード・マフィア”の話を思い出した。

冷静に考えてみれば、日本もさほど変わらないのではないか。状況は違えど、僕たち日本人も外国の音楽に夢中だ。今でこそ“和モノ”なる名目で国産の音楽が注目されることもあるが、全体のマスからみれば微々たるものだろう。海外の音楽好きたちが日本のレコードに熱をあげるのも、ある種のエキゾティシズムの表われで、僕がロシアのレコード屋に抱いていた幻想も同じようなものだ。

pensive

pensive

“ペンシヴ”とはすなわち、“哀愁”。歳を重ねるにつれて、郷愁や望郷の念を感じさせる音楽が心に響くようになるものだが、それは単に、懐古や静穏を求める精神状態の表われというより、切ない感情を呼び起こす美しいメロディや、作家自身の人生が投影された音楽の深い情緒が、心に共鳴するからだろう。本章ではそんな、胸に染み入る“哀愁”の音楽を紹介している。こういう音楽にはやはり、酒がよく似合う。

masterpiece

#543 | Jazz

Trova / 1976 / Argentina

Viejas Raices
De Las Colonias Del Río De La Plata

アルゼンチンのジャズ・ベーシストJorge Lopez Ruizが、75年に発表したソロ作品のタイトルをグループ名に掲げ、翌年にリリースした奇跡の1枚。ウルグアイの土着リズム、カンドンベの要素を多分に取り入れたパーカッシヴなリズムと、シンセサイザーやエレクトリック・ピアノを多用した、メランコリックなサウンドが一体となった、極上のアーバン・ジャズ。女性シンガーAlejandraの色香漂うスキャットが浮遊する「El Viage De Dumpty」のメロウネスが、あまりにも素晴らしい。

#544 | Rock

CGD / 1979 / Italy

Alberto Radius
America Good-Bye

Formula 3やIl Voloなどのプログレッシヴ・ロック・バンドで活動したイタリアのシンガー・ソングライター、Alberto Radiusの79年ソロ作。ソウル、ファンクやディスコなど、アメリカ生まれの音楽をテイスティングした、なかば冗談としか思えない派手な作りの作品だが、心地良くレイドバックするニュー・ソウル・マナーのリズム、ゆるやかなグルーヴを演出しているエレピやストリングスがこのうえなくメロウな「Carifornia Ball...」のような名曲が、ひっそりと隠されている。独特のヴォーカル・ワークにも注目したい。

#545 | Pops

Express / 1976 / Japan

Ami Ozaki 尾崎亜美
Shady

プロデュースを手掛ける松任谷正隆のほか、鈴木茂、林立夫、佐藤博など、ティン・パン・アレー・ファミリーのプロダクションが冴えわたる、洗練されたアルバムでデビューを飾った尾崎亜美。クレジットはされていないが、吉田美奈子や山下達郎も素晴らしいコーラス・ワークを披露している。しかしなんといっても、「私を呼んで」で聴ける、グルーヴを知り尽くした面々が哀愁たっぷりに繰り出す、タイトなレイドバック・ビートにゾクゾクする。鈴木茂のギターがむせび鳴いている。

#546 | Folk

FMS / 1991 / Germany

Anne Wylie
Down To The Sea

ケルト民族の血を引く、アイルランド・ダブリン出身のフォーク・シンガー、Anne Wylieは、伝統的なセルティック・フォークにモダン・ミュージックの要素を融合させたスタイルで、現在も精力的に活動するアーティストだ。ドイツ人ジャズ・ベーシストのManfred Deppeによるプロデュースのもと制作された本作では、アンプラグドなアコースティック・サウンドに、Anne Wylieの可憐なウィスパー・ヴォーカルが相まった、郷愁と慈愛に満ちあふれた美しい世界を堪能することができる。

#547 | World

Top Hits / 1980 / Venezuela

Los Cazadores
Los Cazadores

ヴォーカリストのLuis F. Navarro率いるLos Cazadoresは、70年代初期から現在に至るまで活動する、息の長いベネズエラのグループで、初期のソフト・ロック路線から、時代の変遷とともにアダルトな雰囲気が増していったようだが、80年発表の本作では、日本でいうところのティン・パン・アレーのような、非常に引き締まったレイドバック感のあるグルーヴィな演奏による、ラテン風アーバン・メロウ・サウンドを披露している。もはやムード歌謡の域だが、この哀愁は病みつきになる。

#548 | Jazz

Yedermann Productions / 1981 / Austria

Christine Jones
Jonesmobile

Count Basieも絶賛したらしい、オーストリア・ウィーンの女性ヴォーカリスト、Christine Jonesの1作目。タイトルに掲げた自身のビッグ・バンドJonsmobileを従え、ジャズ、ソウル、R&B、ブルースや、トラッド・ミュージックなど、さまざまなスタイルの楽曲を演奏しているが、なかでも「The Sea」が素晴らしい。押し寄せる波の音、切なく、そしてやさしく響きわたるピアノとホーン、Christineのハスキーでアダルトなヴォーカルが浮遊する、極上のディープ・ミュージックだ。

#549 | Jazz

Edigsa / 1979 / Spain

Esqueixada Sniff
Ocells

スペイン・バルセロナのジャズ・ロック・グループ、Esqueixada Sniffの79年作。軽やかにグルーヴするラテン・パーカッションとエレガントなストリングスをフィーチャーした、ラテン・クロスオーヴァーからジャズ・ファンクまでを展開した名盤だが、ピアノとスキャットのユニゾンがムーディなタンゴ・ジャズ「Laura」、エフェクティヴに処理されたエレクトリック・ピアノとソプラノ・サックスがメランコリックに浮遊する「Amanecer En Un "Fundill" Astral」の、とろけるような哀愁が素晴らしい。

pensive

#550 | World

Polydor / 1986 / Portugal

Eugénia Melo E Castro
Eugénia Melo E Castro

母国だけにとどまらず、本家ブラジルでもその実力が評価されているポルトガルの歌姫、Eugénia Melo E Castroの3作目。彼女がこよなく愛するミナスの名音楽家、Toninho HortaやWagner Tisoなどが全面的にサポートしたリオ・デ・ジャネイロ録音作品。まろやかに響きわたるヴィオラとウッド・ベースのやわらかな旋律をバックに、しっとりと歌い上げる色香漂うヴォーカルがどこまでも美しい。抒情性あふれる洗練されたアレンジと演奏による、アーバン・サウダージな世界。

#551 | Rock

Invitation / 1981 / Japan

FAD
FAD!

山下透と橋本晋が結成したユニット、ファッドのデビュー・アルバムにして唯一作。YMO経由のシンセ・ポップを軸に、ディスコティックからフュージョンまで、広角的な視野をもった音楽性を感じさせる興味深い1枚だが、「Rufen Sie An」に漂う、弱冠22歳のコンビが作ったとは思えないレイドバック感と哀愁は、バックをサポートする村上“ポンタ”秀一や松原正樹など、酸いも甘いも知り尽くすトップ・スタジオ・ミュージシャンたちのタイトな演奏によって生まれた、ツボを押さえたグルーヴの賜物。

#552 | World

Relax-In / 1987 / Lebanon

Fairouz
Maarifti Feek

50年代から現在まで長きにわたり活動する、レバノン伝統音楽を正当に継承する国民的シンガー、Fairouzが87年に発表した異色作。以前作同様、レバノンの名コンポーザー、Zaid Rahbaniが作曲からレコーディングまでを手掛けている。ジャズをはじめ、さまざまな要素を大胆に取り入れ、オーケストラを導入した斬新なアレンジによる独特のサウンドと、妖艶かつフローティングなFairouzのヴォーカルが見事に相まった、唯一無二のネオ・フォークロア・ミュージックを完成させた名盤である。

#553 | World

Moshé-Naim / 1970s / France

Franck Valmont Et Syncro Rhythmic Eclectic Language
Franck Valmont Et Syncro Rhythmic Eclectic Language

カリブ海西インド諸島に浮かぶフランス領の島、マルティニークのシンガーで、画家やコメディアンの顔ももつアフロ・カリビアン、Franck Valmontのアルバム。70年代前半の作品と思われる。とにもかくにも、バックを務めるSyncro Rhythmic Eclectic Languageの演奏が素晴らしい。土着的なパーカッションのリズム、愁いを帯びたエレピや歪んだエレクトリック・ギターに、ラテン／ブラジリアン・フレイヴァーも加味したカリビアン・ジャズ。Franck Valmont のヴォーカルも哀感あふれる。

#554 | Jazz

Cerise / 1983 / France

Françoise Joly
Opus 4756

80年代に3枚のアルバムを残しているフランスの女性鍵盤奏者、Françoise Jolyの1作目。タイトに引き締まったリズム・セクションとアタックの強い鍵盤プレイが疾走するテクニカルなクロスオーヴァー・ジャズから、アダルトな雰囲気漂うムーディなコンテンポラリー・ジャズまでを展開しているが、絹糸のようにか細いウィスパー・ヴォーカルとシンセサイザーのユニゾンが、ヴォコーダー・ヴォイスのような効果を生み出している「Milliards D'étoiles」で描かれる、切なくも美しい郷愁のサウンドスケープに注目したい。

#555 | Rock

CBS / 1977 / Venezuela

Frank Quintero Y Los Baizehaguaos
Travesia

60年代から現在まで活動を続ける、ベネズエラのヴェテラン・シンガー／コンポーザーのFrank Quinteroが、自身のグループLos Balzehaguaosを率いて70年代中後半に制作した3枚のアルバムは、どれも素晴らしい。2作目にあたる本作で聴けるのは、Litto NebbiaやCharly Garcíaなどのアルゼンチン勢にも共通する、南米アーティスト特有の情緒あふれるメロディ・センスと、エッジのきいたプログレッシヴなジャズ・ファンク・サウンドが渾然と一体化した、哀愁のサイケデリクス・ワールド。

#556 | Jazz

Pantagrama / 1987 / Mexico

Gerardo Batiz
Bugambilia

メキシカン・ジャズ・シーンで活躍する鍵盤奏者、Gerardo Batizによる87年発表のリーダー作。サルサ、マンボなど、ラテン音楽のエレメンツを反映した、清涼感のあるトロピカル・フュージョンを展開しているが、アルゼンチン・タンゴに共通する慕情性を感じるヴォーカル曲「Azul Prohibido」や、Pat Methenyファミリーの一員、Pedro Aznarにも通じるメランコリックなインスト・フュージョン「Satin」など、スロー・テンポの楽曲で聴ける、哀愁のメロウネスが素晴らしい。

#557 | Jazz

Atlantic / 1975 / Germany

Gerry Mulligan, Astor Piazzolla
Tango Nuevo

アルゼンチンのバンド・ネオン奏者、Astor Piazzollaは、多ジャンルのさまざまな要素を吸収し昇華しながら、タンゴに新しい息吹きを与えた、言わずと知れた現代タンゴの巨匠。アメリカの名ジャズ・サクソフォニストGerry Mulliganと共演し、イタリアで録音された本作は、ソフィスティケイトされたジャズのエレメントとの融合によって、さらに深みを増したタンゴ独特の慕情を体験することができる名盤だ。イタリアのジャズ・ミュージシャンたちがバックを固めているところも、非常に興味深い。

#558 | Rock

Amiga / 1979 / GDR

Hansi Biebl Band
Hansi Biebl Band

旧東ドイツのブルース・シンガー、Hansi Biebelをリーダーとするグループの79年作。75年に録音された音源を収録した作品が2009年にリリースされているが、リアルタイムで発表された作品としては唯一のアルバムとなる。ボトム・ローなリズム・セクションにギターやブルース・ハープが絡む、シンプルなスタイルのブルース・ロックだが、冒頭曲「Es Gibt Momente」の、素朴ながらも美しいハーモニーを聴かせるコーラス・ワークと、ウェットな音色のギター・サウンドに、思わずグッとくる。

#559 | Rock

Discos CBS / 1975 / Argentina

Invisible
Durazno Sangrando

アルゼンチン・ロック界の至宝、Luis Alberto Spinettaが組んでいた伝説的バンドのひとつ、Invisibleの75年作で、長尺のトラックを含む5曲構成の作品。趣向的にはプログレッシヴなジャズ・ロックといいたいところだが、そこは一筋縄ではいかず、多様な曲調の楽曲にさまざまな感情をインプットしながら展開していく、都会的でありながらもサイケデリックな世界観は、やはりただものではない。哀愁を帯びた独特のメロディ・センスや洗練された演奏も、非常に研ぎすまされている。

#560 | Easy Listening

EMI / 1980 / Italy

Jean Pierre Posit
Magie D'Amour

名前からするとフランス人と思われるが、イタリアで活動したコンポーザーのようだ。エモーショナルなディスコ・トラックなどもやっているが、基本的にはブラスとストリングスによるオーケストラルなサウンドのムード・ミュージックを収録している。Silvettiのようなコッテリとした哀愁だが、ソウル・マナーのレイドバック・リズムに、シンセサイザーとオーケストラのゴージャズなアンサンブルが、エレガントに哀愁の音世界を描きあげる「Shopping Au Boulevard」が、聴けば聴くほどイイ。

#561 | Vocal

Koala / 1987 / Germany

Jenny Evans
Whisper Not

Jimmy Woode、Billy Brooksとのトリオや Art Farmerとの共演で知られるオーストラリアの名ジャズ・ピアニスト、Fritz Pauerが演奏とアレンジで参加した、ドイツのマイナー・ジャズ・シンガーJenny Evansによる唯一のアナログ作品。トゲのないやわらかなスウィングが心地良くカラダをゆらすボッサ・ジャズ「Love's A Symphony」など、円熟したグルーヴを披露するバックのモーダルな演奏に、正当派ながら、ハスキーで美しい歌声を聴かせてくれるジャズ・ヴォーカル・アルバム。

#562 | Jazz

CBS / 1981 / Norway

Jon Eberson Group
Jive Talking

ノルウェーのジャズ・シーンで活躍するギタリスト、Jon Ebersonによる81年発表の初リーダー作品。開放的な空気感が心地良いアーバン・メロウ・フュージョン「Jive Talking」をはじめ、洗練された演奏とアレンジが光る、透明感あふれるクロスオーヴァー・ジャズを収録した知られざる名盤。「It Was」は、エレクトリック・ピアノやギターのウェットな質感と、女性ヴォーカリストSidsel Endersenの少しハスキーで可憐な歌声がしっとりと心に染みてくる、宝石のようなジャズ・バラード。

#563 | World

CBS / 1974 / Spain

Juan Carlos Calderón Y Su Taller De Musica
Juan Carlos Calderón Y Su Taller De Musica

60年代より作曲家として活動し、スペインのポピュラー音楽界に多大なる貢献をしているJuan Carlos Calderónが、74年に発表したソロ作品。ソウル・ミュージックの影響を受けたサウンド・メイクに、スペイン特有のラテン・フィールが絶妙なバランスでマッチした、グルーヴ感あふれる楽曲を収録するほか、アコースティック・ギターとスウィートなコーラスによる、哀愁に満ちたアンサンブルが美しいスロー・ナンバー「Oh My Guitar」のような、とろけるほどメロウな楽曲もあり。

#564 | Jazz

American Clave / 1987 / US

Kip Hanrahan
Days And Nights Of Blue Luck Inverted

ブロンクスで生まれ育ったKip Hanrahanは、幼いころから接していたプエルトリカンたちの影響で、ラテンのリズムがカラダに染み込んでいるようだ。さらにブルースやR&Bなどのセンスも抜群、アヴァンなアプローチを試みながらも、都会的なクールさを感じさせる。ある男と女の物語を音楽で綴った本作でも、ラテン・フィーリングとアーバンなメロウネスがゆるやかに溶け合った、洗練されたジャズ・グルーヴを聴くことができる。「Lisbon, Blue Request」の、夜霧に漂うような哀愁が格別だ。

#565 | Pops

A&M / 1972 / US

Lani Hall
Sun Down Lady

Sergio Mendes & Brasil '66のメンバーとしても活躍したアメリカ人シンガーLani Hallが、夫でもあるコンポーザーHerb Alpertの全面バックアップのもと制作した、72年発表のソロI作目。ゆったりとリズムを刻むマイルドなタッチのドラム、オルガンやアコースティック・ギターの涼しげな旋律に、語りかけるように歌い上げるLaniのヴォーカルが、心の奥底まで染みてくる、愛に満ちあれたメロウ・ソフト・ロック「Love Song」は、本家Lesley Duncanをも凌駕する名カヴァーだ。

#566 | Rock

Trova / 1976 / Argentina

Litto Nebbia
Bazar De Los Milagros

60年代から現在に至るまで、長きにわたり高品位な作品を発表し続けているアルゼンチンのコンポーザー、Litto Nebbiaが生み出すメロディは、琴線を刺激する独特の哀愁を感じさせる。そんな卓越した作家性が最も顕著に表われているのが、本作の冒頭を飾る表題曲「Bazar De Los Milagros」ではないだろうか。涼しげな風が頬をかすめるように微細な旋律を紡ぎだすアコースティック・ギターに、エレクトリック・ピアノとシンセサイザーの愁いに満ちたサウンドが郷愁を誘う、7分50秒の旅路。

#567 | World

Interdisc / 1982 / Argentina

Luciana
Nuevo Día

Lucianaは、いわゆるポップス／フォーク路線の女性シンガーと思われるが、本作はアルゼンチンの天才アーティスト、Litto Nebbiaがプロデュースを手掛けているだけあって、その完成されたサウンドはひと味もふた味も違う。OpaのOsvaldo Fattorusoをはじめ、アルゼンチン／ウルグアイの凄腕ミュージシャンがバックを固め、卓越したテクニックで洗練された演奏を披露している。Ruben Radaの作曲による「La Gran Ciudad」では、エモーショナルなクロスオーヴァー・グルーヴが炸裂する。

#568 | Rock

Dischi Numero Uno / 1974 / Italy

Lucio Battisti
Anima Latina

ポピュラー・ミュージック界にとどまらず、プログレッシヴ・ロック・ファンやディスコ・フリークスまでをも虜にした、イタリアの偉大なるカンタウトゥーレ、Lucio Battistiが74年に発表した作品。ジャズ、フォーク、ロックやソウルなど、多様なスタイルを吸収しながらも、統一性のある独自の世界観をもった名盤だ。夕日に照らされてキラキラと輝く、地中海の美しい光景が目に浮かぶ、郷愁と哀愁のサウンドスケープが描かれた冒頭曲「Abbracciala Abbracciali Abbracciati」が、心に染みる。

#569 | Rock

Moon / 1983 / Japan

Makoto Matsushita 松下 誠
Quiet Skies

松下誠は、アレンジャー／シンガーとしても多岐にわたり活躍する、日本トップ・クラスの技巧派ギタリストだ。重要なポジションを担っていたスタジオ・ミュージシャン・グループ、AB'sやパラダイム・シフトの作品でも、その卓越したギター・プレイやコーラス・ワークを披露しているが、ソロ2作目の本作ではさらに感性が研ぎすまされ、独自の世界観を追求した作品となった。フュージョンとプログレッシヴ・ロックが溶解したドラマティックな音楽が、極めて透明度の高いサウンドとともに音場に出現する。

#570 | Jazz

Blackbird / 1981 / Germany

Margo
Margo

ドイツのマイナー・ジャズ・ロック・グループ、Margoの唯一作。リズミカルに跳ねるサンバ・リズムに、ピアノやフルートがブリージンに響くブラジリアン・クロスオーヴァーから、グルーヴィなファンキー・ジャズ・ロックまで、質の高い演奏による開放感のあるサウンドを展開した好作だ。AshraのHarald Grosskopfもゲスト参加したソロ作をリリースしている女性シンガー、Else Nabuのハスキーで可憐なヴォーカルがソウルフルなエモーショナル・フュージョン「Don't Be Cool」が、なかでも秀逸。

#571 | Rock

Appaloosa / 1984 / Italy

Max Meazza
Better Late Than Never

Puebloというロック・バンドで活動していたMax Meazzaは、81年のソロ・アルバム発表以降、コンスタントに作品をリリースし続けているイタリア人シンガー・ソングライターだ。84年発表の本作は、ムーディな空気感をキープしながらソフトに歌い上げる、男の哀愁がプンプンと漂うアダルト・オリエンテッドなブルース・ロックを展開した渋い1枚。ほどよくテンションを抑えたメロウなグルーヴとともに切ない愛を歌った「Cold As Ice」がとくに素晴らしい。スリーヴの写真もまた渋い。

#572 | Jazz

Estopi / 1989 / Spain

Medianoche
Gracia

スペイン・バルセロナのマイナー・ジャズ・ロック・カルテット、Medianocheが89年に500枚限定でリリースしたプライヴェート・アルバム。自宅録音のため決して良い音質とはいえないが、内容は非常に素晴らしく、プログレッシヴ・ロックばりにシンフォニックな展開を見せる構成、スパニッシュ・ニューエイジに近似するメランコリックなメロディ・ワークとスペーシーなシンセサイザーが、独特の世界観を創造している。この叙情性が個人的にスペインものに惹かれる理由のひとつ。

#573 | World

Color / 1981 / Venezuela

Melao
Nuestra Magia...

ベネズエラのマイナー・グループ、Melaoの81年作。同国の現地音楽色の強いラテン・ミュージックだが、ジャズのイディオムがかなり色濃く反映されていて、いたって洗練された演奏によるコンテンポラリーなサウンドだ。Litto NebbiaやViejas Raicesなどに代表されるアルゼンチン勢に共通するトロピカルなメロウ・フィーリングと、ブラジルのHermeto Pascoalを彷彿させる、プリミティヴかつ精神性の高いネイティヴ・サウンドが一体となった、なかなか出会うことのないタイプの音楽だ。

#574 | Jazz

Zekle Music / 1983 / Haiti

Mushi & Lakansyel
Koté Ou?

Kassavとの親交も深いハイチのグループ、Zekleのメンバーでもある鍵盤奏者、Muschi Widmaierが残した珠玉のフュージョン作品。カリビアンの要素も多分に含まれているが、陽気なトロピカルではなく、非常に秀逸なアレンジと洗練された演奏によるシリアスなクロスオーヴァー・ジャズを披露している。実弟Joel Widmaierのヴォーカルも素晴らしい表現力で、音場の空気を一変させるほど魅力的。音質もハイチ盤とは思えないほど繊細で美しい。突きつめた精神性をもつ音楽はどの国にも存在するものだ。

#575 | World

RGE Discos / 1974 / Brazil

Naire
Naire

ブラジルのシンガー・ソングライター、Naireが残した唯一作にして名盤。ピアニストのAntonio Adolfoをはじめ、ブラジルのトップ・ミュージシャンがバックを固めるほか、Paulinho Tapajósがほとんどの楽曲でNaireと合作している。フラワー・ムーヴメントの幻影を感じるアコースティックなソフト・ロックやフォークを終始展開しているが、オーガニックなパーカッション群やヴィオラ、静かに佇むフェンダー・ローズのウェットな音色が美しい、「Um Dia Azul De Abril」の郷愁感が格別。

#576 | Rock

DG Discos / 1983 / Argentina

Nito Mestre
Escondo Mis Ojos Al Sol

Charly GarcíaとともにSui Generisを結成し、その後も自身のバンドやソロとして長きにわたり活躍した、ブエノスアイレスのシンガー・ソングライター、Nito Mestreの83年作。奇才Mono Fontanaをはじめ、錚々たるメンバーが全面バックアップするほか、作曲陣もCharly GarcíaやSpinettaなど、ものすごい顔ぶれ。哀愁と叙情に満ちあふれたソングライティングとテクニカルなパフォーマンスが冴えわたる、南米アダルト・オリエンテッド・ロック最高峰のひとつといっても過言ではない、歴史的名盤。

#577 | Rock

Discomoda / 1975 / Venezuela

Ofrenda Vytas Brenner
Jayeche

ドイツ生まれのベネズエラ人ミュージシャン、Vytas BrennerによるOfrenda名義の75年作。同国のトラッド・ミュージックやラテンのリズムを取り入れ、さらにシンセサイザーによるスペーシーなサウンドを大胆に導入した、シンフォニックな趣向のプログレッシヴ・ロックを得意とするアーティストだが、若き日に活動をともにしたスペインのピアニスト、Jordi Sabatésの名作『Ocells Del Més Enllà』に通じるメロウ・フュージョン「Aliva」のような情緒豊かな楽曲も天下一品。

#578 | Jazz

Jupiter / 1982 / Germany

Oktagon
Orientation

Klaus DoldingerのPassportなどでも活動した鍵盤奏者、Hermann Weindorfを中心に結成されたドイツのジャズ・ロック・グループ、Oktagonの2作目にして最終作。なんとも薄気味悪いアートワークだが、サウンドは極めてブリージン。技巧的でありながらも難解なインタープレイに走ることはなく、軽やかでオーガニックなジャズ・ロック／フュージョンを披露した好作である。「I Mag Di」は、Pedro AznarやMark EganなどのPat Metheny Group一派にも通じる、心地良い飛翔感をもった名曲だ。

#579 | Jazz

Pläne Jazz / 1978 / Germany

Open Music
Relaxing Waves

BrainstormやOrexisのドラマー／パーカッショニストのJoachim Koinzerを中心とするドイツのジャズ・カルテット、Open Musicの1作目。ブラジリアン・パーカッションやリコーダーのあたたかいサウンドが陽気にゆれる「Aperto」をはじめ、トロピカルなエスニック・ジャズからエッセンシャルなコンテンポラリー・ジャズまでを披露した作品。おだやかな波が浜辺に打ち寄せては消えてゆくように、流麗に旋律を重ね合う哀愁の表題曲「Relaxing Waves」のソフトなフロート感がとても心地良い。

#580 | World

Vanilla / 1979 / Italy

Ornella Vanoni
Oggi Le Canto Cosi

イタリアを代表するカンタンテのひとり、Ornella Vanoniの「Oggi Le Canto Cosi」シリーズI作目。ナポリ歌謡からジャズ、ボサ・ノヴァまで、さまざまな音楽を昇華した洗練されたスタイルで知られるシンガーだが、本作でもそのエレガントな個性が遺憾なく発揮され、「Cercami」や「Tu Si' 'Na Cosa Grande」では、エレクトリック・ピアノやストリングス・アンサンブルの艶やかなサウンドと、Ornellaの味のあるヴォーカルが色香漂う、アダルト・オリエンテッドなメロウ・グルーヴを披露している。

#581 | Jazz

SG Discos / 1982 / Argentina

Pedro Aznar
Pedro Aznar

アルゼンチン・ロック界の最重要グループ、Serú Giránで活躍したベーシスト、Padro Aznarがグループ解散後に発表したソロI作目。Mono Fontanaが参加している。Charly Garcíaとの共同作業で培われたアルゼンチン・ロック特有の情緒漂うメロディ・センス、Jaco Pastoriusに多大な影響を受けた旋律重視のベース・パフォーマンス、その後親密に交流をもつPat Metheny やToninho Hortaに共通するドラマティックな構成とアレンジが冴えわたる、哀愁のメロウ・フュージョン・アルバム。

#582 | Jazz

Hispavox / 1980 / Spain

Pepe Sánchez En Whisky Y Jazz
Signo De Cáncer

日本でもお馴染みの大御所ラテン・シンガー、Julio Iglesiasの作品にも参加しているスペイン人ドラマー、Pepe Sánchezのリーダー作品。ゴージャスなブラス・サウンドとスペーシーなシンセサイザーがディスコティックなブギー・ファンクをはじめ、ロックやソウルを吸収したクロスオーヴァー・サウンドを多数収録した充実の内容だが、George DukeやLonnie Liston Smith顔負けのディープ・スペースなメロウ・ジャズ・ファンクを展開した「Influencias」が、群を抜いて素晴らしい。

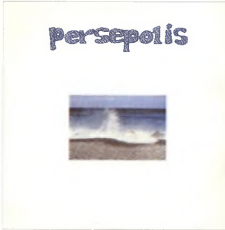
#583 | Jazz

Berman Internacional / 1989 / Spain

Pere Soto Grup
Coincidencias

Pere Sotoは、ジプシー・スウィングの創始者Django Reinhardtのトリビュート・セッションにもたびたび参加している、ジプシー・ジャズに大きな影響を受けたスペインのギタリストだ。89年発表の本作では、女性シンガーGemma Plansの透明感のあるスペイン語ヴォーカルをフィーチャーし、ラテン・フィーリングのリズムと湿り気のあるエレクトリックなサウンドの相性が抜群な、瑞々しいムード・ジャズを展開しているが、突出した洗練のなかにジプシー音楽特有の放牧的な哀愁が漂っている。

#584 | Jazz



RTB / 1986 / Yugoslavia

Persepolis

Persepolis

スロヴェニアン・ジャズ・シーンのトップ・ミュージシャンである、ドラマーのDragan GajicとピアニストのDejan Pecenkoに、オーストリア人ベーシストのPeter Herbertが加わったジャズ・トリオ、Persepolisの唯一作。さらっとした感触の、清涼感のあるモダン・ジャズだが、終始おだやかな哀愁が漂っている。アートワークに掲げられた写真のごとく、誰もいない砂浜で、波が作り出すさまざまな表情を眺めているような、澄みきったサウンドスケープが音場に出現する、非常に美しい作品だ。

#585 | Jazz

Polydor / 1978 / Germany

Peter Herbolzheimer Rhythm Combination & Brass

I Hear Voices

ヨーロッパの名ジャズ・ミュージシャンが一堂に会したビッグ・バンドの78年作。熱くブロウするブラス・アンサンブルに躍動感あふれるリズムとギターが疾走するハイ・テンションなジャズ・ファンクから、アーバン・メロウな雰囲気漂う洗練されたジャズ・グルーヴまでを収録した名作。しかしここで注目すべきは、深い霧に包まれたようなミスティックな空間に、女性コーラスのやわらかなスキャットが静かに浮かぶ、静寂の晩秋を表現したディープ・アトモスフェリック・ジャズ「November」だ。

#586 | Jazz

RTV Ljubljana / 1979 / Yugoslavia

Peter Ugrin

Samo Muzika

数々のユーゴスラヴィアン・ジャズ・プロジェクトで活動した、スロヴェニア人ジャズ・トランペッター、Peter UgrinことPero Ugrinが79年に残したリーダー・アルバム。自身も参加していたグループ、Septemberのメンバーをはじめ、ユーゴスラヴィアのジャズ・ミュージシャンが多数参加。軽快にレイドバックするジャズ・ファンクから、オリエンタルな香り漂うエキゾチックなディープ・ジャズまで、非常に研ぎすまされた感性による上質なジャズ・グルーヴを全編にわたり収録した名作。

#587 | World

Imaginaca / 1980 / Brazil

Ponta De Rama

Ponta De Rama

ブラジルのマイナー・ヴォーカル・グループ、Ponta De Ramaが80年に発表した自主制作盤。ムーディなテナー・サックスとピアノから幕を開け、アコースティック・ギターのしなやかな旋律とストリングス・セクションのエレガントなアンサンブルをバックに、独特の味わいがあるマイルドなヴォーカルが哀愁のサウダージを紡ぐ「Indigesto」ほか、スムース・ジャズや室内音楽の要素を多分に含んだ、メランコリックな趣向のソフト・ブラジリアン・ミュージック作品。

#588 | World

Philips / 1977 / Brazil

O Quarteto
Antologia Da Bossa Nova - 20 Anos Depois

ブラジリアン・コーラス・グループ、O Quartetoによる77年発表の奇跡のアルバム。ボサ・ノヴァ誕生20周年を記念して制作された1枚で、全編にわたってボサ・ノヴァ史を彩った名曲の数々をカヴァーしている。演奏、コーラス、編曲、録音、編集、すべてにおいてパーフェクトな仕上がりで、とくに都会的なセンスと哀愁を兼ね備えた浮遊感のあるコーラス・ワークや、Cesar Marianoによるキーボード類の使い方が半端なく素晴らしく、ブラジル・ポピュラー音楽の成熟度を物語っている。

#589 | Jazz

Zarepta / 1977 / Norway

Radka Toneff
Winter Poem

Arild AndersenやJon Christensenといった、ノルウェーのジャズ・シーンで活躍するミュージシャンがバックを固めた、ジャズ・シンガー／コンポーザー、Radka Toneffのソロ1作目。ストリングス・アンサンブルをフィーチャーしたエレガントなアレンジによる演奏と、さまざまな感情を綴ったリリックを、情緒あふれる表現で歌い上げるヴォーカルが、ノルウェーの美しい雪景色のなかにゆっくりと溶けていく。Radkaはこの後、2枚のアルバムを発表するが、82年にわずか30歳の若さで他界してしまう。

#590 | World

Disques Debs / 1976 / France

Les Rapaces
Les Rapaces

70年代にフランスのアンティレス系レーベルDisques Debsから数枚のアルバムをリリースしている、ブラック・カリビアンによるグループ、Les Rapacesの76年作。ほっこりとした、あたたかみのある哀愁が漂いながらも、軽やかなグルーヴを感じるズークを中心に、ナイヤビンギのような土っぽさとアダルト・オリエンテッドな哀愁が相まったグルーヴがなんとも気持ちいいチャランガや、南国の雰囲気たっぷりのムーディなスロー・ナンバーなど、オッチャン殺しのトロピカル・ミュージックを収録。

#591 | Rock

EMI / 1983 / Italy

Richie Havens
Common Ground

ウッドストック・フェスティヴァルにも参加したアメリカのブラック・フォーク・シンガーRichie Havensが、Pino DanieleやTullio De Piscopoをはじめとするイタリアのミュージシャンとともに制作した、AOR路線の名盤。アコースティック・ギターとエレクトリック・ピアノの愁いを含んだサウンドをバックに、Pino Danieleとの素晴らしいかけ合いを披露する「Gay Cavalier」が名曲として知られるが、Richie Havensのハスキーな低音ヴォイスが哀愁を帯びる「Leave Well Enough Alone」に胸を強くしめつけられる。

#592 | World

Discos CBS / 1983 / Argentina

Rodolfo Mederos

Buenas Noches, Paula

Rodolfo Mederosは、Astor Piazzollaを継承するコンテンポラリー・タンゴの名バンド・ネオン奏者だが、70年代以降、ロックに傾倒した時期があり、83年に発表された本作でも、ジャズ・ロックやプログレッシヴ・ロックの要素を非常に強く匂わせる。アルゼンチンの優れたジャズ・ミュージシャンたちによる確かな演奏と、哀愁を帯びたバンド・ネオンのはかないメロディが美しく融合し、シンフォニック・ロックのごとくアグレッシヴに展開する、テクニカルな楽曲を披露している。

#593 | World

Raviol / 1985 / Uruguay

Ruben Rada

La Yapla Mata

ウルグアイの土着音楽、カンドンベの名手である打楽器奏者／コンポーザー、Ruben Rada。時代とともにさまざまなスタイルを取り入れながら、常に新鮮な音楽を創造してきたウルグアイ・ファンクの帝王が、クロスオーヴァーなジャズ・フュージョンを展開した85年発表の作品。カンドンベのリズムを軸に、盟友Hugo Fattorusoが奏でるエレピのエレガントなソロと、スペーシーなシンセ・パッドがミステリアスにマッチングした、浮遊感あふれるメロウ・グルーヴ「Te Parece」が絶品だ。

#594 | Rock

EMI / 1983 / Portugal

Rui Veloso

Guardador De Margens

Rui Velosoは、ギターの名手としても知られるポルトガルのロック・シンガーで、ブルース、カントリー／フォークやロックンロールなどをルーツに、どちらかといえばアメリカンなノリのロックを得意とするミュージシャンだが、とくに初期作品を聴いていると、ポルトガルの風土に根ざした深い精神性を感じさせる。本アルバムの最終曲として収録されている表題曲「Guardador De Margens」は、テナー・サックスとデュエットした弾き語りで、オレンジ色に輝く港町ポルトの旧市街地の夜景をイメージさせる哀愁のバラードだ。

#595 | World

RCA / 1979 / Brazil

Wilson Simonal

Se Todo Mundo Cantasse Seria Bem Mais Fácil Viver

60年代初期より第一線で活躍するブラジルのシンガー、Wilson Simonalの79年作。流麗なジャズ・アレンジが施された、Chico Buarqueのスコアによるサンバ・ソウル「Tem Mais Samba」をはじめ、オーケストラをフィーチャーしたゴージャスなサウンドとソウルフルなヴォーカルがマッチした、Tom Jonesばりにアダルトな装いのMPBを披露している。ストリングス・セクションとパッキング・ピアノのアンサンブルが美しいアーバン・メロウ・グルーヴ「Minha」に心を奪われる。

column_05

雑音と快適音

これといった理由はないのだが、最近は電車のなかなどで音楽を聴くことが減ってきた。手持ち無沙汰でぼーっとしていると、いろいろな音が聴こえてくる。モーターの上昇音と下降音、車輪とレールの摩擦音、踏切警報機の音、車内アナウンス、乗客の話し声、周期的にループを繰り返す何かの機械音。長年見続けている数少ないTV番組のひとつ、『タモリ倶楽部』にときどき登場する鉄道愛好家たちは、路線によって異なる、鉄道にまつわる音を聴き分けて楽しんでいるらしい。

現代音楽の分野に“ミュージック・コンクレート”というものがあるが、これは、自然界の音や人工的に発せられた音などを録音し、編集を加えてひとつの作品として仕上げる、実験的な具体音楽のひとつで、現在の音楽シーンで広く用いられている、サンプリング手法の基礎的な概念といえるものだ。鉄道音も素材のひとつとしてよく用いられている。しかし、ミュージック・コンクレートの鑑賞と鉄道愛好家たちの決定的な違いは、彼らは人為的な編集が加えられていない、偶発的に発生した原音をまとめて楽しんでいるところにある。発車のベルを鳴らしたのは駅員の意図だが、それは単なる警告音であって、彼らを楽しませるために鳴らしたわけではない。チャンス・オペレーションを意識するのは、聴き手となる鉄道愛好家自身である。アヴァンギャルドだ。

現実の環境音を鑑賞するという意味では、都市生活のなかで鳴っている騒音を聴くことも、自然のなかで鳥や虫の鳴き声、波や風の音を楽しむことも、基本的には同じである。僕はたまに、窓の外から聴こえてくる鳥や虫の鳴き声を、車や電車の走行音などと一緒に鑑賞しているのだが、それを騒音や雑音だと思ったことはない。しかし、何かほかのことに集中しているとき、たとえば音楽を聴いているときには、そのような音を不快に感じることがある。部屋のなかの環境音もそうだ。換気扇や冷蔵庫の音、旧型のTVから聴こえてくる高周波ノイズ、気になりだしたら際限ない。

雑音と快適音の境目はどこにあるのだろう。日本における環境音楽の第一人者である、故・吉村弘氏は、自然と隔離していく都市環境のなかでの耳の復権を目指して“サウンドデザイン”を唱えた。意識次第で、音はいかようにも感じられる。これは音楽についても同じだ。音、音楽に対する意識を少し変えるだけで、世界は大きく広がるものだ。

groovy

groovy

他章にくらべ桃源郷的要素は影を潜めるが、音楽が見せる多様な表情を楽しむ本書のキーワードとして、“グルーヴ”を外すわけにはいかない。ここではダンス・ミュージックに限らず、さまざまなスタイルのグルーヴを取り上げている。“グルーヴ”とは何かを明確に表現することはとても難しいが、レイドバックするビートが生み出す、ある種のリズミカルなヴァイブレーションがカラダに伝わる音楽、とでもいえばいいのだろうか。

masterpiece

#596 | New Wave

Alfa / 1980 / Japan

Sandii
Eating Pleasure

サンディー＆ザ・サンセッツでの活動前に、細野晴臣による渾身のプロデュースのもと制作されたデビュー・アルバム。ハード・エッジなロッキン・テクノ・ポップ「Idol Era」、ウェットなエレクトロニック・サウンドにダブワイズなミックスを施したラヴァーズ・レゲエ「Drip Dry Eyes」、スペーシーな音像処理によるスローモー・ダンサー「Zoot Kook」など、時代の先の先をいく細野晴臣の先鋭的なポップ・センスが、サンディーのエキゾチックなエロティシズムをよりいっそう際立たせている。

#597 | Pops

Ariola / 1979 / Spain

Angela Carrasco
Quererte A Ti

スペインを拠点に活躍したドミニカ共和国出身のシンガー、Angela Carrascoの79年作で、タイトル曲の「Quererte A Ti」は、アメリカやヨーロッパでビッグ・ヒットを飛ばしたようだが、いわゆる普通のポップスで、注目はそこではない。パンチのきいたミッド・テンポのリズム、スペーシーなシンセサイザーとコケティッシュなヴォーカルがパワフルに躍動するブギー・ディスコ「Ibiza」が、本作最大の目玉だ。某国の中古屋で何気なく試聴したとき、思わず悶絶してしまった。偶然が呼んだ奇跡の出会い。

#598 | New Wave

Celluloid / 1981 / France

Artefact
Agit 'Pop

70年代後半から80年代前半にかけて、フランスのニューウェーヴ・シーンで活動したグループの唯一のアルバム。いわゆるシンセ・ポップだが、まったく一筋縄ではいかない。生ドラムとリズム・ボックスが交錯するタイトなビートと、ウェットな肌ざわりのトリッピーなシンセサイザー、スリージーかつレイジーなヴォーカル。ポスト・パンクとエレクトロの融合という意味では、Malcolm McLarenよりもこちらが先か。「Sex Computer」は、Princeを彷彿させる狂った色気を感じるヴォーカルが、かなり危険。

#599 | World

WEA / 1981 / Brazil

Baby Consuelo
Canceriana Telúrica

ブラジル・バイーアのサンバ・ロック・グループOs Novos Baianosのヴォーカル Baby Consueloは、MPBシーンのなかでもとくにロック色の強いアーティストだが、ソロ4作目となる本作では、Jorge Benのコズミック・クラシック「Todo Dia Era Dia De Indio」、ジャズ・ロック的ギターが躍動するディスコティックなサンバ・ホッキ「Um Auê Com Você」や、トロピカル風味のレゲエ・チューン「Telúrica」など、ハスキー・ヴォイスが映えるファンキーでメロウなトロピカル・グルーヴを披露している。

#600 | Rock

CBS / 1975 / Canada

Beauregard, Violletti & Ste-Claire
En Plein Orgasme

カナダ・モントリオールのシンガーズ・トリオ、Beauregard Violletti & Ste-Claireが、75年に発表した唯一作。フォークやカントリーをフォーマットとした、メインストリーム系のポップ・ロックが大半を占めるなか、異常に深いリヴァーブが施された音響空間に、パーカッシヴなアフロ・ビートとサイケデリックなエレクトリック・ギターがレイドバックするブギー・ロック「Ce Soir (Je Sens Que Tout Peut M'Arriver)」だけが、極めて異質かつ秀逸だ。フランス語の気怠いヴォーカルもスリージー。

#601 | World

SIIS / 1980s / France

Bebe Manga

Ami - Oyomiya

Bebe Mangaはカメルーンを代表する女性マコッサ・シンガーのようだが、その活動歴はあまり知られていない。80年代前半に発表されたと思しき本作は、最大のヒット曲「Ami」をはじめとしたマコッサ・ミュージックが大半を占めているが、フェイザーのきいたカッティング・ギターと少し間の抜けたヴォーカルが味わい深いアフロ・ディスコ「Lokognolo」に惹かれる。スペーシーにウネるシンセサイザーがわずかに聴こえてくるが、トゥーマッチと判断されたのか、うしろのほうに追いやられた模様。

#602 | World

EMI / 1970s / Nigeria

Benis Cletin

Alpha & Omega

現在のところ3枚のアルバムが確認されている、ナイジェリアン・アフロ・ビートの最秘境、Benis Cletin。EMIからリリースされた本作は、腰にまとわりつくレイドバック・リズムをラフに刻む引き締まったドラムと、太いベース・ライン、イナタい音色のチープなシンセサイザーのメロディと、スリージーなヴォーカルが、いやがおうにも耳から離れない、クレイジーなブギー・ファンクやレゲエが全編に収録されたキラー・スタッフ。かなり粗削りなサウンドだが、独特のグルーヴ感がある。

#603 | Pops

Barclay / 1981 / France

Bernard Lavilliers

Nuit D'Amour

70年代初期より活動するフランス人シンガーの81年作で、LPと12インチ・シングルの2枚組。シャンソン系の歌手だが、反体制的な活動で知られているらしく、過激な内容のものが多いようだ。本作はレゲエやエレクトロニクスを取り入れたニューウェーヴ的サウンドを展開しており、秀逸なのは12インチ・シングルに収録された表題曲「Nuit D'Amour」。スポークン・ワードとミステリアスなストリングスのフックがきいたダンサブルなトラック。銃声やブレーキ音などのコラージュも面白い。

#604 | World

Private Press / 1970s / France

The Black Show

African People

正体不明のアフリカン・ミュージック・グループ、The Black Showのカルトな自主制作アルバム。リリース国はフランスだが、メンバーの名前を見るとラテン系のようでもあり、なんとも謎だらけであるが、内容はたっぷり濃厚なアフロを収録している。お世辞にもうまいとは言いがたい演奏が、逆にいい塩梅にレイドバックしたユルいグルーヴを醸し出している「Let's Dance」や、チープなシンセサイザーの怪しげな浮遊感がたまらなく気持ち良い「African People」などは、ある意味奇跡的。

#605 | World

Celluloid / 1984 / France

Bobongo Stars
Makasi

アフリカ・ザイールのグループ、Bobongo Starsによる、軽やかにグルーヴするトロピカルなリンガラを収録したナイスな1枚。「Simba Moto」は、熱くファンクするパーカッシヴなリズムとサイケデリックなギター、一度聴いたら耳から離れない、空耳アワーなチャントが最高にグルーヴィなアフロ・ビート。そのほか、Fela Kutiを彷彿させるホーン・セクションがファンキーなトラックから、まろやかなトロピカル・フィーリングが心地良いメロウ・アフロなど、全編をとおして楽しめる。

#606 | Pops

Blow Up / 1975 / Japan

Bread & Butter
Mahae

60年代後期から現在に至るまで、長きにわたり活動を続けるブラザーズ・デュオ、ブレッド&バターは、サマー・ブリーズな香り漂うメロウなポップスを数多く生み出しているが、ここでは75年に発表されたこのアルバムを取り上げたい。佐藤博、林立夫や浜口茂外也などのティン・パン・アレー・ファミリーによるタイトな演奏が光る「デビル・ウーマン」は、タメのあるレイドバック・リズムが気持ち良いサザン・ロック・ナンバーだ。シングル・カットされた「ともしび」もまた秀逸。

#607 | Pops

CBS Sony / 1982 / Japan

Chiemi Manabe 真鍋ちえみ
Fushigi Shoujo 不思議・少女

日本のトップ・プロデューサーやミュージシャンたちが、パンジーというアイドル・ユニットのメンバー真鍋ちえみを、よってたかってテクノ・ポップ・ガールに仕立て上げた、82年発表のアルバム。細野晴臣がスーパーヴァイザーを務め、清水信之がプロデュース、松武秀樹がプログラミングを手掛けている。アイドル路線のキュートなポップスが大半を占めるが、やはり細野晴臣が作曲とアレンジを手掛けた「ねらわれた少女」が一筋縄ではいかない。作詞が阿久悠というところも別の意味で感動してしまう。

#608 | New Wave

Better Days / 1981 / Japan

Colored Music
Colored Music

セッション・ミュージシャンの藤本敦夫とピアニスト橋本一子の夫妻を中心に結成されたプロジェクト、カラード・ミュージックの唯一作で、村上秀一、仙波清彦やペッカーなど、当時の最先端音楽をどん欲に吸収していたミュージシャンが参加し、あまりにも時代を先取りしたサウンドを築き上げている。「Colored Music」や「Heartbeat」で聴けるコンピューター・プログラミングによるシークェンスは、81年という時代にもかかわらず、すでにクラブ・ミュージックの体をなしている。

#609 | Rock

veraBra / 1983 / Germany

Dominik Von Senger
The First

Phantom Bandにも参加しているCan周辺のギタリスト／鍵盤奏者のDominik Von Sengerによるソロ作品。レゲエにインスパイアされたグルーヴィなビートとファットなベースに、クラウト・ロック特有のメランコリックなドライヴ・ギターをフィーチャーした「Late Night Blues」をはじめ、実験精神に富んだスペーシーなニューウェーヴからミステリアスなアンビエント・トラックまで、CanやHolger Czukayからの影響をダイレクトに感じさせる好トラックが多数収録されたカルト・アルバム。

#610 | New Wave

FunfUndVierzig / 1984 / Germany

Dunkelziffer
In The Night

ダモ鈴木やDominik Von Sengerなど、Can人脈のアーティストが参加したノイエ・ドイチェ・ヴェレ・バンドの2作目にして傑作。アフリカンなポリリズムをはじめ、レゲエやワールド・ミュージックを雑多に取り入れた、ラフながら質の高いアヴァン・クラウト・ロック。ノイジーなカッティング・ギターとトリッピーなキーボードに、ダモ鈴木のスリージーなヴォーカルが狂おしいまでの空間を創造する最終曲「Oriental Cafe」は、オブスキュアなダンスものとしても高く評価できる名曲だ。

#611 | World

Peccata Mundi / 1986 / Belgium

Eko Kuango
Fura

Eko Kuangoなるベルギーのグループによる12インチ・シングル。アフリカ系ベルギー人のミュージシャンが参加した大所帯バンドのようだが、正体は不明。ジャンベやバラフォンをはじめ、アフリカ民族打楽器群のプリミティヴなアフロ・ビート、ブライトに響きわたるクラヴィアやホーン、肩の力が抜けた黒人女性ヴォーカルが軽快にグルーヴする楽曲を収録している。なんとも形容しがたい独特のメロディ・ワークがディープなフロウを生み出しているアフロ・ジャズ・ダンサー、「Na Mawazo」が抜群にいい。

#612 | Vocal

Better Days / 1979 / Japan

Eri Ohno 大野えり
Feeling Your Love

さまざまなスタイルの音楽を歌いこなす実力派女性シンガー、大野えりが残した珠玉の1枚。Stevie Wonderの「Don't You Worry About A Thing」などのソウルから、モダン・ジャズ、スタンダード・ナンバーまで、全曲海外アーティストのカヴァーを収録している。ハスキーな声質で自在にメロディを操る大野えりのソウルフルなヴォーカルもさることながら、洗練されたアレンジとツボを押さえたアーバンなグルーヴを生み出す、日本のトップ・ミュージシャンたちによる卓越した演奏が素晴らしい。

#613 | World

Christina Satel / 1980s / Benin

Ernest Honny
Star Of The Sea

鍵盤奏者／レコーディング・エンジニアとして活動し、73年にHonny & The Bees Band名義で制作した「Psychedelic Woman」がレア・トラックとして知られる、アフリカ・ガーナのコンポーザー、Ernest Aubrey Honnyが、ベナンのレーベルからリリースしたソロ・アルバム。ファンクやレゲエを吸収した、ポリリズミックなドラム・マシンのビートと、デジタル・シンセサイザーのきらびやかなサウンドが、Wally Badarouとはまたひと味違う、プリミティヴなファンクネスをひきたてている。

#614 | Rock

Lizard / 1978 / France

Human Egg
Human Egg

フレンチ・ジャズ界隈のミュージシャンが大規模に参加したプロジェクト、Human Eggの唯一作。どギツいアートワークがヘヴィなサイケを連想させるが、ウェットで艶のあるプログレッシヴ・ロックと、グルーヴ感満点のジャズ・ファンクが絶妙なバランスで融合した、他に類を見ない世界観をもった作品だ。ソウルフルな男性ヴォーカルとディスコティックな女性コーラスのかけ合いも素晴らしい「Love Like This」は、USファンク・マナーのグルーヴィなスペース・ディスコ・トラック。

#615 | World

Disques Tropiques / 1974 / Dahomey

Ignace De Souza Et L'Orchestre Black Santiago
Black Santiago

60年代より活動し、はじめてアフロ・ビートを創造したミュージシャンとして語り継がれるアフリカ・ベナンのトランペッター、Ignace De Souzaとそのグループによる74年作。ルンバ、ボレロ、ソンなどのアフロ・キューバンをベースに、土着色の強いハイライフを全編に展開した作品だが、なかでもミニマルにループするアフロ・ビートに絡むサイケデリックなギターやオルガン、ブロウするホーンとプリミティヴなチャントがスモーキーな、珠玉のアフロ・グルーヴ「Dou Dagbé Wè」がすごい。

#616 | Jazz

Nemperor / 1977 / US

Jan Hammer Group
Melodies

ドラマーとしてのみならず、スペーシーなキーボード・プレイにも定評のあるジャズ・ミュージシャン、Jan Hammerの77年作は、Stevie Wonderを彷彿させるソウルフルなソング・ライティングと、グルーヴ感のある演奏が際立つ名作だ。とにかくシンセの使い方が最高で、音色もメロディも文句なしにカッコいい。低音域で展開するアルペジオとTony Smithのヴォーカルがゆらめくスロー・ダンサー「Don't You Know」を筆頭に、クラブ・フィールドでも活躍できるクールなファンクネスが全開。

#617 | World

RCA Victor / 1978 / Spain

Jayme Marques
Stop

60年にOrquesta Orfeuのメンバーとしてポルトガルやスペインに渡り、ボサ・ノヴァやジャズ・サンバをヨーロッパに紹介したブラジル人シンガー・ソングライター、Jayme Marguesが78年に発表した本作は、ゴージャスなオーケストラをフィーチャーし、ソウルやジャズ・ポピュラーなどアメリカ音楽の要素を大々的に取り入れた、圧倒的なグルーヴ感をもつ異国のブラジリアン・ソウル・アルバム。Juan Carlos Calderónなど、スペインのミュージシャンによる演奏も半端なくグルーヴィだ。

#618 | World

Safari Ambiance / 1980s / France

Julien Babinga
M'Bongui-Percussions Volume 3

Julien Babingaはコンゴ出身のパーカッショニストで、80年代に3枚のアルバムが確認されており、いずれもタイトルは異なるが、3部作的な内容となっている。その最終作にあたる本作は、引き締まった音色で空間に飛散するパーカッションのライヴ感あふれるインタープレイと、チープな電子音によるイナタいシンセサイザー・メロディが交錯する、肉体的なエレクトロニック・アフロ・ビートを展開したストレンジな作風。エレクトロニクスがここまでプリミティヴに聴こえるのも珍しい。

#619 | Jazz

Amar / 1978 / Denmark

Kamæleon
Kamæleon

76年から84年にかけて活動していたデンマークのジャズ・ロック・グループ、Kamæleonの1作目。郷愁あふれるイントロからオーガニックなジャズ・ロックへと展開する「Årstidens Salat」、Jukka Tolonenを彷彿させるグルーヴィなギターがリードをとりながら展開する「Meget Gerne」など、ファンク、ラテンのテイストを多分に吸収しつつ、北欧特有のクリアできめ細やかな質感のフィルターを経由させたクロスオーヴァーなサウンドが気持ち良い、カルティッシュな匂いが充満した名盤。

#620 | Pops

CGD / 1980 / Italy

Loredana Bertè
Loredana Bertè

イタリアの国民的カンタンテのひとりであるMia Martiniを姉にもつシンガー、Loredana Bertèによる6枚目のアルバム。どの作品も、さまざまなスタイルの楽曲を雑多に収録した、メインストリームなポップ・シンガーにありがちな内容ではあるが、良い曲が含まれていることが多いのも事実で、本作でも、イタリアン・ディスコのプロデューサーとしてその界隈では知られるStefano Pulgaが参加し、グルーヴィなブギー・ディスコやメロウ・ジャズ・ファンクを披露していて、あなどれない。

#621 | World

Voom Voom Music / 1975 / Italy

M' Bamina
African Roll

72年にイタリアで結成され、76年のカメルーン公演ではManu Dibangoとの共演も果たしている、8人編成のアフリカ／イタリア人混合グループ、M' Baminaの1作目で、思わずカラダが反応してしまうファンキーなアフロ・ビートを収録したアルバム。「Benguela」や「Roll Drums」は、ポリリズミックなパーカッション群と土着的なチャント・コーラスのかけ合いも素晴らしい、ドライヴ感あふれるワイルドなアフロ・ディスコ・トラック。ドラムはイタリア人だが、ものすごいグルーヴ感だ。

#622 | World

EMI / 1981 / Venezuela

Mañana
Amor

ベネズエラのマイナー・ファンク・ロック・トリオ、Mañanaの81年作。NYアンダーグラウンド・ディスコを彷彿させるグルーヴ感とイナたいラテン・フィーリングがイイ塩梅に混ざり合ったディスコ・トラックをはじめ、トロピカル・フレイヴァーたっぷりのAORグルーヴや、メロウでスリージーなレゲエ・チューンなど、さまざまなスタイルの楽曲に挑んでいるが、一貫したソウル・マナーとほっこりした南国ムードが終始漂う。ざっくりしたラフなサウンドに、南米特有のメロウネスを感じる。

#623 | Rock

CBS Sony / 1979 / Japan

Mari & Bux Bunny
The Super Natural

日本のJanis Joplinと呼ばれるロック・シンガーの金子マリと、ジョニー吉長や鳴瀬喜博らが参加したグループ、バックスバニーによる79年作で、たっぷり濃厚なブルース・ロックやファンク・ロックを展開したグルーヴ感あふれる名盤。なかでもすごいのが、アルバムの最後に収録されている、ギタリストの永井充男作曲の「人間爆弾」だ。パワフルにビルドアップするリズムに燃え上がるようなギターがファンキーに疾走するサイケデリック・ロック・トラック。もちろん金子マリのブルージーなヴォーカルも最高。

#624 | World

Music Affair / 1978 / France

Mike Kounou
My Native Land

カメルーン出身のシンガー／コンポーザー、Mike Kounouによる78年作。本作以外にリリースは確認されていないが、70年代に活躍したカメルーンの名ファンキー・プロデューサー、Alan Shellyをアレンジャーに迎え、本家顔負けのパワフルなアフロ・ファンクやブギー・ディスコを披露している。本国カメルーンをはじめ、セネガル、ガボン、ジャマイカやマルティニークなどから参加した、バックを固めるミュージシャンによるブラックネスあふれるファンキーな演奏も、最高にグルーヴィだ。

#625 | Jazz

RTB / 1979 / Yugoslavia

Miki Petkovski

Ko Zna

グラサンがキラリと光るマケドニア生まれのマルチ・プレイヤー、Miki Petkovskiは、SmakやLeb I Solなどのグループで活動した、いわばプログレ畑のアーティストだが、本人名義唯一のアルバムとなる本作は、ファンキーなリズムとシンセサイザーのトリッピーなサウンドが炸裂する、ユーゴスラヴィアン・ジャズ・ロックの大本命的1枚。中期Gongを彷彿させるテクニカルな展開や、プログレ・バンドのIpe I Lazaに参加している女性シンガー、Gordana Ivandićによる可憐なヴォーカルも魅力的だ。

#626 | Rock

Biber / 1982 / Germany

Nerv

Nerv

ドイツのジャズ・シーンで活動するベーシストでありながら、さまざまな形態で実験的な音楽を生み出しているハイセンスな音楽家、Hans Peter Ströerが、実弟のErnst Ströer、Volker KriegelのMild Maniac Orchestraで活動をともにしたEvert Fratermanと結成したワンオフ・プロジェクトの唯一作で、ファンキーなビートを刻むリズム・セクションとカッティング・エッジなギターが空間を切り裂く「Cover」をはじめ、Can一派に通じるエッジのきいたニューウェーヴ・サウンドを展開した作品。

#627 | Reggae

Better Days / 1980 / Japan

Pecker

Pecker Power

日本パーカッション界の草分け的存在、ペッカーこと橋田正人が、大村憲司や吉田美奈子とともにジャマイカへわたり、Sly & RobbieやThe Wailersの全面バックアップのもと制作したソロ1作目で、おそらく日本で最も早い時期に本格的なレゲエに取り組んだ作品だろう。Channel OneとTuff Gongで録音されたスモーキーなレゲエは、すべて疑う余地なく本物だが、A面にさりげなく収録された短尺のエレクトロニック・ダブ「Dr. Dr. Humanity」と「Pecker Power Part Two」もクレイジーだ。

#628 | Rock

Sky / 1980 / Germany

Phantom Band

Phantom Band

CanのドラマーJaki Liebezeitを中心とするドイツのグループ、Phantom Bandの1作目で、Holger CzukayやDominik Von SengerなどのCan人脈のミュージシャンが参加し、Conny Plankがミックスを手掛けている。躍動感のあるパーカッシヴなリズムにトリッピーな鍵盤サウンドが浮遊する「I'm The One」、心なしかDonald Fagenを彷彿させる巧みなコーラス・ワークが冴える「Rolling」など、レゲエ・ビートを基調とした心地良いロック・サウンドを全編に収録した好内容の作品だ。

#629 | New Wave

Delphin / 1983 / Germany

Plaza Hotel
Bewegliche Ziele

ドイエ・ノイチェ・ヴェレの代表的グループであるDAFのギタリスト、Wolfgang Spelmansを中心とするワンオフ・ユニットPlaza Hotelが、自主レーベルから発表した唯一のシングル作品。CanのドラマーJaki Liebezeitがゲスト参加するほか、ModernのCharly Steinbergがミックスを手掛けている。ダビーなセンスとソリッドなニューウェーヴ・サウンドが融合。タイトなドラミングにレイジーなギターやキーボード、Tabuのコケティッシュなヴォーカルが、Maximum Joyあたりにも通じる。

#630 | Jazz

NGM / 1987 / Germany

Quintus Project
Moments

CMP Recordsのサウンド・エンジニアとしても多くの作品に携わる、ドイツ人マルチ奏者のWalter Quintusによるソロ・プロジェクトの唯一作。のちに共演作を発表するジャズ・ピアニストのJoachim Kühnが1曲参加するなど、全体のイメージとしてはスムース・ジャズ／フュージョンだが、イタロ・ディスコを彷彿させるシンセサイザーのレゾナンシーなランニング・サウンドと、エレクトリック・ピアノのブライトなソロがアーバンなビーチ・サイド・ミュージック、「Night Flight」に注目したい。

#631 | Pops

CNR / 1980 / Netherlands

Renée
Reaching For The Sky

ギタリストのRené Nodelijkを中心とするオランダのシンセ・ポップ／ポップ・ロック・グループ、Renéeの2作目で、とりたてて特徴のないメインストリームなポップス作品であるが、こういうものに限って、ハッとさせられる楽曲を含んでいるものだ。紅一点の女性シンガー、Anja Nodelijkのややハスキーで伸びのある可憐なヴォーカルが舞う、シンセ・ポップ的バレアリック・ディスコ「Change Your Style」は、某ディガーによるリエディット・ネタとして知られるようになったオブスキュアな1曲。

#632 | Soul

RCA Victor / 1977 / Australia

Renee Geyer
Moving Along

Renee Geyerは、本国オーストラリアではかなり知られた存在の大御所女性シンガーだ。Frank Wilsonプロデュースのもと、Ray Parker Jr.やErnie Wattsなどが参加して制作された77年発表の本作は、ソウルフルなダンス・サウンドからゴージャスなバラードまで、質の高い楽曲を全編に収録している。小気味良いカッティング・ギターとパーカッションが刻むグルーヴィなビートに絡むブラスとストリングスが映える、アダルトなディスコ・ナンバー「Be There In The Morning」がエモーショナルだ。

#633 | New Wave

EMI Electrola / 1984 / Germany

Saâda Bonaire
You Could Be More As You Are

ドイツのフィメール・デュオ、Saâda Bonaireの唯一作で、シングル盤しかリリースされていない。Dennis Bovellがプロデュースを手掛けており、プレイヤーとしても全面的に参加する力の入れよう。エキゾチックな香り漂うサウンドと怠惰なヴォーカルがそそるエスノ・ダブ・ウェーヴを披露している。タイトル曲は12インチのほうが長尺だが、7インチのみに収録された、James Brownの言わずもがなの名曲をアグレッシヴなダブ・ミックスでカヴァーした「This Is A Man's Man's World」もすごい。

#634 | Jazz

Sun / 1978 / Italy

Sangi
Steps

SangiことMaurizio Sanginetoは、80年代に隆盛したイタリア産ブギー・ファンクの名プロデューサーとして、その筋には知られた存在であるが、78年に自身のソロ名義で素晴らしいジャズ・ロック作品を残している。グイグイと腰にくるファンキーなリズム、跳ねるような弾力性のあるギター、スペーシーなシンセサイザーに女性スキャットなどをフィーチャーし、プログレッシヴなジャズ・ロックからバレアリック・フィーリングあふれるメロウ・グルーヴまでを展開したクールな1枚である。

#635 | Jazz

RTV Ljubljana / 1979 / Yugoslavia

September
Domovina Moja

マルチ・プレイヤーのPeter Ugrinをはじめ、スロヴェニアのジャズ／ロック・シーンで活躍するミュージシャンが集結したグループ、Septemberの79年作。垂涎のダンサブル・ジャズ・ロック「Florida」、ゆったりと腰をゆらすミッド・テンポのジャズ・ファンク「Have To Say Good Bye」、アップリフティングなクロスオーヴァー・ジャズ「Music My Music」など、メロウなエレクトリック・ピアノやブライトなホーンがフィーチャーされたファンキーなジャズ・ロック・アルバムだ。

#636 | Jazz

Harvest / 1976 / Sweden

Sundance
Sundance

黒人打楽器奏者のAhmadu Jarrのほか、スウェーデンのセッション・ミュージシャンが多数参加した大規模編成のカルト・ジャズ・ロック・グループ、Sundanceによる76年発表の唯一作。クラヴィネットのファンキーなフレーズ、ワウをきかせたミュート・トランペット、シンセサイザーのスペーシーなソロ、ソウルフルなフィメール・コーラスなど、挙げたらきりがないくらいパーフェクトな演奏による、ハイブロウなジャズ・ファンクを聴かせてくれる、最高にグルーヴィな1枚。スウェディッシュ・ジャズ恐るべし。

#637 | Electronic

CBS / 1979 / Germany

Supersempfft
Roboterwerke

自作のドラム・マシンをKraftwerkに提供するなど、シンセサイザーの開発者としてもカルト的に知られるドイツのアーティスト、Dieter KolbとFranz Aumüllerからなるドイツの奇天烈スペース・ロック・ユニット、Supersempfftの1作目。トリッピーな電子音が空間を縦横無尽に飛び交う、エレクトロニクスに特化したソリッドなサウンド・メイクが素晴らしい。ディスコからシンセ・ポップまでヴァラエティに富んだ作風やアートワークも含めて、かなりファンタジックなサイケデリクスだ。

#638 | World

Polydor / 1973 / Brazil

Tim Maia
Tim Maia

Tim Maiaの通算4作目となる本作は、モータウンやフィラデルフィアをはじめとするusソウルの影響を多分に受けたエモーショナルなメロディ・ワークに、サウダージ・フィーリングを融合させた初期名作。「O Balanço」で聴けるゴージャスなブラス・アンサンブルと、ワウのきいたエレクトリック・ギターのサイケデリックなサウンドのコントラストも、この時代ならでは。本作のあとに発表される『Racional』2部作では、Sly & The Family Stoneばりにサイケなファンク・グルーヴが露呈する。

#639 | Rock

TVO / 1980s / Netherlands

Various Artists
Courant Zwols Welteverstaan

オランダの無名アーティストの楽曲ばかりを収録した2枚組アルバム。メインストリームなノリのクラシック・ロックから、シンセ・ポップ、ハード・ロックやスカまで、節操なく大量に収められている。Sebelli Bunchによる、シンセ・ウェーヴとAORが混合したような独特のグルーヴ感をもった「N.Y.C. (Took My Love Away)」、Super Perroによる、ストレンジかつフローティングなコーラス・ワークが冴える、Ian Dury的パブ・ロックなファンク・ウェーヴ「(What About....?) The Zip」がオブスキュア。

#640 | New Wave

FünfUndVierzig / 1989 / Germany

The Ya-Ya's
2-3-4-5-6-7-8-9

Phantom BandやDunkelzifferなど、Can直系の実験的ニューウェーヴ・グループの中心人物であるギタリスト兼鍵盤奏者のDominik Von Sengerが、Alfred Schmeltzerとともに結成したユニット。Canのドラマー Jaki Liebezeitも参戦し、「Wild Goes」では、アフロ・ライクなパーカッションが乱れ飛ぶ、10分を超えるプリミティヴなリズム・ミュージックを展開。「System」では、ハード・エッジなマシン・リズム、デジタル・シンセ・サウンドやヴォコーダー、ビリビリとくるギターがダンサブルに疾走する。

recommended record store

未開の地へ旅立つべく、いざ、レコード・ショップを訪れてみよう。ここでは、好奇心をくすぐる独自の品揃えを展開する個性的なショップを紹介したい。まずは東京と大阪の6店。音楽のこととなると話が止まらない店主たちばかりなので、気軽に声をかけてみれば、思いもよらず新しい音楽に出会えるかもしれない。近くに行く機会があったら、ぜひ立ち寄ってみてほしい。すべてのショップがオンライン・ストアを設けているので、遠方の場合でも通販で購入が可能だ。さらに、本書と同様のヴィジョンでセレクトしている、海外のレコード・ショップと通販専門店も紹介しておこう。

【国内】

EAD RECORD

東京都杉並区高円寺南 4-28-13
03-5306-6209
http://www.eadrecord.com/

ダンス・クラシックスやハウス・ミュージックの専門店として知られているが、イギリスのレーベル、Claremont 56 からコンピレーション CD を発表するなど、その審美眼が海外でも注目を集めているオーナーの YOZO 氏による、ジャンルレスなセレクションが光る中古レコード・ショップ。

LOS APSON?

東京都渋谷区幡ヶ谷 2-9-20
第二 DN ビル 3F-B
03-6276-2508
http://www.losapson.net/

本書の座談会にも登場したヤマベケイジ氏が運営するセレクト・ショップ。辺境民族音楽から最新実験音楽まで、カオティックなラインナップが唯一無二。とくに南米音楽の発掘と啓蒙活動は、各方面に多大な影響を与えている。新品 CD ／レコードを中心に扱っているが、中古レコードも必見。

COCONUTS DISK EKODA

東京都練馬区豊玉上 1-9-10
03-3948-2388
http://coconutsdisk.com/ekoda/

都内に 4 店舗をかまえるオール・ジャンルの中古レコード店で、とくにオブスキュアなセレクションに力を入れているのが江古田店だ。DJ Willie としても活動する店長、松本氏のレフトフィールドな視点でセレクトされた変わり種レコードや、DJ やミュージシャンによる放出ネタが要チェック。

Bamboo Music

大阪府大阪市北区万歳町 3-41
シロノビル 104 号
06-6363-2700
http://bamboo-music.net/

大阪は北区万歳町にある中古レコード店。オーナーの横山氏は、Blue Note からクラブ・ミュージックまでフォローするオープン・マインドなセンスの持ち主で、ジャズやソウルなどのブラック・ミュージックからロック、さらには現代音楽まで、実に幅広いセレクションを展開している。

Revelation Time

大阪府大阪市中央区南船場
4-9-5 NOA ビル 4 階 A 号
06-7494-4041
http://revelationtime.net/

地下鉄心斎橋駅から徒歩 5 分の場所に店舗をかまえる中古セレクト・ショップ。オーナーの AZ 氏は、レゲエ、とくにダンスホールのスペシャリストだが、ヨーロッパをメインに買い付けられたオブスキュアなレコードも数多く扱っていて、そのクオリティの高いラインナップは一見の価値あり。

rare groove

大阪府大阪市中央区西心斎橋
1-9-28 リーストラクチャー
西心斎橋 409　06-6657-4454
http://www.raregroove.jp/

大阪心斎橋アメリカ村に店舗をかまえるオール・ジャンルの中古セレクト・ショップ。非ダンス・ミュージックをクラブ・カルチャーへ浸透させるべく奮闘する、オーナーの Norio 氏がアメリカで買い付けたレコードを中心に、DJ ユースからリスニング対応の音楽まで、幅広く取り扱っている。

【海外】

Red Light Records

Oudekerksplein 26
1012 GZ Amsterdam, Netherlands

オランダ・アムステルダムの裏観光名所“飾り窓”の真っ只中に位置する中古レコード店。DJ でもあるオーナーの Tako と Abel は、ディープ・ディガーとしてその名を轟かせていて、彼らのセレクションは多くの信者を生み出している。アムスを訪れた際は立ち寄り必須。通販サイトはない。

【オンライン】

ORGANIC MUSIC

http://organicmusic.jp

本書の著者である Chee Shimizu が運営するオンライン中古レコード店。未知の音楽を追い求めて、ヨーロッパを中心に放浪し買い付けされた、多種多様なレコードを扱っている。海外の DJ やミュージシャンとの交流のなかで独占ディストリビュートしたレコードや CD なども、ときどき入荷する。

growing bin records

http://www.growingbinrecords.com/

ドイツ屈指のディープ・ディガーとして知られる、通称 Basso が運営するオンライン中古レコード店。同名のレコード紹介ブログから派生したショップで、見たことも聴いたこともないレコードがずらりと並ぶ、まさにオブスキュアなセレクションが圧巻。もちろん、日本にも配送してくれる。

二見裕志

organic

小坂 忠 / もっともっと

Mashroom / 1972 / Japan

朴訥とした歌唱、のんびりしたなかにもキリッと美しい旋律、シンプルで滋味深いアレンジ・演奏、すべてが最高のライヴ盤。その昔、小西康陽氏に教えてもらいました。

ethnic

安野とも子 / La Musique Exotique

Canyon / 1984 / Japan

秋山道男、細野晴臣プロデュースによる 3 曲入りミニ・アルバム。「Sur La Terra」という曲がアーバン・エスノ風情。84 年当時のギョーカイの匂いがします。

psychedelic

加藤和彦 / Super Gas

Capitol / 1971 / Japan

「アルカンシェル」という曲がすごくサイケ（だと思う）。この方だけでなく、日本の 70 年代のロックには、そこここにサイケの香りが散らばっている。

spiritual

坪田直子 / ピーターソンの鳥

King / 1976 / Japan

「命あるものは樹から落ちた」という曲がムーディ・フォーク調で沁みます。歌詞内容と歌唱スタイルが、まぁ、スピリチュアルと言えなくもないかなと。

experimental

清水信之 / Anything Goes

Warner-Pioneer / 1982 / Japan

アレンジャーとして著名な氏のセカンド・ソロ・アルバム。実験精神あふれたポップスを聴かせてくれます。子供合唱団が歌う「Cosmic Lullaby」がいい塩梅。

cosmic

JULLAN / Imaginary Doll

Sound Design / 1984 / Japan

YMO 解散直後に出てきた和製ニューロマ・ユニット。ダンサブルで、どことなく高橋幸宏氏の往年の作風と重なる部分もあります。

選曲家／DJ。ラジオ、TV、ファッション・ショー、店舗BGMのほか、映画『ピンポン』などの音楽監督、『Dream Island』『Caramel Papa』といったコンピレーション・アルバムの監修など、幅広く選曲活動を展開中。

meditative

Original Soundtrack / 夢みるように眠りたい

Polydor / 1986 / Japan

映画監督・林海象のデビュー作。全編モノクロ、無声（音はあり）映画にして大正〜昭和初期への憧憬あふれる、文字どおり夢のような作品。音楽もまた夢のように美しい。

tropical

平山みき / 鬼ヶ島

Invitation / 1982 / Japan

近田春夫プロデュースによるニューウェイヴ・レゲエ大傑作。「月影の渚」「電子レンジ」など、いい曲目白押し。彼女の声と音楽性が素晴らしくマッチしています。

floating

とみたゆう子 / Time

Crown / 1985 / Japan

シティ・ポップ・フィールドで人気の彼女ですが、このアルバムは怪しい。ヴォーカル処理が妙に遠く深く、とくに「Olive」という曲が最高に彷徨えます。

mellow

Seiko / Let's Talk About It

A&M / 1996 / US

松田聖子の海外進出期＝96年の傑作スムースR&B。Junior Vasquezのリミックスなども入っていますが、普通にオリジナル・ヴァージョンがいいです。

pensive

Original Soundtrack / ときめきに死す

Polydor / 1984 / Japan

森田芳光監督、沢田研二主演の傑作映画ですが、塩村修氏による“無国籍な環境的音楽”（ライナーより）がやるせなくてたまらない。

groovy

Maximum / Maximum Hot

Show Boat / 1975 / Japan

深町純プロデュースによるアバズレ風情女子ふたり組ユニット。はっぴいえんどの「あしたてんきになれ」、左とん平の「ヘイ・ユウ・ブルース」カヴァーがファンキー。

ヤマベケイジ

organic

Mocky / Saskamodie 〈CD〉

Windbell / 2009 / Japan

ヴィンテージ機材録音のじんわり成熟した音像。ポップでほっこり有機的な1枚。

ethnic

Amephone / Retrospective

Golden Collette / 2012 / Japan

時代感も地域性もまったくわからなくなる特殊エスニックな永遠名盤復活。

psychedelic

Kemialliset Ystävät / Kellari Juniversumi

Fonal / 2002 / Finland

森の妖怪と戯れる感じの？小躍り系、怪しいサイケ。不思議の国の密林状況レポート。

spiritual

Mono Fontana / Ciruelo

Melopea Discos / 1998 / Argentina

アルゼンチンを拠点に活動するシンセ奏者 Mono Fontana 奇跡の名盤。
佇んだことがないような夢の音世界。

experimental

All 7-70 / T'Other Little Tune

ESP-Disk / 1968 / US

奇怪作の多い ESP-Disk ですが、そのなかでもさらに孤高に燦然と輝くはなれ星！
衝動アクションに乾杯！

cosmic

Melodic Energy Commission / Moonphase Compendium 〈CD〉

Energy Discs / 2012 / Canada

カナダの伝説コズミック・ヒッピー集団。
79 年 & 80 年に発表した 2 枚のレコードを収録した自主制作 CD。

1967年生まれ。幼少期は釣りキチ。青年期より音楽に目覚め、80年代後半より六本木WAVEのバイヤーを経て、94年、西新宿に武闘派セレクト・レコード・ショップLOS APSON?を開店し店長を務める。ジャンルの枠にとらわれないフリー・フォームな品揃えに定評あり。音楽レーベル“時空”や“Sexy Recordings”、雑誌『SPECIALOOSE』などのリリース監修を手掛ける。実験DJ変名の“AMEL(R)A”、ライヴ・アクション変名の“ZON-SUKE”etc.といった名義も。

meditative

Peter Zummo / Zummo With An X

Loris / 1985 / US

Arthur Russellとも共演していたトロンボーン奏者。

この時期のニューヨーク地下音楽シーンのオモシロさを伝える内容。

tropical

Finis Africae / A Last Discovery: The Essential Recordings, 1984-2001

EM / 2013 / Japan

スペイン産ニューウェーヴ〜アンビエント〜プログレッシヴ・ミュージックの奇跡。

浄化音楽でもある。

floating

Roland P. Young / Mystiphonic

EM / 2013 / Japan

EM Recordsに発掘された、黒人ディープ・エレクトロ・ミュージック。

mellow

Spinetta / Silver Sorgo 〈CD〉

Universal / 2001 / Argentina

アルゼンチン・ロック界の至宝Spinettaの、ファンの間でも人気の1枚。

pensive

ゑでぃまぁこん / 染色 〈CD-R〉

Pong-Kong / 2010 / Japan

時を超える幽玄なる歌声。世界レヴェルの国産良質音楽。

groovy

Orchestre De Biguine / Album D'or De La Biguine 〈CD〉

Fremeaux & Associes / 2009 / France

アフロ・フレンチ・カリビアンの豊穣さをまるごと楽しめる、極上混血音楽。

梶原としお(BING)

organic

Naná Vasconcelos / Amazonas

Philips / 1973 / Brazil

ノルジステの音楽を確立した Luiz Gonzaga を讃える Vasconcelos の記念碑的作品。アマゾン奥地から聴こえるインディオの音楽と母なるアフリカへの憧憬に満ちたこのまばゆい世界は、自然と人間の共生を抽象化した哲学であり、虐げられた大地に産まれた新しいヴィジョン。ビリンバウという特異な楽器にコンテンポラリーな想像力で向き合った Vasconcelos の功績は偉大。

ethnic

Various Artists / Temiar Dream Music Of Malaya

Folkways / 1955 / US

同じアジア人であってもマレーシアのアボリジニ文化に想いを寄せる人は少なく、この音楽の背景に関する情報はネット上にもほとんど見当たらない。ここはまさしく辺境である。太平洋戦争が勃発し日本軍の上陸作戦が始まる直前の 1941 年に、マレー軍関連のフィールド録音チームがほぼ偶然にテープにとらえたモン・クメール語系テミアル族の“夢唄”。南米のインディオ文化へと続く気が遠くなるような路の最果てに立ち上るやさしく深い朝霧のような音楽です。果たしてこの地に踏み込んで行った若い日本兵たちはこの歌声を聴いたのだろうか?

psychedelic

The Tower Recordings / Furniture Music For Evening Shuttles

Siltbreeze / 1998 / US

近年はヴァーモントの田舎町に本拠地を移し“MV&EE”の名義で活動する友達のバンドを紹介します。カントリー・ブルースなどを含む広義のアメリカン・フォーク・トラディションとアウトサイダー文化を研究し尽くしてきた元中古レコ屋店員の Matt Valentine。The Tower Recordings という大きなコレクティヴの中心であった彼の静かな影響力は語り尽くせないものがあります。自分の経験では、ちょうどこのアルバムを聴いていたころに、北米全域に“新しいフォーク”とでもいうべき意識が根付いて、今に続く各地の DIY なシーンの実り多き共感と連帯のかたちが完成しつつあったような感じがしました。ちなみに先日拝聴した最新作の『Fuzzweed』も相変わらず素晴らしい内容で嬉しい限りです。

spiritual

Walter Marchetti / Per La Sete Dell'orecchio

Vandalia / 1984 / Italy

どこかの洞窟の奥底にある地底湖。天井の岩盤からときおり大きな岩石が剥がれ落ちてその深い静寂を破る。ただそれだけなのですが、スピリチュアルと聞いて真っ先に思い浮かんだのがこのレコード。以前からジャケ裏にイタリア語で記された散文らしきものが気になってはいたが、このたびもしばらく睨んでみたものの、結局わからぬままにしておくことにした。腑に落ちない部分が残るレコードのほうが長い間付き合えるものだから。

experimental

John, Cage, Christian Wolff / John, Cage, Christian Wolff

Time / 1963 / US

差異を際立たせる作用のなかにしか“前衛”は存在しない。かたや“実験”はすべての結果をあらかじめ受け入れてしまった状況とでも言おうか。音として似通っていても、それはまったく異なる音楽である。そのことを念頭にインキャパシタンツと「Cartridge Music」を聴きくらべてみるのもいい。もしくは同時にかけてみるのもいい。

cosmic

Michel Redolfi / Sonic Waters

hat ART / 1984 / Switzerland

現代音楽と呼ばれるジャンルの面白いところは、そこからはみ出してしまった作曲家たちの存在だと思う。有名どころでは John Cage だってそのひとりだし、John Appleton や Tod Dockstader といったクセ者がわんさかいる。水中録音を探求した Michel Redolfi もそこに含まれる反則組だろう。ちなみに自分のなかで“コズミック”とは“不可解な合致”というような意味であって、たまたま絶妙なバランスを得てしまったマジカルな作品を指す言葉だと思います。

meditative

Derek Bailey / Aida

Incus / 1980 / UK

高柳昌行や阿部薫以降の日本のノイズ・インプロヴィゼーションの進展を考えると、若くして亡くなられた間章の業績が日本の文化的土壌を豊かにしてくれたことは間違いないと気づくわけですが、親交の深かった若かりし Bailey が間章という黒い羊を追悼したこのソロ・アルバムもまた、その遺産のひとつであります。Derek Bailey、Tony Oxley、Evan Parker というジャズ・インプロヴィゼーションの新世紀を予言した三人衆が若くして立ち上げた Incus Records。数多くの不思議で刺激的な音楽を記録したレーベルですが、そのなかでも瞑想的な陶酔感が際立っているこのアルバムの孤立無援なやさしさが好きです。

tropical

横尾忠則、細野晴臣 / コチンの月

King / 1978 / Japan

日本に生まれた縁あらば一度は体験してほしいこのトロピカル。誰しもが強烈な南国トリップ感に圧倒されるこの作品ですが、やはり音楽家という自意識の不在がこのマジックを呼び込んでいるのでしょうか？というか旅のあとに音楽作るといいんですよね。言葉にしようがない生々しい異境の息吹が奇怪な音像のなかに充満して、スピーカーから芳醇で怪しげな香りが立ち上ります。

ニューヨークの老舗中古レコード店“A-1 Record Shop”に立ち上げから12年にわたり勤務。オブスキュアな音源の発掘と再評価に奔走したその仕事の延長線上で、レコードやテープを駆使したサウンド・パフォーマンスや、廃墟と廃材を利用したイヴェントの演出に関わる。90年代中期よりChristian Marclayをはじめとする仲間と世界各地での演奏活動や録音をともにし、John Zornが主催した伝説の舞台“TONIC”では、5年間にわたり即興パフォーマンスとクラブ・イヴェントが融合する名物企画“PHONOMENA”を運営するなどして活躍した。2008年に帰国したあとも、日本各地で音楽やパフォーマンス関連の催しに参加して交流の輪を広げている。

floating

Allan Bryant / Space Guitars

Composers Recordings Inc. / 1977 / US

舐めた程度ではグニョグニョしたものにしか聴こえないのですが、しばらくすると浮遊と呼ぶしかないような着地点の見えない状態に持っていかれる怪盤。なんなのでしょうかこれは!? 自作のエンヴェロープ・ジェネレーターだか何だかわからないけどやり過ぎでしょ。でもこの類の脱力系実験サウンドは本当に珍しいので、なぜかまた聴いてしまう1枚。ちなみに元MEVの彼はこれをずっと続けておられるようで、2000年代に突然リリースされた『Spaceball』も同様の怪作となっておりました。偉い！ 来日希望！

mellow

Tony Schwartz / Tony Schwartz Records The Sound Of Children

Folkways / 1970 / US

これは本当に素晴らしい。ただ子供がしゃべったり歌ったりするのを録音してテーマ別に編集しただけなのに、愛情が込められているからなのか聴くたびに感動してしまう。子供の発する音の正直さに軽く泣きそうになりながら過ごす時間は、僕にとって最上のメロウかもしれない。フィールド録音作家でありコレクターのTony Schwartzの作品は徹底的に聴いてきたけど、これはそのなかでも間違いなく傑作のひとつであります。

pensive

Mirror / Islands

Die Stadt / 2001 / Germany

OrganumやThe New Blockadersなんかで活躍したAndrew Chalkと、H.N.A.S.やCurrent 93の名盤に参加したChristoph Heemannのドローン・ユニット。深いリヴァーブ空間で宇宙律に乗って織り成される持続音の合間に、忘れかけたメロディの断片が浮き沈みする惑星ソラリスな世界です。

groovy

Gary Wilson / You Think You Really Know Me

MCM / 1977 / US

“グルーヴィ”とは見事な勘違いのことであり、怪作とはまさにこのようなレコードのこと。自意識過剰な変態男を演出したコンセプチュアル・アートな前衛ポップスになるはずの自主制作ファースト・アルバムで玉砕。次作の発売に至るまでに27年かかった深傷である。14歳にしてJohn CageとDavid Tudorに出会ってしまったのが、脚光を夢見る音楽家としての悲運の始まりだった。Wilsonの胸に突き刺さったままのCageの言葉は“人に嫌われるくらいのものを作らなきゃ駄目だ”という内容だったというからもう拍手するしかない。しかしまたこうして聴いてみると、自宅での多重録音作品という意味では本当に素晴らしい作品で、随所に決して聴き逃すことができないような特異な輝きがあると思う。

著者（選盤／執筆／扉写真）
Chee Shimizu

DJ。レコード・ショップ・オーナー。1971年、東京生まれ松本育ち。22歳のころ、来日中のイギリス人DJに師事し、本格的に活動を開始。フリーランスのグラフィック・デザイナーとしても活動するかたわら、2004年にDJプロジェクト、DISCOSSESSIONを始動。イタロ・ディスコ・リヴァイヴァルやコズミック・ディスコを日本に紹介。同チームで音楽制作も開始し、海外アーティストのリミックスなども手掛ける。2007年ごろより、ダンス・ミュージックの概念を取り払った、新たなDJの表現方法として“リスニング・スタイル”を提唱。2009年には、オンライン・レコード・ショップORGANIC MUSICを立ち上げる。現在は、DJ活動と並行して、ヨーロッパを中心に未知の音楽を発掘する旅を継続中。

カヴァー・アートワーク
QOTAROO

装丁
溝口慎治（lush）

DTP
石原崇子

写真（p.106-107）
小原啓樹

資料提供
師井 徹
Sebastian Grätz
服部雄亮
前山"Dubby"寿人
金石佳大
浅野直行
鈴木啓介

取材協力
LOS APSON?

Special Thanks to
EY∃、Tako Reyenga、Abel Nagengast、EEE♪

obscure sound

【オブスキュア・サウンド】

桃源郷的音盤640選

著者：Chee Shimizu（チー・シミズ）

2013年6月25日　第1版発行

[発行所]
株式会社リットーミュージック
〒102-0075 東京都千代田区三番町20番地
http://www.rittor-music.co.jp/

[お客様窓口]
リットーミュージック カスタマーセンター（商品に関するお問い合わせ）
電話：03-5213-9296 ／ FAX：03-5275-2443 ／ E-Mail：info@rittor-music.co.jp
落丁・乱丁本はお取り替えいたします。本書記事の無断転載・複製は固くお断りいたします。

[書店・取次様窓口]
マーケティング統轄部
電話：03-5213-6260 ／ FAX：03-5213-6261

編集／発行人：古森 優
編集長：小早川実穂子
編集担当：服部 健
印刷／製本：中央精版印刷株式会社

©2013 Chee Shimizu / Rittor Music, Inc.
定価はカヴァーに表示してあります。

Printed in Japan　ISBN978-4-8456-2258-0

obscure sound

（オブスキュアーサウンド）

抗凝固的音盤640選

著者：Chee Shimani（チー・シャニ）

2018年9月27日 第1版発行

【発行元】
未来出版シャドーエンジニアリング
〒150-0041 東京都渋谷区神泉町1番地14 地下室
https://www.shadow-engineering.jp

【印刷・製本】
リリアン・ミュージック・プロセス・ジャパン株式会社（音盤に関する出版に専門家の方々）
電話：03-5411-0000（代）／FAX：03-5411-0001（注文専用）
※「抗凝固的音盤640選」のご注文は、本書巻末の注文票に記入の上、FAXにてお送ください。

【音盤・製本協力】
ヴィーナスレコード株式会社
電話：03-5411-0700（代）／FAX：03-5411-0701

装丁／発行人：土屋 徹
編集長：小柳 帝子
制作担当：清水 恵
印刷・製本：リリアン・ミュージック・プロセス株式会社

[illegible]

[illegible]

9784845622580

1923073022009

ISBN978-4-8456-2258-0
C3073 ¥2200E

RittorMusic
http://www.rittor-music.co.jp/

定価（本体2,200円＋税）

obscure sound

【オブスキュア・サウンド】

桃源郷的音盤640選

selected by Chee Shimizu

RitterMusic

index

A

A La Ping Pong 43
Achim Reichel & Machines 43
Adelhard Roidinger 9, 91
Aera 77
Aire 9
Akis 9
Alan Sorrenti 43, 155
Alberto Favero 9
Alberto Radius 171
Aiceu Valença 43
Aldemaro Romero Y Su Onda Nueva 125
Aldo Tarabella 61
Alejandro Lazo 44
Alex 155
Alex Oriental Experience 44
Allegro Jazz-Ensemble 141
Alpha Centauri 141
Alvin Curran 61
Amaia Zubiria, Pascal Gaigne 61
Amba Sanyal 111
America 155
Amerlan 91
Andreolina 77
Angela Carrasco 187
Angelo Noce Santoro 44
Anna Själv Tredje 111
Anne Wylie 171
Antón García Abril 125
Apocalypse 141
Arbete Och Fritid 27
Archimedes Badkar 27
Arica 44
Arild Andersen 10
Artefact 187
Ash Ra Tempel / Manuel Göttsching 111
Asin 45
Asmus Tietchens 78
Atilla Engin Group 27

B

Babia 27
Baby Consuelo 187
Ban 156
Barnodaj 45
Bayon 61
Beauregard, Violletti & Ste-Claire 187
Bebe Manga 188
Benis Cletin 188
Benoit Widemann 141
Bernard Arcadie Et André Ceccarelli 28
Bernard Lavielliers 188
Bernard Szajner 91
Bernie Krause 10
Bernie Leadon, Michael Georgiades The Band 156
Bertrand Richard 142
Beto & Kara 156
Bill Loko 126
Black Show, The 188
Black Soul 45
Bo Stief 28
Bobongo Stars 189
Boury 28
Brainticket 46, 112
Brongi 10
Bruce Ditmas 78
Brüning V. Alten's Sunrise Orchestra 126
Büdi Und Gumbls 62
Bülent Arei & Daria Semegen 91

C

Chris Hinze, Sigi Schwab, Eberhard Weber, Lala Kovacev 62
Candela 126
Carlos Dafe 126
Cassiano 156
Cazadores, Los 171
Celluloid 112
Charlélie Couture 79
Charles Lloyd 46
Charly Garcia - Pedro Aznar 157
Chateau 10
Chelique Sarabia 46
Chick Corea 8
Chris Latul 127
Christian Bollmann 112
Christian Boule 46
Christine Jones 172
Clara Mondshine 79, 92
Clivage & The Philharmonic Orchestra 47
Collin Walcott, Don Cherry, Nana Vasconcelos 62
Conrad Schnitzler 90
Cosmology 142
Craig Kupka 113
Craig Leon 79
Cy Man 47
Cyklus 142

D

D.J. Pratt, Pe-De-Boi 47
Dale Jacobs 127
Damiani Opus Music Ensemble 11
Daniel Goyone 11
Daniel Grau 92
Daniel Lentz 113
Daniel Sahuleka 157
Danyel Gerard 47
Dario Domingues 127
David Amram 62
David Borden / The New Mother
Mallard Band 113
David Hopkins 113
David Torn 92
Dede Cruz 157
Delired Cameleon Family 48
Desert 92
Deuter 48, 114
Deutsche Wertarbeit 93
Dieter Reith 93
Diethelm/Famulari 143
Dino Del Monte Nahor 114
Djalma Corrêa 28
Dogliotti 127
Dolores 128
Dominik Von Senger 190
Dominique Bertram 128
Dominique Guiot 93
Dominique Lawalrée 143
Don Cherry 63
Double Fantasy 143
Dunkelziffer 190
Dunyabélé 28
Dyani, Temiz, Feza 29

E

E+ 128
Eberhard Weber Colours 11
Ecstasy Of Saint Theresa, The 114
Edgar Froese 93
Eduard Artemiev & Yuri Bogdanov 94
Edward Vesala 11
Egberto Gismonti 60, 94
Eko Kuango 190
Embryo & Yoruba Dun Dun Orchester 29
Emilio Cao 48
Eno Moebius Roedelius 12
Enrique Mateu De Villavicencio 80
EP-4 80
Eric Vann 114
Erik Wøllo 12, 63
Ernest Honny 191
Esclarecidos 143
Esqueixada Sniff 172
Et Cetera 63
Eternal Wind 12
Eugénia Melo E Castro 172
Évé 12

F

Fabriano Fuzion 64
Fairouz 173
Family Of Percussion 29
Fermata 94
Fernando Girão 128
Fernando's Ginga 129
Finis Africae 13
Flex 80
Francesco Messina 144
Francis Bebey 29
Francisco 48
Francisco Semprum Et Michel Christodoulides 80
Franck Valmont Et Syncro Rhythmic Eclectic Language 173
Françoise Joly 173
Frank Quintero Y Los Balzehaguaos 173
Frida 129
Friedemann 13
Fuchs-Goos-Band 13
Futuro Antico 49

G

Gal Costa 157
Gamma 13
Gasper-Lawal 129
George Adams Quintet 94
George Duke 158
Gerardo Batiz 174
Gerry Mulligan, Astor Piazzolla 174
Gianni Bedori 64
Gianni Marchetti 144
Gianni Sposito 95
Gigi Masin 14
Gigi Masin & Alessandro Monti 14
Gil E Jorge 124
Ginni Gallan 158
Glatter Wahnsinn 144
Glen Velez 30
Gondwanaland Project 30
Graf / Hovensja / Eberson / Christensen 14
Group, The 81
Groupe Berbere Agraw 30
Grupo Afro-Cuba 158
Grupo Madera 31
Grupo Proyecto De Gonzalo Rubalcaba 129
Guru Guru Sun Band 144

H

Haboob 49
Hallimasch 130
Hans-Joachim Roedelius 145
Hansi Biebl Band 174
Harald Grosskopf 14
Harmonia 140
Hector Costita 159
Hector Zazou 31, 81
Heinz Becker, Karl-Heinz Stegmann, Isabel Zeumer 64
Heinz Lieb Project 64
Heliotrope 130
Helmut Lipsky 95
Henk Werkhoven 65
Henri Texier 31
Henry Torgue & Serge Houppin 95
Herbert F. Bairy 49
Horacio "Chivo" Borraro 65
Human Egg 191
Hyldon 131

I

Ian Lynn 145
Ignace De Souza Et L'Orchestre Black Santiago 191
Igor Garšnek & Nevil Blumberg 145
Igor Savin 115
Ilaiyaraaja 32
Inner Voices 115
Invisible 174
Ivory Playground 65

J

J.O.B. Orquestra 49
Jabir 115
Jan Garbarek 66
Jan Hammer Group 191
Jacques Lasry 81
Jasmine feat. Cassandra Wilson 131
Jasper Van't Hof 95
Javier Paxariño 32
Jay Azzolina 15
Jayme Marques 192
Jazz Q Prague 50
Jazz Yatra Sextet 32
Jean Marc Jafet 131
Jean Pierre Posit 175
Jean-Claude Camors 82
Jean-Luc Barbier 66
Jenny Evans 175
Jim Brock 32
Joan Bibiloni 132
Joan Bibiloni Band 159
Joel Vandroogenbroeck 116
John Martyn 159
John Themis 15
Jolly Kunjappu 116
Jon Eberson Group 175
Jon Hassell 82
Jordi Sabatés 66
Jorge Reyes 82
José Neto 66
Juan Belda 82
Juan Carlos Calderón Y Su Taller De Musica 175
Judy Roberts 160
Juhani Aaltonen 33
Jukka Tolonen 96
Jukkis Uotila 146
Julien Babinga 192
Justo Almario 15

K

Kamæleon 192
Kapingbdi 33
Kassiry 132
Katamaran 33
Kebnekaise 50
Kip Hanrahan 176
Klamm 83
Klaus Schønning 96
Klaus Weiss 96
Kolbe-Illenberger-Dauner 67
Kulpowicz feat. Niemen 33

L

Lani Hall 176
Laraaji 116
Larry Chernicoff 34
Laza Ristovski 96
Leaf 132
Lena D'Água 132
Lena Platonos 83
Lenny Mac Dowell 67, 116
Lito Vitale Cuarteto 16
Litto Nebbia 146, 176
Loredana Berté 192
Luciana 176
Lucio Battisti 177
Luigi Venbento 97
Luis Delgado 34
Luis Eduardo Aute 16
Luis Paniagua 34
Luluk Purwanto 133

M

M' Bamina 193
Macky Feary Band 154
Madhya 117
Magica 97
Magog 50
Malombo 50
Mañana 193
Maquina De Hacer Pajaros, La 160
Maras-Posillipo-Proietti 16
Marc Hollander - Aksak Maboul 83
Marcio Montarroyos 34
Marco Fedrigo 17
Marcos Ariel 17
Margo 177
Maria João Quintet 35
Marie-Claude Clerval 51
Mario Acquaviva 160
Mário Negrão 133
Mark Egan & Danny Gottlieb 17
Mark Isham 117
Markus Stockhausen, Jasper Van't Hof 51
Matthias Frey, Trilok Gurtu 18
Max Meazza 177
Mecanica Popular 84
Medianoche 178
Melao 178
Melodic Energy Commission 51
Mendes Mendes Et O' Asah 133
Merge 146
Michael Bierylo 18
Michael Hedges 18
Michael O'shea 84
Michael Shrieve 147
Michael William Gilbert 84
Michel Mulders 97
Mick Clarke 117
Miha Kralj 97
Mike Kounou 193
Miki Petkovski 194
Mikkelborg, Knudsen, N.H.O.P. 147
Mimir 51
Mind Over Matter 117
Missus Beastly 52
Murju 52
Mushi & Lakansyel 178
Musica Elettronica Viva 52

N

Naire 178
Nana Vasconcelos 68
Nerv 194
Newtone Experience 52
Ney Matogrosso 53, 133
New Hip Stilen 84
Nito Mestre 179
Nivaldo Ornelas 18
Nohelani Cypriano 161

O

Oberton-Chor Düsseldorf 118
Ofrenda Vytas Brenner 179
OIO 35
Okay Temiz 35
Oktagon 179
Om Buschman 36
Open Music 179
Original Galapagos Duck, The 36
ORM, Kamelie 147
Ornella Vanoni 180
Orquesta De Las Nubes 19
Orquestra Mirasol 134
Osmar Milito 148
Ossian 68

P

P'cock 161
Pablo Manavello 134
Pablo Milanes Y Su Grupo 162
Pan-Ra 53
Panarama 162
Paolo Modugno 69
Papete 36
Partei, Die 98
Pat Metheny & Lyle Mays 69
Pat Metheny Group 19
Patrick Gleeson 98
Patrick Moraz 98
Patrick Vian 98
Paulo Steinberg 69
Paz 70
Pedro Aznar 19, 180
Pepe Maina 20
Pepe Sánchez En
Whisky Y Jazz 180
Per Tjernberg 36
Pere Soto Grup 180
Persepolis 181
Pete Brewer 20
Peter Herbolzheimer Rhythm
Combination & Brass 181
Peter Schaefer 134
Peter Schmid, Philipp Zehnder 85
Peter Sprague 70
Peter Ugrin 181
Phantom Band 194
Philip Glass 37
Philippe Cauvin 70, 85
Piirpauke 20
Pino Daniele 162
Plaza Hotel 195
Ponta De Rama 181
Popol Vuh 53
PorSuiGieco 53

Q

Quarteto, O 182
Quasar 54
Quintus Project 195

R

Rachel Sweet 162
Radka Toneff 182
Raffaele Serra 85
Ragner Grippe 54
Rainbow Band, The 54
Rainer Brüninghaus 20
Ralph Lundsten 99
Ramuntcho Matta 85
Randomize 86
Rão Kyao 37
Rapaces, Les 182
Rare Silk 148
Rasa 163
Raul Porchetto 99, 148
Ray Lynch 99
Reinhard Flatischler 70
Renée 195
Renee Geyer 195
Repercussion Unit 37
Resa 21
Rhoda Scott 99
Riccardo Sinigaglia 86
Richard Schneider Jr. 100, 148
Richard Torrance & Eureka III 163
Richie Havens 182
Rita Lee 135
Ritmia 37
Robertinho Silva 71
Roberto Aglieri 21
Roberto Donnini 21
Roberto Gatto 149
Roberto Laneri 118
Roberto Musci &
Giovanni Venosta 86, 149
Rodolfo Mederos 183
Rodolfo Mederos &
Generacion Cero 54
Roger's New Conception 100
Roland Bocquet 149
Roland Hollinger 118
Ronald Snijders 163
Rosa Zaragoza 21
Ruben Rada 183
Rüdiger Oppermann &
Ensemble 119
Rui Veloso 135, 183

S

S. Ramses 119
Saâda Bonaire 196
Sail-Joia 135
Sand 55
Sandra Sá 135
Sanford Ponder 22
Sangi 196
Sango 164
Santiago 164
Saraba 136
Savant 86
SBB 164
Schoenherz 164
September 196
Sergio Boré 136
Shanti 55
Shusaku & Dormu
Dance Theater 87
Silent Jazz Ensemble, The 38
Silvio Cesar 165
Simo Lazarov 100
Simone 165
Sindykato, El 55
Sinus 71
Smoke 71
Sonõna Pot 71
Soular System 100
Space Art 101
Speira N' Mbassa 72
Spinetta 165
Spinetta Jade 166
Spiro, Giacopuzzi 150
Splash 72
Starbuck 150
Stefan Kukurugya 150
Stenio Mendes 72
Stephen Montague 119
Steve Eliovson, Collin Walcott 22
Steve Hillage 101, 110
Steve Maxwell Von Braund 101
Steve Reich 22
Steve Reich - Kronos Quartet,
Pat Metheny 76
Steve Tibbetts 72, 119
Ströer 166
Ströer Duo 87
Sunbirds 73
Sundance 196
Supersempfft 197
Suso Saiz 87
Sussan Deihim,
Richard Horowitz 87
Sven Grünberg 101, 120
Sweet Smoke 55
Syndrome 56

T

Tamia & Pierre Favre 38
Tamma with Don Cherry &
Ed Blackwell 26
Tango? 136
Tender Leaf 136
Terraced Garden 56
Teruo Nakamura 73
Thomas Almqvist 38
Tilburi 56
Tim Maia 166, 197
Tim Timmermans &
Skipper Wise 102
Tiziana Ghiglioni 137
Tom Ehrlich 120
Toni Esposito 39
Toninho Horta 151
Tonto 102
Tony Scott 73
Tony Scott feat.
Jan Akkerman 73
Tony Vacca & Tim Moran 22
Torbjorn Langborn &
The Feel Life Orchestra 23
Totem 56
Toti Soler 39
Toto Blanke's Electric Circus
feat. Stu Goldberg 102
Toubabou 39
Tritonus 102
Twins Seven Seven 39

U

Umberto Balsamo 167

V

Valerie Carter 167
Vangelis Katsoulis 121
Veetdharm 121
Via Nort 137
Vidna Obmana 122
Viejas Raices 170
Voices Of Brasil 137
VSP Projekt 74
Vytas Brenner 57

W

Waldron, Jackson,
Weber, Braceful 57
Waves 74
Wayne Horvitz - Butch Morris -
Robert Previte 74
William Penn 122
William Senna 23
Wilson Simonal 183
Wolfgang Dauner 88
Wolfgang Gnida 152

X

X-Tet 103
Xavier Jouvelet 167

Y

Ya-Ya's, The 197
Yuri Bogdanov Boomerang
Group 103

Z

'Zabba' W. Lindner &
Carsten Bohn 40
Zakir Hussain &
The Rhythm Experience 40
Zann 40
Zed 103
Zenamon 23
Zizi Possi 167

V.A.

V.A. / Architettura Sussurrante 88
V.A. / Birth Of A New Place 57
V.A. / Courant Zwols
Welteverstaan 197
V.A. / Jazz Praha Live 57
V.A. / Musica Esporadica 151
V.A. / Primera Aventura
De Pepe Carvalho: Tatuaje 40
V.A. / Vor Der Flut 88

国内アーティスト（50音順）

アクシス 112
芦川 聡 149
アトラス 155
アラゴン 78
アンアイデンティファイド・パルシング・オブジェクト 121
伊藤 詳 111
井上 鑑 77
井上 鑑・松任谷正隆・佐藤 博 125
大上留利子 163
大野えり 190
尾崎亜美 171
OM 35
カラード・ミュージック 189
キリング・タイム 16
桑名晴子 158
芸能山城組 30
小久保 隆 88, 150
小林"ミミ"泉美 131
桜井哲夫 137
佐々木義生マインド・ジャズ・オーケストラ 122
佐藤 博 130,159
サンディー 186
東海林 修 118
鈴木 茂 165
鈴木"チン"良雄 74
高田みどり 67
高野昌昭 17
高橋鮎生 45
タブラトゥーラ 38
茶木みやこ 161
ツトム・ヤマシタ 120
D-Day 142
ディップ・イン・ザ・プール 79
富樫雅彦 67
豊田貴志 120
鳥山雄司 152
新津章夫 125
西村由紀江 152
パシフィック・ジャム 134
浜瀬元彦 147
林 英哲 63
パラダイム・シフト 69
原マスミ 83
日向敏文 151
広瀬 豊 122
ファッド 172
4-D Mode-1 77
深町 純 15
ブレッド＆バター 189
ペッカー 194
細野晴臣 31, 81, 130
本多俊之 166
松岡直也 161
松下 誠 177
真鍋ちえみ 189
マリ＆バックスバニー 193
宮下富実夫 115
ムクワジュ・アンサンブル 68
森園勝敏 146
Yas-Kaz 23
山本邦山 65
横尾忠則、細野晴臣 42
吉田美奈子 160
吉村 弘 145
V.A. / 882studio 151
V.A. / Sound Sensor II 152
V.A. / Yen Manifold Vol.1 103
V.A. / 驚異のシンセサイザー軍団登場!! 121